

神奈川県茅ヶ崎市

茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅻ

円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査

円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査

2025

茅ヶ崎市教育委員会

神奈川県茅ヶ崎市

茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅻ

えんぞう しもがまち
円 蔵 下ヶ町遺跡第12次調査
えんぞう しもがまち
円 蔵 下ヶ町遺跡第24次調査

2025

茅ヶ崎市教育委員会

刊行にあたって

茅ヶ崎市には、令和6年度時点で216箇所の埋蔵文化財包蔵地が周知されています。埋蔵文化財包蔵地は市北部の丘陵地帯、丘陵裾から南東に向かって広がる砂丘・砂州地帯、南西部の自然堤防地帯などに分布しており、これまでの発掘調査等の成果により約3万年以上前から「茅ヶ崎」で古代人が活動していたことが明らかになっています。

本市では、埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事等の照会が令和5年度には2,675件を数えました。中には土木工事によって遺跡が影響を受けてしまうことがあり、その場合には関係者協議の上、やむを得ず事業を実施する場所については事前に発掘調査を実施することで遺跡の記録保存に努めています。

今回報告しますのは、円蔵地区に分布する下ヶ町遺跡の記録保存を目的とした発掘調査です。下ヶ町遺跡の東側隣接地には懷島景義(景能)の居館跡にあたり居館の鎮守であったと伝わる神明神社が鎮座し、中世懷島郷の中心となりうる地域として鎌倉幕府との関係を考えるうえで重要な遺跡です。

調査の結果、古墳時代前期・古代・中世・近世・近代の遺構や遺物が発見され、本市の歴史や文化をより一層理解する一助となりました。

現地調査および報告書作成にあたっては事業者ならびに土地所有者、関係者のご理解ご協力をいただきました。この場を借りてあらためてお礼申し上げますとともに、今後とも遺跡の保存に一層のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本書が、市民をはじめとする多くの方に有効に活用されますことを祈念いたしまして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

令和7年3月

茅ヶ崎市教育委員会
教育長 竹内 清

例 言

1. 本書は、神奈川県茅ヶ崎市円蔵地区において実施された下ヶ町遺跡第12次・24次調査の発掘調査報告である。
2. 本書の作成は茅ヶ崎市教育委員会社会教育課三戸智也および伊藤俊一が担当した。
3. 本書の内容のうち、茅ヶ崎市域の沖積低地に立地する遺跡として共通する地理的・歴史的環境や過去の調査は第Ⅰ編、各次調査の内容は下記に対応する各編に掲載し、写真図版は全報告分をまとめて本文の後に掲載した。
4. 発掘調査は茅ヶ崎市教育委員会が主体となり実施した。各調査の期間・体制等は各編に掲載した。
5. 本書の執筆は以下のとおりに分担し、伊藤、高橋美智子が編集した。
 - (1) 第Ⅰ編 遺跡概観
第Ⅰ章：三戸
 - (2) 第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査
第Ⅰ章第1～3節：三戸 第Ⅰ章第4節～第Ⅲ章：伊藤
 - (3) 第Ⅲ編 円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査
第Ⅰ章第1～3節、第Ⅲ章：三戸 第Ⅰ章第4節～第Ⅱ章：伊藤
6. 本書に係わる出土品および記録図面、写真、本書で使用した原稿、挿図、図版等は茅ヶ崎市教育委員会において保管している。
7. 本調査の成果については既に概要等を遺跡発表会や概要報告などで発表しているものがあるが、内容の不一致がある場合は本書をもって正式報告とする。

凡 例

1. 遺構配置図等に記載した国家座標は世界測地系第IX系を基準とした。
2. 現地の測量は光波測量または平板測量を行い、またオートレベルを使用した。
3. 遺構平面分布図や土層堆積図等のトレースには、Adobe社のIllustratorを使用した。また写真は同社のPhotoshopを使用して加工し、版組みについては同社のInDesignを使用した。
4. 各挿図中の方位は座標の北を示し、写真図版中の方位は磁北を示す。土層堆積図の水糸高は海拔標高を示す。
5. 縮尺は原則として次のとおりとし、各挿図に示した。

遺構：1/40

遺物：土製品：1/5 土器類・石製品：1/3 鉄製品：1/2 銭貨：1/1

6. 挿図中のスクリーントーンは次のとおりである。また随時各挿図に示した。

遺構：重複する上位遺構

遺物：須恵器 擦痕・使用痕

7. 土層および土器類の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を基にした。
8. 遺構の残存規模は遺構確認面における計測値であるが、土層断面の規模を加味する場合は本文中に明記した。また計測値の単位は(m)で表すが、深さの単位は(cm)で表す。
9. ピット計測表の計測値の単位は(cm)で表す。遺物観察表の計測値の単位は、口径・底径・器高・残高等は(cm)、重量は(g)で表す。なお括弧内の数値は復元値を表し、(-)は計測不能を表す。
10. 本書記載の遺構名称について、以下のとおり遺構名称を統一した。また挿図等で使用した略号は次のとおりとし、これ以外の略号については随時各挿図に示した。

堅穴址 ← 堅穴状遺構 井戸 ← 井戸址 溝 ← 溝状遺構

遺構 堅穴址：SI 掘立柱建物：SB 井戸：SE 溝：SD 土坑・土壇：SK ピット：SP
畝状遺構：SU 不明遺構：SX

遺物 土器類：P 礫・石製品：S 骨：B

11. 本報告作成にあたり現地調査時から名称・番号を変更した遺構は各報告に示した。
12. 過去に実施された調査の遺構名称は原則各報告の名称による。
13. 本書に係わる出土品の注記名は次のとおりである。

下ヶ町遺跡第12次・24次調査：「下ヶ町12」・「下24」

14. 本書で使用した白地図類は次のとおりである。

国土地理院発行 1/50,000地形図『平塚』『藤沢』、茅ヶ崎市発行 1/10,000『茅ヶ崎市全図』、同1/2,500都市計画基本図『円蔵』、同1/500茅ヶ崎市道路台帳現況図、陸軍参謀本部発行 明治15年測量1/20,000着色迅速測図『神奈川県相模国高座郡柳島村』『同小和田村及菱沼村』『同萩園村外二十三村』『同小和田村外十二ヶ村』

目 次

刊行にあたって

例言

凡例

目次

第Ⅰ編 遺跡概観

第Ⅰ章 調査遺跡の概観	3
第1節 茅ヶ崎市の地形と地理的環境	3
第2節 自然堤防地帯に分布する遺跡と歴史的環境	9
第3節 遺跡の概要と調査地点の位置	15
第4節 過去の調査	16
引用・参考文献	

第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査

第Ⅰ章 調査の概要	27
第1節 調査に至る経緯	27
第2節 調査区の設定と調査の方法	28
第1項 調査区の設定	28
第2項 調査の方法	28
第3節 調査の体制と経過	28
第1項 調査の体制	28
第2項 調査の経過	31
第3項 整理作業	31
第4節 基本土層	32

第Ⅱ章 発見された遺構と遺物	35
第1節 近代	36
第1項 井戸	37
第2項 土坑	39
第2節 近世	41
第1項 溝	42
第2項 土坑	45
第3項 ピット	48
第3節 中近世	50
第1項 溝	51
第2項 土坑	58
第3項 ピット	62
第4節 中世	68
第1項 竪穴址	69
第2項 掘立柱建物	70
第3項 溝	72
第4項 不明遺構	83
第5項 土坑	84
第5節 古代～中世	89
第1項 竪穴址	90
第2項 掘立柱建物	92
第3項 ピット	94
第6節 遺構外	96
第1項 表土出土遺物	96
第2項 攪乱出土遺物	97
第3項 遺物包含層出土遺物	99
第4項 遺構確認面出土遺物	100
第Ⅲ章 まとめ	101

第Ⅲ編 円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査

第Ⅰ章 調査の概要	107
第1節 調査に至る経緯	107
第2節 調査区の設定と調査の方法	108
第1項 調査区の設定	108
第2項 調査の方法	109
第3節 調査の体制と経過	109
第1項 調査の体制	109
第2項 調査の経過	110
第3項 整理作業	110
第4節 基本土層	111
第Ⅱ章 発見された遺構と遺物	113
第1節 近世	114
第1項 溝	115
第2項 土壇墓	120
第3項 集石	122
第4項 ピット	125
第2節 中世～近世	127
第1項 溝	128
第2項 土坑	131
第3項 ピット	133
第3節 中世	134
第1項 竪穴址	134
第4節 古代～中世	137
第1項 ピット	137

第5節 遺構外	138
第1項 表土出土遺物	138
第Ⅲ章 まとめ	139
引用・参考文献	

挿図目次

第Ⅰ編 遺跡概観	第24図 第60号・63号・64号ピット	49
第1図 遺跡周辺地形図1	第25図 中近世遺構配置図	4
第2図 地形分類図1	第26図 第2号溝	5
第3図 地形分類図2	第27図 第2号溝出土遺物	6
第4図 遺跡周辺地形図2	第28図 第3号溝	7
第5図 調査地点の位置と周辺の遺跡	第29図 第4号溝	8
第6図 市城南西部の地形と鎌倉古道	第30図 第4号溝出土遺物	12
第7図 過去の調査地点	第31図 第2号土坑	17
第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査	第32図 第3号土坑	
第8図 調査区位置図	第33図 第5号土坑	29
第9図 グリッド配置図	第34図 第11号土坑	30
第10図 基本土層図	第35図 第12号土坑	33
第11図 遺構配置図	第36図 1区中近世ピット	34
第12図 近代遺構配置図	第37図 2区車返し部中近世ピット	36
第13図 第1号井戸	第38図 2区東半部中近世ピット	37
第14図 第1号井戸出土遺物	第39図 中世遺構配置図	38
第15図 第15号土坑	第40図 第2号竪穴址	39
第16図 第15号土坑出土遺物	第41図 第1号掘立柱建物	40
第17図 近世遺構配置図	第42図 第5号溝	41
第18図 第1号溝遺物分布	第43図 1区第6号溝	42
第19図 第1号溝	第44図 2区第6号・7号溝	43
第20図 第1号溝出土遺物	第45図 第6号溝出土遺物	44
第21図 第1号・13号・14号土坑	第46図 第8号溝	46
第22図 第1号土坑出土遺物	第47図 第9号溝	47
第23図 第47号・90号ピット	第48図 第10号・11号溝	48
	第49図 第12号～14号溝	81

第50図	第15号溝	82	第72図	第1b号溝出土遺物	117
第51図	第1号不明遺構	83	第73図	第2号溝	118
第52図	第6号土坑	84	第74図	第2号溝出土遺物	118
第53図	第7号土坑	85	第75図	第3号溝	119
第54図	第8号土坑	86	第76図	第1号土墳墓	120
第55図	第8号土坑出土遺物	86	第77図	第1号土墳墓遺物分布	121
第56図	第9号・10号土坑	87	第78図	第1号集石	122
第57図	古代～中世遺構配置図	89	第79図	第1号集石遺物分布	123
第58図	第1号竪穴址出土遺物	90	第80図	第1号集石出土遺物	124
第59図	第1号竪穴址	91	第81図	第1号・2号・7号ピット	125
第60図	第2号掘立柱建物	93	第82図	第2号ピット出土遺物	126
第61図	1区北部古代～中世ピット	95	第83図	中世～近世遺構配置図	127
第62図	表土出土遺物	96	第84図	第4号溝遺物分布	128
第63図	攪乱出土遺物	98	第85図	第4号溝	129
第64図	遺物包含層出土遺物	99	第86図	第4号溝出土遺物	130
第65図	遺構確認面出土遺物	100	第87図	第2号・3号・4号土坑	132
第66図	第12次調査地点付近溝分布図	103	第88図	第6号ピット	133
第Ⅲ編	円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査		第89図	中世遺構配置図	134
第67図	調査区位置図	108	第90図	第1号竪穴址	135
第68図	基本土層図	112	第91図	第1号竪穴址遺物分布	136
第69図	遺構配置図	113	第92図	古代～中世遺構配置図	137
第70図	近世遺構配置図	114	第93図	第3号～5号ピット	138
第71図	第1a号・1b号溝遺物分布	116	第94図	第12次・24次調査地点付近溝分布図	141

表目次

第Ⅰ編 遺跡概観

表 1	周辺の遺跡地名表	9
表 2	下ヶ町遺跡における過去の調査概要 1	18
表 3	下ヶ町遺跡における過去の調査概要 2	19
表 4	下ヶ町遺跡における過去の調査概要 3	20

第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査

表 5	発掘調査に係わる文書一覧表	27
表 6	遺構名称変更一覧表	35
表 7	第 1 号井戸出土遺物観察表	38
表 8	第15号土坑出土遺物観察表	40
表 9	第 1 号溝出土遺物観察表	45
表10	第 1 号土坑出土遺物観察表	46
表11	近世ピット計測表	49
表12	第 2 号溝内ピット計測表	51
表13	第 2 号溝出土遺物観察表	53
表14	第 3 号溝内ピット計測表	55
表15	第 4 号溝出土遺物観察表	57
表16	1 区中近世ピット計測表	64
表17	2 区車返し部中近世ピット計測表	65
表18	2 区東半部中近世ピット計測表	67
表19	第 1 号掘立柱建物内ピット計測表	71
表20	第 5 号溝内ピット計測表	73
表21	第 6 号溝内ピット計測表	75
表22	第 6 号溝出土遺物観察表	76
表23	第 7 号溝内ピット計測表	76

表24	第 9 号溝内ピット計測表	78
表25	第11号溝内ピット計測表	80
表26	第12号溝内ピット計測表	80
表27	第 8 号土坑出土遺物観察表	86
表28	第 9 号土坑内ピット計測表	88
表29	第 1 号竪穴址出土遺物観察表	90
表30	第 1 号竪穴址内ピット計測表	91
表31	第 2 号掘立柱建物内ピット計測表	94
表32	1 区北部古代～中世ピット計測表	95
表33	表土出土遺物観察表	97
表34	攪乱出土遺物観察表	99
表35	遺物包含層出土遺物観察表	100
表36	遺構確認面出土遺物観察表	100

第Ⅲ編 円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査

表37	発掘調査に係わる文書一覧表	107
表38	遺構名称変更一覧表	110
表39	第 1 b号溝出土遺物観察表	117
表40	第 2 号溝出土遺物観察表	118
表41	第 1 号集石出土遺物観察表	124
表42	第 2 号ピット出土遺物観察表	126
表43	近世ピット計測表	126
表44	第 4 号溝出土遺物観察表	130
表45	第 6 号ピット計測表	133
表46	古代～中世ピット計測表	138

写真図版目次

第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査

図版 1

1. 1区北半部(南南西から)
2. 第1号・3号溝(西北西から)
3. 第2号・4号溝(西北西から)
4. 1区中央部(南南西から)
5. 第1号掘立柱建物・第15号土坑(西北西から)
6. 1区南半部(南南西から)
7. 第1号竪穴址・第5号溝(西北西から)
8. 第3号土坑馬骨出土状況(北北西から)

図版 2

1. 2区全景(南南西から)
2. 2区北端部(南から)
3. 第6号・7号溝北側(南西から)
4. 2区南端部(西から)
5. 2区車返し部(南南西から)
6. 第14号溝・第1号不明遺構(南南東から)
7. 1区東壁基本土層(西北西から)
8. 2区東壁基本土層(西北西から)

図版 3

1. 近代
 1. 第1号井戸出土遺物
 2. 第15号土坑出土遺物
2. 近世
 1. 第1号溝出土遺物
 2. 第1号土坑出土遺物

図版 4

1. 中近世
 1. 第2号溝出土遺物
 2. 第4号溝出土遺物

2. 中世

1. 第6号溝出土遺物
 2. 第8号土坑出土遺物
- ### 3. 古代～中世
1. 第1号竪穴址出土遺物

図版 5

1. 遺構外
 1. 表土出土遺物
 2. 攪乱出土遺物

図版 6

1. 遺構外
 1. 遺物包含層出土遺物
 2. 遺構確認面出土遺物

第Ⅲ編 円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査

図版 7

1. 第24次調査地点(下)と第8次調査地点(県道)
・第3次調査地点(イエローハット)
(南西から)

図版 8

1. 調査地点近景(南西から)
2. 調査区設定状況(南東から)
3. 事業地北西側に残る水路敷(南西から)
4. 作業風景(北西から)
5. 全景(上が北東)

図版 9

1. 遺構確認状況(南東から)
2. 第1a号溝宝永火山灰確認状況(南西から)
3. 第1a号・1b号溝完掘状況(南西から)

4. 第1a号・1b号溝北壁土層堆積状況
(南西から)

図版10

1. 第2号溝完掘状況(南西から)
2. 第1号土壙墓人骨検出状況(北東から)
3. 第1号土壙墓南壁土層堆積状況(北東から)
4. 第1号土壙墓完掘状況(北東から)
5. 第1号集石確認状況(南西から)
6. 第1号集石検出状況(南東から)
7. 第1号集石完掘状況(南東から)

図版11

1. 第3号溝完掘状況(南西から)
2. 第1号・2号ピット完掘状況(北から)
3. 第4号溝北壁土層堆積状況(南西から)
4. 第1a号・1b号・4号溝完掘状況(上が北東)
5. 第2号・3号土坑完掘状況(南から)
6. 第6号ピット完掘状況(南西から)
7. 第4号土坑・第3号ピット完掘状況
(北東から)

図版12

1. 第1号竪穴址完掘状況(南東から)
2. 第1号竪穴址完掘状況(上が北東)
3. 第1号竪穴址東壁土層堆積状況(北西から)
4. 第3号・4号ピット完掘状況(北西から)
5. 第5号ピット完掘状況(北東から)

図版13

1. 近世
 1. 第1b号溝出土遺物
 2. 第2号溝出土遺物
 3. 第1号集石出土遺物

図版14

1. 近世
 1. 第2号ピット出土遺物
2. 中世～近世
 1. 第4号溝出土遺物

第 I 編 遺跡概観

第Ⅰ章 調査遺跡の概観

第1節 茅ヶ崎市の地形と地理的環境

茅ヶ崎市(以下「本市」)は神奈川県南部中央にあたり、東経139度24分、北緯35度20分に位置する。北側は寒川町と藤沢市、東側は藤沢市、西側は相模川を挟んで平塚市と接し、南側は相模湾に面する。昭和30(1955)年4月に旧小出村との分村合併により現在の市域となっており、市域は南北7.60km、東西6.94km、面積35.76km²で周囲は約30.46kmに及ぶ。平成元(1989)年12月に県下で7番目の20万都市に発展し、令和4(2022)年1月現在では人口24万人を超えるなど市域の市街化が著しい。

本市の地形は、大きく北部台地・丘陵地帯と南部の沖積低地に二分され、沖積低地はさらに台地・丘陵地帯南裾から海岸まで続く砂丘・砂州地帯と相模川に接する市南西部の自然堤防地帯に分けられる。遺跡の分布は、縄文時代前期に最も縄文海進が進んだ結果、北部台地・丘陵地帯の尾根上やその緩斜面に限られるが、その後の海退により市内の低地にも活動が広がり、縄文時代中期以降には砂丘・砂州地帯、弥生時代以降には自然堤防に囲まれた砂質微高地などに遺跡が立地するようになる。沖積低地域は都市化による地形改変が著しく、現況から原地形を読み取ることが困難な地域も多いが高い密度で遺跡が分布する。地形発達と遺跡形成については上本進二、浅野哲哉の研究に詳しく(上本・浅野1999)、ここでは地形の概要を述べる。

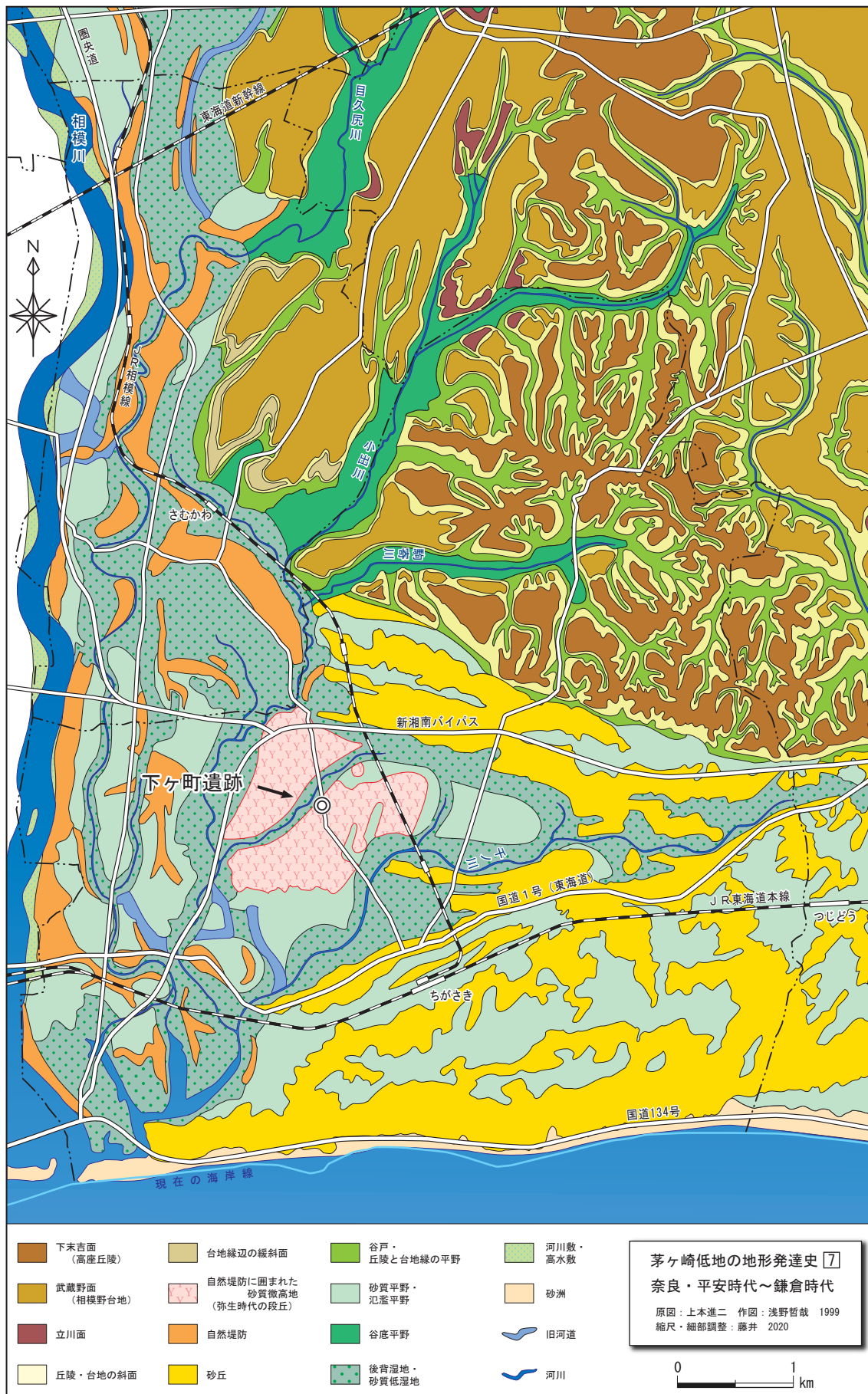
北部台地・丘陵地帯は、現在の芹沢、行谷、堤、下寺尾などの地区にあたり、高座丘陵や相模野台地の南西端部に位置する。高座丘陵は綾瀬市から藤沢市にかけて、北から南に広がる三角形を呈する南北9.0km、東西0.5～5.0kmの丘陵で、比較的緩やかな起伏の丘陵面が広がっている。この丘陵を小出川や支流の駒寄川などが浸食し、芹沢、行谷などの樹枝状の谷戸を作り出している。地形面は、約13万年前に離水した下末吉面に対比される高座丘陵、約8～6万年前に離水した武蔵野面、約3～1万年前に離水した立川面からなり、武蔵野面は下末吉面に比べて開析谷が未発達で谷戸も少ないとされているが、市域では下末吉面と同様に規模の小さい堤、下寺尾などの平坦面が分布する。立川面は高座丘陵や相模野台地の縁辺部が川の蛇行によって浸食されたあと離水して立川ロームが堆積したと考えられており、市北部の小出川沿いに僅かに認められる。

北部の丘陵地から海岸までの約4.0kmにわたる地域は、砂丘・砂州地帯および砂丘間低地で、海岸と並行に形成された東西砂丘が連なっている。砂丘は縄文時代中期以降の海退と地盤の隆起などによって発達し、現在までで10本程度の砂丘列が確認されており、香川駅周辺に形成された砂丘が最も古い砂丘となっている。奈良・平安時代には、現在とほぼ変わらない位置まで海岸線が後退し、固定された。

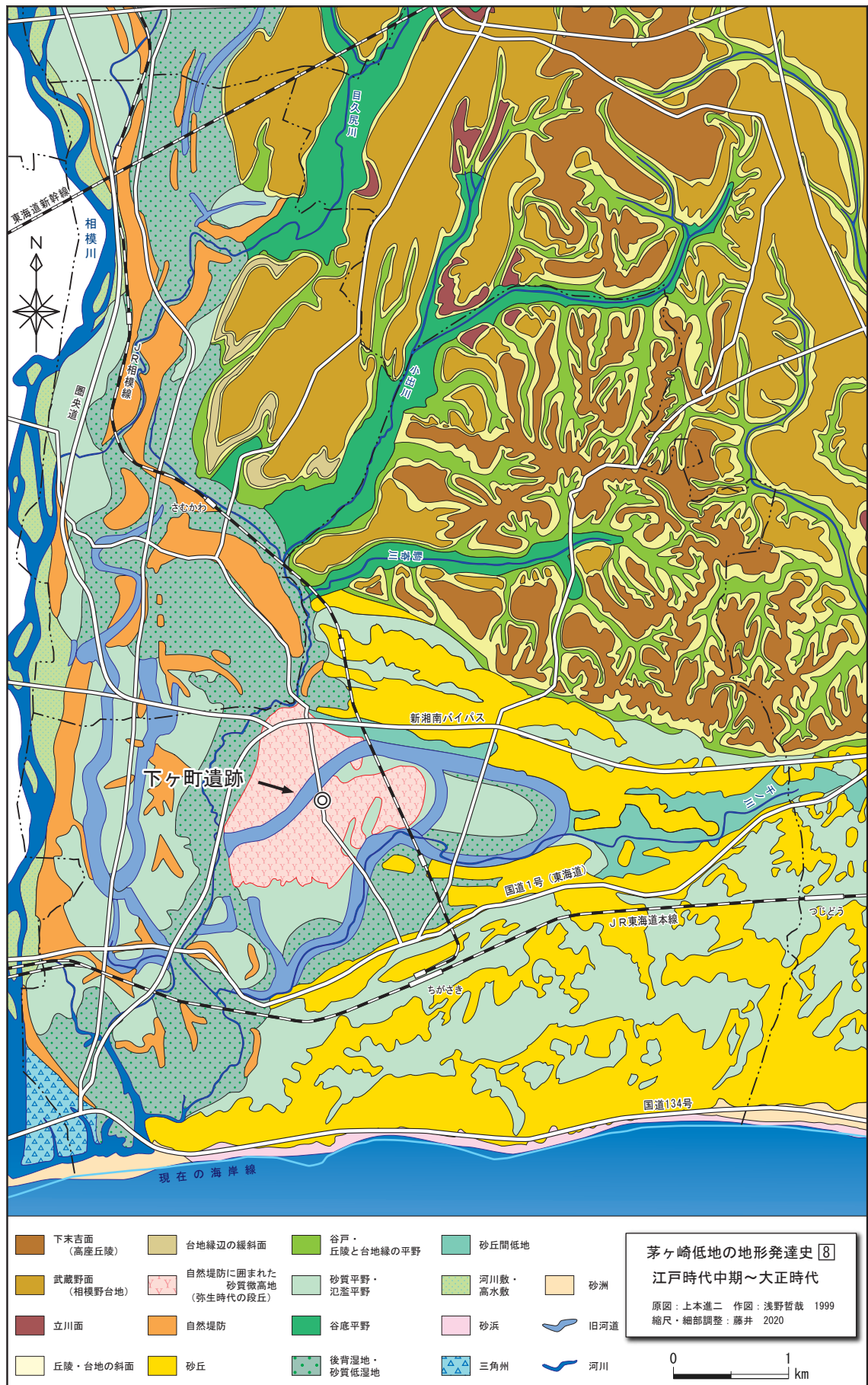
南西部の自然堤防地帯は、現在の西久保、円蔵、矢畑、浜之郷、萩園などの地区にあたる。旧相模川の蛇行による砂丘地帯の浸食で形成され、さらに西方への流路の変遷に従い上流からの土砂が堆積したことで自然堤防地形が残されたが、円蔵、西久保、浜之郷地区周辺は小出川の蛇行と下刻により周囲が低くなった結果自然堤防に囲まれた砂質微高地(以下「砂質微高地」)となり、弥生時代前期頃には離水したとされている。自然堤防や砂質微高地の周囲には後背湿地・砂質低湿地や砂質平野・氾濫平野が分布している。



第1図 遺跡周辺地形図1 (1/50,000)



第2図 地形分類図1 (1/50,000)



第3図 地形分類図2 (1/50,000)



第4図 遺跡周辺地形図2 (1/25,000)

– 8 –

第2節 自然堤防地帯に分布する遺跡と歴史的環境

ここでは、市城南西部の西久保、円蔵、矢畑、浜之郷、下町屋地区に分布する主な遺跡について歴史的変遷を述べる。

市城南西部の砂質微高地上には西久保、円蔵、矢畑、浜之郷地区が立地し、また砂質微高地の南側に形成された砂質平野・氾濫平野上には浜之郷、下町屋地区が立地する(第2・3図)。北東から南西方向へ流下する旧河道(通称「大土腐」)は、砂質微高地を大きく二分している(第5図)。西久保地区と浜之郷地区の北部が北側砂質微高地にあたり、上ノ町遺跡、広町遺跡、大町A・B遺跡、大屋敷A・B遺跡、西ノ谷上遺跡や中谷遺跡が分布する。円蔵、矢畑地区と浜之郷地区の南部が南側砂質微高地にあたり、下ヶ町遺跡(以下「本遺跡」)が立地する。また本遺跡北東側には御屋敷A・B遺跡、鶴ヶ町遺跡、東側には小井戸遺跡、南西側には金山遺跡、円蔵前遺跡、勝沼遺跡、宮ノ腰遺跡、本社A・B遺跡、明王ヶ谷遺跡や鐘ヶ谷遺跡が分布する。

砂質微高地では遺跡の分布密度が極めて高く、また各遺跡は各時期の複合遺跡であることが確認されている(第5図、表1)。

表1 周辺の遺跡地名表(番号は第5図中の遺跡番号に対応する)

番号	遺跡名	種別	時 期
19	本社山	塚	不明
147	石原A遺跡	集落跡 参道 遺物散布地	古墳後、奈良、平安、中世、近世、近代、現代
148	上ノ町遺跡	集落跡 居館跡	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世、近代
149	大町B遺跡	集落跡 遺物散布地	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
150	西ノ谷上遺跡	集落跡	古墳中、奈良、平安、中世、近世
151	入定塚	塚	古代、中世、近世
152	宮ノ腰遺跡	集落跡	古墳、奈良、平安、中世、近世
153	へび塚	塚	不明
154	本社A遺跡	集落跡 社寺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世
155	輪光寺の塚	塚	古墳末～中世
156	御屋敷A遺跡	集落跡	奈良、平安、中世、近世
157	御屋敷B遺跡	集落跡	弥生末～古墳前、古墳後、奈良、平安、中世、近世
158	勝沼遺跡	集落跡	古墳、奈良、平安、中世、近世
159	明王ヶ谷遺跡	集落跡	弥生末～古墳初、古墳後、奈良、平安、中世、近世
180	石原B遺跡	集落跡 参道	奈良、平安、中世、近世、近代、現代
181	本社B遺跡	集落跡	古墳、奈良、平安、中世、近世
182	金山遺跡	集落跡 館跡	弥生末、古墳前、奈良、平安、中世、近世
183	円蔵前遺跡	集落跡	古墳末、奈良、平安、中世、近世
184	下ヶ町遺跡	集落跡	古墳、奈良、平安、中世、近世
185	小井戸遺跡	集落跡	弥生末、奈良、平安、中世、近世、近代
186	鶴ヶ町遺跡	集落跡	古墳前、奈良、平安、中世、近世
187	中谷遺跡	集落跡	古墳前、古墳後、奈良、平安、中世、近世
188	大屋敷A遺跡	遺物散布地	古代、奈良、平安、中世、近世
189	大屋敷B遺跡	集落跡 遺物散布地	弥生後、古墳前、奈良、平安、中世、近世
190	大町A遺跡	集落跡	古墳中、奈良、平安、中世、近世、近代
191	広町遺跡	集落跡 遺物散布地 生産跡	古墳末～奈良、平安、中世、近世
210	鶴嶺八幡宮参道	参道	平安
215	鐘ヶ谷遺跡	集落跡	奈良、平安

各項目の記載は神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳[茅ヶ崎市]から転載し一部種別の用語を統一した

弥生時代中期～後期

市域砂質微高地での人的活動の初源期にあたる最も古い痕跡は、新湘南国道建設工事に伴って行われた西久保上ノ町遺跡第 1 次調査で確認された弥生時代中期の遺物や後期の小形壺であり(岡本・富永・大村 1985)、また第 17 次調査では宮ノ台式期の短頸壺が出土した(伊藤 2014)。矢畑金山遺跡第 8 次調査では 2 号竪穴状遺構や 9 号土坑などのテフラ分析を行った結果、中期後半～後期に遡る遺構であることが確認された(宮下 2000a、上本 2000)。西久保大町 A・B 遺跡第 1 次調査では黒色湿地層から下部の砂層にかけて後期から終末期の土器片と多量の木材(農耕具・杭建築材を含む)が発見され、弥生時代の水田跡が広がる可能性を指摘している(富永 1999)。

弥生時代末～古墳時代前期

古墳時代前期は弥生時代末に引きつづき集落が営まれるほか、西久保地区では市域では初(県内でも 5 例目)となる玉造工房址も認められる。浜之郷地区では宮ノ腰遺跡および本社 A・B 遺跡から弥生時代末～古墳時代前期の遺物が出土している。

集落の形成が確認されるのは弥生時代末期以降であり、西久保大屋敷 B 遺跡第 1 次調査(藤井 1997)や円蔵小井戸遺跡第 4 次調査(富永 1997)では弥生時代末～古墳時代前期の竪穴住居址が検出された。

西久保大屋敷 B 遺跡第 9 次調査では数十軒単位の竪穴住居址や玉造工房址が検出され、管玉製作関連資料が出土した。玉造集団の専住が想定されている(小池 2011)。円蔵御屋敷 B 遺跡第 9 次調査では竪穴住居址が検出され、古墳時代前期末頃と推測される器台が出土した(宮下・伊藤 2015)。

古墳時代中期～後期

円蔵御屋敷 B 遺跡は、本遺跡の北東側に隣接して分布する。第 3 次調査地点東部では中期と推測される 1 号竪穴住居址が検出された。古墳時代の土師器の出土量が多いことから、周辺地域に古墳時代の遺跡が展開している可能性も十分考えられる(永井 1997)。

浜之郷西ノ谷上遺跡第 1 次調査では竪穴住居址が検出され、出土遺物より古墳時代中期末～後期初頭の所産と考えられる(大村・寺岡 1997b)。また宮ノ腰遺跡第 1 次調査では左記に後続する 6 世紀後半～7 世紀前半、7 世紀後半と推測される竪穴住居址が検出された(富永・大村 1986)。宮ノ腰遺跡第 3 次調査では大きな円形を描く 1 号溝状遺構が確認された。溝状遺構は古墳(高塚古墳)の周溝の一部分であり、出土遺物から 6 世紀の所産と考えられる(大村 1990)。

古墳時代後期

円蔵地区の下ヶ町遺跡第 1 次調査(下ヶ町 A 遺跡第 2 次調査)において竪穴住居址他が検出され、土器とともに管玉、丸玉、切子玉、勾玉、有孔円板などが出土した(寺井 1994)。下町屋、浜之郷地区の石原 A・B 遺跡ではこの時期以降の痕跡が認められ、下町屋石原 A 遺跡第 2 次調査では 7 世紀後半～8 世紀前半と推測される竪穴住居址 3 軒が検出されている(永野 1995)。

奈良・平安時代

前時代に比して遺構密度が高まるのが奈良・平安時代であり、各地に断続的かつ集中して集落が形成され、矢畑、浜之郷地区では鉄・鉄器生産を窺わせる痕跡も出土する。また公的施設と考えられる大型の掘立柱建物や三彩陶器等の遺物も出土し、本地形に分布する遺跡と下寺尾官衙遺跡群が小出川の水利をもつ

て結びついていた可能性が指摘されている(富永2011)。

西久保上ノ町遺跡第1次調査では、7世紀後葉～10世紀前半の竪穴住居址が多数発見された(岡本・富永・大村1985)。大町A・B遺跡第1次調査では市内最大の3×5間(長軸11.5m)の大型掘立柱建物址と、同規模の可能性を有する1棟(長軸12.6m)が検出された(富永1999)。

円蔵小井戸遺跡第1次調査では、古代の掘立柱建物址が検出され、建物址から緑釉陶器の稜皿や灰釉陶器の段皿が出土した。なお北側隣接地にあたる第7次調査地点においても緑釉陶器が出土しており、本地域の性格を考える上で重要である(大村・石倉2009)。

矢畑明王ヶ谷遺跡第4次調査では古代の竪穴住居址や土坑、溝状遺構、木枠を有する井戸址が検出された。なかでも土坑は100基以上が検出されるとともに、一部の土坑内から鉄滓やフイゴの羽口が出土した。また溝状遺構から8世紀末～9世紀前葉頃の土師器や集落域での出土が少ない須恵器横瓶が出土したほか、遺構外からは市内初となる石帯の巡方が出土した(高橋1999)。

浜之郷宮ノ腰遺跡では隣接する第1次および第15次調査地点から竪穴住居址17軒が集中的に検出された。第15次調査地点では竪穴建物址から多量の鍛冶関連遺物が出土し、9世紀後半以降の円形土坑から三彩陶器薬壺底部片が出土した(富永・大村1986、藤井・澤村2018)。

浜之郷西ノ谷上遺跡第2次調査では竪穴住居址28軒が中央の溝状遺構を境に粗密をもって分布し、掘立柱建物址2棟、総柱建物址1棟が検出された(宮下2004)。

下町屋・浜之郷地区の石原A・B遺跡では、8世紀中頃～11世紀前半まで集落が営まれ、石原A遺跡第1・11次調査、石原B遺跡第2・4・5・6・7次調査などで竪穴住居址が検出されている。

中世

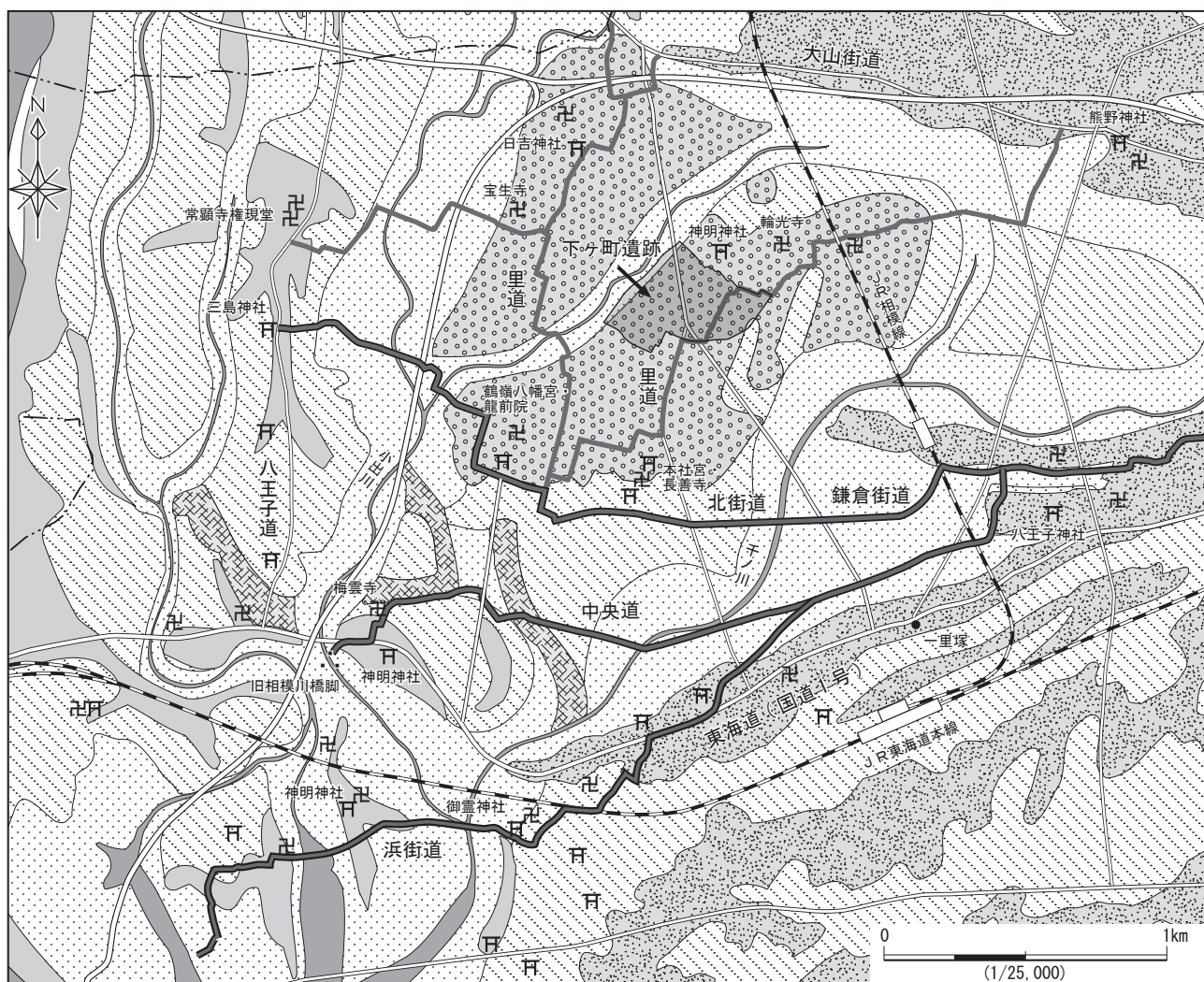
本地域においては領主層などが隆盛する時代であり、屋敷堀と考えられる大規模な溝や居館跡などの発見が報告されている。また多量のかかわりや舶載品、板碑などの豊富な内容は居館や社寺に関連し、当時の活況を物語る資料であり、今後も新たな発見が期待される。なお、発見される溝や道状遺構の多くは現市道に沿って造られていることが多く、現代の地割や区画が中世期に遡ることを示唆している。

『茅ヶ崎市史』によれば、砂質微高地に立地する西久保、円蔵、矢畑、浜之郷地区は、源順が承平5(935)年に撰進した『倭名類聚鈔』の高座郡十三郷一駅家の中の河会郷にあたり、長治年中(1104～1106)に相模国の住人平景正が、先祖相伝の私領を伊勢恒吉を通じて伊勢神宮の御領に寄進した大庭御厨(御厨は伊勢神宮の荘園を指す言葉)の西部分にあたと推測されている。『吾妻鏡』には治承4(1180)年に源頼朝による挙兵が記され、大庭御厨周辺を所領していた者として大庭平太(懷島)景義(景能)の名がみられるが、建暦3(1213)年には、侍所別当和田義盛の挙兵に際し、懷島景義の子、大庭(懷島)景兼が討死し所領が没収されている(貫1981)。その後懷島は二階堂氏、足利直義の所領へと変遷する。明応4(1495)年には伊勢宗瑞(北条早雲)が小田原城を大森藤頼から奪い取り、永正9(1512)年には三浦義同の岡崎城を陥して鎌倉に入ったとされ、このころに茅ヶ崎市域は後北条氏の勢力圏内に入ったと考えられる。永禄2(1559)年の『小田原衆所領役帳』では、近藤氏が懷島を「根拠地」として、甘沼を知行地としていたとされた(佐藤1981)。それ以降は徳川家の直轄地と旗本の領地に分かれ、例えば天正18～20(1590～1592)年の円蔵村は、直轄地と旗本横山一重、大田吉正が知行するようになる(神崎1981)。

円蔵字御屋敷に所在する神明神社は、『新編相模國風土記稿』第3巻によれば、神社は懷島景義の居館跡にあり、居館の鎮守と伝えられている。さらに岩見屋舗や近藤中屋舗などの居館は懷島景義の居館跡にあったとされ、御家人などの居住地になったと伝えられている。そのほか、浜之郷地区には鎌倉幕府および足利氏鎌倉府体制下と密接な関係を有した浜之郷鶴嶺八幡宮や鶴嶺八幡宮元僧坊の一つであった龍前院、西久保地区には宝生寺や日吉神社、妙運寺など中世には存在したと考えられる社寺があり、沿革や記録については『茅ヶ崎市史』（天ヶ瀬1980、小川1980）や『茅ヶ崎市文化財資料集』（斉藤1988）ほか（丸山1992）に詳しい。

鎌倉古道については、今では住宅が立ち並び街道らしき面影は見られないが、市内には鎌倉街道が通っていたとされている(第6図)。

鎌倉の長谷から藤沢を経て西に向かう道は南街道および北街道と称される街道があり、2本の街道は茅ヶ崎市立松林中学校付近で合流する。そして市内を通り、再び2本に分かれる。北街道は鶴嶺八幡宮の南を通り小出川を渡って寒川方面へ北上する道であり、南街道は茶屋町、十間坂の北から参道の松並木を横切り梅雲寺の南側を抜け、鎌倉時代に架けられた橋の橋脚であると考証された「史跡旧相模川橋脚」付近まで延びる。南街道より茅ヶ崎市役所付近で南に分かれ東海道を横切り、十間坂、松尾を通り柳島へ向かう



第6図 市城南西部の地形と鎌倉古道(1/25,000 藤井・澤村2015から転載一部改変 地形分類は第2図に準ずる)

道があるが、これは江戸時代に年貢米を柳島へ運んだ道と伝えられている(平山1994)。

鶴嶺八幡宮横参道から北上して中谷橋で旧河道を渡って西久保地区の宝生寺や日吉神社の門前を通り大山街道へ至る里道や、同横参道から矢畑地区を抜けて円蔵地区の神明神社や輪光寺の門前を通り大山街道へ至る里道の存在が知られている。これらの道に沿って中世の社寺が所在することから、道の時期は中世に遡ることが想定されている。この他、宝生寺の門前に北向地藏と呼ばれる地藏尊が安置されており、ここから萩園地区の常願寺にある権現堂に至る子之権現道も存在する。なお縁起によると権現堂の開帳をするようになった時期は、至徳(1384)元年頃に遡る(平山1994)。

発掘調査では、西久保地区の上ノ町遺跡第6次調査では屋敷地と考えられる掘立柱建物集中地点や居館を囲む碁盤目状の溝、東西道および南北道により構成される区画が確認され、掘立柱建物址は13～14世紀代と15～16世紀代の大きく2段階に分けられる可能性を指摘し、近藤氏の居館跡であると推定されている(穴戸・宗臺2003)。遺物では12世紀後半～13世紀前半の龍泉窯系青磁碗(富永・小森2009)や、第6次－4調査30区3号井戸址出土の遺物が13世紀に限られ、二階堂氏領有時代と推測される(澁谷・吉川2009)。

西久保地区の主要な区画溝は、中世の溝分布図(三澤・高橋2013)にまとめられており、「居館」を中心に区画溝が東西と南北の軸位を有してほぼ同一直線上に広範囲にわたって展開している様子が観察できる。

13～14世紀代については、浜之郷龍前院の北側隣接地(本社A・B遺跡)にこの時期の遺物が集中する傾向にあり、本社A遺跡第7次調査地点では中世の溝状遺構5条が確認され、最も古い溝状遺構から13世紀中頃と推測されるかわらけがまとまって出土した(藤井1999)。現在の龍前院本堂西側である本社A遺跡第12次調査地点では、特異な土坑(第5号土坑)が確認され、寺域内の茶毘址の可能性を指摘している。第5号土坑内からは14世紀～15世紀代の常滑産陶器、瓦質土器や青磁が出土している(加藤・伊藤2024)。

本社B遺跡第2次調査地点では13世紀後葉～14世紀初頭の土坑から24個体以上のかかわらけが出土し、薄手丸深型1個体が含まれていた(伊藤2007)。第7次調査地点では幅3.0m以上の溝状遺構4条や土坑群が検出され、13世紀前半頃の手づくねかわらけや青磁碗、山茶碗などが出土した(伊藤・長澤2013)。

矢畑明王ヶ谷遺跡第5次調査地点では中世の遺構群が高密度に検出され、建物址、井戸址、区画溝と推測されるV字溝などから13世紀代の遺物が出土した(押木・齋木2015)。

15～16世紀代については、円蔵御屋敷B遺跡第1次調査では中世の屋敷堀の可能性を有する大溝の屈折箇所や大溝の内側に建物址が検出された(大村・寺岡1995)。また第8・9次調査では第1次調査屋敷堀の北側延長部分が検出された。第9次調査では大溝の東側に多数のピット群が検出され、建物址や柵列の可能性のある柱穴列が確認された(伊藤2009、宮下・伊藤2015)。

浜之郷西ノ谷上遺跡第2次調査地点では中規模の区画溝、建物址、竪穴状遺構が検出され、竪穴状遺構から15世紀末～16世紀初頭頃のかかわらけが出土した(宮下2004)。中谷遺跡第3次調査地点では道状遺構の可能性のある溝状遺構が検出された(宮下2011)。本社A遺跡第1次調査地点では溝状遺構、土坑などが検出され、70号土坑から208片のかかわらけが一括出土した。土坑の時期は15世紀末～16世紀初頭頃と推測されている(大村・石倉2005)。宮ノ腰遺跡第1次調査では区画溝が検出され、区画内からは中世末16世紀～近世の竪穴状遺構が検出された。竪穴状遺構は住居関連遺構と想定されている(富永・大村1986)。

第15次調査ではL字状の区画溝が検出され、第1次調査区画溝の一部分を構成する可能性があるとともに鶴嶺八幡宮に関係する神社仏閣や屋敷の区画である可能性を指摘している(田中・林原2018)。

第16次調査では溝状遺構、井戸址、地下式坑等が検出され、2号・3号溝状遺構からは大小多量のかわらけが出土した。1号井戸址からは13世紀代の常滑窯や渥美窯の甕・鉢などの炆器類、青磁などの中国輸入陶磁、古銭、板碑片などが出土した(大坪2021)。

矢畑金山遺跡第1次調査では室町時代後半期から戦国期(16世紀)と推測される幅4.5～5.5mの15号溝が検出された(富永1994)。中世における状況は、館を取り巻く堀と考えられる大溝の発見などから、懷島関連の遺跡であることを予察させる(大村1993)。第6次調査では16世紀代を下限とする溝状遺構が検出され、12世紀代の渥美窯の遺物や13世紀代・15世紀明代の舶載青磁が出土した(岡本・大村・藤井1997)。第10次調査においても幅約4.5mを測る大溝が検出された(東2003)。第14次・16次調査では居館と考えられる大型区画や柱穴列、竪穴状遺構が検出され、竪穴状遺構覆土からは15世紀末～16世紀初頭と推測されるかわらけや、13世紀中葉～14世紀初頭と推測される白磁口禿皿片が出土した。また区画内の井戸址からは13世紀後半の白磁口禿皿片や13世紀初頭から中頃の青磁同安窯櫛搔文碗体部が出土した(伊藤・中根2011)。

近世以降

近世以降は、遺物の出土がない限り中世以降から宝永火山灰が降灰する1707年までの区別は難しく、遺跡では宝永火山灰をもって近世以降の痕跡を捉えることになる。遺跡では、耕作に伴う溝状遺構や小ピットが表土下から大部分の遺跡で確認することができるほか、宝永期以前に築造された溝や井戸が宝永火山灰を含む堆積土で覆われている事例も散見される。後世の土地利用により残存が良くない場合もある。

上述のほかには、浜之郷地区の宮ノ腰遺跡第8次調査で東西方向の近世溝状遺構を検出しており、その延長が万延元(1860)年作成の絵図に描かれた鶴嶺八幡宮の横参道と符合し、近世段階の横参道に伴う側溝である可能性が高いとされた。平成31(2019)年4月に実施した横参道(宮ノ腰遺跡、本社A遺跡)の確認調査でも横参道および側溝と考えられる硬化面と溝状遺構が確認されており、絵図に描かれた横参道が存在することは確実である(大村・三戸2021)。第9次調査地点では横参道に接続する道路状遺構および側溝が検出され、道路状遺構2面の硬化面のうち、下面は18世紀前半には存在していたこと、大正11(1922)年の鶴嶺小学校改変時まで使用されていたことが明らかになった(大村・石倉2006)。

鶴嶺八幡宮参道では第1次調査において17世紀以降の古参道を3面にわたり検出しており、最も古い17世紀代の第Ⅲ面に伴うと推測される木製鳥居の柱基礎が出土した(岡本・大村1992)。なお、鶴嶺八幡宮参道は両側の松並木とともに歴史的景観的な価値から市の史跡・天然記念物に指定(昭和44(1969)年)されている。第16次調査では、土地所有者である尾坂家で使用されていた蔵と思われる近世建物址が検出された(大坪2021)。

第 3 節 遺跡の概要と調査地点の位置

本遺跡は神奈川県茅ヶ崎市円蔵字下ヶ町2357～2487ほかに所在する。神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳によると東西約550.00m、南北約200.00mの範囲を測り、不整の三角形状を呈する。遺跡の種別は集落跡であり、時代は古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世であることが確認されている。

遺跡の北西辺は、旧河道と接して包蔵地外となっている。また中央を県道45号線が南南東―北北西方向へ縦断している。主な水域までの距離は、相模湾まで南側約2.90km、相模川まで西側約2.50km、相模川の支流である小出川まで西側約0.90kmとなっている。

地表面の標高は約5.20m～6.00mを測り、概ね平坦ではあるが南部砂質微高地の南東端部側へ下降傾斜する傾向にある。

明治15(1882)年に測量された迅速測図(第4図)の記載は、近世後半以降から昭和時代の市街地化が進む前までは円蔵村の原風景を止めていたと考えられる。浜之郷鶴嶺八幡宮から円蔵神明神社を経由して大山街道へ至る里道沿いには家屋が点在し、里道沿いに集落が形成されていたことが確認できる。また本遺跡の東半部は、里道および集落の一面にあたることが確認できる。

第12次調査地点は茅ヶ崎市円蔵字下ヶ町2602番の一部外に所在し、JR東海道本線茅ヶ崎駅の北西側約1.65km、JR相模線北茅ヶ崎駅の西北西側約1.10kmにあたる。調査地点の周囲は、耕作地から宅地化しつつある。また遺跡範囲の南西部にあたり、調査区の北端部は平成29年度下水調査地点に接続する。

本調査地点の南側約55.00mには第11次調査地点が位置し、金山遺跡の北端部に隣接する。この辺りは、古代の居住域であることが確認されている。

第24次調査地点は茅ヶ崎市円蔵2463番5に所在し、JR東海道本線茅ヶ崎駅の北北西側約1.60km、JR相模線北茅ヶ崎駅の北西側約1.10kmにあたる。また遺跡範囲の北西部で旧河道の左岸域にあたり、旧河道の南東側約65.00mの距離にある。現地標高は概ね5.90～6.00mを測り、市域砂質微高地において最高地点の一地点にあたる。県道45号丸子・中山・茅ヶ崎線の西側に位置する住宅地の一角であり周辺は住宅が多く、県道沿いには店舗が建ち並ぶなど市街化が著しい。昨今は旧河道部分の田んぼが宅地開発に伴い盛土されたり、屋敷地が分譲され旧地形や古来からの土地区画が窺いづらくなっている。

本調査地点は第15次調査地点の西側約35.00mの距離に位置する。第15次調査地点では古代集落の拠点と成り得る遺構が高密度で発見されている。また北西側約20.50mの距離に第20次調査地点が位置し、仏教信仰が窺われる青銅製香炉脚を伴う中世の竪穴状遺構が発見されている。本調査地点にも古代集落や中世村落の展開が予想される。

第 4 節 過去の調査

下ヶ町遺跡においては、過去に26次にわたる本格調査が行われ弥生時代後半から近世までの内容が確認されている。各調査の主な内容は表 2・3・4 のとおりである。

弥生時代後期後半から古墳時代前期においては、第13次調査では、折り返し口縁壺が出土した(長澤2007)。また第15次調査では古墳時代前期の土器が出土した(宮下・伊藤2009)。

古墳時代中期においては、第17次調査では中期後半～末と推測される 1 号井戸が検出された(加藤・渡辺2019)。市域砂質微高地では中期遺跡の検出事例は極少なく、重要な発見である。

古墳時代後期においては、遺跡西部が集落の中心と考えられ、第 1・4・8・10・11次調査で堅穴住居址が検出されている。特に第 1 次調査では 9 号堅穴住居址他から管玉、勾玉、丸玉、切子玉などの装飾品や石製模造品(有孔円板)が出土し、有力者の居宅や祭祀場の可能性が指摘されている(寺井1994)。

奈良・平安時代においては、遺構が遺跡全体に広がり、遺跡西側ではやや特殊な遺構・遺物が確認されている。第15次調査では、長軸が1.0m以上を測る大型柱穴により構成される 3 間の規模を持つ掘立柱建物 2 棟が検出された。建物の役割としては、第 1 次調査で銅製の帯金具の「鉞尾」、第 4・7・15次調査で緑釉陶器が出土していることから、税物資等の収集や運搬を担っていた可能性があり、それに伴って監督する人物の存在が示唆され、背景には旧河道による水運の可能性を指摘できる(宮下・伊藤2009)。

第 6 次調査では奈良時代の堅穴住居址 1 軒が検出された。また西側隣接地の第 2 次調査地点では平安時代の堅穴住居址 3 軒が発見されている。低地に集落が進出する要因は、稲作あるいは畑作などの生産を目的とする可能性も考慮されるが、当該期の生産遺構は発見されておらず今後の課題である(高橋1997)。

第 8 次調査では、古代以前の堅穴住居址14軒、堅穴状遺構18基、掘立柱建物址 3 棟、井戸址 4 基、溝状遺構32条、土坑32基、落込み16基、ピット460穴が検出された。堅穴住居址の時期は、概ね 7 世紀中葉～後半 3 軒、8 世紀後半～9 世紀前葉 7 軒、9 世紀中葉～後半 2 軒が確認されている(宮下2003)。

第26次調査では旧河道の岸部分において 9 世紀を中心とする時期の堅穴住居址や井戸他が検出され、また旧河道の岸から2.0m以上低い土地において 8 世紀前半頃の溝状遺構や土坑が検出された(降矢2023)。

中・近世においては、溝状遺構が多く検出されている。第 2 節で述べたとおり、本遺跡周辺は中世期に「懷島郷」として栄えた地域であり、屋敷地や社寺などが立地するなど土地開発が盛んに行われたと考えられる。第 2・3 次調査では幅5.0mを超える大溝が検出されており、屋敷堀と想定されている(大村・寺岡1997a・b)。第11・14次調査では、幅2.0～3.0mの溝が検出されている(林原2007、宮下2007)。

第 6 次調査では中近世の溝状遺構30条以上が確認された。このうち調査区を縦走する第 1 号・5 号溝状遺構は断面形状が薬研状を呈し、覆土の状況から帯水していた状況が窺える(高橋1997)。

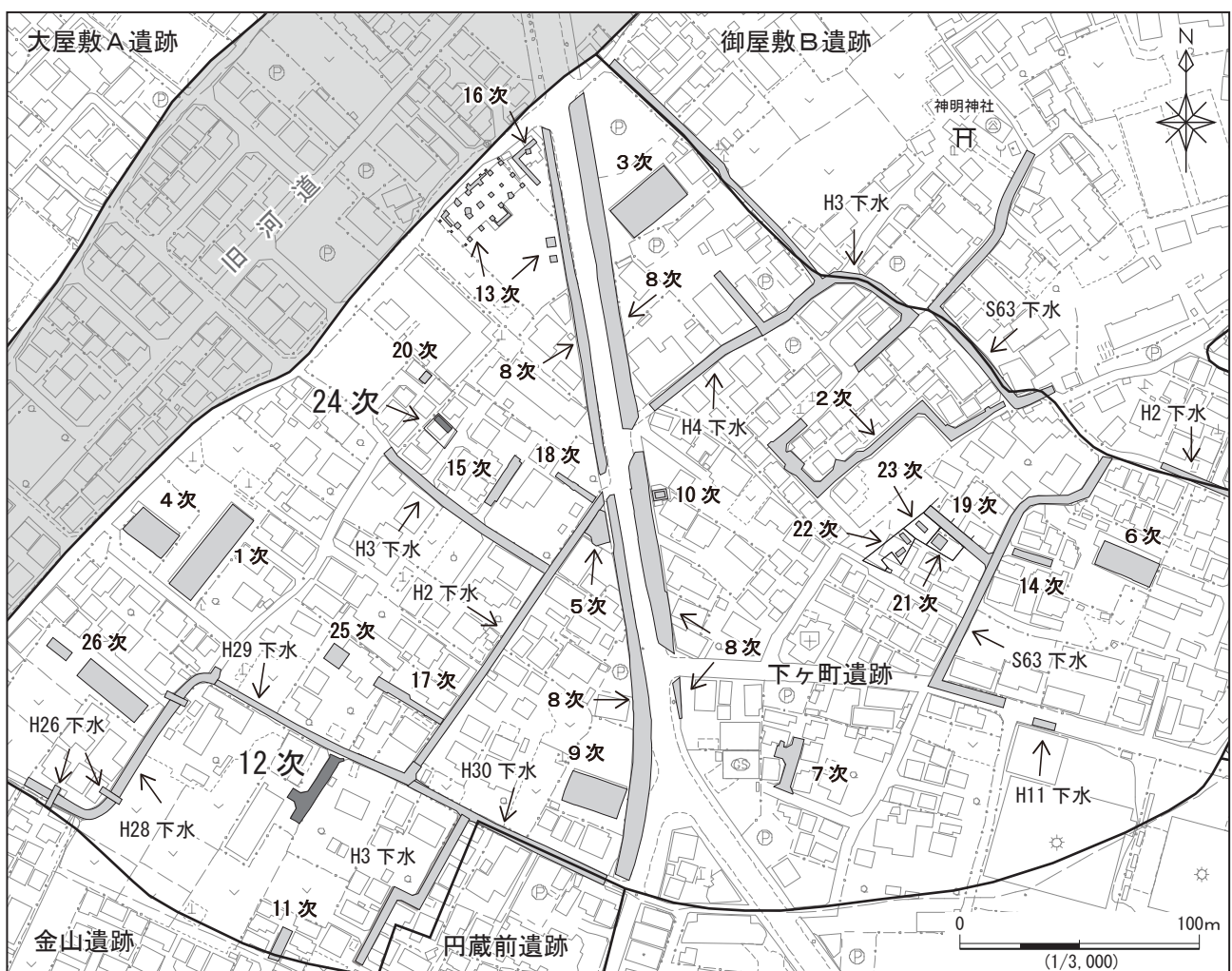
第 8 次調査では堅穴状遺構 2 基、井戸址12基、溝状遺構66条、土坑30基、落込み11基、ピット425穴が検出された。溝状遺構は近世以降の溝状遺構と同様の方向性を有し、区割りの性格のものが多いと思われる(宮下2003)。第13次調査では、「おそらく西方に顔を向け、膝を曲げて横たわる側臥屈葬」と思われる埋葬人骨が発見され、近くから埋葬時に供えたと考えられる16世紀代のかわらけが 1 点出土した(長澤2007)。

第19次調査では調査区に沿って走行する中世の溝 6 条が検出された。いずれも上面の幅は1.00m以下である。溝 6 条の年代観は、出土遺物から16世紀～17世紀初頭頃と推測される(降矢2023)。

第20次調査では竪穴状遺構が検出され、青銅製の香炉脚が出土した。遺構の年代観は、出土遺物から16世紀の所産で後北条氏領主期頃と想定される。遺構の性格は、仮設の構造をもつ可能性があり、一方仏具の出土は仏教信仰による儀礼を示唆し、遺構・遺物が遺された背景には、近藤氏などの領主の影響が想定される(三戸ほか2022)。

昭和63年度の公共下水工事に伴う発掘調査は、第19次調査地点と接続する市道4073号線においても行われ、大小多くの溝状遺構が検出された(富永・大村1989)。

近世においては、第8次調査では井戸址21基、溝状遺構68条、土坑39基、畝状遺構53条、水田址1箇所、落込み25基、ピット346穴が検出された。溝状遺構や畝状遺構は北東から南西方向に延び、または直交する。水田址は県道45号線が開通するまで存在していた水田域の名残を示す(宮下2003)。第6・9次調査では土壌墓が検出された。第6次調査の土壌墓は、木棺を伴い副葬品に寛永通寶が含まれることから、報告者は埋葬形態から当時の地方農村において仏教思想に基づく葬送儀礼が定着していた様相を窺うことができる(高橋1997)。第9次調査では、土壌墓1基と溝状遺構1条から人骨が出土した。土壌墓については副葬品の出土がなく、中世末から近世までの幅を持たせて報告されている(安井1998)。



第7図 過去の調査地点(1/3,000)

表 2 下ヶ町遺跡における過去の調査概要 1

調査 回数	調査年月日	面積 (㎡)	発見された主な遺構と遺物		文献
	調査原因				
1 次	平成 5 (1993) 年 6 月 10 日 ～12 月 13 日	482.0	古墳後期～古代	：堅穴住居址 17 軒、堀立柱建物址 6 棟以上、堅穴状遺構 1 基 土師器、須恵器、灰釉陶器、帯金具(鉈尾)、石製品(管玉・丸玉・ 切子玉・勾玉・有孔円板(石製模造品)・砥石・石錘・紡錘車)	53
	共同住宅		古代～中世 中世 中世～近世 古代～中近世 近世	：溝状遺構 13 条、土坑 62 基 ：井戸址 4 基、溝状遺構 4 条 ：土壇墓 1 基 かもらけ、陶器、磁器、金属製品(刀子・こうがい・ 煙管・釘)、銭貨、木製品(箸・井戸側)、馬歯、種子 ：ピット 100 穴 ：溝状遺構 1 条	
2 次	平成 7 (1995) 年 4 月 17 日 ～6 月 7 日	527.4	古代	：堅穴住居址 3 軒、堀立柱建物址 2 棟、溝状遺構 6 条、土坑 4 基、 ピット 170 穴 土師器、須恵器	24
	宅地造成		中世 近世	：堅穴状遺構 5 基、溝もち建物址 1 棟、井戸址 2 基、土坑 1 基、 溝状遺構(南北方向の大溝含む) 6 条、ピット 64 穴 かもらけ、陶器、棒状鉄製品、銭貨、石製品(硯・石臼・板碑)、 木製品(柄杓・漆碗・杭)、獣骨、昆虫、種子、植物遺存体 ：ピット 10 穴	
3 次	平成 7 (1995) 年 6 月 15 日 ～7 月 15 日	446.9	古代 古代～中近世 中世	：井戸址 1 基 土師器、須恵器、瓦、土製品(管状土錘、転用硯) ：ピット 92 穴 ：井戸址 3 基、溝 2 条(1 条は幅 6 m を超える大溝)、土坑 1 基 かもらけ、陶器(三耳壺)、青磁、鉄滓、青銅鏡、鉄製品(筭・釘)、 石製品(石臼・砥石・石鍋・宝篋印塔・板碑)、木製品(漆器) ：磁器	24
	集合住宅		近世		
4 次	平成 8 (1996) 年 5 月 10 日 ～8 月 3 日	235.0	古墳後期 古代	：堅穴住居址 2 軒 ：堅穴住居址 5 軒、堀立柱建物址 2 棟、溝状遺構 12 条、土坑 4 基、 落込み 4 ケ所、ピット 35 穴 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器	77
	共同住宅		中世	：溝状遺構 1 条、土坑 1 基、ピット 2 穴 陶器、青磁、鉄製品(鎌)、石製品(砥石)、銭貨、種子	
5 次	平成 8 (1996) 年 7 月 1 日 ～8 月 3 日	92.0	古代～中世 中世末～近世 近世	：土坑 2 基、ピット 6 穴 土師器、須恵器、灰釉陶器 ：溝状遺構 4 条、ピット 14 かもらけ、山茶碗、陶器、石製品(火輪) ：井戸址 1 基、溝状遺構 1 条、土坑 4 基 瓦器、瓦、陶器、磁器、鉄製品(覆金具・錠前)、石製品(石臼・砥石) ：土坑 1 基、ピット 52 穴 陶器、磁器、ガラス	51
	個人住宅		近世～近代		
6 次	平成 8 (1996) 年 8 月 5 日 ～9 月 21 日	250.0	奈良 古代～近世 中世～近世	：堅穴住居址 1 軒 土師器、須恵器 ：ピット 174 穴 ：井戸 2 基、溝状遺構 37 条、土坑 11 基 かもらけ、陶器、磁器、鉄製品(刀子・鎌・釘)、石製品(砥石)、 土製品(泥面子)	48
	共同住宅		近世	：土壇墓 2 基 石製品(数珠玉)、木製品(木棺・漆塗箱)、銭貨	
7 次	平成 8 (1996) 年 11 月 25 日 ～12 月 17 日	150.0	古代 中世	：溝状遺構 1 条、ピット 11 穴 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器 ：堅穴状遺構 1 基、井戸址 2 基(桶を利用した井戸枠)、溝状遺構 2 条、 落込み 1 ケ所、ピット 1 穴	76
	宅地造成		近世 中世～近世 時期不明	：井戸址 1 基、落込み 1 ケ所、ピット 2 穴 銭貨 ：かもらけ、陶器、磁器、鉄製品、木製品(井戸枠)、馬歯、昆虫、種子 ：溝状遺構 6 条、土坑 8 基、落込み 2 ケ所、ピット 74 穴	
8 次	平成 8 (1996) 年 12 月 15 日 ～ 平成 9 (1997) 年 3 月 31 日	611.3	古墳後期 古代 中近世	：堅穴住居址 1 軒 土師器 ：溝状遺構 5 条、土坑 6 基、ピット 85 穴 ：井戸址 1 基、溝状遺構 3 条、土坑 2 基、ピット 62 穴 かもらけ、陶器、磁器、石製品(砥石)、木製品(梯)、馬歯	56 83
			近世以降	：溝状遺構 19 条、土坑 10 基、畝状遺構 11 条	
	平成 9 (1997) 年 4 月 1 日 ～ 平成 10 (1998) 年 3 月 31 日	1,645.0	古墳前期 古墳後期～平安	：土師器 ：堅穴住居址 5 軒、堅穴状遺構 4 基、堀立柱建物址 7 棟、溝状遺構 10 条 土坑 13 基、落込み 2 ケ所、ピット 166 穴	78 83
			中世～近世	土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品(管状土錘)、石製品(紡錘車) ：堅穴状遺構 1 基、井戸址 5 基、溝状遺構 38 条、土坑 12 基、 落込み 9 ケ所、ピット 169 穴 かもらけ、陶器、青磁、瓦質土器、土製品、石製品、木製品、漆碗、 金属製品(煙管)、銭貨、動物遺存体(人歯・馬歯)、種子	
			近世(宝永)以降	：井戸址 4 基、溝状遺構 26 条、土坑 4 基、落込み 11 ケ所、ピット 88 穴 陶器、磁器、土製品(泥面子)、金属製品(煙管)、銭貨	
	平成 10 (1998) 年 4 月 1 日 ～ 平成 11 (1999) 年 3 月 31 日	1,200.0	古墳後期～平安	：堅穴住居址 6 軒、井戸址 2 基、溝状遺構 6 条、土坑 11 基、 落込み 7 ケ所、ピット 62 穴、その他 5	62 79 83
			中世～近世	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、石製品、ガラス玉 ：堅穴状遺構 7 基、井戸址 3 基、溝状遺構 39 条、土坑 22 基、 落込み 9 ケ所、ピット 164 穴、その他 10 かもらけ、陶器、瓦質土器、土製品(管状土錘)、木製品(曲物)、銭貨	
			近世(宝永)以降	：井戸址 9 基、溝状遺構 36 条、土坑 8 基、落込み 19 ケ所、ピット 154 穴 その他 200 瓦質土器(火鉢)、陶器、磁器、土製品(泥面子)、金属製品(煙管)、 石製品(砥石)、銭貨	
	平成 11 (1999) 年 5 月 1 日 ～9 月 30 日	805.0	古代以前 中世～近世初頭	：堅穴住居址 1 軒、ピット 4 穴 土師器、須恵器、灰釉陶器 ：溝状遺構 6 条、土坑 1 基、落込み 1 ケ所、ピット 61 穴 かもらけ、陶器、磁器、土製品、石製品、銭貨	81 83
	県道 45 号線改良		近世(宝永)以降	：土坑 1 基、落込み 10 ケ所、ピット 46 穴 瓦質土器、ガラス製品	

表3 下ヶ町遺跡における過去の調査概要2

調査 次数	調査年月日	面積 (㎡)	発見された主な遺構と遺物		文献
	調査原因				
8次	平成12(2000)年 4月1日 ～5月31日 (第47～51区)	約 300.0	古代 中世～近世初頭 近世(宝永)以降	: 堅穴住居址1軒、堅穴状遺構1基、掘立柱建物址1棟、井戸址3基、溝状遺構1条、落込み4ヶ所、ピット41穴 土師器、須恵器 : 井戸址1基、溝状遺構5条、落込み5ヶ所、ピット15穴 : 井戸址4基、溝状遺構1条、土坑2基、畝状遺構9条、落込み5ヶ所 ピット17穴、不明遺構14基	82 83
	県道45号線改良		中世～近現代	: かわらけ、陶器、磁器、瓦質土器、鉄製品、石製品、木製品、銭貨、昆虫、種子、ガラス製品	
9次	平成9(1997)年 7月14日 ～11月8日	456.3	古代 古代～中近世 中世 中世～近世 近世	: 堅穴住居址8軒、掘立柱建物址2棟、溝状遺構11条、土坑14基 土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品(土錘) : ビット177穴 : 土壌墓1基 かわらけ、陶器、青磁、鉄製品、銭貨、人骨、獣骨 : 溝状遺構20条、土坑3基 : 陶器、磁器、鉄製品(釘)	90
	集合住宅				
10次	平成11(1999)年 6月8日 ～6月18日	20.0	古墳後期 古代	: 堅穴住居址1軒 土師器、須恵器 : 溝状遺構2条、土坑6基、落込み1ヶ所、ピット20穴 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器	81
	個人住宅		中近世	: かわらけ、陶器、磁器、鉄製品、石製品(砥石)、銭貨、ガラス製品	
11次	平成16(2004)年 5月11日 ～5月21日	63.0	古墳後期～奈良 古代 近世	: 堅穴住居址1軒 土師器、須恵器 : 溝状遺構5条、土坑3基 土師器、須恵器 : 溝状遺構1条 陶器、磁器	66
	住宅建設				
12次	平成17(2005)年 8月1日 ～9月15日	175.0	古代～中世 中世 中近世 近世 近代	: 堅穴址1基、掘立柱建物1棟、ピット4穴 : 堅穴址1基、掘立柱建物1棟、不明遺構1基、溝11条、土坑5基 陶器、鉄製品、砥石 : 溝3条、土坑5基、ピット16穴 かわらけ、陶器、馬骨 : 溝1条、土坑3基、ピット5穴 陶器、磁器、石製品 : 井戸1基、土坑1基 土製品、ガラス、鉄製品、銭貨	85 本書
	宅地造成				
13次	平成18(2006)年 7月1日 ～7月20日	152.0	弥生後期後半～古墳前期 古代 中近世 近世	: 土器 : 溝5条 土師器、須恵器、灰釉陶器 : 溝5条 井戸1基、土坑4基、ピット7穴 かわらけ、陶器、石製品(石臼・砥石)、埋葬人骨1体 : 井戸1基、溝3条、土坑2基、ピット2穴 陶器、磁器	63
	店舗				
14次	平成18(2006)年 8月12日 ～8月18日	50.0	古代 中世～近世	: 堅穴状遺構1基 土師器、須恵器 : 井戸址1基、溝状遺構4条、土坑3基、ピット7穴 かわらけ、陶器	86
	宅地造成				
15次	平成20(2008)年 10月27日 ～11月20日	115.0	古墳前期 古代	: 土師器 : 堅穴住居址2軒、堅穴状遺構2基、掘立柱建物址2棟、柱穴多数、溝状遺構2条、土坑8基 土師器、黒色土器、ロクロ土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、鉄製品(刀子・鎌・鋌・紡輪・釘)、石製品(石臼)、動物遺存体(骨片)	88
	宅地造成		中世 近世	: 井戸址2基 : 井戸址1基 施釉陶器	
16次	平成24(2012)年 9月10日 ～9月22日	50.0	古代 古代～中世 中世	: 土師器、須恵器 : 堅穴址2基、ピット5穴 : 地業遺構1ヶ所、溝7条、ピット49穴 土師質土器、かわらけ、陶器、鉄滓、礫、動物遺存体	17 21
	集合住宅		近世	: 溝2条 磁器	
17次	平成30(2018)年 5月21日 ～6月20日	103.0	古墳 平安	: 堅穴状遺構1基、井戸1基、土坑3基 土師器 : 堅穴状遺構1基、柱穴列1基、溝状遺構7条、土坑28基、ピット8穴 土師器、須恵器、灰釉陶器	37
	宅地造成		中世 近世	: 掘立柱建物跡2棟、溝状遺構2条、土坑8基、ピット15穴 かわらけ、土製品(火鉢あるいは火入れ) : 溝状遺構2条、土坑11基、畝状遺構1基、ピット19穴 陶器、磁器	
18次	令和2(2020)年 7月2日 ～8月8日	46.9	古墳～平安 古代 中世後半～近世初頭 中世～近世 近世後半以降 近代	: 土師器、須恵器 : 堅穴建物址2基、溝状遺構1条、土坑4基、ピット12穴 : 方形堅穴状遺構1基、土坑1基、ピット8穴 陶器、磁器 : 井戸1基、土坑1基 : 便所遺構2基、土坑1基 瓦、陶器、磁器、ガラス	47
	宅地造成				
19次	令和2(2020)年 8月20日 ～9月30日	145.74	古代 中世	: 道路状遺構1条、土坑1基、ピット1穴 土師器、須恵器、灰釉陶器 : 溝6条、土坑7基、ピット14穴 かわらけ、瓦、土製品(フイゴ)、陶器、石製品(石臼)、礫	73
	宅地造成		近世	: 堅穴状遺構1基、溝1条、土坑2基、ピット2穴 陶器、磁器、瓦質土器(火消し壺)	
20次	令和2(2020)年 12月7日 ～12月11日	13.5	古墳～平安 中世	: ピット2穴 土師器、須恵器、灰釉陶器 : 堅穴状遺構3基、土坑1基、ピット39穴 かわらけ、瓦質土器、陶器、青銅製品(香炉脚)	43
	個人住宅		近世	: ピット1穴 陶器、磁器	

表 4 下ヶ町遺跡における過去の調査概要 3

調査 次数	調査年月日	面積 (㎡)	発見された主な遺構と遺物		文献
	調査原因				
21次	令和3(2021)年 9月7日 ～9月8日	25.0	古代～近世前半 近世前半以前 近世後半以降 近現代	:ピット10穴 土師器、須恵器、かわらけ、磁器 :溝状遺構1条、土坑3基 :土坑3基、畝状遺構2条、ピット7穴 :ピット1穴	34
	個人住宅				
22次	令和3(2021)年 9月10日 ～9月13日	18.0	近世前半以前	:堅穴状遺構1基、溝状遺構3条、ピット4穴 土師器、須恵器、陶器、磁器、石製品(砥石)	34
	個人住宅				
23次	令和3(2021)年 9月14日 ～9月15日	10.4	古代～近世 近世前半以前 近世後半以降	:土師器、陶器、磁器 :堅穴状遺構1基、溝状遺構4条、ピット3穴 :土坑1基、ピット1穴	34
	個人住宅				
24次	令和4(2022)年 3月17日 ～3月29日	20.0	古代～中世 中世 中世～近世 近世	:ピット3穴 土師器、須恵器、灰釉陶器 :堅穴址1基 陶器、馬骨 :溝1条、土坑3基、ピット1穴 かわらけ、陶器、青磁、鉄製品、石製品 :溝3条、集石1基、土壌墓1基、ピット3穴 陶器、磁器、鉄製品、 人骨、礫、炭化物、植物遺存体	44 本書
	個人住宅				
25次	令和4(2022)年 8月1日 ～8月26日	56.25	古代～中世 古代～近世 中世～近世前半 近代	:溝状遺構1条、ピット42穴 :土師器、須恵器、灰釉陶器、陶器、磁器、鉄製品 :土坑2基 :焼夷弾	35
	個人住宅				
26次	令和4(2022)年 8月22日 ～11月10日	320.46	古墳後期～奈良 古代 中世	:溝状遺構2条、土坑11基、 :堅穴住居址5軒、井戸址1基、土坑30基、ピット81穴 土師器、灰釉陶器 :井戸址1基 かわらけ	72
	集合住宅				
S63 下水	昭和63(1988)年 9月～ 平成元(1989)年 2月	総面積 2,000.0	古代～中近世 下ヶ町遺跡 御屋敷B遺跡 ※市道が下ヶ町遺跡と御屋敷B遺跡の境界にあたることから両遺跡を掲載した	:溝状遺構6条、ピット1穴 :堅穴住居址1軒、堅穴址2基、掘立柱建物址2棟、溝状遺構23条、 土壌2基、ピット群 土師器、須恵器、かわらけ、陶器、磁器、鉄製品、石製品、木製品	60
	公共下水				
H2 下水	平成2(1990)年 7月19日 ～11月14日	92.18	古代 古代～中近世 中近世	:堅穴住居址3軒 :溝状遺構10条、土壌2基 土師器、須恵器、かわらけ、陶器、磁器、五輪塔、木製品 :落込み2基、ピット2穴	27
	公共下水				
H3 下水	平成3(1991)年 5月19日 ～9月25日	-	古代～中近世	:溝状遺構8条、土壌2基、ピット45穴 土師器、須恵器、かわらけ、陶磁器、木製品等 ※中世主体	28
	公共下水				
H4 下水	平成4(1992)年 8月21日 ～8月25日	33.4	古代～中近世	:堅穴状遺構3基、溝状遺構3条、土壌1基、ピット18穴 土師器、かわらけ、陶磁器 ※中・近世主体	29
	公共下水				
H11 下水	平成11(1999)年 9月7日	13.4	遺構・遺物なし		50
	公共下水				
H26 下水	平成26(2014)年 7月14日 ～7月16日	10.21	中近世 近世	:溝状遺構2条 :土坑2基 土師器、須恵器、かわらけ	6
	公共下水				
H28 下水	平成28(2016)年 11月16日 ～12月07日	81.0	古代 中世 近世	:土師器、灰釉陶器 :溝状遺構5条 陶器 :堅穴状遺構3基、溝状遺構6条、土坑1基 陶器、磁器、土製品	7
	公共下水				
H29 下水	平成29(2017)年 9月11日 ～10月12日	194.0	古墳後期～古代 中世 中世～近世 近世 近代	:土師器、須恵器、灰釉陶器 :かわらけ、陶器 :溝状遺構11条 礫、焼土塊 :溝状遺構9条、ピット1穴 陶器、磁器、石製品(石臼) :陶器、磁器、土製品(鉢)	8
	公共下水				
H30 下水	平成30(2018)年 7月30日 ～10月02日	176.1	古代 中世 中世～近世 近世 近世～近代 近代	:土師器、須恵器、灰釉陶器 :かわらけ、陶器、石製品(板碑) :溝状遺構25条、土坑1基、ピット2穴 :土器、陶器、磁器、石製品(砥石)、礫 :道状遺構11条 :陶器、磁器、ガラス瓶、木製品(木杭)、動物遺存体(獣骨)	9
	公共下水				

引用・参考文献

1. 東真江 2003「19. 矢畑金山遺跡第10次調査」『第14回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
2. 天ヶ瀬恭三 1980「民俗編 第二章 第二節」『茅ヶ崎市史 3』考古・民俗編 茅ヶ崎市 茅ヶ崎市史編集委員会
3. 伊藤俊一 2007『浜之郷 本社B遺跡』茅ヶ崎市文化振興財団調査報告11 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
4. 伊藤俊一 2009「2. 円蔵御屋敷B遺跡 第8次調査」『第20回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
5. 伊藤俊一 2014「9. 西久保上ノ町遺跡 第17次調査」『第25回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
6. 伊藤俊一 2015「第IV編 平成26年度発掘調査 第1章 下ヶ町遺跡」『公共下水道布設関連調査』
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告49 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
7. 伊藤俊一・田中万智 2018『公共下水道布設関連調査 平成28年度発掘調査』
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告62 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
8. 伊藤俊一・田中万智 2019『公共下水道布設関連調査 平成29年度発掘調査』
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告66 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
9. 伊藤俊一・田中万智 2020『公共下水道布設関連調査 平成30年度発掘調査』
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告69 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
10. 伊藤俊一・中根由起子 2011『矢畑 金山遺跡V』茅ヶ崎市文化振興財団調査報告24
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
11. 伊藤俊一・長澤保崇 2013「8. 浜之郷本社B遺跡 第7次調査」『第24回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
12. 上本進二 2000「茅ヶ崎市矢畑金山遺跡のテフラ分析結果」『矢畑 金山遺跡Ⅷ』茅ヶ崎市文化振興財団調査報告65
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
13. 上本進二・浅野哲哉 1999「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」『文化資料館調査研究報告』7
茅ヶ崎市教育委員会 茅ヶ崎市文化資料館
14. 大坪宣雄 2021『神奈川県茅ヶ崎市 浜之郷宮ノ腰遺跡第16次調査 発掘調査報告書』有限会社吾妻考古学研究所
15. 大村浩司 1990「宮ノ腰遺跡1号溝状遺構が意味するもの」『茅ヶ崎市史研究』第十四号
茅ヶ崎市 茅ヶ崎市史編集委員会
16. 大村浩司 1993「文化財保護4.(2)4 矢畑金山遺跡の第4次調査」『平成4年度・茅ヶ崎の社会教育』
茅ヶ崎市教育委員会
17. 大村浩司 2013「9. 円蔵下ヶ町遺跡 第16次調査」『第24回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
18. 大村浩司・石倉澄子 2005「第IV・V章」『浜之郷本社A遺跡』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告22 茅ヶ崎市教育委員会
19. 大村浩司・石倉澄子 2006『浜之郷宮ノ腰遺跡Ⅲ』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告25 茅ヶ崎市教育委員会
20. 大村浩司・石倉澄子 2009『円蔵小井戸遺跡Ⅰ』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告32 茅ヶ崎市教育委員会
21. 大村浩司・伊藤俊一 2015「第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第16次調査」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅲ』
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告44 茅ヶ崎市教育委員会
22. 大村浩司・三戸智也 2021「5 鶴嶺八幡橋参道(浜之郷 宮ノ腰遺跡・本社A遺跡)確認調査」
『第31回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨 茅ヶ崎市教育委員会
23. 大村浩司・寺岡早苗 1995「3. 円蔵・御屋敷B遺跡」『第6回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会

24. 大村浩司・寺岡早苗 1997a「9. 円蔵・下ヶ町遺跡第2次調査」「10. 円蔵・下ヶ町遺跡第3次調査」
『第7回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
25. 大村浩司・寺岡早苗 1997b「9. 浜之郷・西ノ谷上遺跡」『第8回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
26. 岡本勇・富永富士雄・大村浩司 1985『新湘南国道埋蔵文化財調査報告』新湘南国道埋蔵文化財調査会
27. 岡本孝之・富永富士雄 1991「3 下水道関連工事（4）円蔵下ヶ町A B遺跡」
『第2回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨 茅ヶ崎市教育委員会
28. 岡本孝之・富永富士雄 1992「2 公共下水工事に伴う調査（6）円蔵下ヶ町A遺跡」
『第3回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨 茅ヶ崎市教育委員会
29. 岡本孝之・富永富士雄・寺井朗雄 1993「文化財保護4. (2)① 1 公共下水道工事に伴う埋蔵文化財調査
1-8 円蔵下ヶ町B遺跡」『平成4年度・茅ヶ崎の社会教育』茅ヶ崎市教育委員会
30. 岡本孝之・大村浩司 1992『鶴嶺八幡宮参道』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告6
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会 石原B遺跡発掘調査団
31. 岡本孝之・大村浩司・藤井秀男 1997『矢畑金山遺跡VI』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告10
茅ヶ崎市教育委員会 茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会
32. 小川直之 1980「民俗編 第二章 第一節」『茅ヶ崎市史3』考古・民俗編 茅ヶ崎市 茅ヶ崎市史編集委員会
33. 押木弘己・齋木秀雄 2015『矢畑明王ヶ谷遺跡 第5次発掘調査報告書』株式会社斉藤建設 有限会社鎌倉遺跡調査会
34. 加藤大二郎 2022「19 円蔵下ヶ町遺跡第21次調査」「20 円蔵下ヶ町遺跡第22次調査」「21 円蔵下ヶ町遺跡第23次調査」
『第33回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨 茅ヶ崎市教育委員会
35. 加藤大二郎 2023「8 円蔵 下ヶ町遺跡第25次調査」『第34回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会
36. 加藤大二郎・伊藤俊一 2024「第Ⅱ編 浜之郷 本社A遺跡第12次調査」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報XI』
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告69 茅ヶ崎市教育委員会
37. 加藤大二郎・渡辺務 2019『円蔵 下ヶ町遺跡第17次発掘調査報告書』株式会社アーク・フィールドワークシステム
38. 神崎彰利 1981「近世 第一章」『茅ヶ崎市史4』通史編 茅ヶ崎市 茅ヶ崎市史編集委員会
39. 貫達人 1981「古代・中世 第一・二章」『茅ヶ崎市史4』通史編 茅ヶ崎市 茅ヶ崎市史編集委員会
40. 小池聡 2011「特別報告 西久保大屋敷B遺跡第9次調査の成果と課題」『第22回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
41. 佐藤博信 1981「古代・中世 第三・四・五章」『茅ヶ崎市史4』通史編 茅ヶ崎市 茅ヶ崎市史編集委員会
42. 斎藤彦司 1988「茅ヶ崎市龍前院の五輪塔」『茅ヶ崎市文化財資料集』第11集
茅ヶ崎市教育委員会 茅ヶ崎市文化資料館
43. 三戸智也・大久保日向子・和泉亜理沙・鈴木裕 2022「第Ⅲ編 円蔵 下ヶ町遺跡第20次調査」
『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報IX』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告62 茅ヶ崎市教育委員会
44. 三戸智也 2022「22 円蔵下ヶ町遺跡第24次調査」『第33回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会
45. 矢戸信悟・宗臺富貴子 2003「第Ⅵ章 第3節(1) 第Ⅶ章」『上ノ町遺跡』かながわ考古学財団調査報告143
財団法人かながわ考古学財団
46. 澁谷正信・吉川映子 2009『上ノ町遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告247 財団法人かながわ考古学財団
47. 鈴木綾・高橋桃子 2022「14 円蔵 下ヶ町遺跡第18次調査」『第32回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会

48. 高橋和 1997「1. 円蔵・下ヶ町 B 遺跡第 6 次調査」『第 8 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
49. 高橋和 1999「9. 矢畑・明王ヶ谷遺跡第 4 次調査」『第 10 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
50. 高橋和 2000「7. 公共下水道工事関連遺跡調査」『第 11 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
51. 高橋和・田中万智 2001『円蔵 下ヶ町遺跡第 5 次調査』財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
52. 田中万智・林原栞 2018「第 IV・V 章の中世以降の遺構・遺物について」『浜之郷宮ノ腰遺跡第 15 次調査』
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告 63 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
53. 寺井朗雄 1994「7. 円蔵・下ヶ町 A 遺跡第 2 次調査」『第 5 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会
54. 富永樹之・小森明美 2009『上ノ町遺跡 II』かながわ考古学財団調査報告 232 財団法人かながわ考古学財団
55. 富永富士雄 1994「茅ヶ崎市金山遺跡第 1 次調査の成果」『文化資料館調査研究報告』2
茅ヶ崎市教育委員会 茅ヶ崎市文化資料館
56. 富永富士雄 1997「文化財保護 4 (2) ⑫ 円蔵・下ヶ町 B 遺跡第 8 次調査」
「文化財保護 4 (2) ⑭ 円蔵・小井戸遺跡第 4 次調査」
『平成 8 年度・茅ヶ崎の社会教育』茅ヶ崎市教育委員会
57. 富永富士雄 1999「7. 西久保・大町 A・B 遺跡」『第 10 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
58. 富永富士雄 2011「特別講演 茅ヶ崎の縄文世界と古代社会(試案)」『第 22 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
59. 富永富士雄・大村浩司 1986「宮ノ腰遺跡」『茅ヶ崎市文化財資料集』第 10 集 茅ヶ崎市教育委員会
60. 富永富士雄・大村浩司 1989「文化財保護 4. (3) ⑧ 公共下水道工事に伴う発掘調査」
『昭和 63 年度・茅ヶ崎の社会教育』茅ヶ崎市教育委員会
61. 富永富士雄・宮下秀之 2000『円蔵・下ヶ町遺跡 一民間住宅建設に伴う第 10 次発掘調査報告書一』
茅ヶ崎市文化振興財団調査報告 1 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
62. 富永富士雄・宮下秀之・永野博美 1999「文化財保護 5 (3) 9 円蔵・下ヶ町遺跡第 8 次調査」
『平成 10 年度・茅ヶ崎の社会教育』茅ヶ崎市教育委員会
63. 長澤保崇 2007『下ヶ町遺跡(No. 184) 発掘調査報告書』株式会社斉藤建設
64. 永井洋 1997「8. 円蔵・御屋敷 B 遺跡第 3 次調査」『第 8 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
65. 永野博美 1995「9. 下町屋・石原 A 遺跡」『第 6 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨 茅ヶ崎市教育委員会
66. 林原利明 2007「第 2 編 円蔵下ヶ町遺跡(第 11 次調査)」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報 I』
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告 28 茅ヶ崎市教育委員会
67. 平山孝通 1994「第 3 部 1. 茅ヶ崎の道」『地図集 大地が語る歴史』茅ヶ崎市史 現代 7 茅ヶ崎市
68. 藤井秀男 1997「8. 西久保・大屋敷 B 遺跡」『第 7 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
69. 藤井秀男 1999「2. 浜之郷・本社 A 遺跡第 7 次調査」『第 10 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
70. 藤井秀男・澤村奈穂子 2015『浜之郷石原 A 遺跡第 7 次調査』茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告 47
公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団

71. 藤井秀男・澤村奈穂子 2018「第 V 章の古代遺物について 総括」『浜之郷宮ノ腰遺跡第15次調査』
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告63 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
72. 降矢順子 2023「9. 円蔵 下ヶ町遺跡第26次調査」『第34回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会
73. 降矢順子・三戸智也・上本進二 2023『円蔵下ヶ町遺跡第19次発掘調査報告書』株式会社斉藤建設
74. 丸山理 1992「附編 I 文献からみた鶴嶺八幡宮」『鶴嶺八幡宮参道』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告 6
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会 石原 B 遺跡発掘調査団
75. 三澤壮太・高橋泰子 2013「第 3 章 まとめ」『神奈川県茅ヶ崎市 西久保 大屋敷 B 遺跡』株式会社四門
76. 宮下秀之 1997a「文化財保護 4 (2) ⑦ 円蔵・下ヶ町 B 遺跡第 7 次調査」『平成 8 年度・茅ヶ崎の社会教育』
茅ヶ崎市教育委員会
77. 宮下秀之 1997b「4. 円蔵・下ヶ町 B 遺跡第 4 次調査」『第 8 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
78. 宮下秀之 1998「1. 円蔵・下ヶ町遺跡第 8 次調査」『第 9 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
79. 宮下秀之 1999「8. 県道45号線関連遺跡調査」『第10回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
80. 宮下秀之 2000a『矢畑 金山遺跡Ⅷ』茅ヶ崎市文化振興財団調査報告65 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
81. 宮下秀之 2000b「9. 県道45号線関連遺跡調査」「10. 円蔵・下ヶ町遺跡第10次調査」
『第11回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨 茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
82. 宮下秀之 2001「4. 県道45号線関連遺跡調査」『第12回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
83. 宮下秀之 2003『円蔵・下ヶ町遺跡 一県道45号線道路改良工事に伴う第 8 次発掘調査報告書一』
茅ヶ崎市文化振興財団調査報告 7 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
84. 宮下秀之 2004「1. 浜之郷西ノ谷上遺跡第 2 次調査」『第15回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
85. 宮下秀之 2006「4-2. 下ヶ町遺跡第12次調査」『第17回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
86. 宮下秀之 2007「12. 円蔵下ヶ町遺跡第14次調査」『第18回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
87. 宮下秀之 2011『浜之郷 中谷遺跡』茅ヶ崎市文化振興財団調査報告28 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
88. 宮下秀之・伊藤俊一 2009「1. 円蔵下ヶ町遺跡 第15次調査」『第20回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
茅ヶ崎市教育委員会 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
89. 宮下秀之・伊藤俊一 2015『円蔵 御屋敷 B 遺跡』茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告46
公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
90. 安井千栄子 1998「3. 円蔵・下ヶ町遺跡第 9 次調査」『第 9 回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
91. 雄山閣 1972『大日本地誌体系21 新編相模風土記稿第三巻』

第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査

第Ⅰ章 調査の概要

第１節 調査に至る経緯

茅ヶ崎市円蔵字下ヶ町2602番の一部外における土木工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、事業主から照会を受けた茅ヶ崎市教育委員会(以下「市教委」)は、当該地が神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳[茅ヶ崎市]No. 184下ヶ町遺跡の範囲内に位置することから、文化財保護法第93条第１項に基づく届出を提出するよう指導した。

隣接地において行われた過去の発掘調査では遺跡の密度が非常に高く、当該地に遺跡の展開が予想されていた。市教委は土木工事計画が埋蔵文化財に影響を与える可能性が高いと判断し、事業主に対して遺跡を現状保存するためには土木工事計画の変更が必要である旨を回答した。

その後検討結果を踏まえて事業主と市教委間で協議を行い、土木工事によりやむを得ず遺跡に影響を与える部分については、事前記録保存調査を実施する方向で調整した。調査体制は、事業主から財団法人茅ヶ崎市文化振興財団(以下「市財団」)に対して調査依頼書が提出された。これを受けて事業主、市教委、市財団による三者協定を締結し、事業主と市財団間での事前発掘調査業務の契約に至った。

事前発掘調査主体者となる市財団は、神奈川県教育委員会教育長宛てに文化財保護法第92条第１項に基づく発掘調査の届出を提出し、発掘調査の指示通知により現地調査の運びとなった。

現地調査は、市教委の指導のもと平成17(2005)年８月12日から９月15日の期間で実施された。調査面積は事業面積975.14㎡に対し175.00㎡であり、残りの部分については原則現状保存とした。なお発掘調査に係わる文書は、以下のとおりである。

表５ 発掘調査に係わる文書一覧表

	文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
1	埋蔵文化財所在有無の照会					
	所在有無の照会	-	-	事業主	市教委	
文化財保護法第93条第1項に基づく土木工事の届出						
2	土木工事の届出	-	平成17年3月28日	事業主	県教育長	市教委経由
	土木工事の指示通知	生文17第6-1023号	平成17年5月19日	県教育長	事業主	市教委経由
埋蔵文化財発掘調査の契約						
3	三者協定締結	-	平成17年7月22日	事業主・市教育長・市財団長		
	発掘調査の契約	-	平成17年7月22日	事業主・市財団長		
文化財保護法第92条第1項に基づく発掘調査の届出						
4	発掘調査の届出	-	平成17年8月1日	市財団長	県教育長	市教委経由
	発掘調査の指示通知	生文17第5-45号	平成17年8月12日	県教育長	市財団長	市教委経由
出土品の手続き						
5	埋蔵物の発見届	-	平成17年9月8日	市財団長	市警察署長	
	埋蔵文化財保管証の提出	-	平成17年9月8日	市財団長	県教育長	市教委経由
	文化財認定と帰属の通知	-	平成17年9月22日	県教育長	市財団長	市教委経由

* 名称の略記
 ・事業主：土地所有者(個人) ・県教育長：神奈川県教育委員会教育長 ・市教育長：茅ヶ崎市教育委員会教育長
 ・市教委：茅ヶ崎市教育委員会 ・市財団長：財団法人茅ヶ崎市文化振興財団理事長 ・市警察署長：茅ヶ崎警察署長

第2節 調査区の設定と調査の方法

第1項 調査区の設定

調査対象は、埋設管の布設を予定している開発道路部分であった。事業設計図をもとに簡易測量を行い調査区を設定した。道路の幅員は4.50m、延長は約32.00mであり、一部車返しの箇所が約5.00m突出する(第8図)。残土を敷地内に仮置きし、簡易倉庫や重機・車両等のスペースを確保するために調査区を二分割し、1区は北半部4.50m×延長約18.50m、2区は車返し以南とした。また調査区グリッドは、事業設計図と茅ヶ崎市都市計画基本図『円蔵』を整合した後、世界測地系第Ⅸ系座標を基軸とした2.00mグリッドを設定した(第9図)。なお座標軸と調査区東壁長軸方向との偏差はN-32°-E東偏を指す。

第2項 調査の方法

調査は1区から開始し、調査終了後に一旦1区を埋め戻し、その後2区の調査を行った。

調査区を設定し重機による表土掘削を行った後に、人力により慎重に第Ⅰ層土や攪乱を掘り進め、第Ⅱ層上面において遺構確認を試みた。その結果遺構群の密度が非常に高く、重複遺構も多いことから、最終的には第Ⅴ層上面まで掘り下げて各遺構を確定した。

記録作業は、土層堆積状況の観察を行い土層堆積図を作成し、検出された遺構は平板測量により遺構平面分布図を作成した。また随時写真撮影を行い記録写真とした。

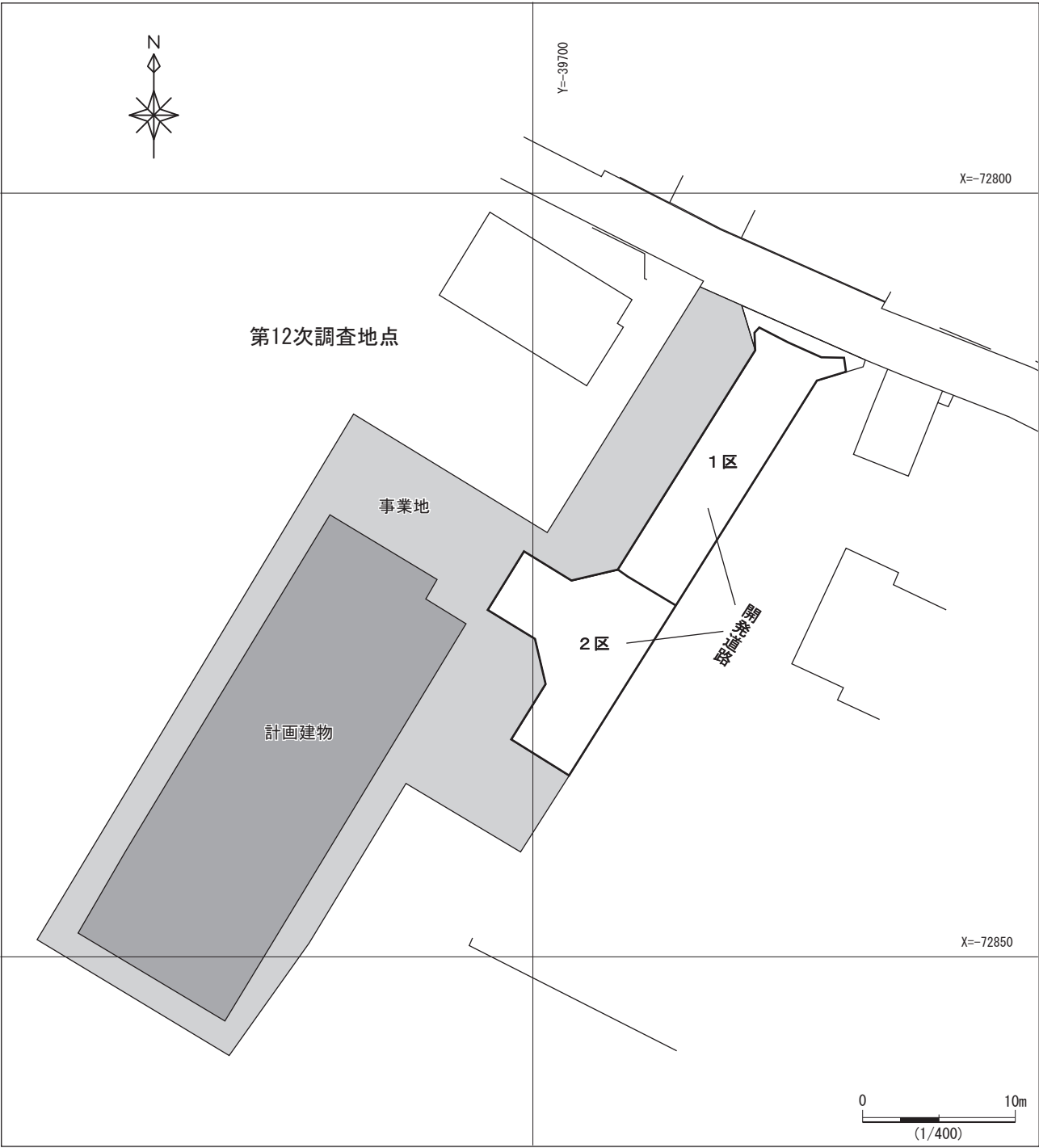
第3節 調査の体制と経過

第1項 調査の体制

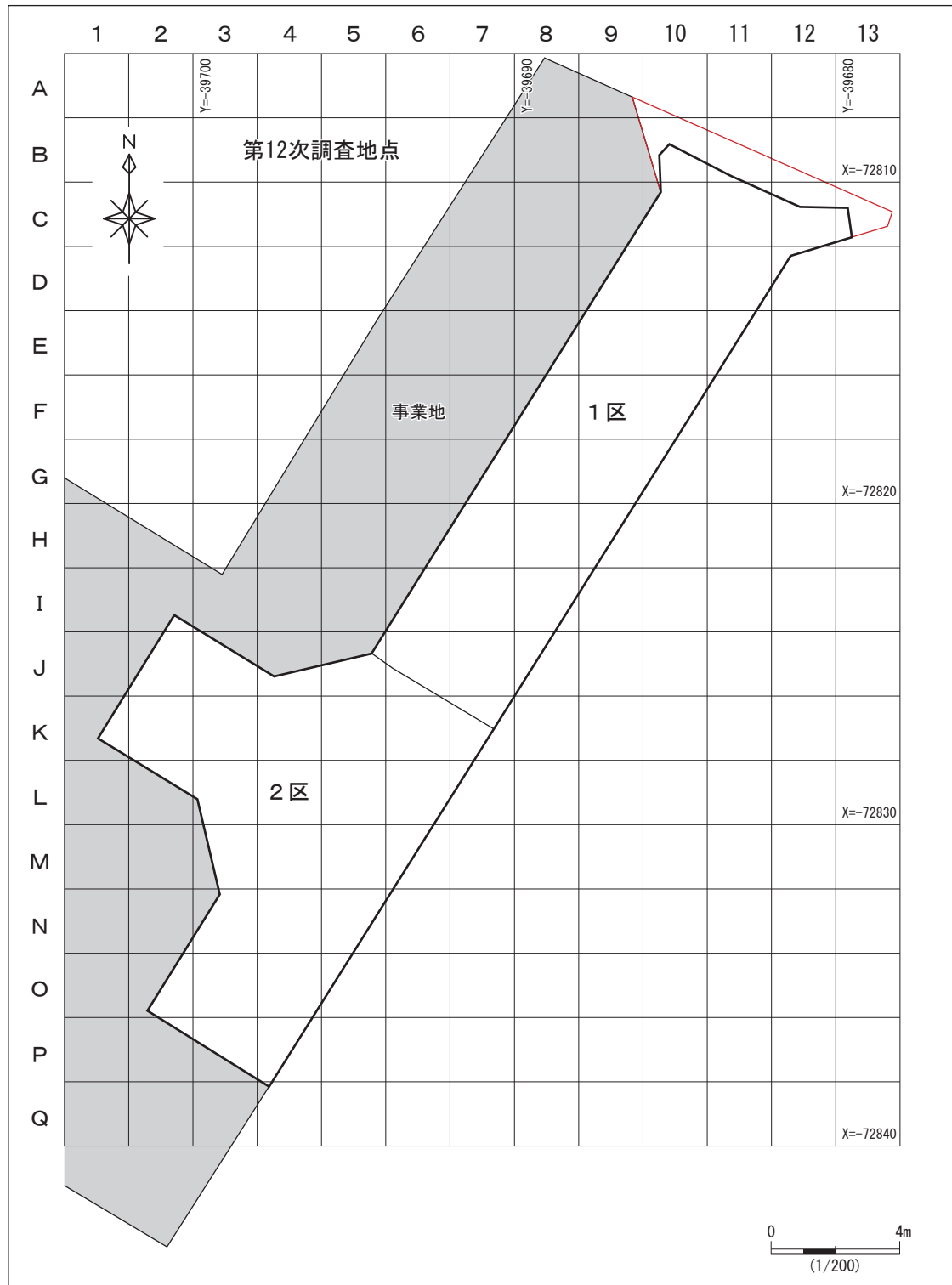
現地調査・整理作業・報告書作成の体制は、以下のとおりである。

調査体制

- ①調査地点 神奈川県茅ヶ崎市円蔵字下ヶ町2602番の一部外
- ②調査目的 宅地造成工事に伴う事前記録保存調査
- ③調査期間 現地調査：平成17年8月12日から同年9月15日
整理作業：平成17年9月16日から平成18(2006)年9月30日
報告書作成：令和6(2024)年4月1日から令和7(2025)年3月31日
- ④調査体制 現地調査：担当 伊藤俊一 永野博美 宮下秀之 支援 一伸工業
補助員 大竹恵子 折本美代子 是恒肇子 柴田姫美子 若菜佳子
整理作業：担当 伊藤 補助員 大竹 折本 是恒 柴田 竹内幸子 永野 若菜
報告書作成：担当 伊藤 補助員 高橋美智子
- ⑤作業分担 遺構図面修正・トレース・挿図作成：伊藤 高橋
遺物実測図・拓影図作成・トレース：高橋 観察表作成：伊藤
写真図版作成：伊藤 高橋 遺構写真：宮下 遺物写真：伊藤
- ⑥助言・協力者 大村浩司 金馬義郎 三戸智也 田尾誠敏 田中万智 富永富士雄



第 8 図 調査区位置図 (1/400)



第9図 グリッド配置図(1/200)

第 2 項 調査の経過

8 月 1～11 日は、原点移動や周辺の実測作業を行った。

8 月 12 日は、1 区の重機による表土掘削を行い、その後人力により遺構確認作業を行い、その結果調査区を横断する溝やピット群を確認した。

8 月 22 日には、掘削深度の深い主要な溝の掘削および平面分布図や土層堆積図の作成を完了し、土坑やピット群等の調査にに移行した。

8 月 25 日は、1 区の全体写真を撮影し、その後土層堆積図作成などの残作業を行った。

8 月 26 日は、1 区の重機による埋め戻し作業を行った。

8 月 29 日は、2 区の重機による表土掘削と人力による遺構確認作業を行い、溝を主体とした遺構群を確認した。

9 月 2 日には、主要な溝の掘削を完了し、各遺構の平面分布図や土層堆積図の作成に移行した。

9 月 8 日は、調査区の掘削作業を終了し、2 区の全体写真を撮影した。

9 月 9～15 日は、各実測図作成等の残作業や撤収作業を行い、現地調査を終了した。

第 3 項 整理作業

出土品等整理作業は、財団法人茅ヶ崎市文化振興財団が平成 17 年 9 月 16 日から平成 18 年 9 月 30 日まで随時実施した。作業内容は、測量図面をもとに遺構精査、デジタルトレースを行った。また出土遺物の洗浄、注記、接合を行った。

令和 6 年度に報告書刊行の機会を得たことから、市教委が令和 6 年 4 月 1 日から令和 7 年 3 月 31 日まで随時実施した。作業内容は、市財団が作成した概要報告のデジタルトレースを再検討し、デジタルトレースを修正した。また出土遺物の実測、拓本を行った。あわせて原稿執筆、図版作成、報告書編集、校正を行った。

第4節 基本土層

本調査地点の現況は更地であった。平成2年版茅ヶ崎市明細地図(株式会社明細地図社1989)によると、平成2(1990)年には既に宅地であったことが確認できる。

1 区基本土層

第Ⅰa～Ⅰc層は近現代の埋土である。第Ⅰd～Ⅱ層は近現代の開発行為によりほぼ消失し、限定的に残存するのみである。第Ⅰ層の直下には、古代～中世の遺物包含層(第Ⅲ層)が認められる。古代の遺物包含層(第Ⅳ層)は東壁南端部を除いて確認されず、第Ⅳ層の二次堆積土として第Ⅲ層が形成されていた。第Ⅴ・Ⅵ層は自然堆積土層であり、また第Ⅶ層への漸移層である。第Ⅶ・Ⅷ層は、市域砂質微高地における基盤層である。

第Ⅰ層	： 褐灰色土(10YR6/1)	表土。しまりやや弱い。全体にやや酸化。堆積粗い。
第Ⅰa層	： 褐灰色土(10YR6/1)	しまり強い。酸化強い。
第Ⅰb層	： 褐灰色土(10YR6/1)	樹木根の痕跡。酸化強い。
第Ⅰc層	： 褐灰色土(10YR6/1)	酸化弱い。
第Ⅰd層	： 褐灰色土(10YR6/1)	近世。しまりやや弱い。宝永パミスを含む。全体にやや酸化。堆積粗い。
第Ⅱ層	： 褐灰色土(10YR5/1)	中世。粘性弱い。橙色粒子を少量含む。土粒細かく紛質。堆積緻密。
第Ⅲ1層	： 灰黄褐色土(10YR4/2)	古代～中世。しまりやや強い。色調暗く、暗褐色土を含む。
第Ⅲ1'層	： 灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり強い。樹木根痕。
第Ⅲ1''層	： 褐灰色土(10YR4/1)	第Ⅲ1層に比べ暗い。
第Ⅲ2層	： 灰黄褐色土(10YR4/2)	古代～中世。第Ⅲ1層より色調明るくしまり減る。橙色粒子を中量含む。
第Ⅳ層	： 黒褐色土(10YR3/2)	古代。しまり粘性やや強い。橙色スコリアを中量含む。
第Ⅳ'層	： 黒褐色土(10YR3/2)	第Ⅳ層土中に褐色土ブロックを少量含む。
第Ⅴ層	： 灰黄褐色土(10YR4/2)	第Ⅶ層への漸移層。しまり強い。灰色土を含む。全体に酸化し部分的に暗い。
第Ⅴ'層	： 灰黄褐色土(10YR4/2)	第Ⅶ層への漸移層。第Ⅴ層に比べしまりやや減る。
第Ⅵ層	： 褐色土(10YR4/4)	第Ⅶ層への漸移層。しまり有り。橙色スコリアを中量含む。
第Ⅶ層	： 明黄褐色土(10YR6/6)	市域砂質微高地の基盤層を構成する。やや砂質。褐色土を極少量含む。
第Ⅶ'層	： 褐色土(10YR4/6)	市域砂質微高地の基盤層を構成する。全体に酸化し部分的に硬化。堆積やや粗い。
第Ⅷ層	： 明黄褐色土(10YR6/6)	市域砂質微高地の基盤層を構成する。全体にやや酸化。堆積やや緻密。

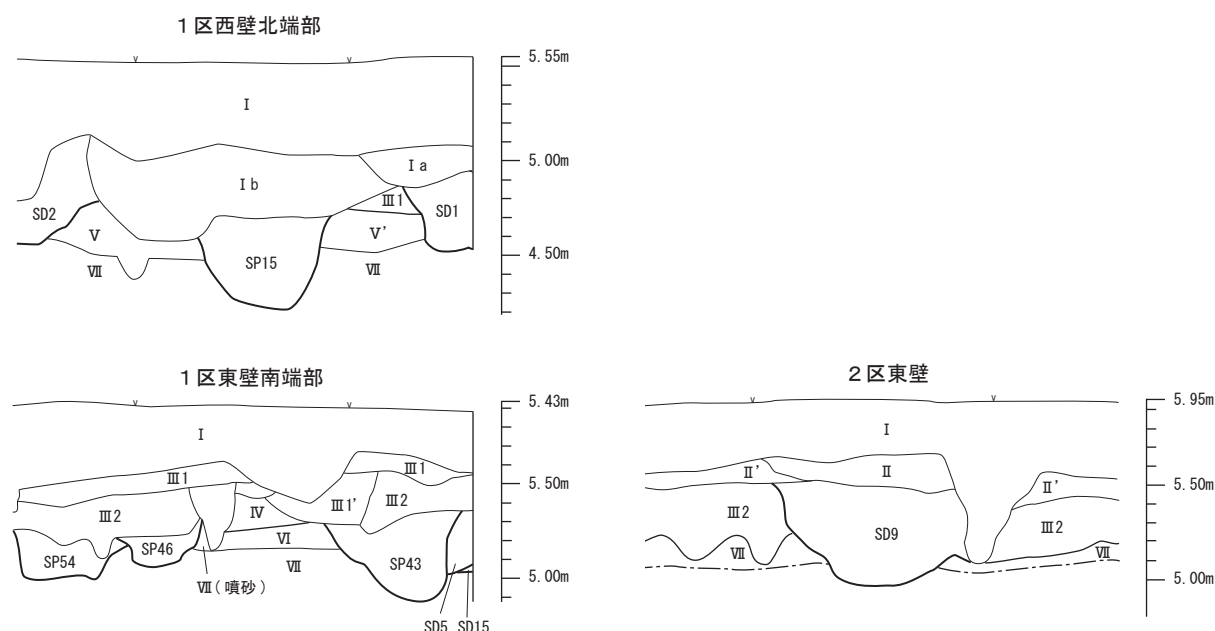
引用・参考文献

1. 株式会社明細地図社 1989『平成2年版 茅ヶ崎市明細地図』

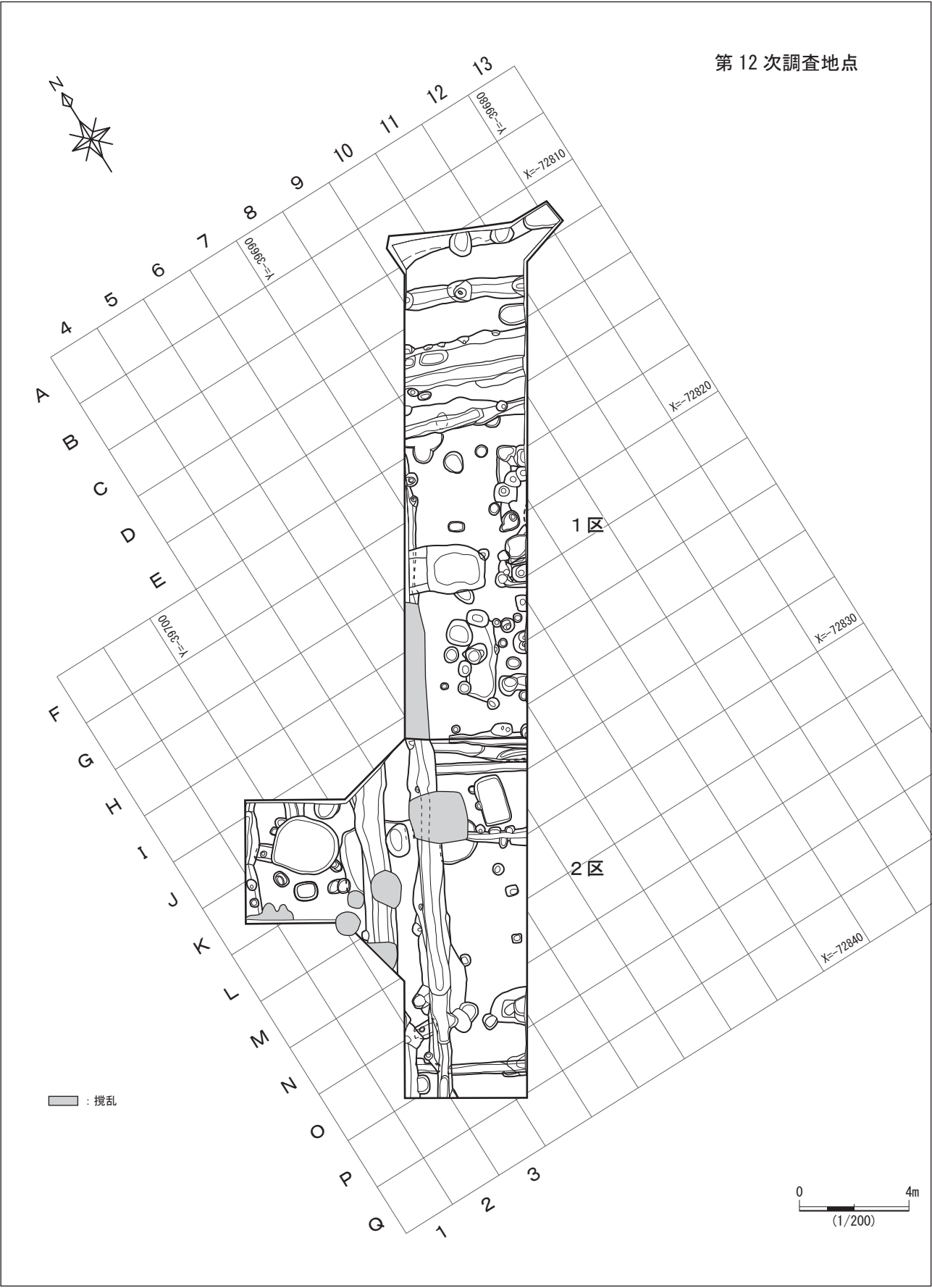
2区基本土層

全体的に1区に比べやや明るい色調に変化する。第I層の直下には、中世の遺物包含層(第II層)が認められる。古代の遺物包含層(第IV層)は確認されず、中世の地業行為の結果として第IV層の二次堆積土(第III層)が形成された。

- 第I層：褐灰色土(10YR6/1) 客土。全体に酸化する。色調斑に赤褐色味を帯びる。灰色土を少量含む。
- 第I'層：褐灰色土(10YR6/1) 宝永パミスの中量含む。元来近世層と思われるが攪拌されている。
- 第II層：褐灰色土(10YR5/1) 中世。しまり強く粘性やや弱い。やや酸化。橙色粒子を中量含む。堆積緻密。
- 第II'層：灰黄褐色土(10YR5/2) 酸化著しく色調斑に赤褐色味を帯び、部分的に硬化する。
- 第III1層：灰黄褐色土(10YR4/2) 古代～中世。しまり粘性やや強い。色調やや暗い。橙色粒子を多く含む。
- 第III2層：灰黄褐色土(10YR4/2) 古代～中世。第III1層より色調明るくしまり減る。橙色粒子を中量含む。
- 第III2'層：灰黄褐色土(10YR4/2) 全体に酸化強く、橙色粒子減る。
- 第V1層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) 第VII層への漸移層。褐色土をブロック状に含む。堆積緻密。
- 第V2層：にぶい黄褐色土(10YR5/4) 第VII層へ漸移層。暗褐色土をブロック状に少量含む。
- 第VII層：黄褐色土(10YR5/6) 市域砂質微高地の基盤層を構成する。全体に酸化する。色調斑に赤褐色味を帯びる。



第10図 基本土層図(1/40)



第11図 遺構配置図(1/200)

第Ⅱ章 発見された遺構と遺物

第12次調査では、近代、近世、中近世、中世、古代～中世の遺構群が発見された。遺構の内訳としては、近代の井戸1基、土坑1基、近世の溝1条、土坑3基、ピット5穴、中近世の溝3条(ピット11穴含む)、土坑5基、ピット16穴、中世の竪穴址1基、掘立柱建物1基(ピット9穴含む)、溝11条(ピット23穴含む)、土坑5基(ピット1穴含む)、不明遺構1基、古代～中世の竪穴址1基(ピット10穴含む)、掘立柱建物1基(ピット6穴含む)、ピット4穴である(第11図)。なお本書に記載した遺構名称は表6のとおりである。主な出土遺物は中世陶器であり、古代の土師器、須恵器、中世のかわらけ、近世の陶磁器がそれぞれ極少量出土した。その多くは細片であった。

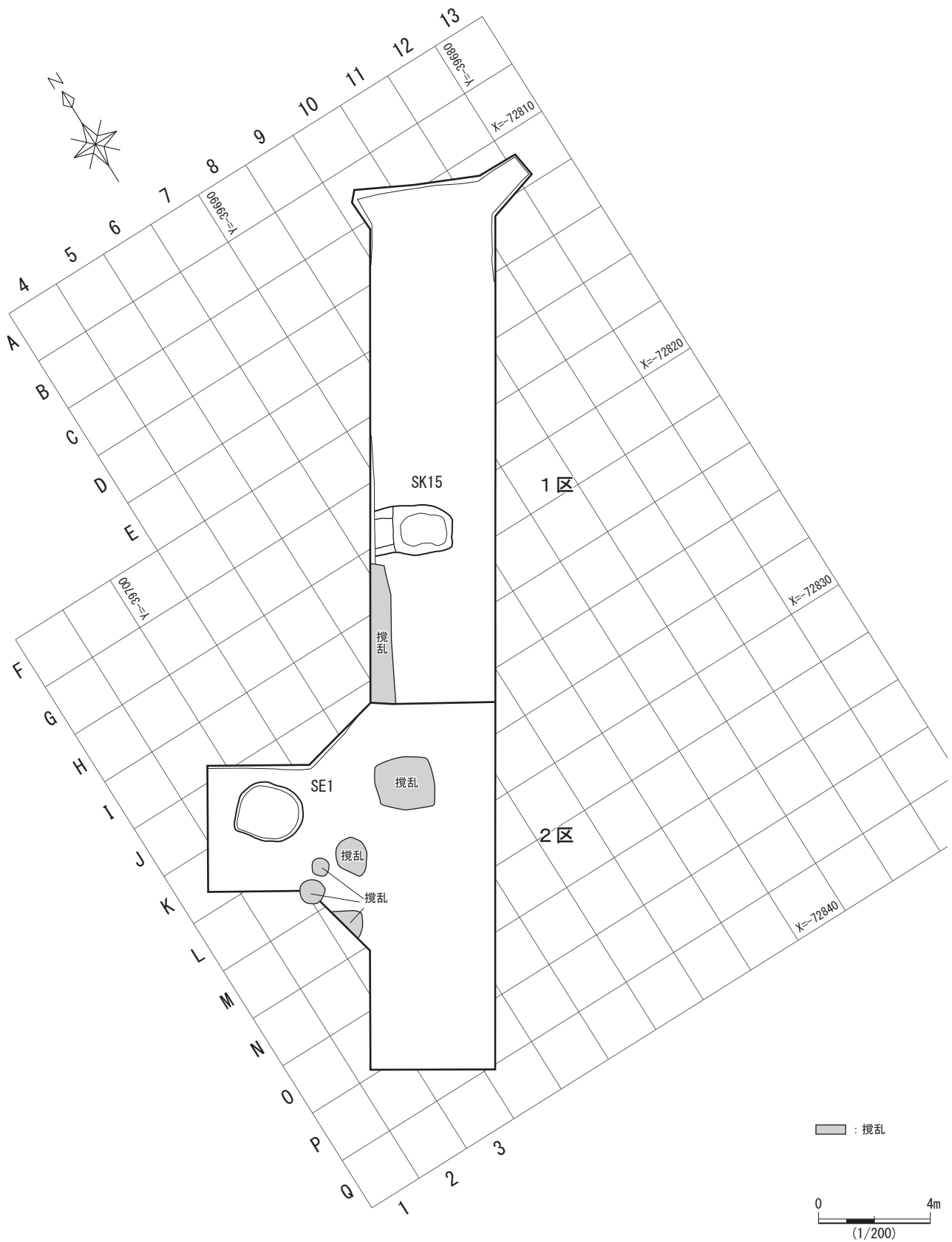
以下に近代、近世、中近世、中世、古代～中世の調査成果について記述する。

表6 遺構名称変更一覧表

本書掲載遺構名称		原図記載遺構名称
第1号竪穴址	←	1号落込み+2号落込み
第2号竪穴址	←	6号落込み
第1号掘立柱建物	←	無し
第2号掘立柱建物	←	無し
第6号溝	←	4号落込み
第14号溝	←	無し
第15号溝	←	第4号土坑+無し
第11号土坑	←	34号ピット
第12号土坑	←	62号ピット
第13号土坑	←	1号ピット
第14号土坑	←	2号ピット
第15号土坑	←	3号落込み
不明遺構	←	5号落込み
攪乱	←	61号ピット
第81号ピット	←	無し
第82号ピット	←	無し
第83号ピット	←	無し
第84号ピット	←	無し
第85号ピット	←	無し
第86号ピット	←	無し
第87号ピット	←	無し
第88号ピット	←	無し
第89号ピット	←	無し
第90号ピット	←	無し
遺構名称は原則として現地調査時の名称を使用し、変更が必要になったものは本表にまとめた。 なお原図記載遺構名称について、以下のとおり遺構名称を統一した。 竪穴址 ← 竪穴状遺構 掘立柱建物 ← 掘立柱建物址 井戸 ← 井戸址 溝 ← 溝状遺構		

第1節 近代

1区南側で第15号土坑、2区車返し部で第1号井戸を検出した。



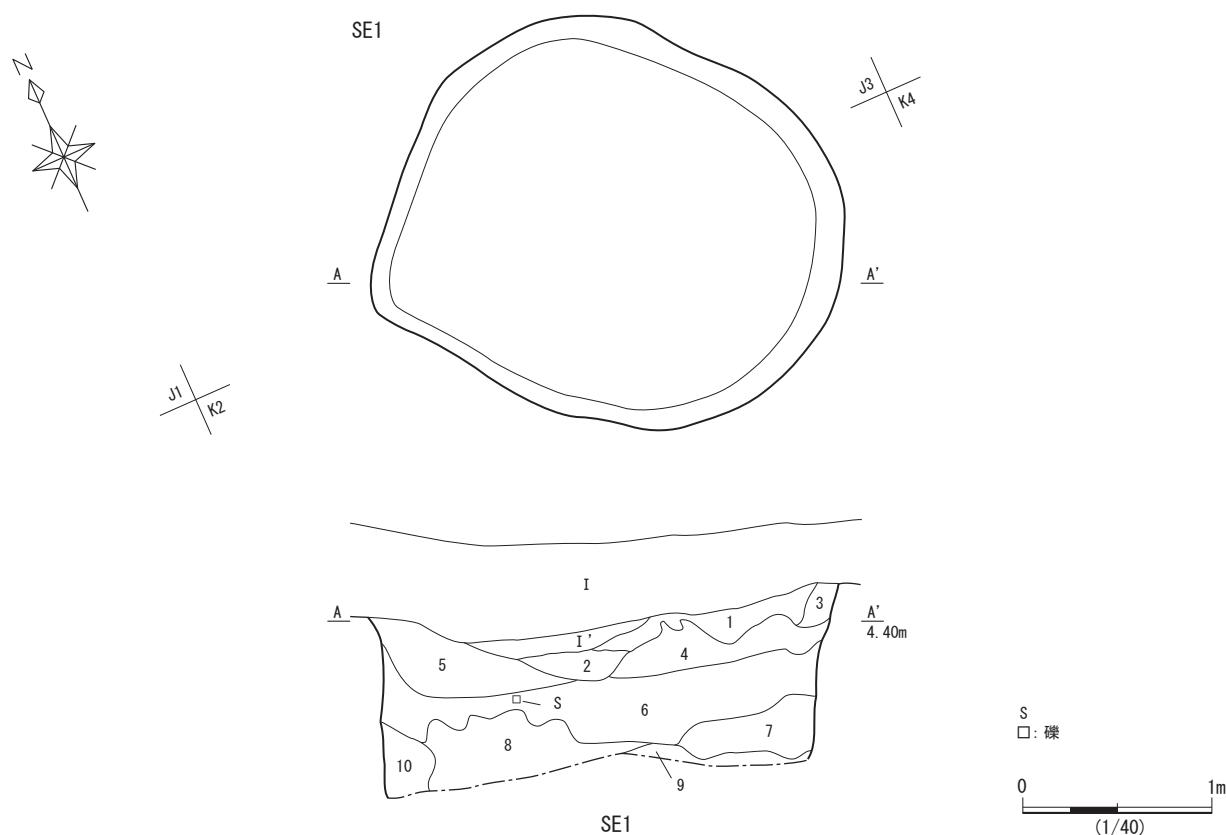
第12図 近代遺構配置図 (1/200)

第1項 井戸

第1号井戸(第11～14図 表7 図版2-5、図版3-1-1)

2区J・K2・3グリッドで検出した。平面形状は不整楕円形を呈し、北西側が角張る。座標軸と長軸方向との偏差は、N-44°-W西偏を指す。なお第8～9層下面で湧水したため、掘削を中止した。現況の断面形状は箱形を呈するが、本来の形状は不詳である。残存規模は、長軸2.38m、短軸2.04m、深さ91.0～97.0cmを測る。

遺構の時期は、覆土にモルタルやスレートを含むことから近代と推測される。



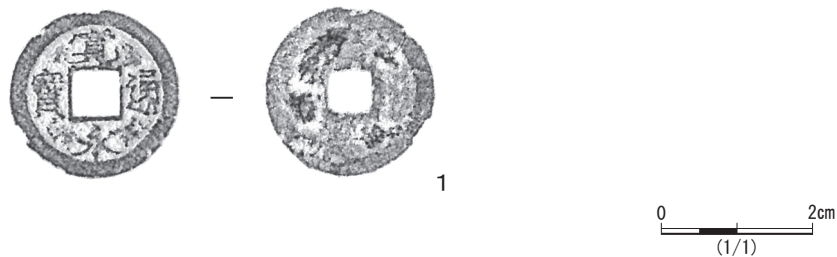
第1号井戸

第I'層：褐灰色土(10YR4/1)	客土。灰褐色土ブロックを含む。
第1層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり有り。全体に酸化。赤褐色酸化粒子を含む。堆積粗い。
第2層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)	しまり強い。第1層に比べ赤褐色酸化粒子増す。堆積粗い。
第3層：灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性やや強い。やや酸化。堆積やや粗い。
第4層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり粘性やや強い。全体にやや酸化。褐色土ブロックを含む。
第5層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり粘性やや強い。全体に酸化。宝永パミス含む。色調やや暗い。
第6層：にぶい黄褐色土(10YR5/3)	しまり粘性有り。全体に酸化。斑に赤褐色を呈す。灰色粘質土含む。
第7層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)	しまり粘性有り。やや酸化。褐色土ブロックを含む。堆積緻密。
第8層：暗青灰粘質土(5BG4/1)	堆積緻密。
第9層：暗灰黄粘質土(2.5Y5/2)	堆積緻密。
第10層：灰黄褐色土(10YR5/2)	しまり有り粘性やや強い。やや酸化。第8層土を斑に含む。

第13図 第1号井戸(1/40)

遺物は、相模型土師器甕 3 片 4.8g、須恵器蓋 1 片 9.0g、瓦 3 片 246.0g、陶器 2 片 12.8g、磁器碗 2 片 10.9g、銅製品 1 点 2.3g、礫 1 点 33.8g、植物遺存体 1 点 57.0g が出土した。磁器碗は肥前系で 18 世紀代の 1 片と、瀬戸・美濃系で外面に波に帆掛舟文を描いた 19 世紀前半頃の 1 片が含まれる。陶器 2 片は、近世瀬戸・美濃系の灰釉陶器である。本遺構の出土遺物は、埋土中の混入遺物であると考えられる。このうち銅製品 1 点を図示した。

1 は銅製の銭貨であり、銭名は「寛永通寶」である。新寛永文銭に分類され、遺物の時期は 17 世紀後葉以降と推測される。



第14図 第 1 号井戸出土遺物(1/1)

表 7 第 1 号井戸出土遺物観察表

No.	種別	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
	銭名			
1	銅製品 寛永通寶	外径：2.2 内径：1.8 穿径：0.65×0.65 厚さ：0.11 重量：2.3g 残存：略完形	分類：新寛永文銭 文字書体：行書 読み方：対読 遺存状態：良好 年代：近世寛文以降 備考：縁辺 部剥離有り	SE1 覆土一括

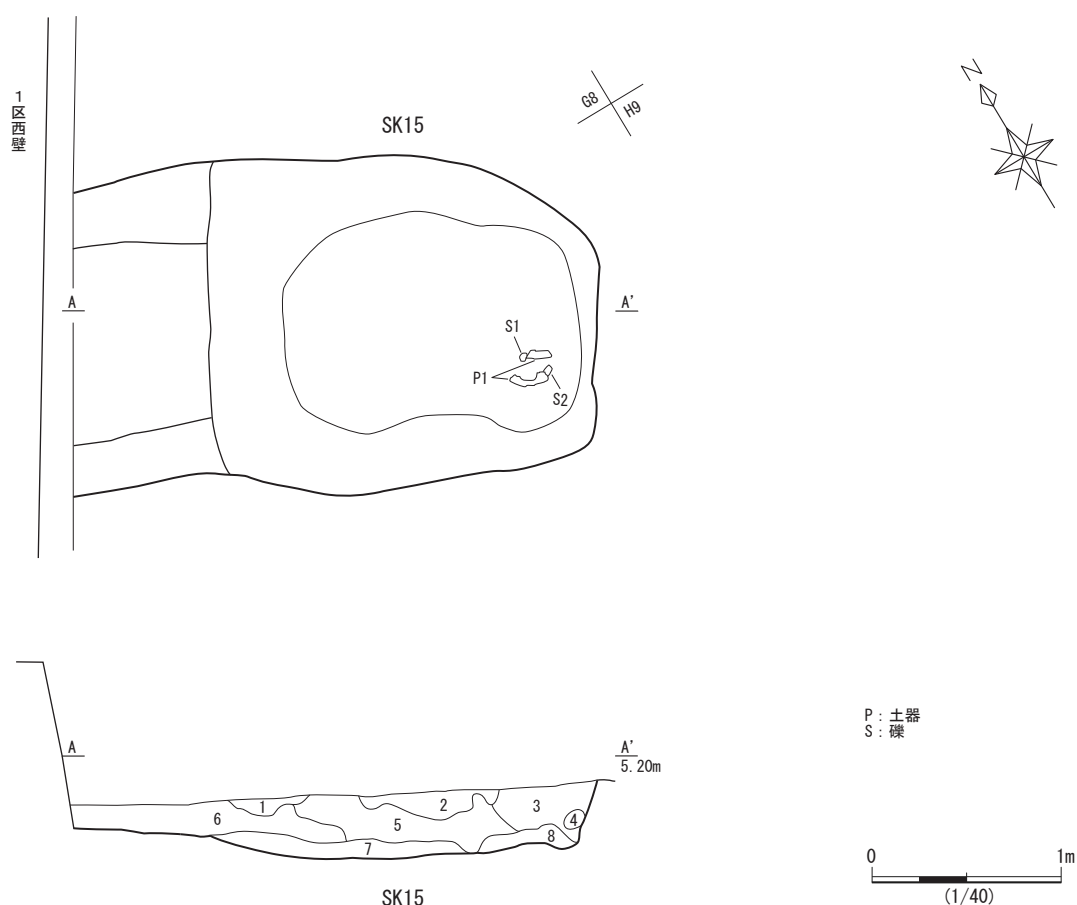
No. は第14図の遺物番号に対応する

第2項 土坑

第15号土坑(第11・12・15・16図 表8 図版1－5、図版3－1－2)

1区G・H7・8グリッドで検出した。平面形状は不整長楕円形を呈するが、西側が調査区外となる。座標軸と長軸方向との偏差は、N-61°-W西偏を指す。残存規模は、長軸2.84m、短軸1.60～1.77m、深さ12.7～44.9cmを測る。断面形状は箱形もしくは舟底形を呈し、底面は中央へ向かい約6.0cm窪む。

遺構の時期は、覆土下層から板ガラス片が出土したことから、近代と推測される。



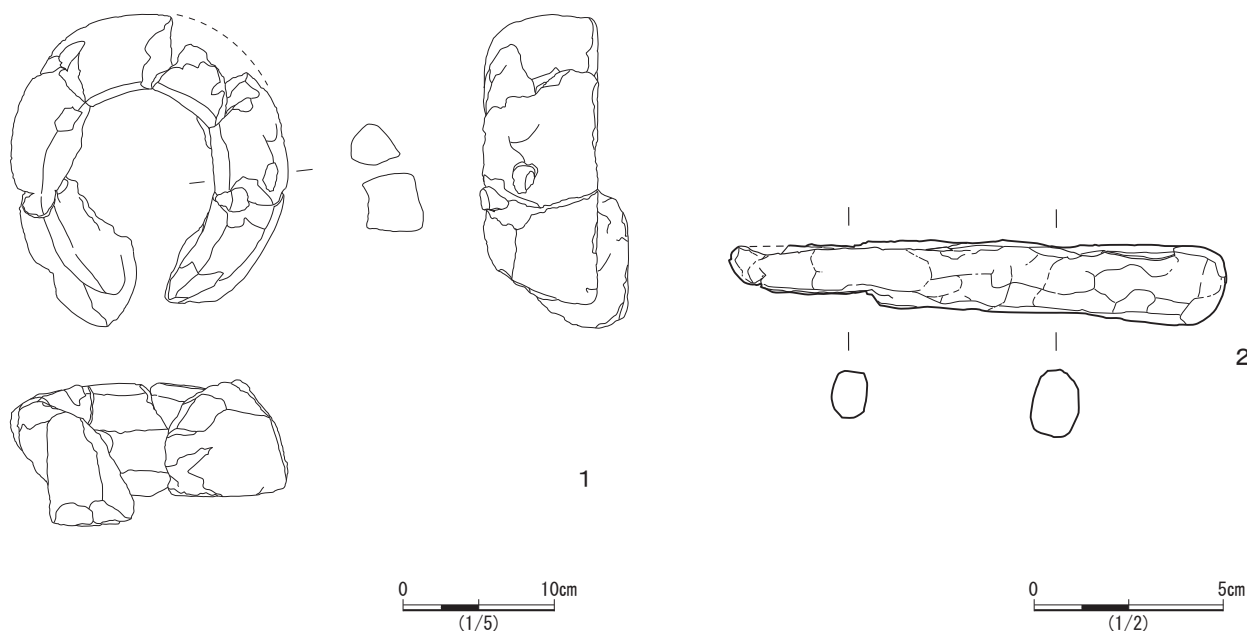
第15号土坑

- | | |
|--------------------|--|
| 第1層：褐灰色土(10YR5/1) | しまり弱い。砂質。鉄分を少量、宝永パミス(直径3.0mm)・炭化物を極少量含む。堆積粗い。 |
| 第2層：褐灰色土(10YR4/1) | 褐色土ブロックを少量、宝永パミス(直径3.0mm)を極少量含む。堆積やや粗い。 |
| 第3層：黒褐色土(10YR3/1) | しまり弱い。宝永パミス(直径3.0mm)・炭化物を少量含む。堆積粗い。 |
| 第4層：灰黄褐色土(10YR4/2) | 灰黄褐色土ブロック。炭化物を極少量含む。 |
| 第5層：褐灰色土(10YR4/1) | しまりやや弱く粘性やや有り。宝永パミス(直径3.0mm)・焼土を極少量含む。堆積粗い。 |
| 第6層：褐灰色土(10YR4/1) | 粘性やや強く粘性有り。宝永パミス(直径3.0mm)・鉄分を少量含む。第6層西寄りに炭化物目立つ。第5層に比べ色調やや暗い。堆積粗い。 |
| 第7層：褐灰色土(10YR4/1) | 第6層に似るが第6層に比べしまり減り粘性やや増す。堆積粗い。 |
| 第8層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまりやや強い。黄褐色土を斑に多量含む。堆積やや緻密。 |

第15図 第15号土坑(1/40)

遺物は、相模型土師器甕 5 片12.6g、須恵器坏 1 片2.5g、甕 1 片25.3g、蓋 1 片9.0g、灰釉陶器瓶類 1 片21.9g、土製品20片1,133.1g、陶器 2 片7.7g、磁器碗 2 片5.5g、鉄製品 1 点65.1g、礫 2 点340.4gが出土した。磁器はいずれも肥前系碗であり、近世中～後期の丸碗と18世紀後半頃の碗が含まれる。このうち2点を図示した。

1は土製品であり、型押し成形されたものと考えられるが極粗雑な作りである。平面形状は環状に近いU字状を呈し、断面形状は縦形の不整台形を呈して太い。底面は平らである。また側面4箇所には穿孔が認められた。器種は側面の穿孔や外面の一部分に残る被熱痕から簡易な七輪の類と推測されるが、用途は不詳である。遺物の時期は第二次世界大戦時下で生活物資が欠乏した時期である可能性がある。2は鉄製品であり、形状は棒状を呈して先細る。器種は不詳である。



第16図 第15号土坑出土遺物(1/5・1/2)

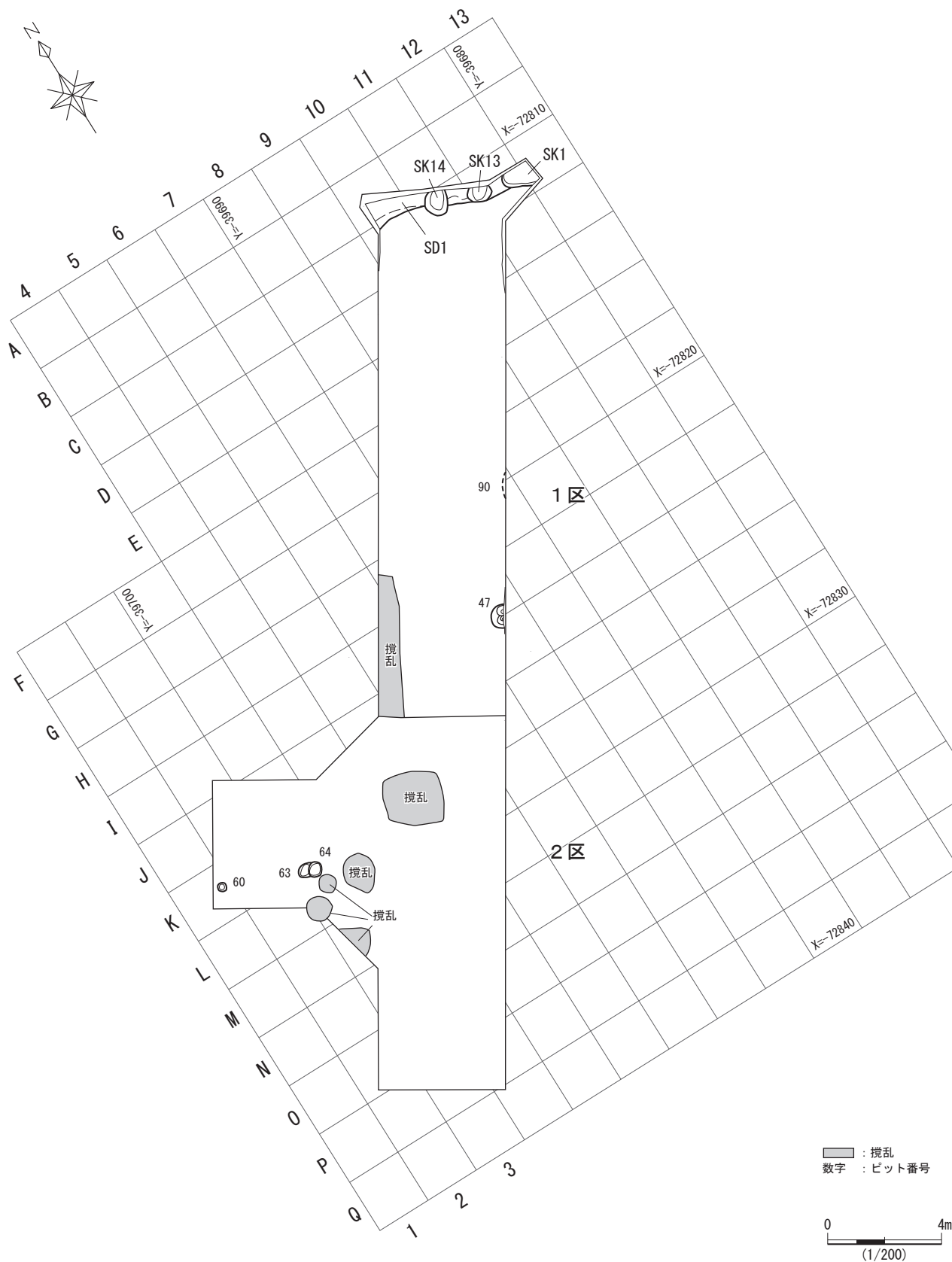
表 8 第15号土坑出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	土製品	直径：(22.0) 器高：7.0 重量：1,133.1g 残存：2/3	胎土：緻密 砂粒 色調：内外面 10YR6/3にぶい黄橙 せいけい：型押し→側面4箇所穿孔 備考：外面一部分被熱	SK15 P1
2	鉄製品	長さ：13.15 幅：1.8 厚さ：1.25 重量：65.1g 残存：1/1	形状：棒状を呈して基部から先端部へ向かい先細る	SK15 覆土一括

No. は第16図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第15図中の遺物番号に対応する

第2節 近世

1区北端部で第1号溝および第1号・13号・14号土坑、1区南部で第47号・90号ピット、2区車返し部で第60号・63号・64号ピットを検出した。第1号溝は現市道に沿って延びることが確認された(第66図)。



第17図 近世遺構配置図(1/200)

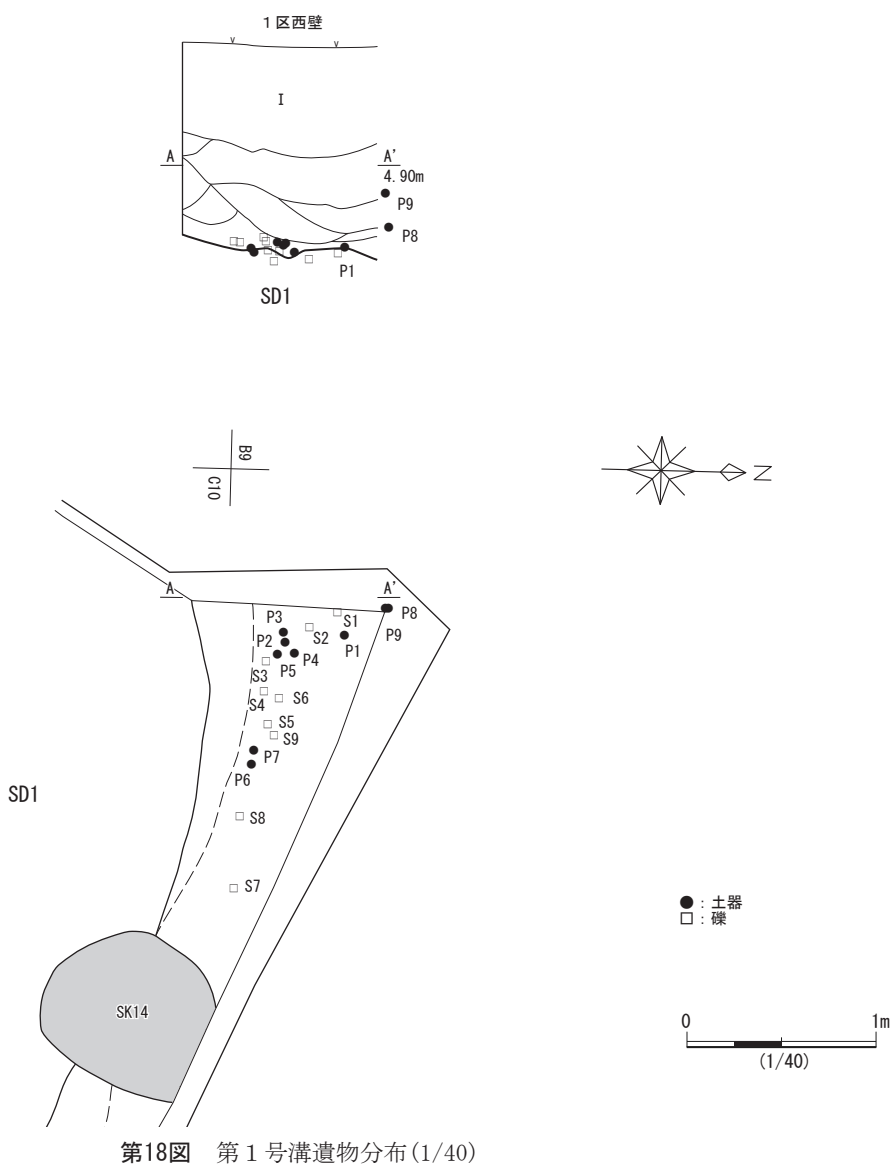
第1項 溝

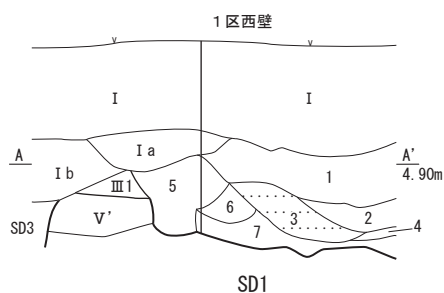
第1号溝(第11・17～20図 表9 図版1-2、図版3-2-1)

1区北端部のB・C10～13グリッドで検出した。遺構の北壁側は調査区外となる。延長方向は東南東―西北西方向にやや蛇行しつつ延び、調査区を横断する。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-76.5°-W西偏を指す。第1号・13号・14号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。西壁土層断面の観察から、少なくとも3回の掘り込みが認められ、最新段階の掘り込み(第19図第1～4層)は、幅約1.10m、深さ約56.0cmを測り、断面形状は椀形を呈することが想定される。遺構確認面における残存規模は、延長約5.84m、幅員0.48～0.99m、深さ8.0～21.6cmを測る。底面の標高は、北端部で4.30m、中央部で4.36m、南端部で4.56mを測り、南端部の掘削時に段差が生じたことが考えられる。

西壁土層断面の観察から復元した溝想定ライン(第19図)を基にした残存規模は、延長約5.48m、幅員0.78～1.38m、深さ64.0cmを測り、最終的な断面形状は船底状を呈する。

遺構の時期は、覆土および出土遺物から近世宝永期以降～近世末頃と推測される。





第1号溝

第1層：褐灰色土(10YR5/1)

しまり弱い。宝永パミス(直径3.0～8.0mm)・宝永スコリアを少量含む。堆積粗い。

第2層：褐灰色土(10YR5/1)

粘性やや有り。宝永パミス(直径3.0～8.0mm)・宝永スコリアを中量含む。堆積やや粗い。

第3層：褐灰色土(10YR5/1)

しまりなく脆い。宝永スコリアを多く、宝永パミス(直径3.0～8.0mm)をやや多く含む。堆積粗い。

第4層：褐灰色土(10YR4/1)

しまりやや弱い。宝永スコリアを中量、宝永パミス(直径3.0～8.0mm)を少量含む。酸化により色調灰色味やや強い。

第5層：灰黄褐色土(10YR5/2)

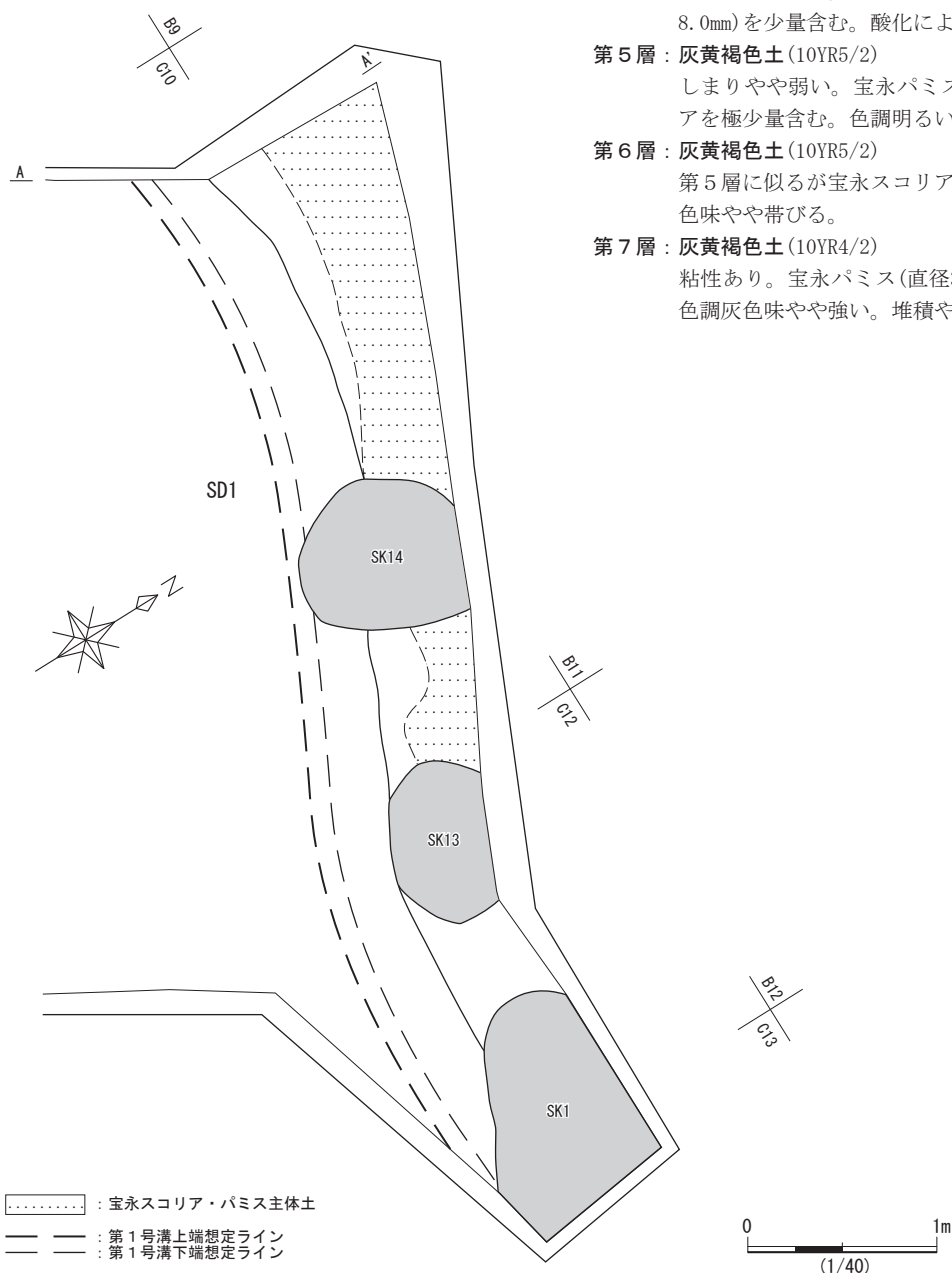
しまりやや弱い。宝永パミス(直径3.0mm)を少量、宝永スコリアを極少量含む。色調明るい。堆積やや粗い。

第6層：灰黄褐色土(10YR5/2)

第5層に似るが宝永スコリア・鉄分やや増す。部分的に色調赤色味やや帯びる。

第7層：灰黄褐色土(10YR4/2)

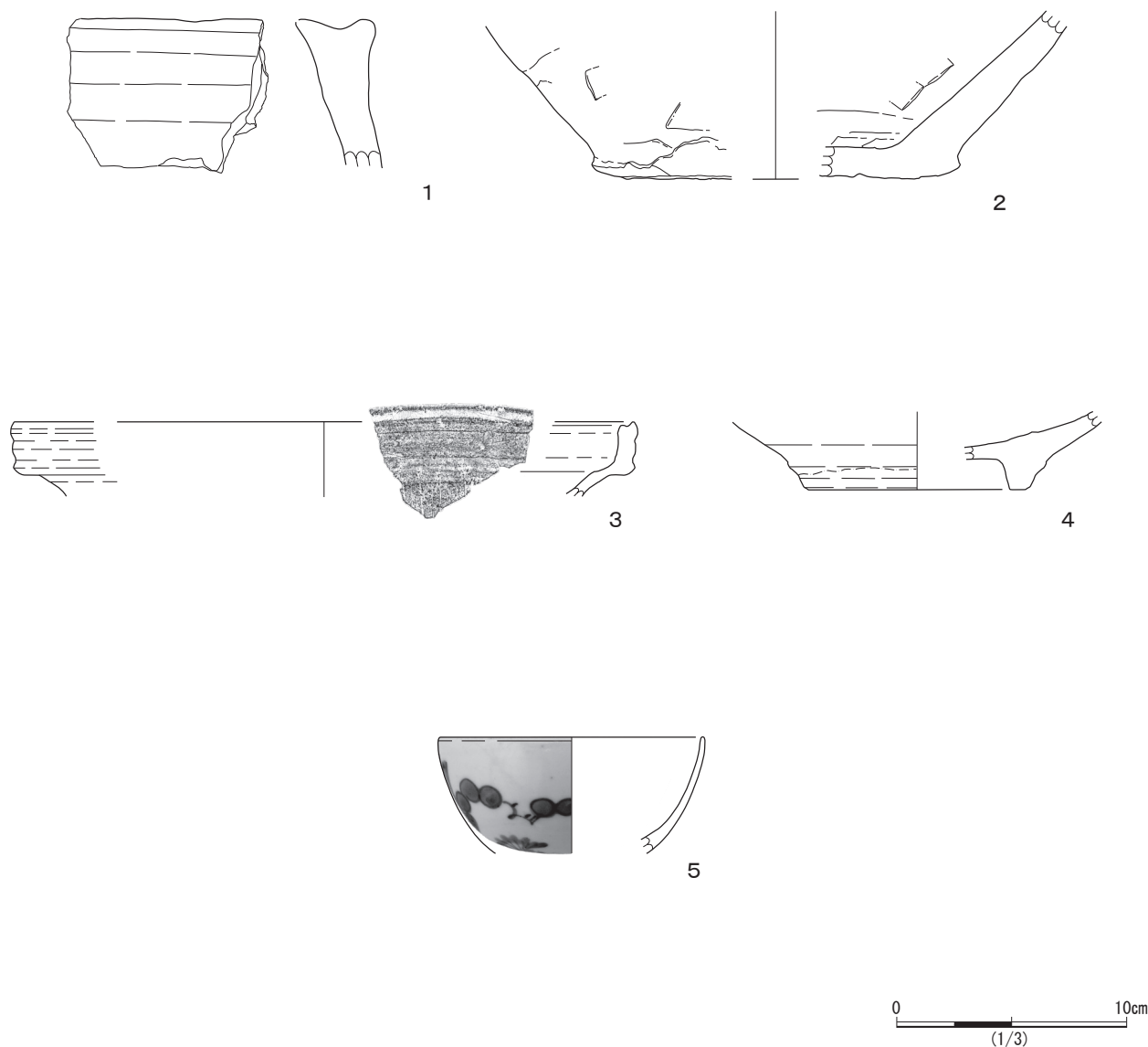
粘性あり。宝永パミス(直径3.0mm)を極少量含む。酸化により色調灰色味やや強い。堆積やや粗い。



第19図 第1号溝(1/40)

遺物は、相模型土師器坏 1 片 7.3g、甕 3 片 4.5g、須恵器甕 1 片 21.8g、瓦 1 片 21.7g、在地系土器火鉢 8 片 570.3g、陶器甕 1 片 69.9g、壺 2 片 206.5g、播鉢 1 片 49.8g、鉢 7 片 311.0g、磁器碗 2 片 67.9g、瓶類 1 片 23.7g、礫 9 点 12,056.8g が出土した。陶器には近世前半頃の信楽系播鉢、近世後半頃の備前系壺や、17 世紀～18 世紀の瀬戸・美濃系笠原鉢が含まれる。磁器には 19 世紀前半頃の肥前波佐見系の瓶類が含まれる。瓦の時期は近世と推測される。このうち 5 点を図示した。

1 と 2 は在地系土器の火鉢であり、同一個体である可能性が高く、また第 4 号溝の P2 と接合した。遺物の時期は近世前半と推測される。3 は丹波系陶器の播鉢であるが、すり目の単位は不詳である。遺物の時期は近世前半と推測される。4 は唐津系陶器の三島手大鉢であり、遺物の時期は 17 世紀～18 世紀初頭と推測される。5 は肥前系磁器の碗である。外面には梅花文が染付される。遺物の時期は 18 世紀前半と推測される。



第20図 第1号溝出土遺物(1/3)

表9 第1号溝出土遺物観察表

No.	種別	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
	器種			
1	土器 火鉢	口径：(-) 底径：- 残高：6.5 重量：163.7g 残存：口縁部小片	胎土：やや粗 砂礫 白色粒 黒色粒 焼成：良好 色調：2.5YR6/6橙 せいけい：粘土紐巻き上げ→ 轆轤成形 産地：在地 年代：近世前半 備考：第 1号溝P5と同一個体の可能性がある	SD1 P6
2	土器 火鉢	口径：- 底径：(15.0) 残高：5.3 重量：259.5g 残存：体部～底部1/5	胎土：やや粗 砂礫 白色粒 黒色粒 焼成：良好 色調：2.5YR6/6橙 せいけい：粘土紐巻き上げ→ 轆轤成形 産地：在地 年代：近世前半 備考：第 4号溝P2と接合	SD1 P5
3	陶器 擂鉢	口径：(26.9) 底径：- 残高：3.25 重量：28.7g 残存：口縁～体部小片	胎土：やや粗 砂粒 長石 焼成：良好 色調： 5YR5/3にぶい赤褐 せいけい：轆轤成形 産地：丹 波 年代：近世前半 備考：すり目単位不詳	SD1 覆土一括
4	陶器 三島手 大鉢	口径：- 高台径：(9.4) 残高：3.4 重量：146.7g 残存：底部～高台部1/4	胎土：緻密 砂礫 白色粒 焼成：良好 色調： 5YR5/2/灰褐 せいけい：轆轤成形 産地：唐津 施釉：内外面 透明釉 年代：17世紀～18世紀初頭 備考：見込みに砂目	SD1 P9
5	磁器 碗	口径：11.4 底径：- 残高：5.05 重量：55.8g 残存：口縁部～体部1/3	胎土：緻密 砂粒 焼成：良好 色調：N8/灰白 せいけい：轆轤成形 産地：肥前 文様：染付 外 面 梅花文 年代：18世紀前半	SD1 P7

No. は第20図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第18図中の遺物番号に対応する

第2項 土坑

第1号土坑(第11・17・21・22図 表10 図版1-2、図版3-2-2)

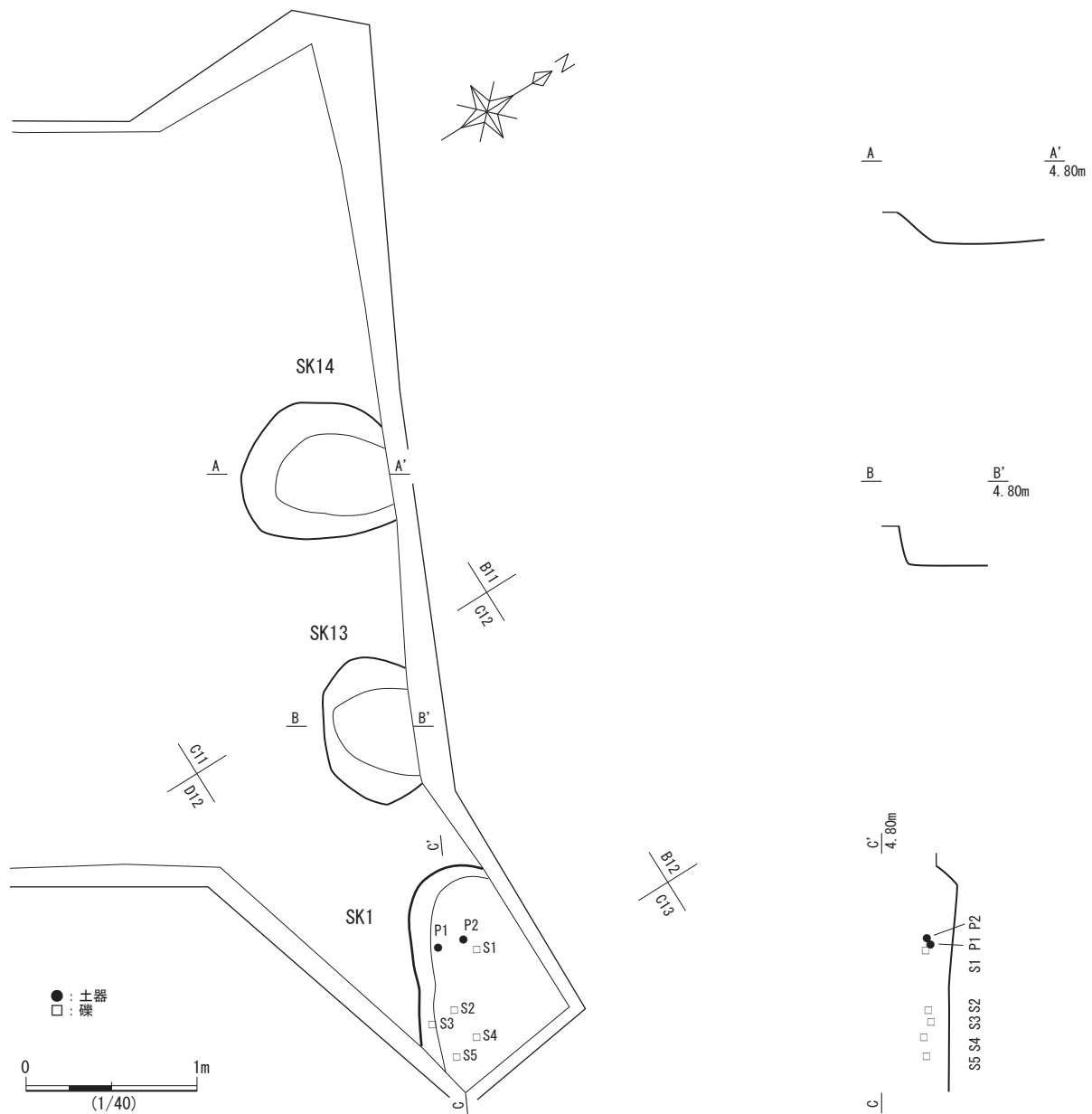
1区北端部C12・13グリッドで検出した。遺構の北側から東側は調査区外となるが、平面形状は長楕円形または方形を呈すると推測される。座標軸と遺構の南辺との偏差は、概ねN-62.5°-W西偏を指す。第1号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。残存規模は、長軸1.34m、短軸0.88m、深さ10.2～20.2cmを測る。底面は概ね平坦であるが、北側へ5.0～8.0cm程度下降傾斜する。断面形状は箱形を呈すると推測される。

南辺寄りで、土器や礫がやや集中して出土した。各遺物は概ね水平方向に並ぶ様子が窺われ、その標高は4.53m前後である。

遺物は、相模型土師器坏4片5.1g、甕3片2.2g、須恵器甕1片173.9g、蓋1片1.7g、灰釉陶器碗1片1.4g、磁器碗1片23.8g、石製品1点152.3g、礫4点724.0gが出土した。磁器は18世紀後半～19世紀前半頃の肥前波佐見系碗と推測される。このうち石製品1点を図示した。

1は砥石である。基部は破断面であり、上下面および先端面に使用痕を有する。左右両面は、石材を鋸引きした際の工具痕であると考えられる。

遺構の時期は、近世宝永期以降で第1号溝に後続する時期と推測される。

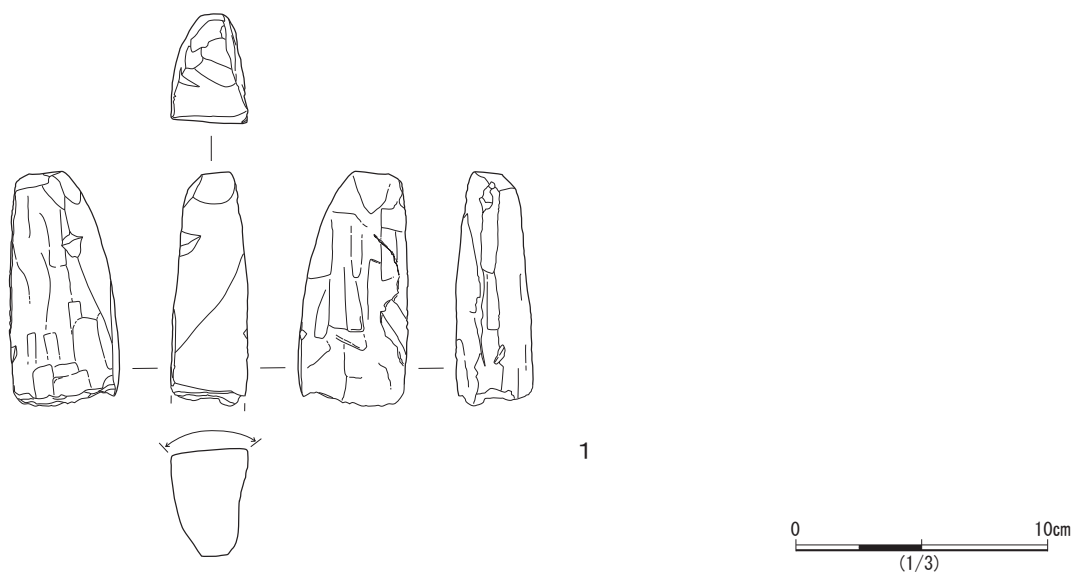


第21図 第1号・13号・14号土坑(1/40)

表10 第1号土坑出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	石製品 砥石	長さ：(9.3) 幅：3.05 厚さ：4.3 重量：152.3g 残存：端部欠損	石材：凝灰岩	SK1 S4

No. は第22図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第21図中の遺物番号に対応する



第22図 第1号土坑出土遺物(1/3)

第13号土坑(第11・17・21図 図版1-2)

1区北端部C11・12グリッドで検出した。遺構の北側は調査区外となるが、平面形状は不整楕円形を呈すると推測される。第1号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。残存規模は、長軸0.88m、短軸0.52m、深さ12.9～27.0cmを測る。底面は概ね平坦であるが、東側へ7.0cm程度下降傾斜する。断面形状は箱形を呈すると推測される。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、近世宝永期以降で第1号溝に後続する時期と推測される。

第14号土坑(第11・17・21図 図版1-2)

1区北端部C11グリッドで検出した。遺構の北側は調査区外となるが、平面形状は不整楕円形を呈すると推測される。第1号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。残存規模は、長軸0.87m、短軸0.80m、深さ18.4cmを測る。底面は概ね平坦であるが、中央部が3.0cm程度窪む。断面形状は逆台形を呈すると推測される。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、近世宝永期以降で第1号溝に後続する時期と推測される。

第3項 ピット

1区南側で第47号・90号ピット、2区車返し部で第60号・63号・64号ピットを検出した。近世のピットは遺構密度が非常に低いことが窺われる(第17図)。

第47号ピット(第11・17・23図 表11 図版1-5・6)

1区I・J8グリッドで検出した。遺構の東半部は調査区外となる。平面形状は楕円形を呈し、断面形状は不整U字形を呈すると推測される。残存規模は、表11のとおりである。開口部の高さや断面から窺える規模は、第90号ピットに類似する。

遺物は相模型土師器甕1片2.4gが出土したが、図示には至らなかった。

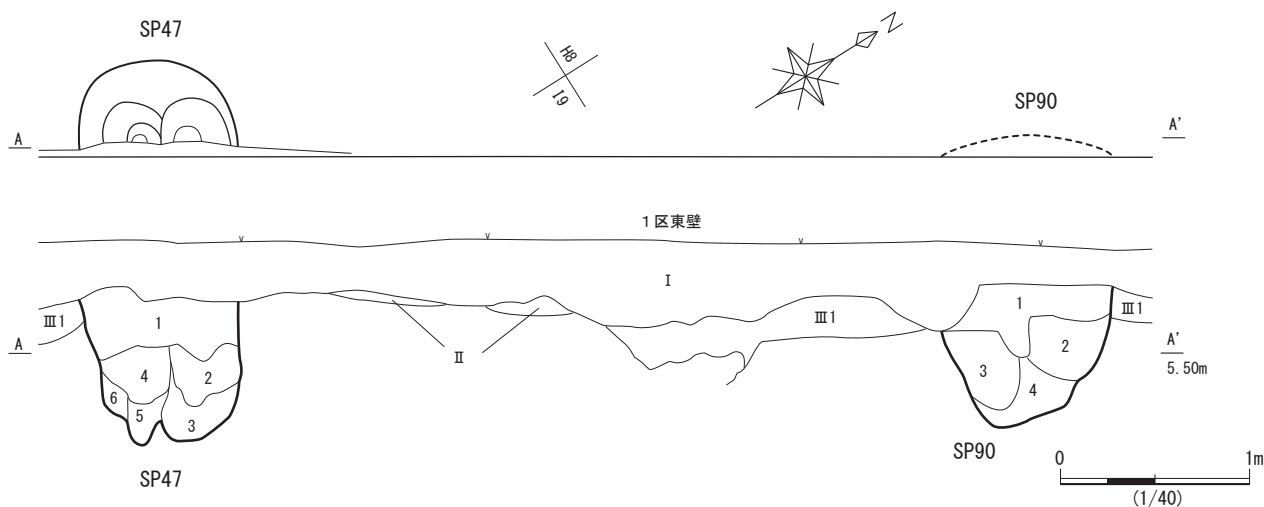
遺構の時期は、第90号ピットと同時期であると推測される。

第90号ピット(第11・17・23図 表11 図版1-5・6)

東壁土層断面の観察により、第47号ピットに類似する掘り込みを確認した(第23図)。遺構の大部分は調査区外となる。断面形状は不整U字形を呈すると推測される。残存規模は、表11のとおりである。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から近世宝永期以降と推測される。



第47号ピット

第1層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強い。褐色土を少量、焼土を極少量含む。色調やや明るい。
第2層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強い。黄褐色土を少量、橙色粒子を極少量含む。
第3層：黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや弱い。黄褐色土をやや斑に少量、焼土を極少量含む。
第4層：黒褐色土(10YR3/2)	しまり強い。黄褐色土を斑に中量、橙色粒子を少量含む。
第5層：黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや弱い。黄褐色土ブロックを少量、酸化鉄分を極少量含む。
第6層：黒褐色土(10YR3/2)	橙色粒子・黄褐色土を極少量含む。堆積やや粗い。

第90号ピット

第1層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強い。宝永パミス・焼土を極少量含む。堆積やや粗い。
第2層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強い。炭化物・橙色粒子・褐色土を極少量含む。
第3層：黒褐色土(10YR3/2)	しまり強い。橙色粒子を少量含む。下部に黄褐色土を少量含む。
第4層：黒褐色土(10YR3/2)	部分的にしまりやや強い。黄褐色土を中量、橙色粒子を極少量含む。

第23図 第47号・90号ピット(1/40)

第60号ピット(第11・17・24図 表11 図版2-5・6)

2区K 1グリッドで検出した。平面形状は隅丸方形を呈し、断面形状はU字形を呈する。残存規模は、表11のとおりである。

遺物は近世瀬戸系陶器で灰釉施釉の皿1片5.2gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、出土遺物や覆土の特徴から近世と推測される。

第63号ピット(第11・17・24図 表11 図版2-5・6)

2区K・L 3グリッドで検出した。第64号ピットと重複し、新旧関係は本遺構が古い。平面形状は楕円形を呈し、断面形状はU字形を呈する。残存規模は、表11のとおりである。

遺物は土師器甕1片1.6g、壺1片3.3gが出土したが、図示には至らなかった。

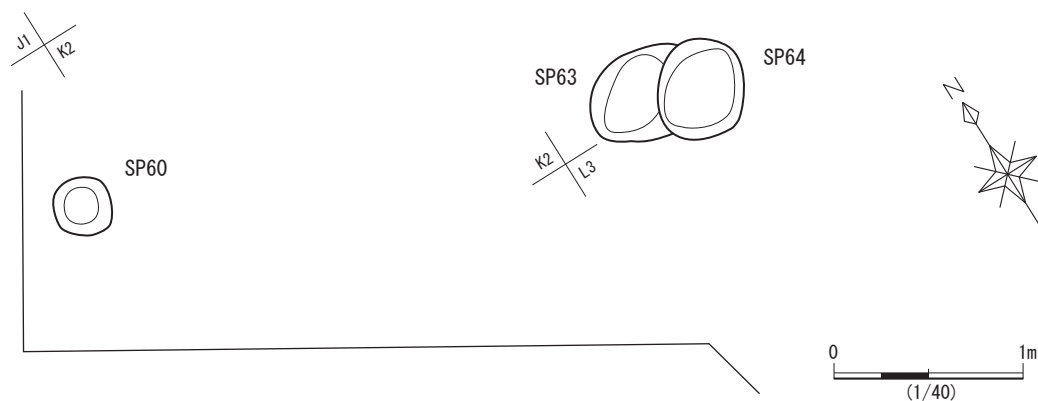
遺構の時期は、覆土の特徴から近世宝永期以降と推測される。

第64号ピット(第11・17・24図 表11 図版2-5・6)

2区K・L 3グリッドで検出した。第63号ピットと重複し、新旧関係は本遺構が新しい。平面形状は楕円形を呈し、断面形状はU字形を呈する。残存規模は、表11のとおりである。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、第63号ピットと同時期であると推測される。



第24図 第60号・63号・64号ピット(1/40)

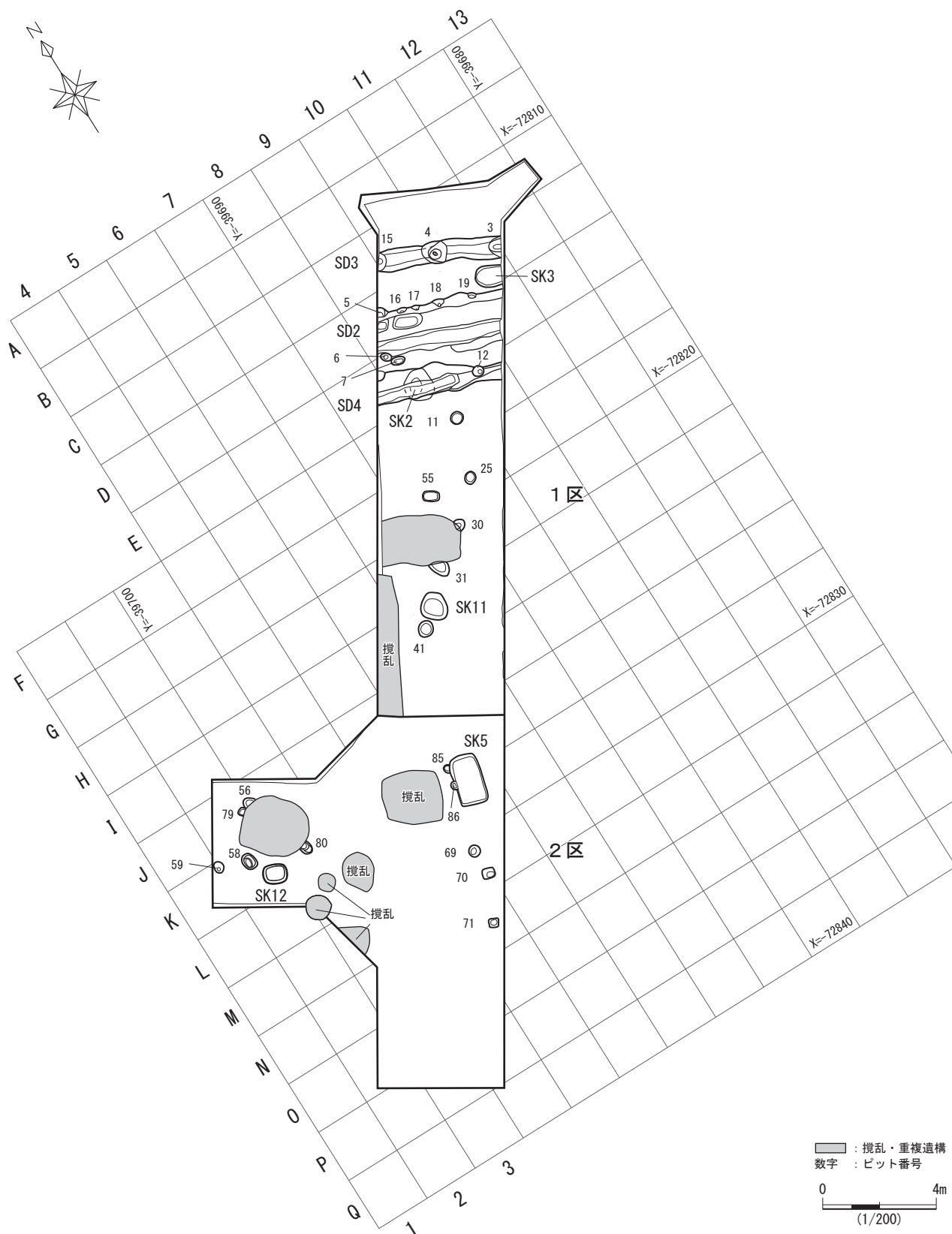
表11 近世ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP47	(楕円形)	不整U字形	(84.0)	(45.0)	30.5	土師器甕1片2.4g
SP60	隅丸方形	U字形	31.0	30.0	39.8	陶器皿1片5.2g
SP63	楕円形	U字形	(62.0)	49.0	17.5	土師器甕1片1.6g、壺1片3.3g
SP64	楕円形	U字形	53.0	51.0	17.6	—
SP90	—	不整U字形	(90.0)	—	36.0	—

番号は第23・24図中の遺構番号に対応する

第3節 中近世

1区北側で第2号～4号溝を検出し、本調査地点の地割りを画す溝群として重要な発見となった。2区北側で長方形を呈する第5号土坑を検出した。その性格は墓墳の可能性はあるが、今後の検討を要する。



第1項 溝

第2号溝(第11・25～27図 表12・13 図版1－3、図版4－1－1)

1区北部のD～F 8～11グリッドで検出した。延長方向は東南東－西北西方向に延び、調査区を横断する。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-64.5°-W西偏を指す。第4号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。西壁土層断面の観察から2回以上の掘り込みが認められ、断面形状がV字状もしくは漏斗状を呈する掘り込みが北側へ位置をずらしつつ掘られたことが確認された。遺構確認面における残存規模は、延長約4.79m、幅員2.07～2.95m、深さ89.5～94.5cmを測る。底面の標高は中央部で3.80mを測り、東西両側に比べ10.0cm窪む。

西壁および東壁土層断面の観察から復元した溝想定ライン(第26図)を基にした残存規模は、延長約4.79m、幅員3.40～3.60m、深さ約126.0cmを測る。

なお第1号溝と第2号溝に挟まれた辺りに里道が通ると思われるが、道状遺構は確認されなかった。

遺構の時期は、第4号溝を掘り込むことから、18世紀後半～19世紀前半以降と推測される。

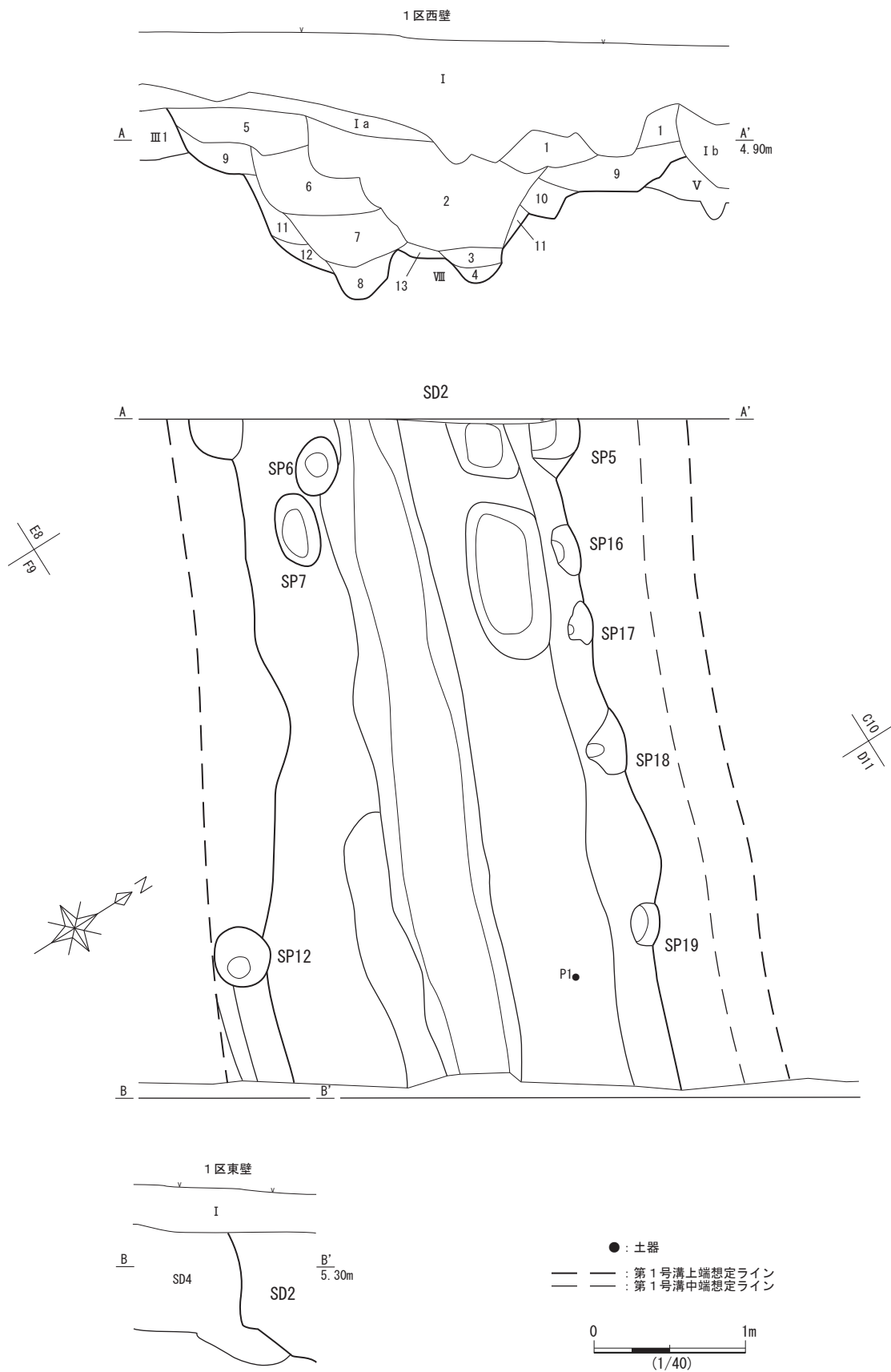
表12 第2号溝内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP5	(隅丸方形)	(箱形)	(33.0)	(26.0)	17.4	—
SP6	楕円形	U字形	39.0	28.0	23.0	土師器甕2片 4.4g
SP7	楕円形	箱形	49.0	28.0	32.4	—
SP12	楕円形	U字形	40.0	37.0	18.2	—
SP16	楕円形	U字形	34.0	16.0	38.5	—
SP17	不整楕円形	V字形	29.0	17.0	52.3	—
SP18	不整楕円形	V字形	42.0	27.0	62.6	—
SP19	楕円形	U字形	28.0	19.0	26.0	—

番号は第26図中の遺構番号に対応する

第2号溝

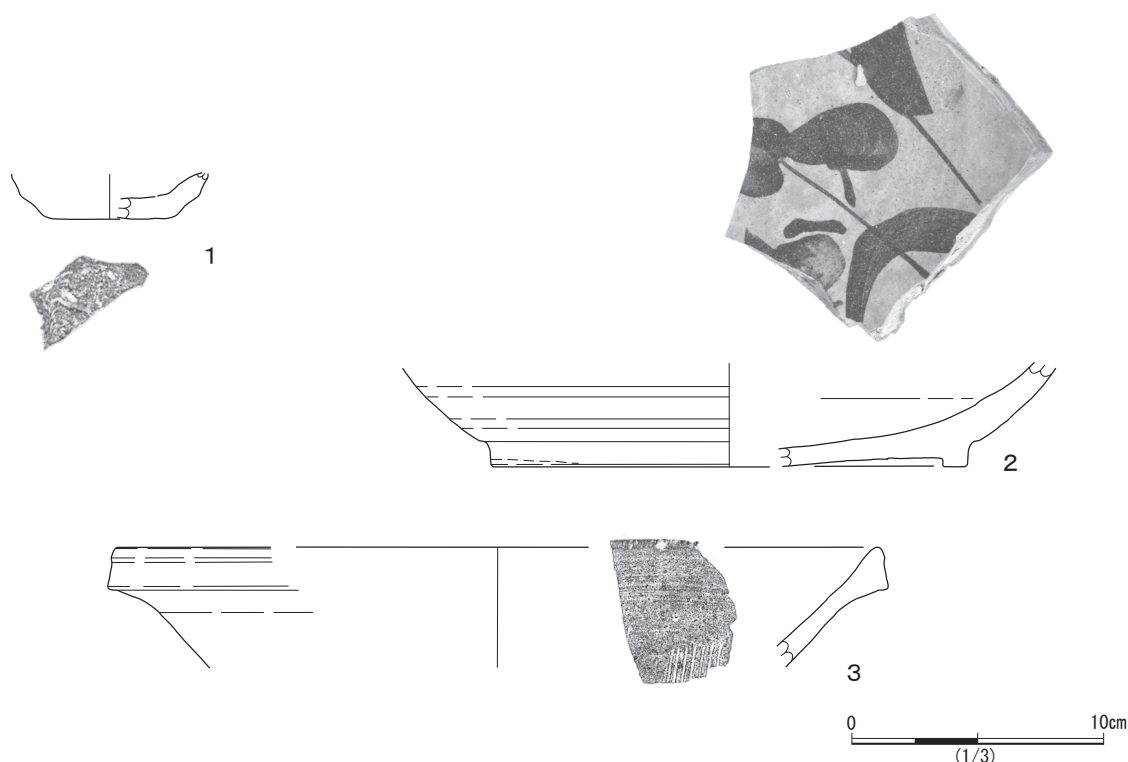
第1層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。宝永パミス・焼土粒を極少量含み土粒細かい。色調明るい。乾燥により粉質。
第2層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや強い。上部に宝永パミス(直径3.0mm)を極少量、中～下部に炭化物・灰を帯状に少量含む。
第3層：褐灰色土(7.5YR5/1)	粘性やや強い。酸化鉄分を粉状にやや多量に含み色調赤色味やや強い。
第4層：褐灰色土(7.5YR5/1)	粘性やや強い。酸化鉄分を粉状に多量に含み色調赤色味強い。
第5層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。灰白色パミス・焼土粒を極少量含み土粒細かい。色調明るい。乾燥により粉質。
第6層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。灰白色パミスを極少量含む。部分的に灰白色土ブロックを中量含む。堆積やや粗い。
第7層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強く粘性やや有り。酸化鉄分を粉状に多量、橙色粒子を極少量含む。
第8層：褐灰色土(7.5YR5/1)	粘性有り。酸化鉄分を極多量に含み色調明るい。堆積緻密。
第9層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。灰白色パミス・橙色粒子を極少量含む。乾燥によりやや粉質。堆積やや粗い。
第10層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。灰白色土ブロックを中量、灰白色パミスを極少量含む。堆積やや粗い。
第11層：灰白色土(10YR7/1)	しまり強く粘性やや有り。にぶい黄褐色土ブロックを極少量含む。
第12層：灰白色土(10YR7/1)	粘性有り。酸化鉄分をやや多量、にぶい黄褐色土を少量含む。堆積やや緻密。
第13層：灰白色土(10YR7/1)	粘性やや強い。炭化物・焼土を極少量含む。堆積やや緻密。



第26図 第2号溝(1/40)

遺物は、相模型土師器坏 2 片 6.2g、甕 5 片 38.3g、須恵器坏 1 片 5.5g、甕 4 片 32.1g、かわらけ 1 片 20.1g、陶器甕 1 片 43.9g、鉢 1 片 233.5g、播鉢 2 片 67.3g、急須 1 片 2.3g、礫 4 点 724.0g が出土し、このうち 3 点を図示した。急須は益子系で近世～近代の遺物と推測されるが、後世の混入遺物と考えられる。

1 はかわらけである。口縁部外面に煤が付着し、燈明皿として使用されたものと考えられる。遺物の時期は口縁部の形状が不明確であるため中世とするに止める。2 と 3 は陶器であり、2 は瀬戸・美濃系の笠原鉢であり、内面には白泥を塗布した後鉄釉で秋草文を描く。遺物の時期は 17 世紀～18 世紀頃と推測される。3 は丹波系の播鉢であり、遺物の時期は近世前期と推測される。



第27図 第2号溝出土遺物(1/3)

表13 第2号溝出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	かわらけ	口径：(-) 底径：(5.0) 残高：1.7 重量：20.1g 残存：体部～底部小片	胎土：やや粗 白色粒 褐色粒 雲母 輝石 白色骨針 状物質 焼成：良好 色調：7.5YR6/4にぶい橙 せいけい：ロクロ成形→ナデ 底部 回転糸切り→ ナデ 板状圧痕 年代：中世 備考：口縁部外面 煤 付着 口唇部欠損	SD2 覆土一括
2	陶器 笠原鉢	口径：- 高台径：(18.6) 残高：4.1 重量：233.5g 残存：体部～高台部1/4	胎土：粗 砂礫 焼成：良好 色調：2.5Y8.3淡黄 10YR5/1褐灰 せいけい：轆轤成形 施釉：外面灰 釉 絵付：内面 白泥塗布→鉄釉絵付 文様：秋草 文 産地：瀬戸・美濃 年代：17世紀～18世紀	SD2 P1
3	陶器 播鉢	口径：(30.2) 底径：- 残高：4.75 重量：37.5g 残存：口縁部～体部小片	胎土：やや粗 白色粒 焼成：良好 色調：外面 10YR6/1褐灰 内面 7.5YR6/4にぶい橙 施釉：内面 錆釉 せいけい：粘土紐巻き上げ→轆轤成形 産地：丹波 年代：近世前期 備考：スリ目単位不 明	SD2 覆土一括

No. は第27図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第26図中の遺物番号に対応する

第3号溝(第11・25・28図 表14 図版1-2)

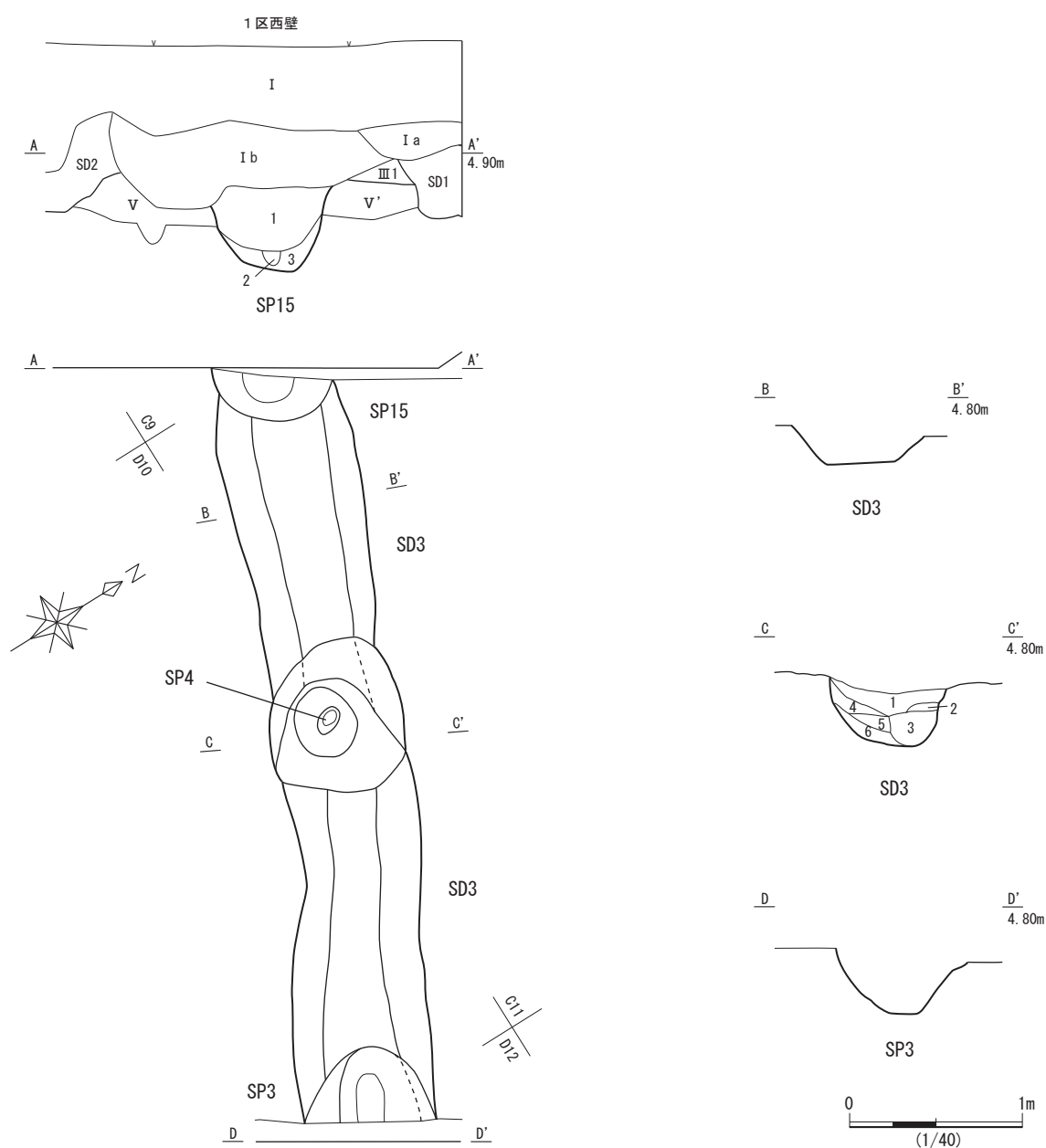
1区北部のC・D9～12グリッドで検出した。延長方向は東南東―西北西方向にやや蛇行しつつ延び、調査区を横断する。座標軸と延長方向との偏差は、概ね $N-76.5^{\circ}-W$ 西偏を指す。第1号溝と第2号溝に挟まれる位置関係にあるが、近代の攪乱が遺構の開口部にまで及ぶため、2条との新旧関係は不詳である。

本遺構と第3号・4号・15号ピットは重複関係にあるが、溝もちの柱穴で構成される柵列などの一部分である可能性が考えられる。

各ピットを含めた残存規模は、延長約4.49m、幅員0.63～0.81m、深さ14.4～33.0cmを測る。

遺物は、相模型土師器坏2片6.8g、甕5片23.8g、須恵器瓶類1片4.2g、陶器鉢類1片21.6gが出土したが、図示には至らなかった。陶器は、近世の常滑系鉢類と推測される。

遺構の時期は、覆土の特徴から近世宝永期以前と推測されるが、上限は不詳である。



第28図 第3号溝(1/40)

第3号溝

第1層：灰黄褐色土(10YR5/2)

粘性やや弱い。全体に酸化する。堆積粗い。

第2層：褐灰色土(10YR5/1)

やや酸化。やや砂質。色調灰色味やや濃い。

第3層：褐灰色土(10YR5/1)

粘性やや強い。堆積やや緻密。

第4層：褐灰色土(10YR5/1)

第1層を基調として褐色土を少量含む。堆積やや粗い。

第5層：褐灰色土(10YR5/1)

しまりやや弱い。第3層に似るがややソフト。堆積粗い。

第6層：褐灰色土(10YR5/1)

しまり有り粘性やや強い。褐色土を少量含む。

第15号ピット

第1層：褐灰色土(10YR5/1)

しまり部分的にやや強く粘性有り。にぶい黄褐色土を少量、焼土を極少量含む。浸透水により酸化強い。色調やや明るい。

第2層：褐灰色土(10YR5/1)

第1層に似るがしまり粘性やや増す。堆積やや粗い。

第3層：灰黄褐色土(10YR5/2)

しまりやや弱く粘性有り。にぶい黄褐色土ブロックを多く含む。

表14 第3号溝内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP3	(楕円形)	不整U字形	(76.0)	(43.0)	37.6	—
SP4	隅丸方形	U字形	90.0	79.0	39.8	—
SP15	楕円形	U字形	(71.0)	(27.0)	17.6	—

番号は第28図中の遺構番号に対応する

第4号溝(第11・25・29・30図 表15 図版1—3、図版4—1—2)

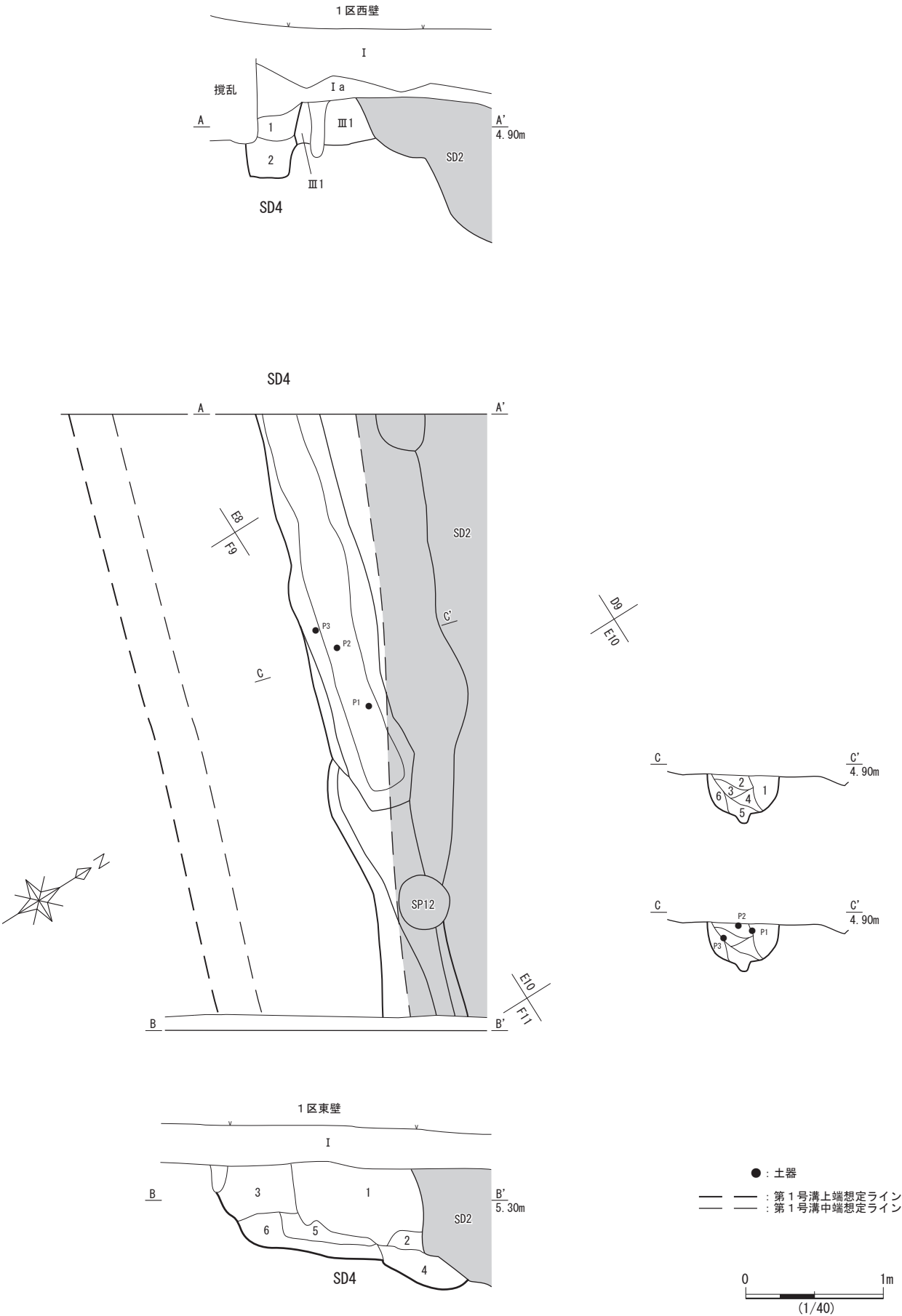
1区北部のE・F8～10グリッドで検出した。延長方向は東南東—西北西方向に延び、調査区を横断する。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-70.5°-W西偏を指す。第2号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古く、遺構の北壁は第2号溝の掘り込みにより消失していた。遺構確認面における残存規模は、延長約4.63m、幅員0.45～0.59m、深さ12.8～37.4cmを測る。底面の標高は西端部で4.53mを測り、断面形状は箱形状もしくは逆台形状を呈する。また東端部で標高4.65mを測り、断面形状は碗形状を呈する。底面の西側約2/3は、東側に比べて約18.0cmの段差をもって深く掘られていた。

東壁土層断面の観察から復元した溝想定ライン(第29図)を基にした残存規模は、延長約4.60m、幅員約1.72～1.81m、深さ約94.0cmを測る。

遺物は、相模型土師器坏1片1.4g、甕9片40.6g、須恵器甕1片3.0g、在地系土器火鉢1片36.0g、陶器3片275.3g、磁器碗3片12.4gが出土した。陶器には18世紀後半～19世紀前半の瀬戸系灰釉大鉢が含まれる。磁器には18世紀後半の肥前系碗が含まれる。このうち陶器2点を図示した。

1は肥前唐津系の刷毛目平鉢である。内面は白泥を塗った後に白泥を渦巻き状に剥ぎ取り、透明釉をかける。遺物の時期は近世前半～中頃と推測される。2は常滑系捏鉢の転用陶片である。調整の特徴からスリ目がない頃の片口鉢Ⅱ類9型式期に比定され、遺物の時期は15世紀中頃と推測される。

遺構の時期は、出土遺物から18世紀後半頃に埋没したと推測され、近世前期以前まで遡る可能性がある。



第29図 第4号溝(1/40)

第4号溝

西壁A-A'

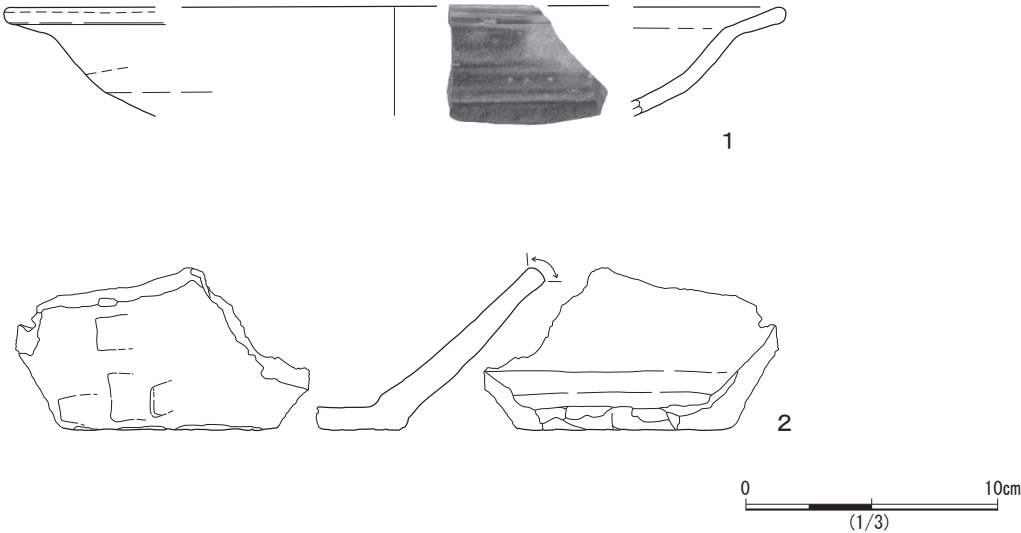
- 第1層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。焼土・灰白色パミスを極少量含む。
第2層：暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや有り。焼土・橙色粒子を極少量含む。堆積やや緻密。

東壁B-B'

- 第1層：褐灰色土(10YR5/1) しまり有り。宝永パミスを中量含む。堆積粗い。
第2層：褐灰色土(10YR5/1) 褐色土を中量、宝永パミス・炭化物を極少量含む。土粒やや細かい。堆積やや緻密。
第3層：褐灰色土(10YR5/1) しまり強い。褐色土中量、宝永パミス・炭化物を極少量含む。色調明るい。
第4層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。橙色粒子・黄褐色土を極少量含む。
第5層：暗褐色土(10YR3/3) しまり強い。黄褐色土ブロックを少量、橙色スコリア・黒色スコリア・炭化物を極少量含む。堆積やや緻密。
第6層：灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性やや有り。黄褐色土を多く、暗褐色土を極少量含む。堆積やや緻密。

C-C'

- 第1層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。炭化物・褐色土を極少量含む。
第2層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。橙色粒子・炭化物を極少量含む。
第3層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。橙色粒子を極少量含む。
第4層：褐灰色土(10YR4/1) 橙色粒子を極少量含む。僅かに酸化し、色調やや明るい。
第5層：暗褐色土(10YR3/3) しまり弱い。黄褐色土を少量含む。堆積粗い。
第6層：暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強い。黄褐色土を少量、炭化物を極少量含む。



第30図 第4号溝出土遺物(1/3)

表15 第4号溝出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	陶器 刷毛目平鉢	口径：(30.6) 底径：－ 残高：4.35 重量：50.7g 残存：小片	胎土：やや緻密 砂粒 焼成：良好 色調：外面 7.5Y4/2灰オリーブ 内面 10YR6/4にぶい黄橙 せいけい：轆轤成形 施釉：内外面 透明釉 白泥塗 布→渦巻き状の白泥剥ぎ 産地：肥前唐津 年代：近世前半～中頃	SD4 P1
2	陶器 捏鉢 転用陶片	口径：－ 底径：(－) 残高：6.45 幅：11.7 重量：187.2g 残存：小片	胎土：やや粗 砂礫 白色粒 焼成：良好 色調：内 外面 7.5YR6/6橙 せいけい：粘土紐巻き上げ→ 轆轤成形 産地：常滑 年代：片口鉢Ⅱ類9型式15 世紀中頃	SD4 覆土一括

No. は第30図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第29図中の遺物番号に対応する

第2項 土坑

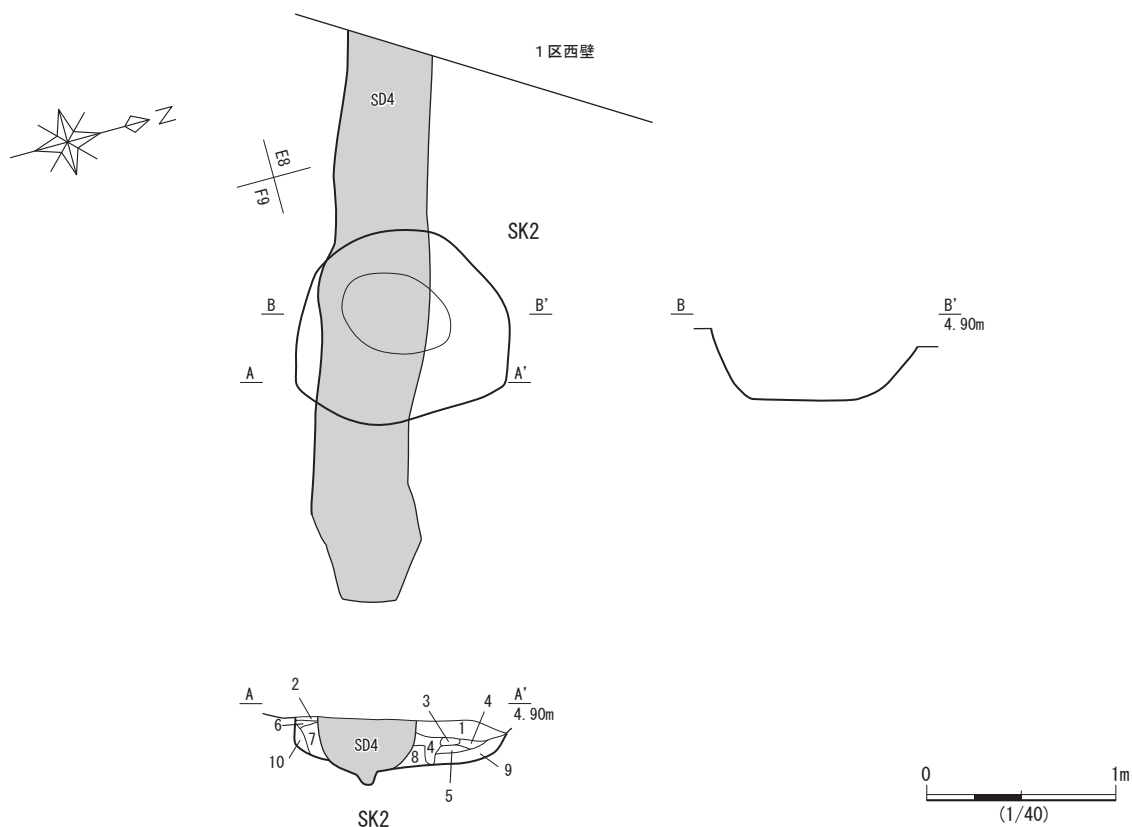
土坑は、調査区全域に点在する分布状況が窺われる。その多くは楕円形を呈するが、長方形を呈する土坑も1基発見された。

第2号土坑(第11・25・31図 図版1-3)

1区北部のE・F9グリッドで検出した。第4号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。平面形状は、不整楕円形を呈する。遺構確認面における残存規模は、長軸1.16m、短軸1.09m、深さ27.0~38.5cmを測る。底面は約2.0cmの凹凸を有するが、概ね平坦である。断面形状は、碗形もしくは逆台形を呈する。

出土遺物は、現地調査時は第29図中のP2・P3を本遺構出土遺物としていたが、第4号溝出土遺物と判断した。

遺構の時期は、第4号溝と同時期と推測される。



第2号土坑

第1層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや弱い。褐色土を少量含む。色調やや明るい。
第2層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強い。橙色粒子・炭化物を極少量含む。
第3層：灰黄褐色土(10YR5/2)	しまり強く粘性有り。灰黄褐色土ブロック。やや酸化受け、色調やや明るい。堆積緻密。
第4層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや強い。褐色土を中量含む、色調明るい。堆積やや緻密。
第5層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや弱い。黄褐色土を極少量含む。
第6層：灰黄褐色土(10YR4/2)	黄褐色土ブロック。色調明るい。堆積緻密。
第7層：暗褐色土(10YR3/3)	焼土・黄褐色土を極少量含む。堆積やや粗い。
第8層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)	第V層に類似する。しまり強く粘性有り。やや酸化受け、色調やや明るい。堆積緻密。
第9層：灰黄褐色土(10YR4/2)	第8層に似るが第8層に比べしまりに欠け色調やや暗い。堆積やや緻密。
第10層：灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性やや有り。黄褐色土を中量含む。堆積緻密。

第31図 第2号土坑(1/40)

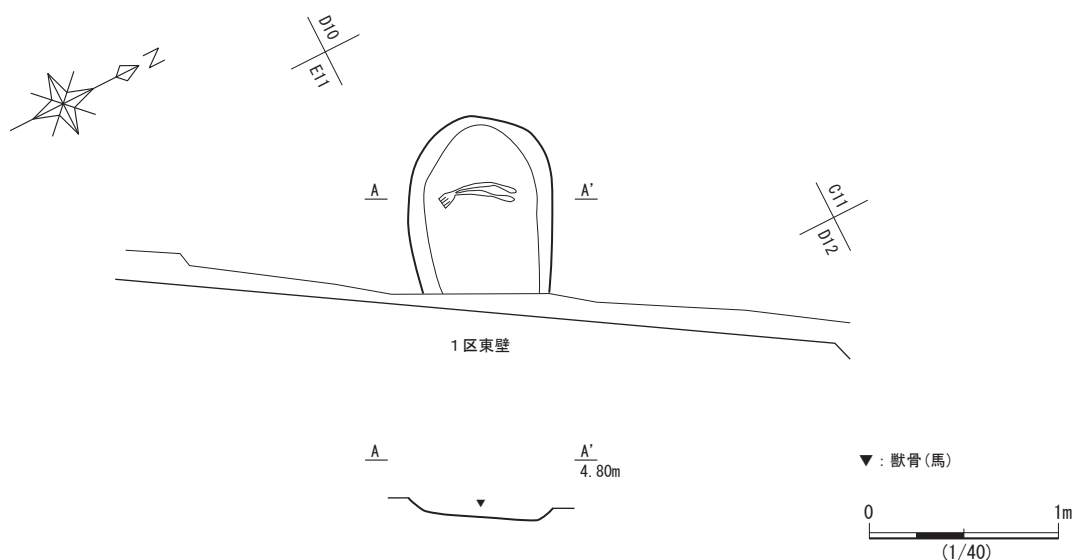
第3号土坑(第11・25・32図 図版1-2・8)

1区北部のD・E11グリッドで検出した。遺構の東側は調査区外となる。平面形状は、長楕円形を呈すると推測される。遺構の残存状況は不良であり、遺構の下部から底面の確認に止まった。遺構確認面における残存規模は、長軸0.94m、短軸0.76m、深さ4.1～7.5cmを測る。底面の標高は約4.50mを測り概ね平坦であるが、北西～北側が約3.5cm程度高い。断面形状は、不詳である。覆土は灰黄褐色土であり、第2号・3号溝の覆土に類似する。

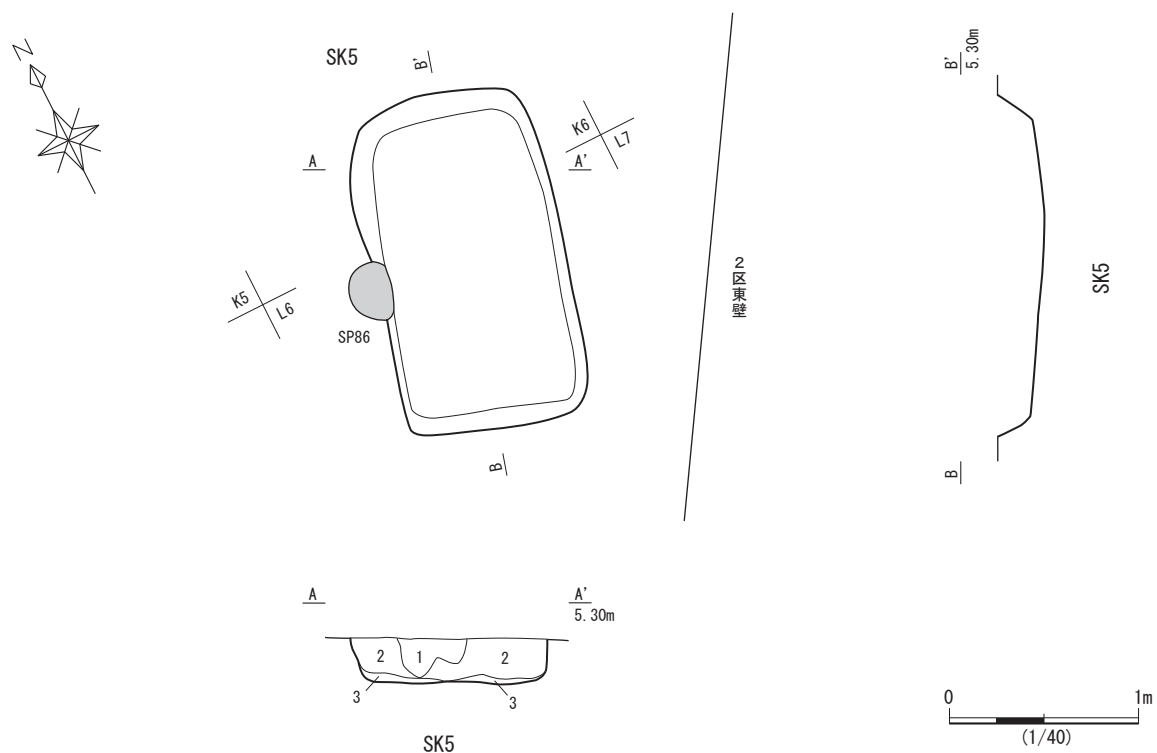
出土遺物は馬の下顎の部位にあたる。風化が激しく取り上げることが困難であったが、13点1.4gを取り上げることができた。

当該地は浜之郷鶴嶺八幡宮から円蔵神明神社の横参道へ至る辻にあたり、辻の南側隣接地で馬骨を有する土坑を確認した。

遺構の時期は、第2号・3号溝に付帯する可能性が高く、同時期と推測される。



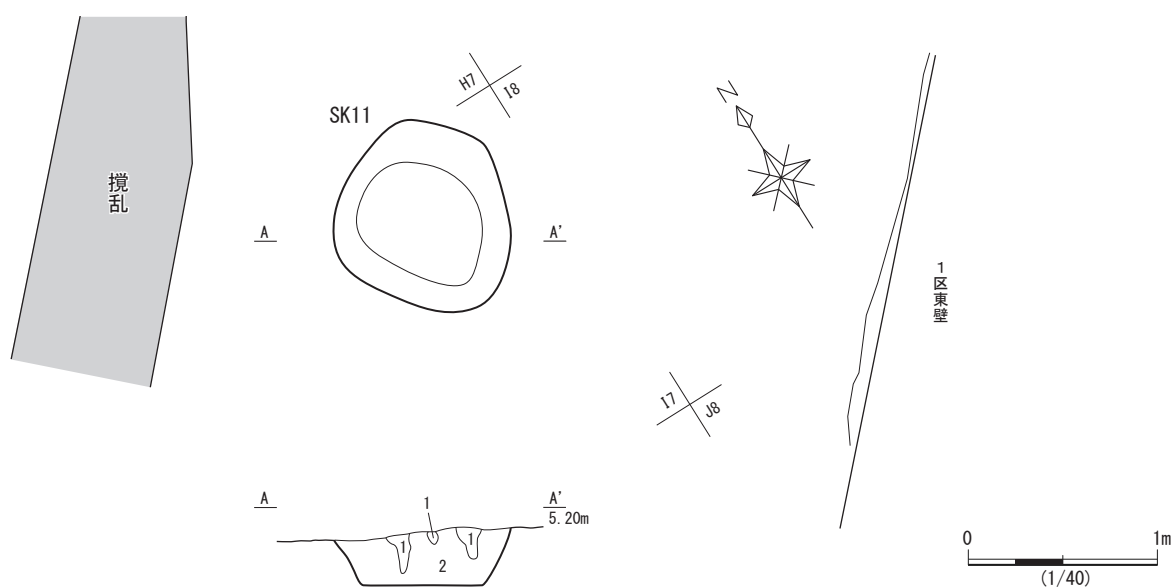
第32図 第3号土坑(1/40)



第5号土坑

- 第1層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。褐色土を少量、橙色粒子・酸化鉄分を極少量含む。
 第2層：褐灰色土(10YR4/1) 粘性やや有り。橙色粒子・褐鉄鉱(高師小僧)を少量含む。堆積やや緻密。
 第3層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強く粘性有り。堆積緻密。

第33図 第5号土坑(1/40)



第11号土坑

- 第1層：褐灰色土(10YR4/1) しまり弱い。灰黄褐色土を少量含む。色調やや明るい。堆積粗い。根の影響を受けた可能性がある。
 第2層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強い。黄褐色土を多量に含む。部分的に褐灰色土ブロックを極少量含む。堆積緻密。

第34図 第11号土坑(1/40)

第5号土坑(第11・25・33図 図版2-2)

2区北部のK・L 6 グリッドで検出した。第86号ピットと重複し、新旧関係は本遺構が古い。平面形状は、隅丸長方形を呈する。遺構確認面における残存規模は、長軸1.81m、短軸1.01～1.06m、深さ14.5～25.0cmを測る。底面は概ね平坦であるが、中央部が約8.0cm窪む。断面形状は、箱形を呈する。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世～近世宝永期前と推測される。

第11号土坑(第11・25・34図 図版1-6・7)

1区南部のH・I 7 グリッドで検出した。第1号竪穴址と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。平面形状は、不整四辺形を呈する。遺構確認面における残存規模は、長軸0.95m、短軸0.95m、深さ15.5～27.6cmを測る。底面は概ね平坦である。断面形状は、逆台形を呈する。

遺物は出土していない。

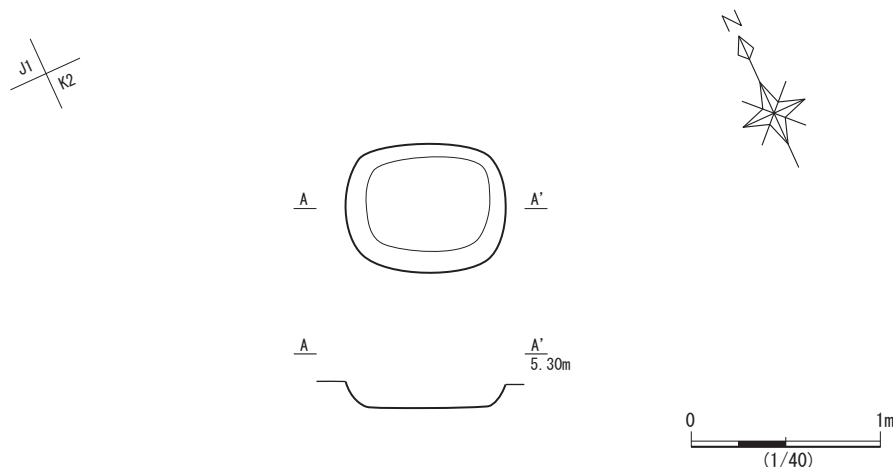
遺構の時期は、覆土の特徴から中世～近世宝永期前と推測される。

第12号土坑(第11・25・35図 図版2-5)

2区車返し部のK 2 グリッドで検出した。平面形状は、隅丸方形を呈する。遺構確認面における残存規模は、長軸0.85m、短軸0.68m、深さ10.5～13.2cmを測る。底面は概ね平坦であるが、短軸方向は南側へ約5.0cm下降傾斜する。断面形状は、箱形もしくは逆台形を呈する。覆土は灰黄褐色土である。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世～近世宝永期前と推測される。



第35図 第12号土坑 (1/40)

第3項 ピット

1区中央～南側で6穴、2区車返し部で5穴、2区東半部で5穴を検出した。中近世のピットは遺構密度が非常に低いことが窺われる(第36～38図)。なお1区のピット群は、南西―北東方向に並ぶことが窺われる。各ピットの時期は、覆土の特徴から中近世と推測される。

第11号ピット(第11・25・36図 表16 図版1－1・3～5)

1区F9グリッドで検出した。残存規模は、表16のとおりである。

遺物は土師器甕1片2.4g、土製品1点1.4gが出土したが、図示には至らなかった。

第25号ピット(第11・25・36図 表16 図版1－1・4～6)

1区G9グリッドで検出した。残存規模は、表16のとおりである。

遺物は出土していない。

第30号ピット(第11・25・36図 表16 図版1－4～6)

1区H8グリッドで検出した。第15号土坑と重複し、第15号土坑の掘り込みにより遺構の西半部は消失していた。残存規模は、表16のとおりである。

遺物は出土していない。

第31号ピット(第11・25・36図 表16 図版1－4～7)

1区H7・8グリッドで検出した。第15号土坑と重複し、第15号土坑の掘り込みにより遺構の北側は消失していた。残存規模は、表16のとおりである。

遺物は出土していない。

第41号ピット(第11・25・36図 表16 図版1－6・7)

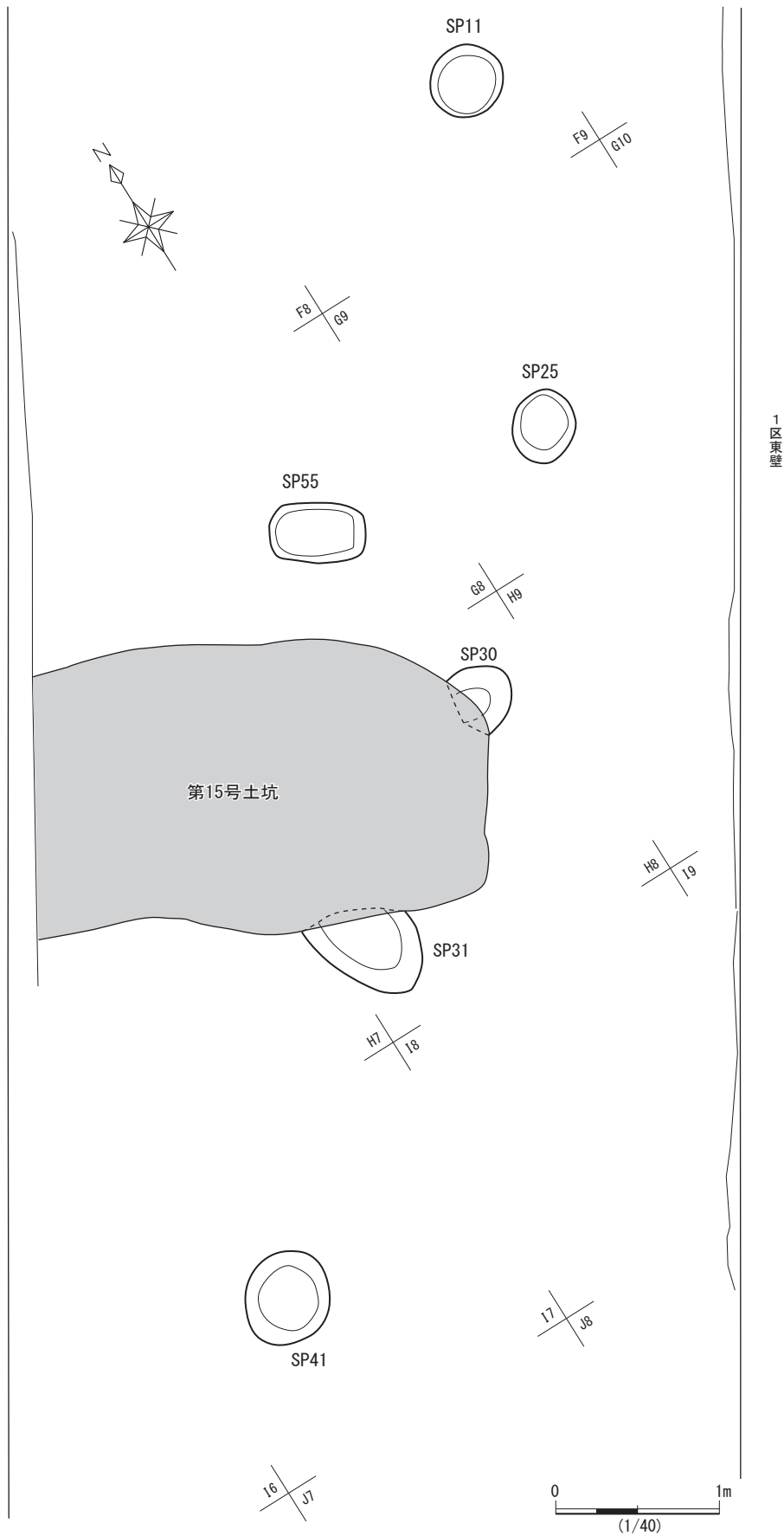
1区I7グリッドで検出した。残存規模は、表16のとおりである。

遺物は出土していない。

第55号ピット(第11・25・36図 表16)

1区G8グリッドで検出した。残存規模は、表16のとおりである。

遺物は出土していない。



第36図 1区中近世ピット(1/40)

表16 1区中近世ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP11	楕円形	椀形	45.0	43.0	25.8	土師器甕 1 片 2.4g、土製品 1 点 1.4g
SP25	楕円形	椀形	45.0	39.0	11.2	—
SP30	楕円形	U字形	(38.0)	42.0	20.2	—
SP31	(不整楕円形)	椀形	(69.0)	(58.0)	15.6	—
SP41	楕円形	椀形	60.0	53.0	8.0	—
SP55	隅丸方形	箱形	59.0	37.0	21.0	—

番号は第36図中の遺構番号に対応する

第56号ピット(第11・25・37図 表17 図版2-5・6)

2区車返し部J 2・3グリッドで検出した。第1号井戸と重複し、第1号井戸の掘り込みにより遺構の南側は消失していた。残存規模は、表17のとおりである。

遺物は出土していない。

第58号ピット(第11・25・37図 表17 図版2-5・6)

2区車返し部K 2グリッドで検出した。残存規模は、表17のとおりである。

遺物は土師器甕 1 片2.6gが出土したが、図示には至らなかった。

第59号ピット(第11・25・37図 表17 図版2-6)

2区車返し部K 1・2グリッドで検出した。残存規模は、表17のとおりである。

遺物は土師器坏 1 片1.3g、甕 2 片5.4gが出土したが、図示には至らなかった。

第79号ピット(第11・25・37図 表17 図版2-5・6)

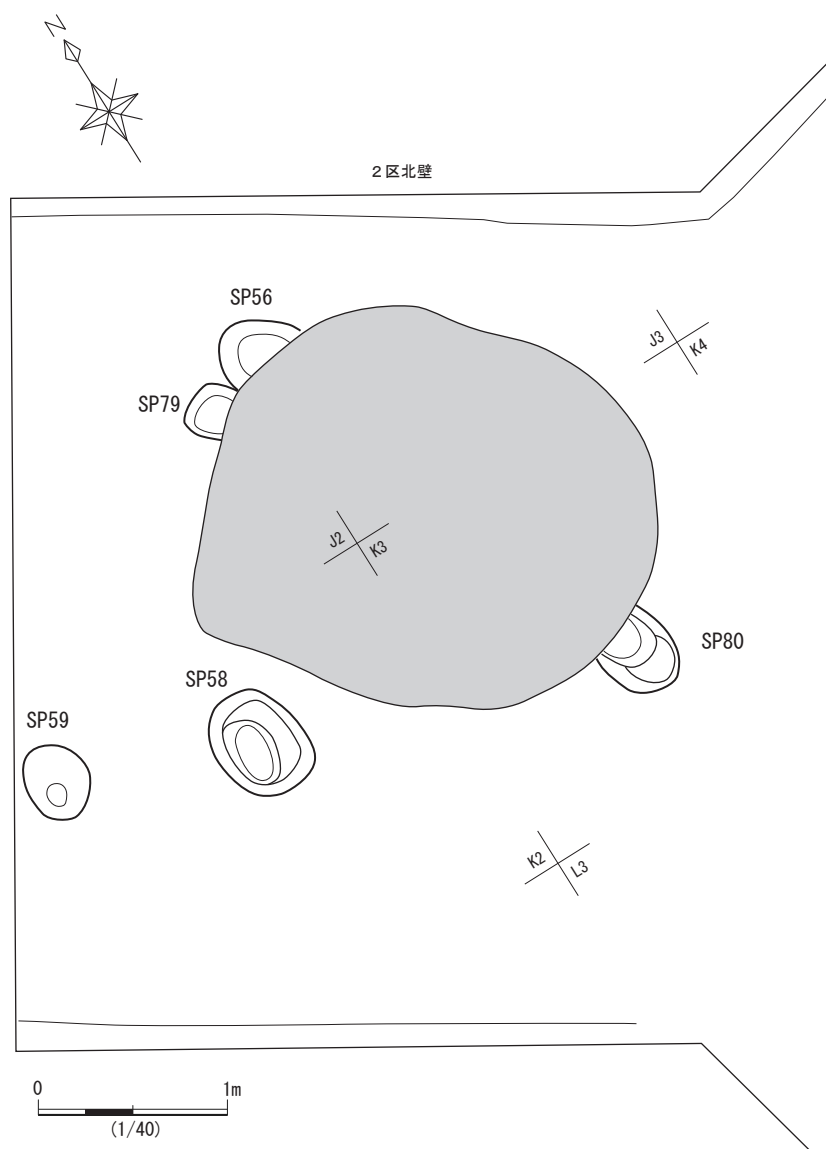
2区車返し部J 2グリッドで検出した。第1号井戸と重複し、第1号井戸の掘り込みにより遺構の東側は消失していた。残存規模は、表17のとおりである。

遺物は礫 8 点3,856.0gが出土したが、図示には至らなかった。

第80号ピット(第11・25・37図 表17 図版2-5)

2区車返し部K 3グリッドで検出した。第1号井戸と重複し、第1号井戸の掘り込みにより遺構の北側は消失していた。残存規模は、表17のとおりである。

遺物は出土していない。



第37図 2区車返し部中近世ピット(1/40)

表17 2区車返し部中近世ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP56	(不整楕円形)	(楕円形)	(34.0)	(44.0)	—	—
SP58	隅丸方形	U字形	60.0	47.0	32.3	土師器甕 1 片 2.6g
SP59	楕円形	U字形	42.0	34.0	33.5	土師器坏 1 片 1.3g、甕 2 片 5.4g
SP79	不整方形	U字形	(24.0)	29.0	21.5	礫 8 点 3,856.0g
SP80	楕円形	U字形	(41.0)	38.0	43.3	—

番号は第37図中の遺構番号に対応する

第69号ピット(第11・25・38図 表18 図版2－1・2)

2区東半部M5・6グリッドで検出した。残存規模は、表18のとおりである。
遺物は出土していない。

第70号ピット(第11・25・38図 表18 図版2－1)

2区東半部M5・6グリッドで検出した。残存規模は、表18のとおりである。
遺物は灰釉陶器瓶類1片5.6gが出土したが、図示には至らなかった。

第71号ピット(第11・25・38図 表18 図版2－1)

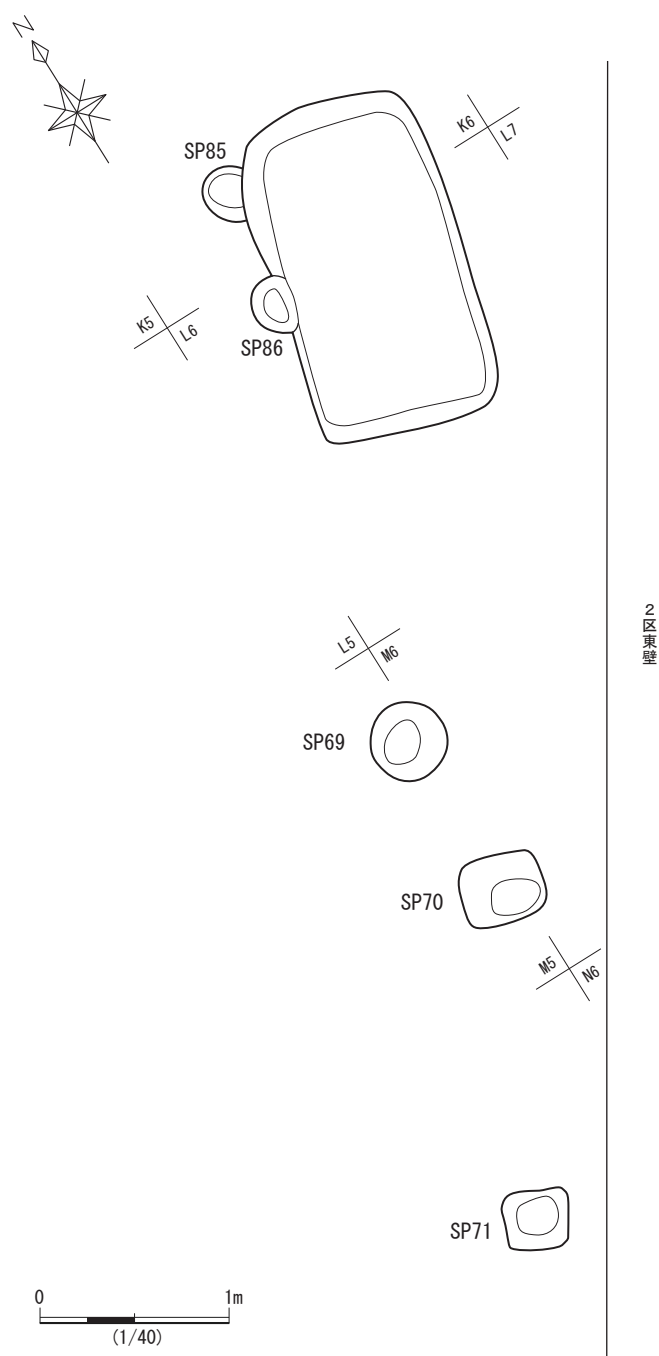
2区東半部N5グリッドで検出した。残存規模は、表18のとおりである。
遺物は出土していない。

第85号ピット(第11・25・38図 表18 図版2－1～3)

2区東半部K6グリッドで検出した。第5号土坑と重複し、第5号土坑の掘り込みにより遺構の東側は消失していた。残存規模は、表18のとおりである。
遺物は出土していない。

第86号ピット(第11・25・38図 表18 図版2－1～3)

2区東半部L6グリッドで検出した。第5号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。残存規模は、表18のとおりである。
遺物は出土していない。



第38図 2区東半部中近世ピット(1/40)

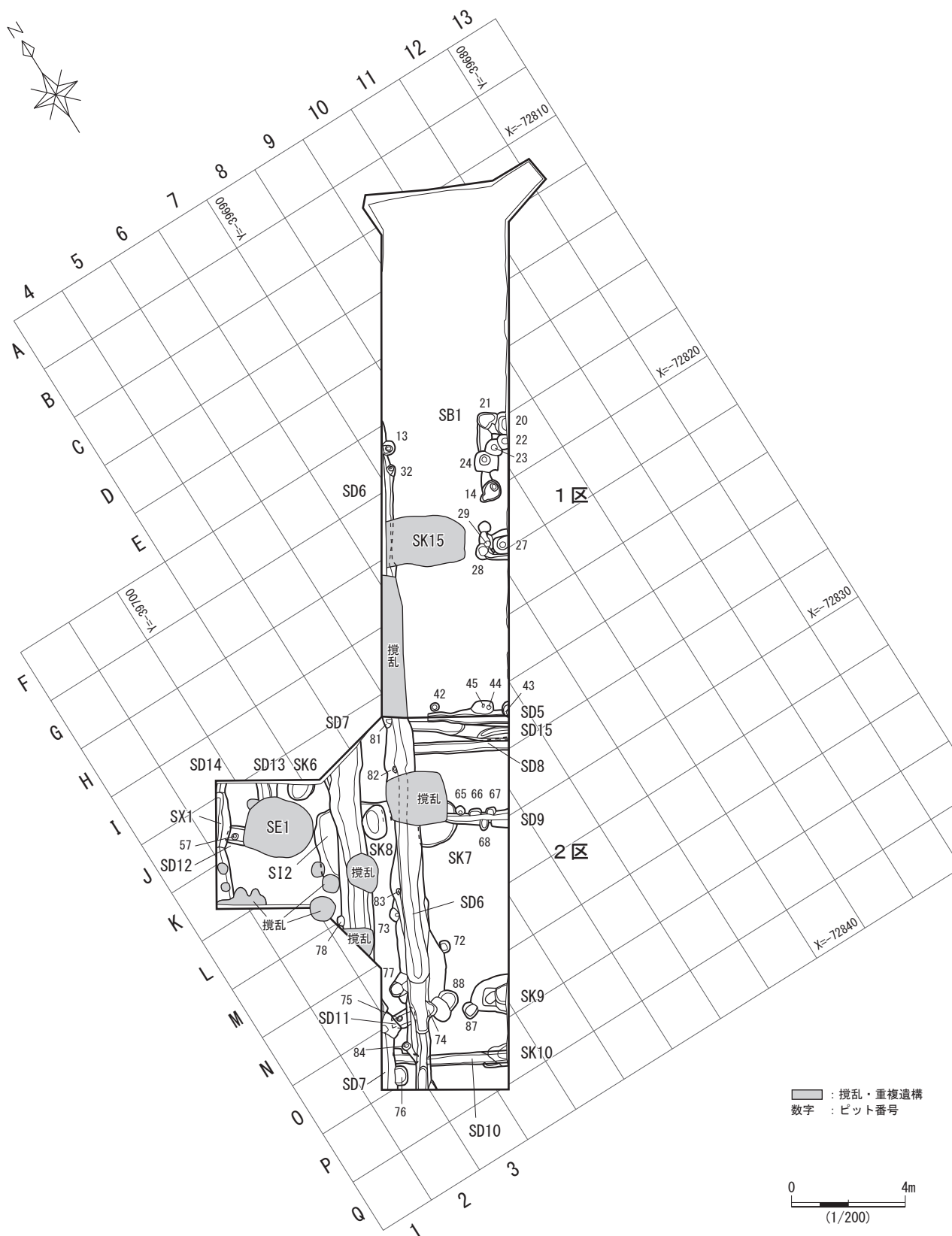
表18 2区東半部中近世ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP69	楕円形	U字形	42.0	41.0	11.7	—
SP70	隅丸方形	U字形	45.0	37.0	31.3	灰釉陶器瓶類 1片 5.6g
SP71	方形	U字形	36.0	32.0	29.5	—
SP85	(楕円形)	U字形	(26.0)	29.0	5.5	—
SP86	楕円形	U字形	32.0	(23.0)	18.5	—

番号は第38図中の遺構番号に対応する

第4節 中世

延長方向が南南西―北北東方向または直交する溝群が発見された。



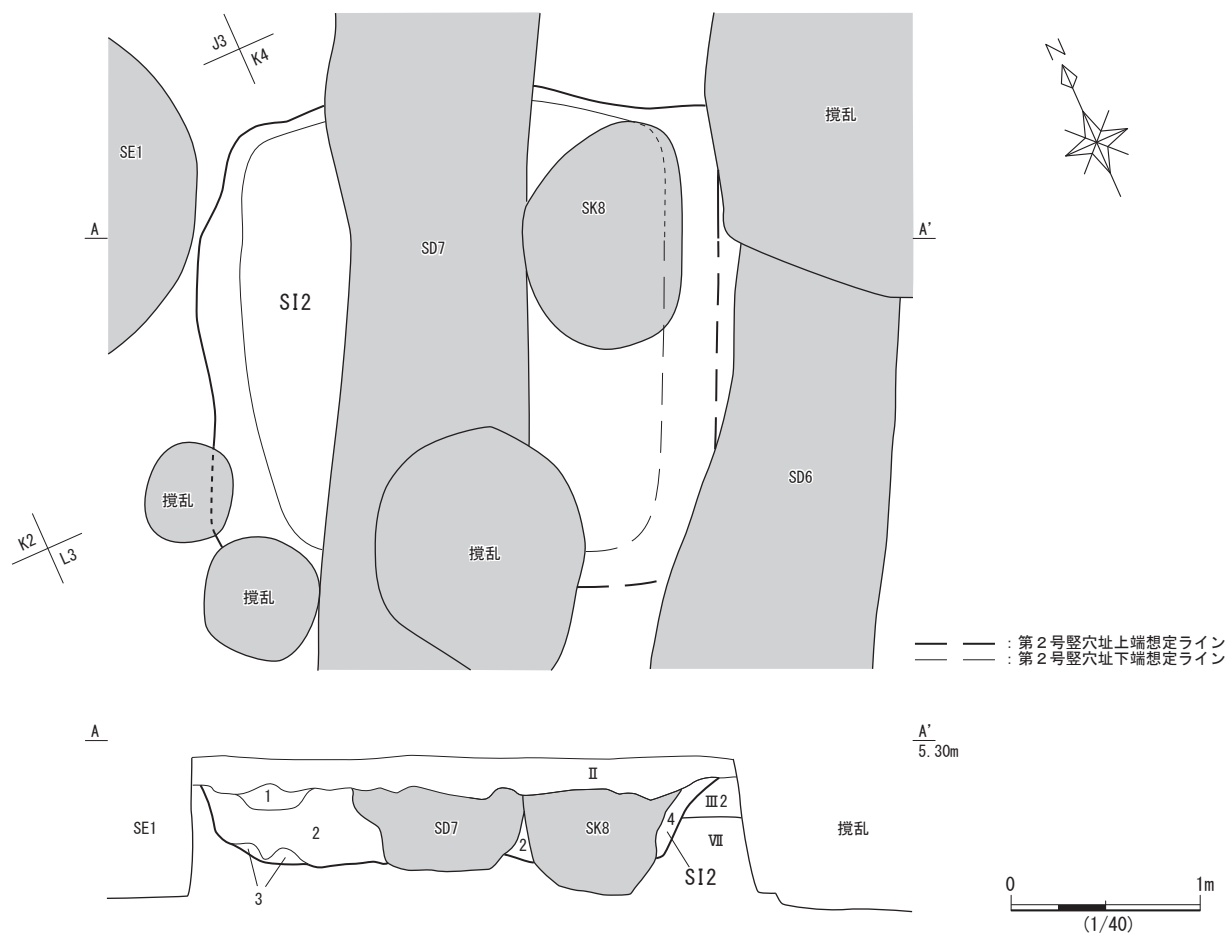
第1項 竪穴址

第2号竪穴址(第11・39・40図 図版2-3・5)

2区車返し部のK・L 3～5グリッドで検出した。なお東辺の一部分や南東角側は、確認できなかった。第6号・7号溝、第8号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が古い。平面形状は、隅丸長方形を呈すると推測される。座標軸と西辺～北辺との偏差は、概ねN-23.0°-E東偏を指す。遺構確認面における想定規模は、長軸2.65～2.75m、短軸2.50～2.60m、深さ42.8～52.0cmを測る。底面の標高は北壁側を除いて約4.71mを測り、10.0cm前後の凹凸を有する。断面形状は、偏平な箱形で強く外傾すると推測される。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世と推測される。



第2号竪穴址

- | | |
|--------------------|------------------------------------|
| 第1層：褐灰色土(10YR5/1) | しまり強い。灰白色パミスを極少量含む。色調やや明るい。 |
| 第2層：褐灰色土(10YR4/1) | しまり強い。黄褐色土を少量、炭化物・焼土を極少量含む。堆積やや緻密。 |
| 第3層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまりやや弱い。黄褐色土ブロックやや多量に含む。色調明るい。 |
| 第4層：褐灰色土(10YR4/1) | しまりやや弱い。橙色粒子を極少量含む。 |

第40図 第2号竪穴址(1/40)

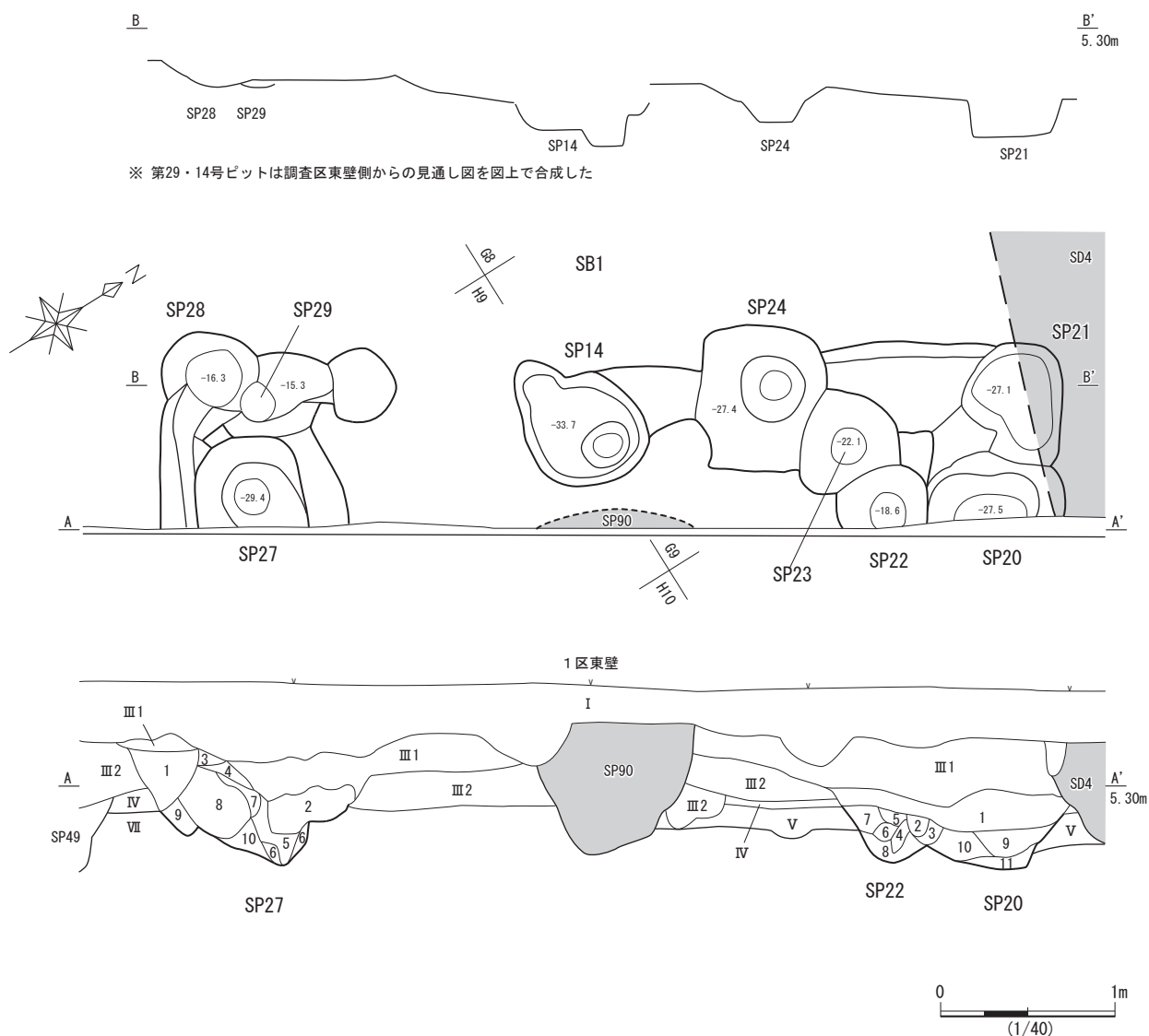
第2項 掘立柱建物

第1号掘立柱建物(第11・39・41図 表19 図版1-1・3~7)

1区北部のF~I 8~10グリッドで検出した。遺構の西辺から南北各辺の一部分を検出し、確認されたピットは9穴を数える。但し建物東側の大部分は調査区外となり、棟方向は不詳である。第4号溝および第90号ピットと重複し、新旧関係は本遺構が古い。座標軸と西辺との偏差は、概ねN-32.7°-E東偏を指す。遺構確認面における残存規模は、長軸5.22m、短軸1.00~1.17mを測る。西辺は3間の規模を有して、南側から第28・29-14-24-21号ピットからなる配列が想定される。また各芯芯間の距離は、2.25m-0.96m-1.46mを測る。各ピットの残存規模は、表19のとおりである。第14~21号ピットの間には溝状の掘り方を有する。

遺物は、第14号ピットから相模型土師器甕1片2.0gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世と推測される。



第41図 第1号掘立柱建物(1/40)

第22号ピット

第1層：褐灰色土(10YR5/1)	酸化粒子を極少量含む。
第2層：褐灰色土(10YR5/1)	褐色味やや強い。堆積やや緻密。
第3層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強い。色調やや明るい。
第4層：黒褐色土(10YR3/1)	しまり弱い。根の腐植によりやや黒色味を帯びる。
第5層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強い。橙色粒子を極少量含む。
第6層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりやや強い。褐灰色土を極少量含む。
第7層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや強い。橙色粒子を極少量含む。堆積やや粗い。
第8層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり強い。褐灰色土を極少量含む。色調明るい。堆積緻密。

第20号ピット

第9層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや強い。黄褐色土主体。色調明るい。
第10層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり強い。褐灰色土を中量含む。
第11層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強い。色調灰色味やや強い。堆積やや粗い。

第27号ピット

第1層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。橙色粒子を多量に、黄褐色土を極少量含む。色調やや明るい。
第2層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや強い。黄褐色土を斑に多量に、橙色粒子を極少量含む。
第3層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。橙色粒子・褐色土を極少量含む。
第4層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや強い。褐色土を少量含む。
第5層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや弱い。第2層の褐灰色土を少量、橙色粒子を極少量含む。堆積やや粗い。
第6層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりやや弱い。第2層と第5層の褐灰色土を少量含む。色調明るい。
第7層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや弱い。褐色土を中量含む。
第8層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。橙色粒子・焼土を極少量含む。
第9層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり強い。黄褐色土・橙色粒子を極少量含む。堆積やや粗い。
第10層：褐灰色土(10YR4/1)	粘性やや有り。褐灰色土を極少量含む。堆積緻密。

表19 第1号掘立柱建物内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP14	不整楕円形	逆台形2段	86.0	66.0	33.7	土師器甕1片 2.0g
SP20	不整楕円形	逆台形	(80.0)	(41.0)	27.5	—
SP21	不整楕円形	箱形	(70.0)	58.0	27.1	—
SP22	楕円形	U字形	(36.0)	52.0	18.6	—
SP23	不整楕円形	U字形	(60.0)	(58.0)	22.1	—
SP24	不整方形	逆台形	84.0	76.0	27.4	—
SP27	不整方形	逆台形	(57.0)	88.0	29.4	—
SP28	楕円形	椀形	57.0	45.0	16.3	—
SP29	楕円形	椀形	(63.0)	49.0	15.3	—

番号は第41図中の遺構番号に対応する

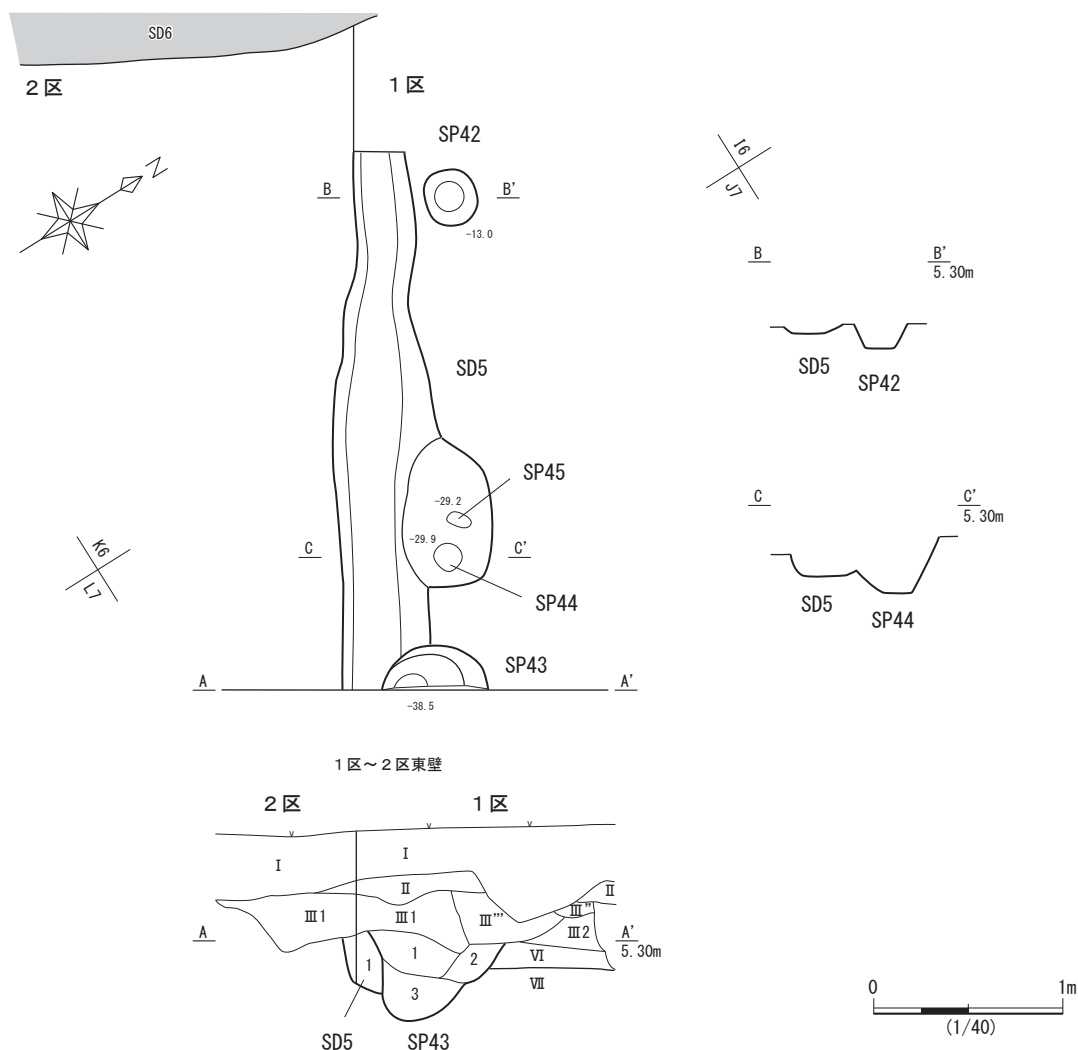
第3項 溝

第5号溝(第11・39・42図 表20 図版1-6・7)

1区と2区の境界部にあたるJ・K6・7グリッドで検出した。延長方向は東南東-西北西方向に延び、調査区を横断すると推測される。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-59.0°-W西偏を指す。第15号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い可能性がある。また第42号～45号ピットは、本遺構に付帯する遺構であると考えられる。各ピットの残存規模は、表20のとおりである。遺構確認面における残存規模は、延長約2.85m、幅員0.28～0.57m、深さ4.0～19.6cmを測る。底面の標高は中央部で4.93mを測り、2.0cm前後の起伏を有するが概ね平坦である。

遺物は第43号ピットから土師器坏3片8.7g、甕1片3.7gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世と推測される。



第5号溝

第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや弱く粘性やや有り。炭化物・酸化粒子を極少量、下部に黄褐色土を極少量含む。

第43号ピット

第1層：褐灰色土(10YR5/1) しまり強い。橙色粒子を少量、焼土を極少量含む。

第2層：褐灰色土(10YR4/1) 焼土・黄褐色土を極少量含む。色調やや明るい。

第3層：褐灰色土(10YR4/1) しまりやや弱い。黄褐色土を少量、炭化物を極少量含む。

第42図 第5号溝(1/40)

表20 第5号溝内ピット計測表

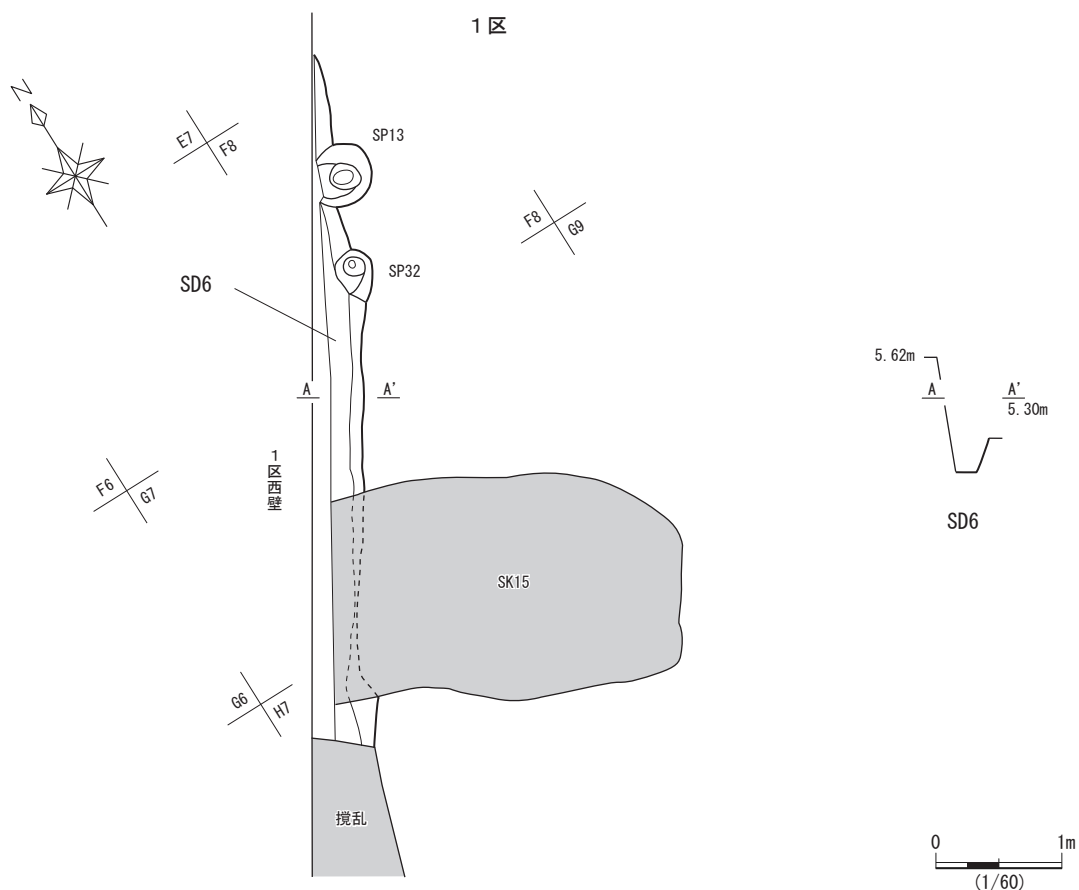
番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP42	楕円形	逆台形	30.0	27.0	13.0	—
SP43	楕円形	U字形	(57.0)	(24.0)	38.5	土師器坏3片 8.7g、甕1片 3.7g
SP44	長楕円形	逆台形	80.0	(48.0)	29.9	—
SP45	長楕円形	V字形	80.0	(48.0)	29.2	—

番号は第42図中の遺構番号に対応する

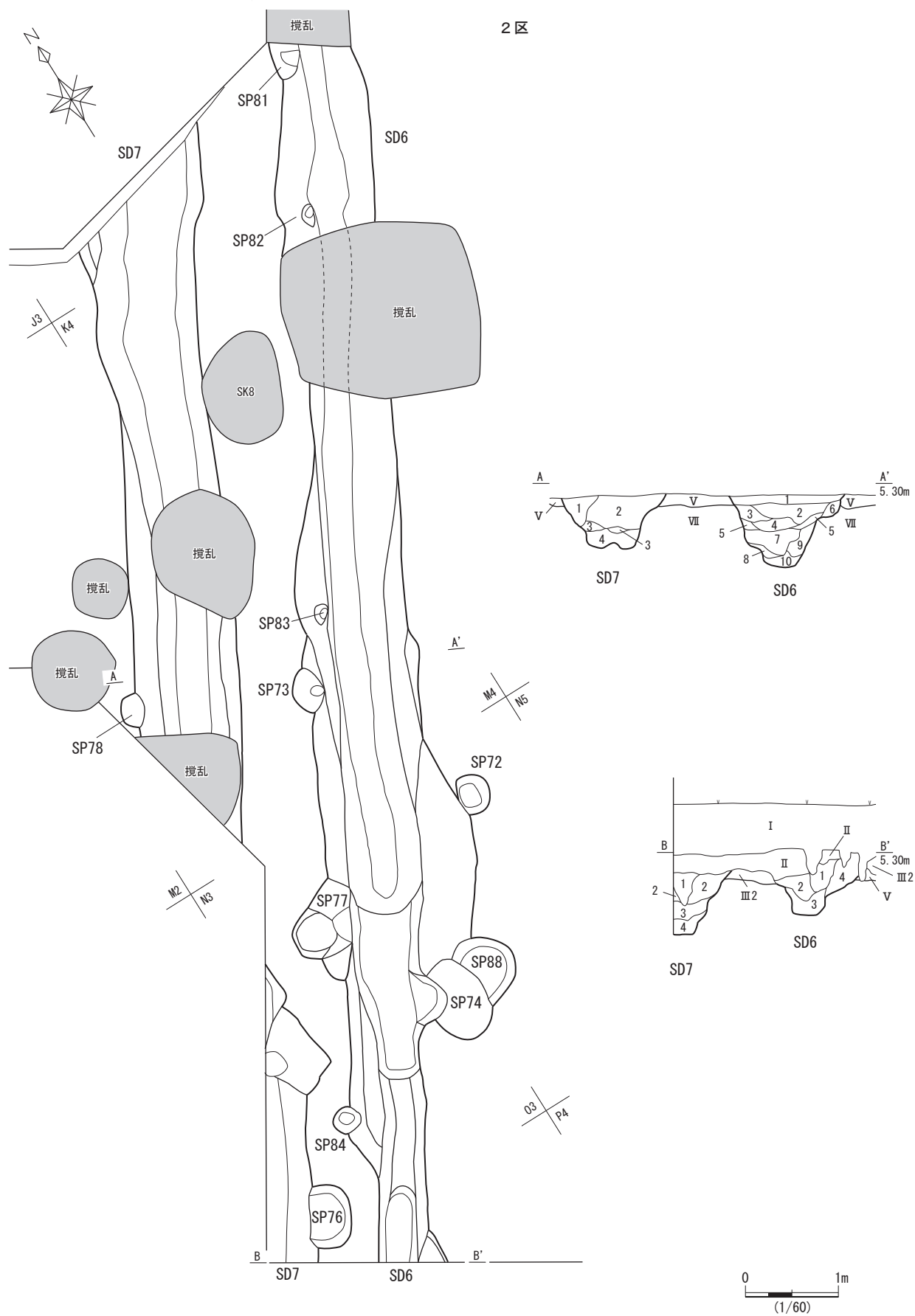
第6号溝(第11・39・43～45図 表21・22 図版1－1・4、図版2－1～4、図版4－2－1)

調査区西壁沿いの1区中央部から2区に至るE～P2～8グリッドで検出した(第39図)。延長方向は南南西－北北東方向に伸び、調査区を縦断する。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-28.5°-E東偏を指す。本遺構と交差する各溝との新旧関係は、本遺構が最も新しい。また第2号竪穴址や第7号土坑より新しい。さらに重複するピット13穴は本遺構に付帯する遺構であると考えられ、各ピットの残存規模は表21のとおりである。遺構確認面における残存規模は、延長約23.50m、幅員0.53～1.63m、深さ32.0～69.8cmを測る。底面の標高は2区北側で約4.45m、2区南側で約4.76mを測り、少なくとも4段の段差を有する。

遺構の時期は、出土遺物から中世と推測される。



第43図 1区第6号溝(1/60)



第44図 2区第6号・7号溝(1/60)

第6号溝

A-A'

第1層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。やや粉質。褐色土やや多量に、灰白色パミスを極少量含む。
第2層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。灰白色パミス少量、焼土粒子を極少量含む。堆積やや緻密。
第3層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。黄褐色土を極少量含む。色調やや明るい。堆積緻密。
第4層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや弱い。炭化物・黄褐色土・灰白色パミスを極少量含む。
第5層：褐灰色土(10YR5/1)	しまりやや弱い。黄褐色土を斑に極少量含む。
第6層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。灰白色パミス少量、堆積やや緻密。
第7層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり弱い。黄褐色土ブロック(直径1.0cm)やや多量に含む。色調明るい。
第8層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強い。黄褐色土やや斑に少量、酸化粒子を極少量含む。
第9層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや弱い。酸化により色調黒色味やや帯びる。堆積緻密。
第10層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強く粘性やや有り。酸化により色調灰色味やや帯びる。

B-B'

第1層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。橙色粒子を少量含む。堆積やや緻密。
第2層：褐灰色土(10YR5/1)	第1層より色調明るい。堆積やや粗い。
第3層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりやや強い。褐色土を少量含む。堆積やや緻密。
第4層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強く粘性やや有り。橙色粒子、褐色土を斑に少量含む。

第7号溝

A-A'

第1層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。酸化鉄分やや斑に、灰白色パミスを極少量含む。
第2層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり強い。炭化物・黄褐色土を極少量含む。
第3層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりやや弱い。黄褐色土ブロックをやや多量に含む。色調明るい。
第4層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強く粘性やや有り。炭化物を極少量含む。堆積やや緻密。

B-B'

第1層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり弱く脆い。堆積粗い。
第2層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり粘性やや強い。
第3層：褐灰色土(10YR5/1)	しまり粘性やや強い。褐色土を少量含む。堆積やや緻密。
第4層：黒褐色土(10YR3/1)	粘性強い。堆積緻密。

表21 第6号溝内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP13	楕円形	U字形	48.0	(39.0)	23.7	土師器甕 1 片 13.6g
SP32	不整楕円形	U字形	(44.0)	(30.0)	24.8	—
SP72	楕円形	逆台形	43.0	(35.0)	22.2	—
SP73	楕円形	V字形	49.5	(34.0)	27.0	—
SP74	不整楕円形	逆台形	(100.0)	(89.0)	44.5	—
SP77	楕円形	箱形	(65.0)	(110.0)	24.9	—
SP81	不整楕円形	逆台形	(42.0)	(33.0)	48.5	—
SP82	楕円形	U字形	26.5	(13.0)	28.6	—
SP83	楕円形	U字形	22.0	(14.0)	31.5	—
SP84	楕円形	U字形	30.0	(27.0)	—	—
SP88	不整楕円形	箱形	(63.0)	70.0	14.0	—

番号は第43・44図中の遺構番号に対応する

遺物は、土師器壺類 1 片14.0g、相模型土師器坏13片27.0g、甕31片111.3g、須恵器甕 2 片16.6g、蓋 1 片10.4g、鉢 1 片23.6g、灰釉陶器碗 1 片1.0g、陶器甕 3 片115.2g、碗 1 片3.2g、細片 1 片7.0g、磁器碗 1 片3.2g、鉄製品 1 点10.4g、礫 4 点717.4gが出土した。陶器には中世瀬戸・美濃系の灰釉陶器や近世後半の信楽系陶器が含まれる。磁器は景德鎮窯系白磁口禿碗である可能性がある。須恵器蓋は環状摘を有し胎土に白色骨針状物質を含み、南比企窯系の所産と推測される。土師器坏にはロクロ土師器の底部片が含まれる。土師器壺類は頸部～胴部片である。外面に縦ミガキを施し、弥生時代末～古墳時代前期頃と推測される。このうち鉄製品 1 点を図示した。

1 は角釘であり、1 区から出土した。先端部を欠損する。



第45図 第6号溝出土遺物(1/2)

表22 第6号溝出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	鉄製品 角釘	長さ：(6.15) 幅：1.0 厚さ：0.9 重量：10.4g 残存：先端部欠損	—	SD6 一括

No. は第45図の遺物番号に対応する

第7号溝(第11・39・44図 表23 図版2-1～4)

2区車返し部東側から調査区南西角にあたるJ～O2～5グリッドで検出した。延長方向は南南西―北北西方向に延び、2区中央部を縦断する。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-29.0°-E東偏を指す。第8号土坑や第2号堅穴址と重複し、新旧関係は第2号堅穴址より新しく、第8号土坑より古い。さらに重複するピット2穴は本遺構に付帯する遺構であると考えられ、各ピットの残存規模は表23のとおりである。遺構確認面における残存規模は、延長約12.25m、幅員0.95～1.25m、深さ41.8～54.5cmを測る。底面の標高は中央部で4.59mを測り、4.0cm前後の起伏を有するが概ね平坦である。但し南端部の標高は4.42mを測り北半部に比べ18.0cm前後深く、段差を有することが確認された。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、第6号溝とセットで地割りを画したことが想定され、第6号溝と同時期と考えられる。

表23 第7号溝内ピット計測表

番号	平面 形状	断面 形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP76	隅丸方形	箱形	69.0	(45.0)	14.4	—
SP78	楕円形	椀形	37.0	(25.0)	15.2	—

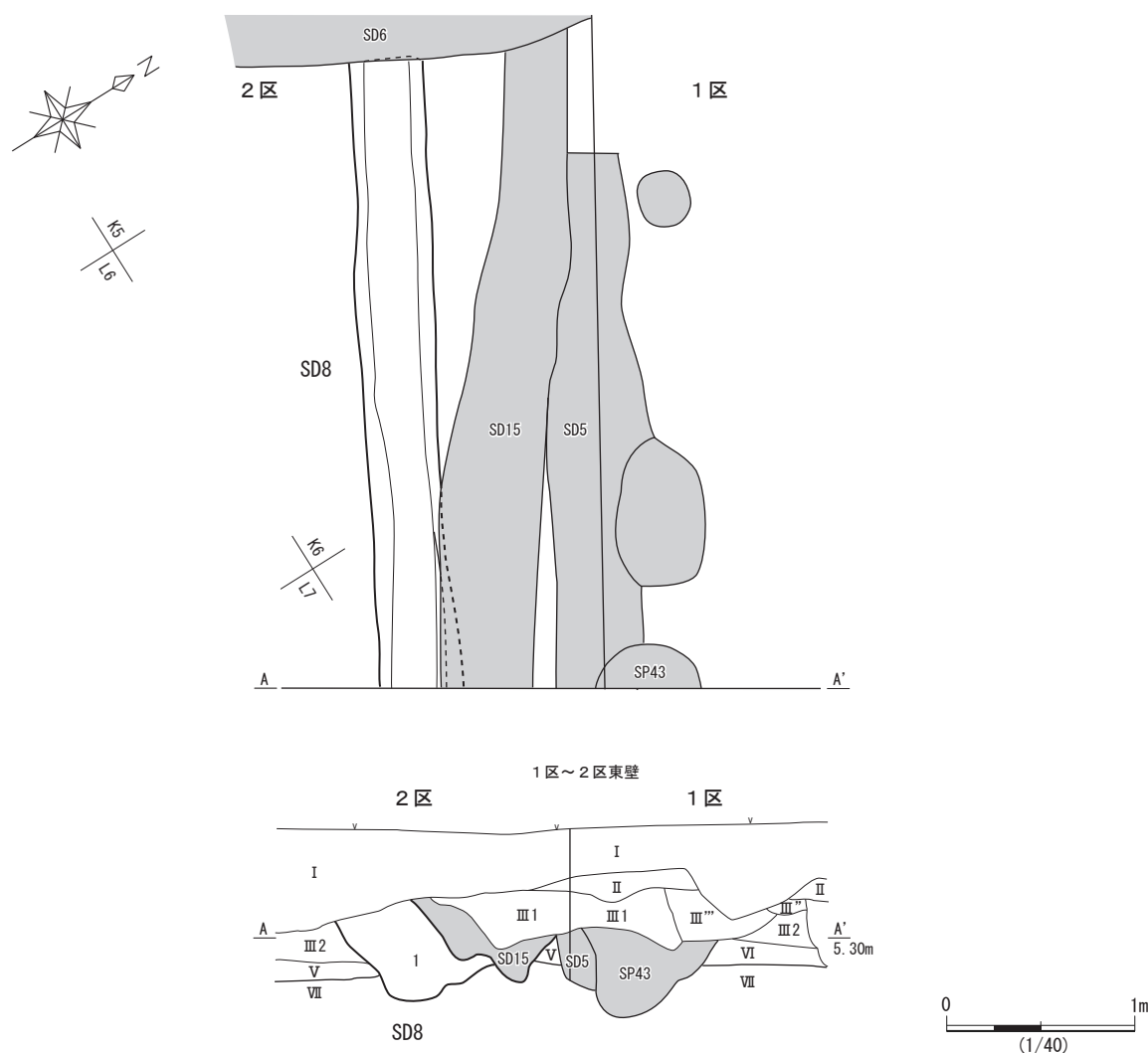
番号は第44図中の遺構番号に対応する

第8号溝(第11・39・46図 図版2-1・2)

1区と2区の境界部にあたるK・L5～7グリッドで検出した。延長方向は東南東―西北西方向に延び、西側は第6号溝により掘り込まれて消失し、東側は調査区外となる。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-62.0°-W西偏を指す。第6号溝の他に第15号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。遺構確認面における残存規模は、延長約3.38m、幅員0.39～0.45m、深さ10.8～13.4cmを測る。底面の標高は中央部で約5.00mを測り、東側へ向かい約4.0cm下降傾斜するが概ね平坦である。

遺物は、相模型土師器坏1片1.4g、甕2片5.8g、陶器1片4.1gが出土したが、図示には至らなかった。陶器は中近世の常滑系の遺物であるが、器種は不明である。

遺構の時期は、規模や延長方向が類似する第5号・15号溝と同時期と推測される。



第8号溝

第1層：暗褐色土(10YR5/1) 下部ややソフト。やや酸化。堆積やや粗い。

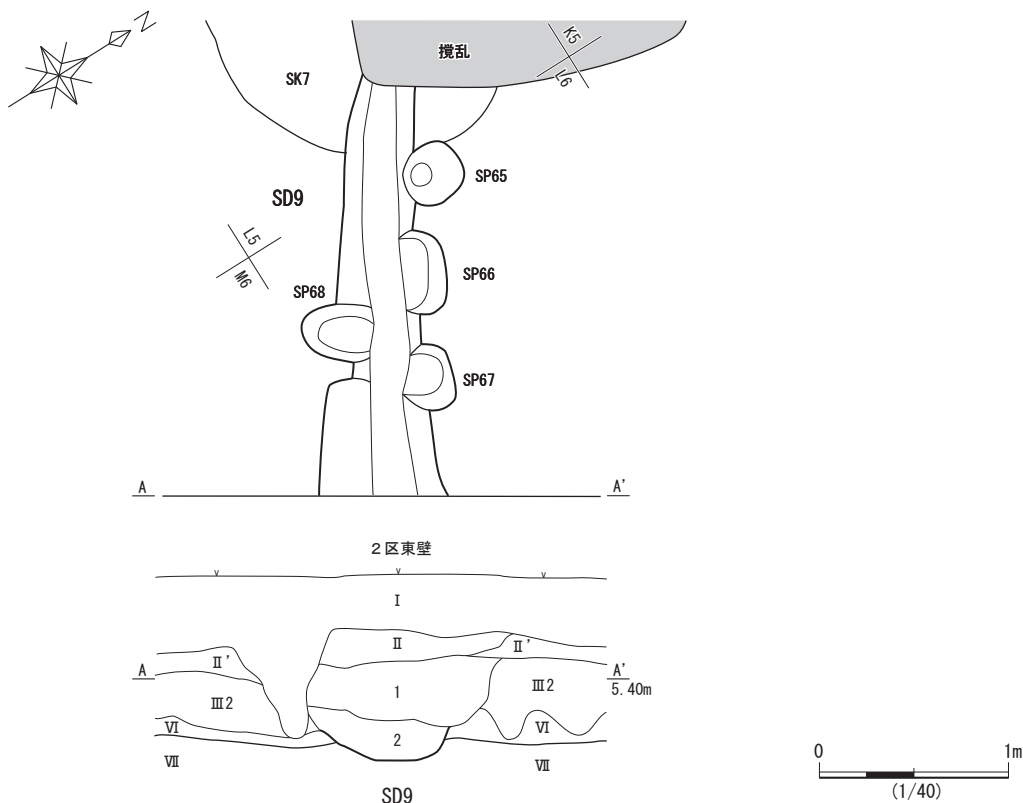
第46図 第8号溝(1/60)

第9号溝(第11・39・47図 表24 図版2-1・2)

2区の北部にあたるL・M5・6グリッドで検出した。延長方向は東南東-西北西方向に延び、西側は攪乱により掘り込まれて消失し、東側は調査区外となる。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-58.0°-W西偏を指す。重複するピット4穴は本遺構に付帯する遺構であると考えられ、各ピットの残存規模は表24のとおりである。遺構確認面における残存規模は、延長2.65m、幅員0.35~0.68m、深さ12.0~14.6cmを測る。底面の標高は中央部で4.95mを測り、3.0cm前後の起伏を有するが概ね平坦である。

遺物は第65号ピットから土師器壺1片16.2gや砥石1点66.8gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世と推測される。



第9号溝

第1層：灰黄褐色土(10YR) 粘性やや強い。全体に酸化し色調斑に赤褐色味を帯びる。堆積粗い。

第2層：灰黄褐色土(10YR) 粘性強い。黄褐色土を斑らに含む。色調斑に赤褐色味を帯びる。

第47図 第9号溝(1/40)

表24 第9号溝内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP65	隅丸方形	U字形	(31.0)	30.0	15.3	土師器壺1片16.2g、砥石1点66.8g
SP66	楕円形	箱形	45.0	(23.0)	13.4	—
SP67	不整楕円形	逆台形	35.0	(28.0)	9.4	—
SP68	楕円形	逆台形	(38.0)	30.0	14.8	—

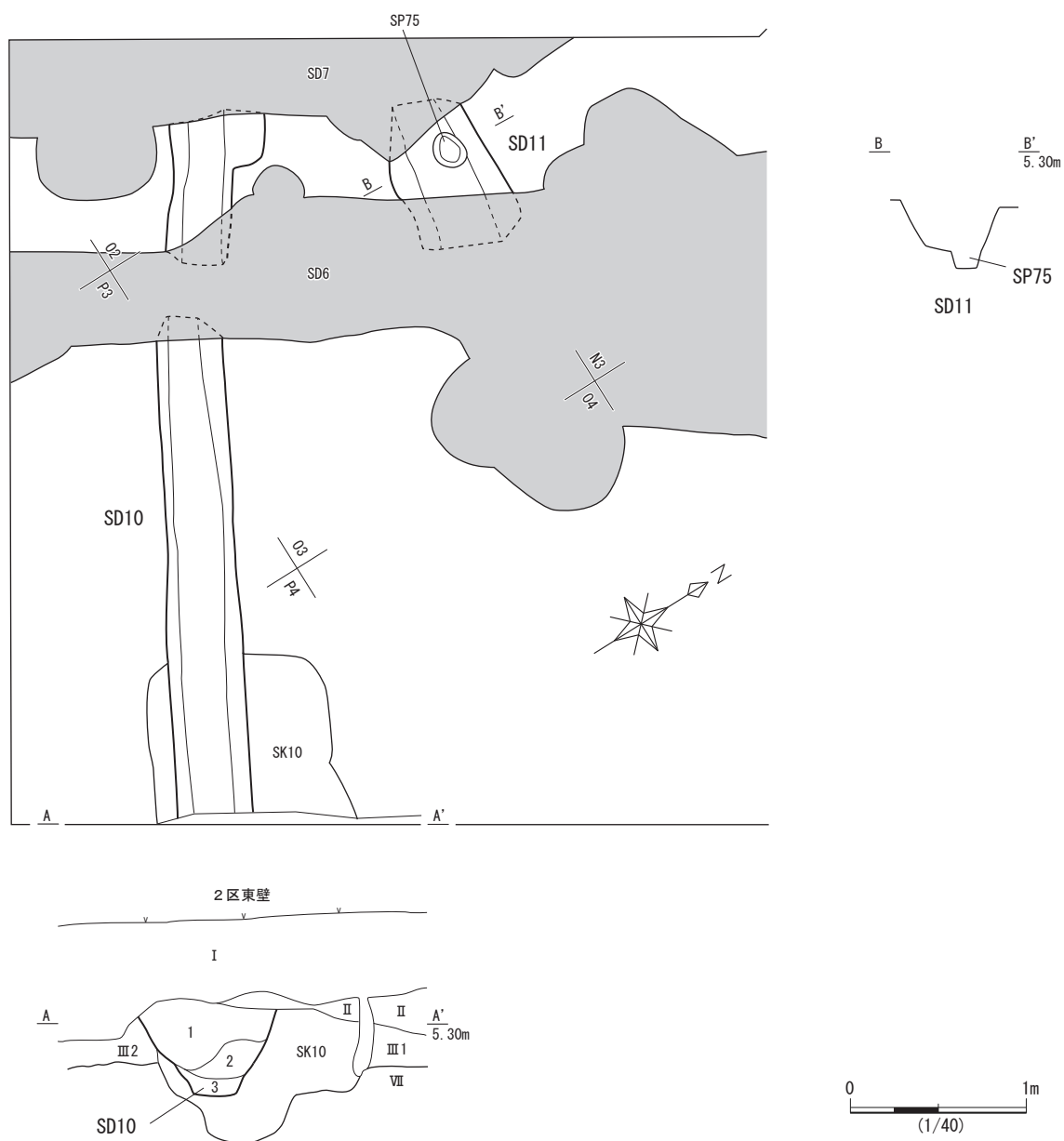
番号は第47図中の遺構番号に対応する

第10号溝(第11・39・48図 図版2-1・4)

2区の南端部にあたるO・P2～4グリッドで検出した。延長方向は東南東―西北西方向に延び、西側は第7号溝により掘り込まれて消失しており、東側は調査区外となる。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-58.5°-W西偏を指す。第10号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。遺構確認面における残存規模は、延長4.06m、幅員0.34～0.55m、深さ8.9～20.3cmを測る。底面の標高は中央部で4.89mを測り、4.0cm前後の起伏を有するが概ね平坦である。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世と推測される。



第10号溝

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 第1層：褐灰色土(10YR4/2) | 粘性やや強い。橙色粒子を少量含む。堆積やや粗い。 |
| 第2層：褐灰色土(10YR4/2) | 第1層に比べ色調明るい。焼土目立つ。 |
| 第3層：褐灰色土(10YR4/2) | 粘性やや強い。堆積やや粗い。 |

第48図 第10号・11号溝(1/40)

第11号溝(第11・39・48図 表25 図版2－1・4)

2区の南端部にあたるN・O3グリッドで検出した。延長方向は概ね東西方向に延びる。遺構の両端は、第6号溝および7号溝で止まるものと考えられる。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-79.5°-W西偏を指す。遺構確認面における残存規模は、延長0.95m、幅員0.52～0.61m、深さ25.5～29.0cmを測る。底面の標高は中央部で4.73mを測り、約2.0cmの凹凸を有するが概ね平坦である。底面において第75号ピットを確認した。ピットの規模は表25のとおりである。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、第6号溝と7号溝を接続する付帯施設であり、両遺構と同時期と考えられる。

表25 第11号溝内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP75	楕円形	U字形	21.5	18.0	9.3	—

番号は第48図中の遺構番号に対応する

第12号溝(第11・39・49図 表26 図版2－5・6)

2区車返し部西側のJ2グリッドで検出した。延長方向は概ね南東－北西方向に延びる。西側は第1号不明遺構、東側は第1号井戸の掘り込みにより消失する。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-49.5°-W西偏を指す。遺構確認面における残存規模は、延長0.68m、幅員0.58～0.65m、深さ12.2～17.7cmを測る。底面の標高は5.06～5.07mを測る。底面において第57号ピットを確認した。ピットの規模は表26のとおりである。

遺物は第57号ピットから相模型土師器坏1片3.6gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、覆土の特徴から第6号・7号溝などの溝群と同時期と考えられる。

表26 第12号溝内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP57	楕円形	逆台形	25.0	23.0	15.4	土師器坏1片3.6g

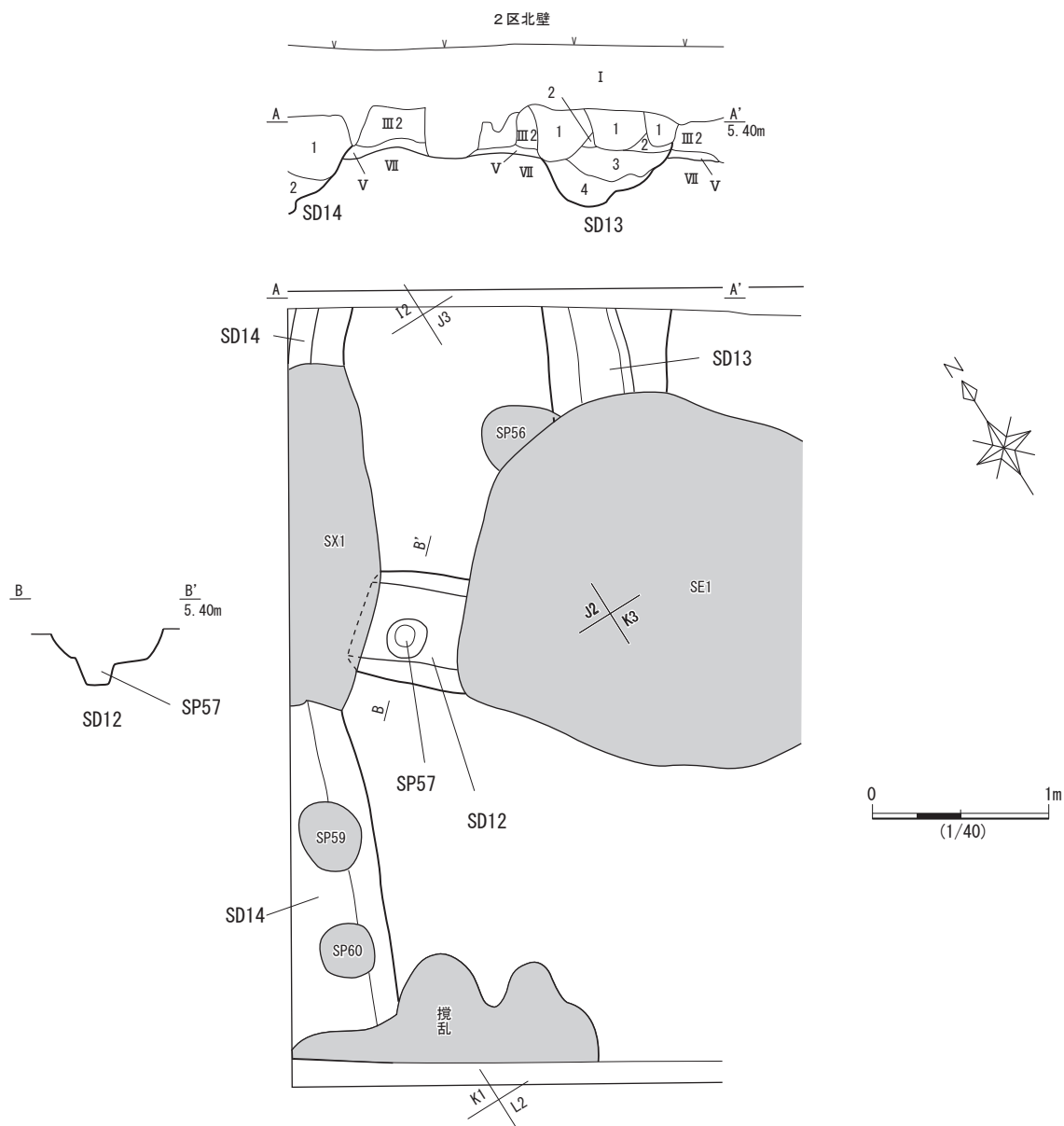
番号は第49図中の遺構番号に対応する

第13号溝(第11・39・49図 図版2－5・6)

2区車返し北端部のJ3グリッドで検出した。延長方向は概ね南南西－北北東方向に延びる。南側は第1号井戸の掘り込みにより消失し、北側は調査区外となる。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-22.5°-E東偏を指す。第56号ピットと重複し、新旧関係は本遺構が古い。遺構確認面における残存規模は、延長0.65m、幅員0.42～0.48m、深さ20.8～27.4cmを測る。底面の標高は中央部で4.97mを測る。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から第6号・7号溝などの溝群と同時期と考えられる。



第13号溝

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 第1層：褐灰色土(10YR5/1) | しまり強い。酸化著しい。堆積粗い。 |
| 第2層：褐灰色土(10YR4/1) | しまり強い。酸化。褐色土を含む。堆積粗い。 |
| 第3層：褐灰色土(10YR4/1) | 色調やや明るい。褐色土を斑にやや多量に含む |
| 第4層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまり粘性有り。やや酸化。土粒細かく堆積緻密。 |

第14号溝

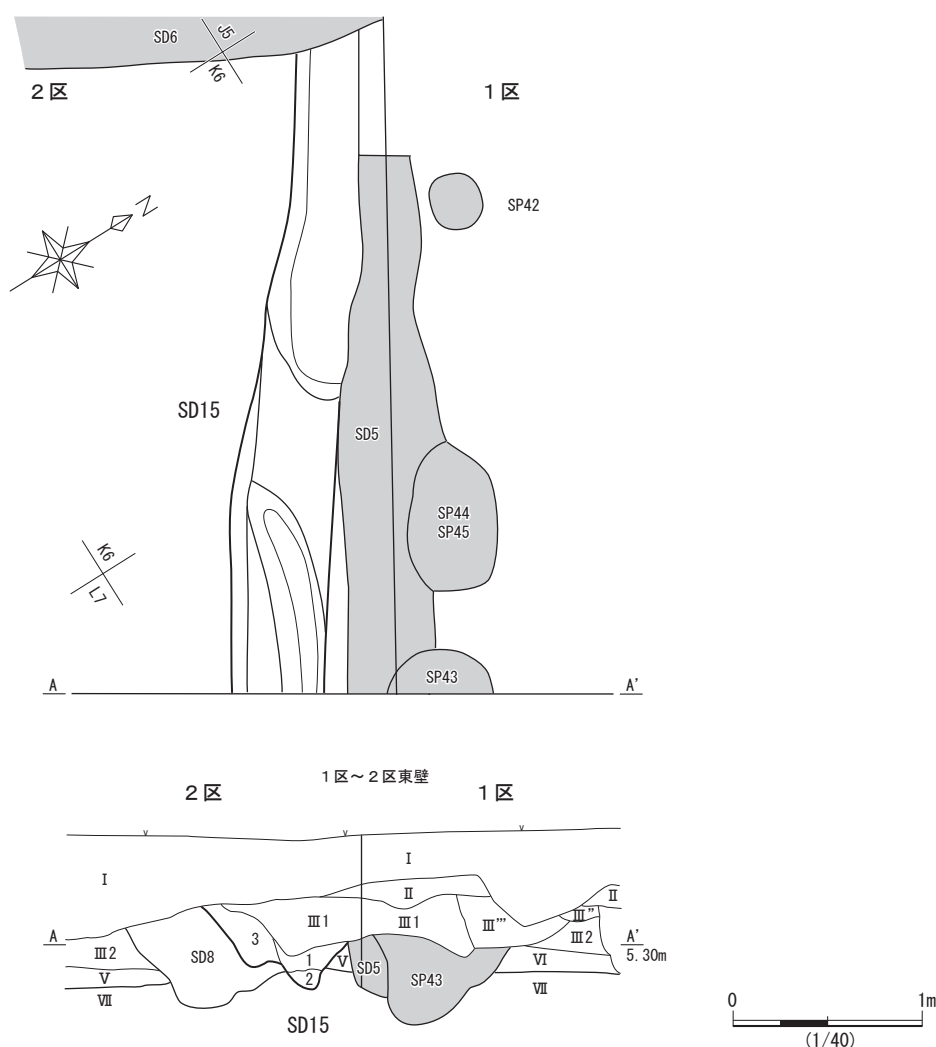
- | | |
|--------------------|----------------------------|
| 第1層：褐灰色土(10YR4/1) | 粘性やや弱い。堆積粗い。やや酸化。 |
| 第2層：灰黄褐色土(10YR4/2) | 粘性やや強い。ソフト。やや酸化。土粒細かく堆積緻密。 |

第49図 第12号～14号溝(1/40)

第14号溝(第11・39・49図 図版2-5・6)

2区車返し西端部のI~K 1・2グリッドで検出した。延長方向は概ね南南西-北北東方向に延びる。南側は攪乱の掘り込みにより消失し、北側は調査区外となる。座標軸と延長方向との偏差は、蛇行するものの概ねN-28.0°-E東偏を指すと推測される。第59号・60号ピットおよび第1号不明遺構と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。遺構確認面における残存規模は、延長4.20m、幅員0.30~0.60m、深さ9.9~33.3cmを測る。底面の標高は南部で4.97m、北端部で4.88mを測り、北側へ向かい約9.0cm下降傾斜する。遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から第6号・7号溝などの溝群と同時期と考えられる。



第15号溝

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 第1層：褐灰色土(10YR4/1) | しまり強い。第III1層に似る。 |
| 第2層：褐灰色土(10YR5/1) | しまり有り粘性やや強い。第1層に比べ色調灰色味強い。 |
| 第3層：褐灰色土(10YR5/1) | 第III1層に似るが、褐色土を少量含む。 |

第50図 第15号溝(1/40)

第15号溝(第11・39・50図)

1区と2区の境界部にあたるJ・K6・7グリッドで検出した。延長方向は東南東―西北西方向に延び、西側は第6号溝の掘り込みにより消失し、東側は調査区外となる。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-53.5°-W西偏を指す。第6号溝の他に第5号・8号溝と重複し、新旧関係は第8号溝より新しく、第5号溝より古い。遺構確認面における残存規模は、延長約3.53m、幅員0.33~0.62m、深さ4.5~17.7cmを測る。底面には北半部と南側にそれぞれ段差を有する。中央部の標高は5.09mを測るが、北半部は中央部に対して16.0cm前後低く、南側は17.0cm前後低い。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から第5号・8号溝と同時期と考えられる。

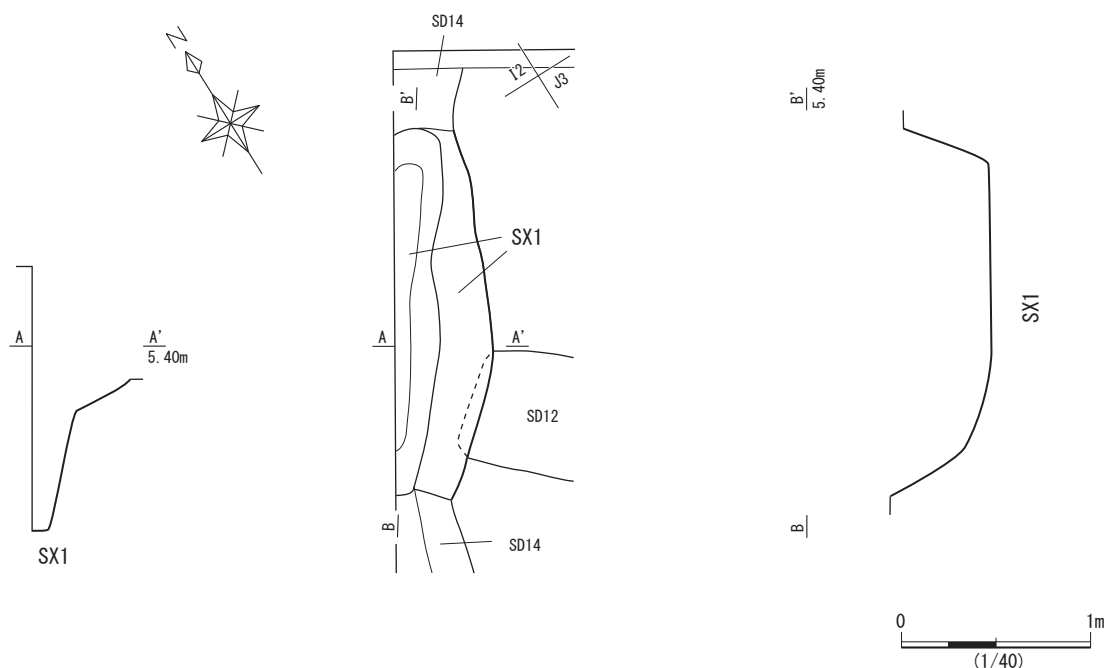
第4項 不明遺構

第1号不明遺構(第11・39・51図 図版2-5・6)

2区車返し西端部のI・J2グリッドで検出した。遺構の東壁から底面の一部を検出し、西側は調査区外となる。座標軸と長軸方向との偏差は、概ねN-35.0°-E東偏を指す。第12号・14号溝と重複し、新旧関係は本遺構が最も新しい。平面形状は、長楕円形を呈する可能性がある。遺構確認面における残存規模は、長軸約1.96m、幅員0.30~0.52m、深さ20.6~80.7cmを測る。底面北半部の標高は約4.43mを測る。断面形状は舟底状を呈し、また第14号溝と本遺構の底面の高低差は約61.0cmを測る。覆土は、第14号溝第1層と概ね同じであると考えられる。

遺物は相模型土師器坏1片1.8g、甕2片5.4g、陶器1片18.2gが出土したが、図示には至らなかった。陶器は近世後半の瀬戸・美濃系灰釉陶器であるが、後世の混入遺物と考えられる。

遺構の時期は、覆土の特徴から第12号・14号溝と同時期と考えられる。



第51図 第1号不明遺構(1/40)

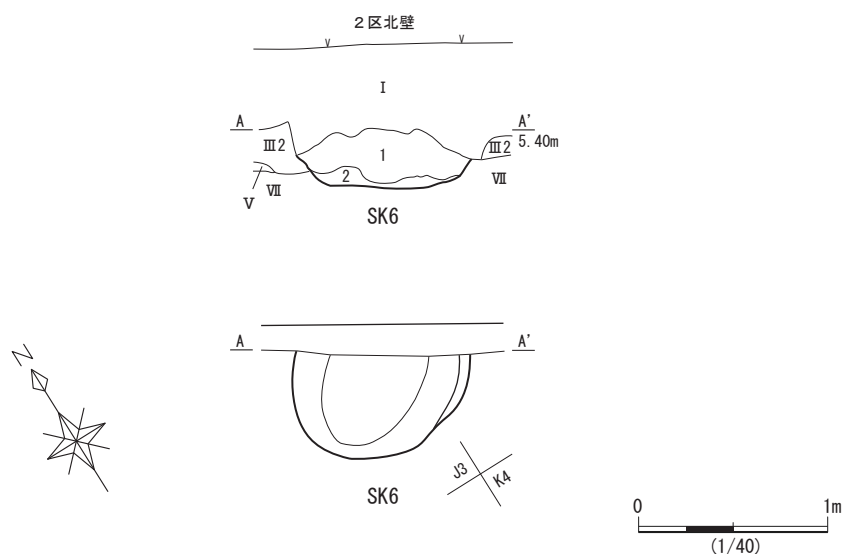
第5項 土坑

第6号土坑(第11・39・52図 図版2-5)

2区車返し北端部東側のJ3・4グリッドで検出した。北側は調査区外となる。平面形状は、楕円形を呈すると推測される。座標軸と長軸方向との偏差は、概ねN-57.2°-E東偏を指すと推測される。遺構確認面における残存規模は、長軸0.79m、短軸0.85m、深さ4.4~9.4cmを測る。底面の標高は約5.09mを測り、北側へ向かい約3.0cm下降傾斜するが概ね平坦である。断面形状は、碗形を呈する。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から西側に隣接する第13号溝と同時期と推測される。



第6号土坑

第1層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。酸化鉄分を斑に含む。下部に褐色土ブロックを含む。堆積粗い。

第2層：灰黄褐色土(10YR4/2) 第1層の褐色土ブロック極少量含む。色調明るい。堆積緻密。

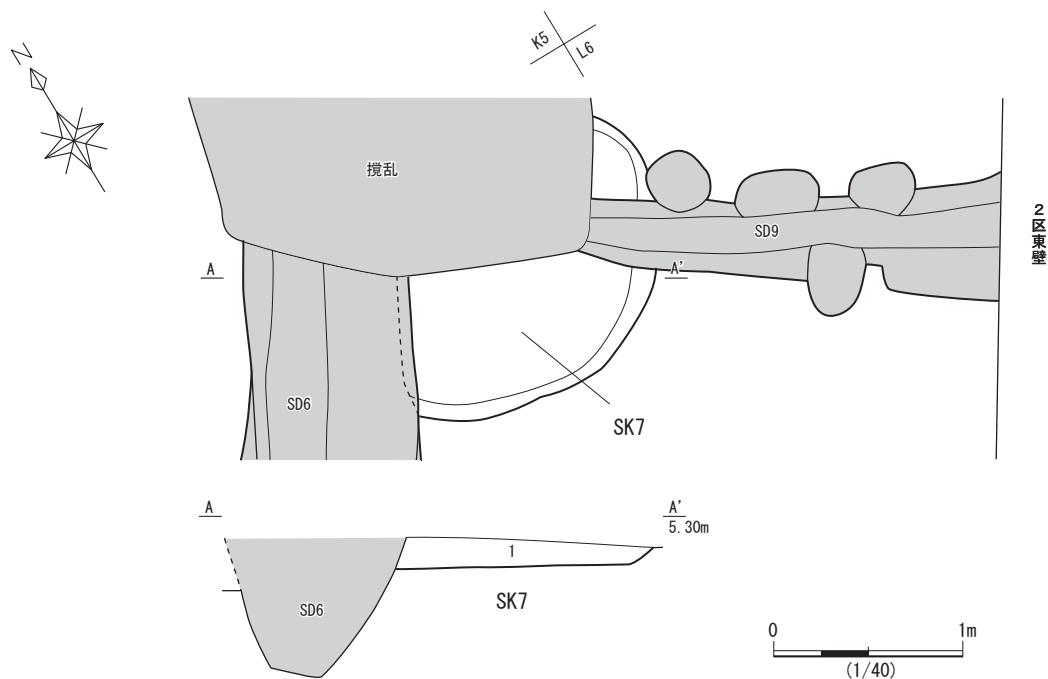
第52図 第6号土坑(1/40)

第7号土坑(第11・39・53図 図版2-2)

2区北側のL5・6グリッドで検出した。北西側から西側は攪乱および第6号溝の掘り込みにより消失し、また第9号溝が横断する。第6号・9号溝との新旧関係は、本遺構が最も古い。平面形状は不整楕円形を呈すると推測される。座標軸と長軸方向との偏差は、概ねN-74.5°-E東偏を指す。遺構確認面における残存規模は、長軸1.82m、短軸1.08m、深さ4.3~16.7cmを測る。底面中央部の標高は約5.03mを測り、縁辺部から中央部へ向かい約3.0cm下降傾斜するが概ね平坦である。断面形状は、箱形を呈すると推測される。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世と推測され、また第6号・7号・9号溝などの溝群を伴う土地利用より一時期古いものと考えられる。



第7号土坑

第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまり粘性有り。褐色土ブロック極少量含む。色調明るい。堆積緻密。

第53図 第7号土坑(1/40)

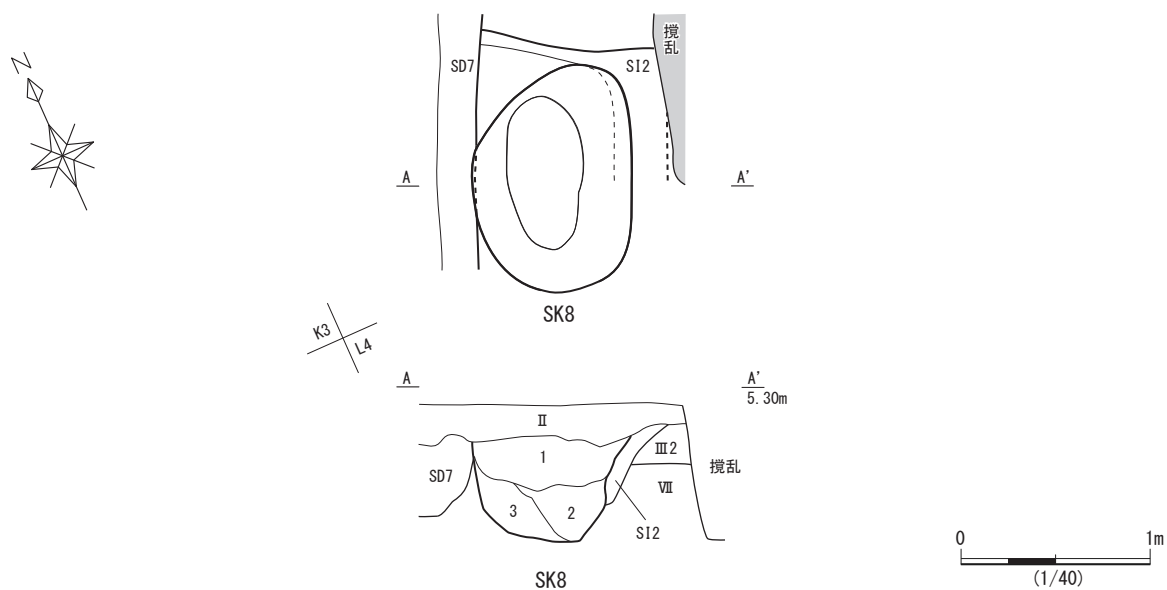
第8号土坑(第11・39・54・55図 表27 図版2-3、図版4-2-2)

2区北部のK・L4グリッドで検出した。第7号溝の東側に隣接し、第7号溝と同時期に掘られた可能性がある。また第2竖穴址と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。平面形状は、不整楕円形を呈する。座標軸と長軸方向との偏差は、概ねN-22.7°-E東偏を指す。遺構確認面における残存規模は、長軸1.21m、短軸0.85m、深さ16.8～56.0cmを測る。底面中央部の標高は約4.50mを測り、約4.0cmの凹凸を有するが概ね平坦である。断面形状は、箱形を呈する。

遺物は、相模型土師器坏2片9.0g、甕13片40.8g、須恵器瓶類1片12.8g、石製品1点96.9gが出土し、このうち石製品1点を図示した。

1は凝灰岩製の砥石である。概形は四角錐状を呈し、また断面形状は三角形に近い台形を呈する。基部は破断面であり、対となる2側面と先端面の合計3面が使用面であることが確認された。残りの対となる2側面は、鋸歯状工具で石材を挽いた際の工具痕であると考えられる。

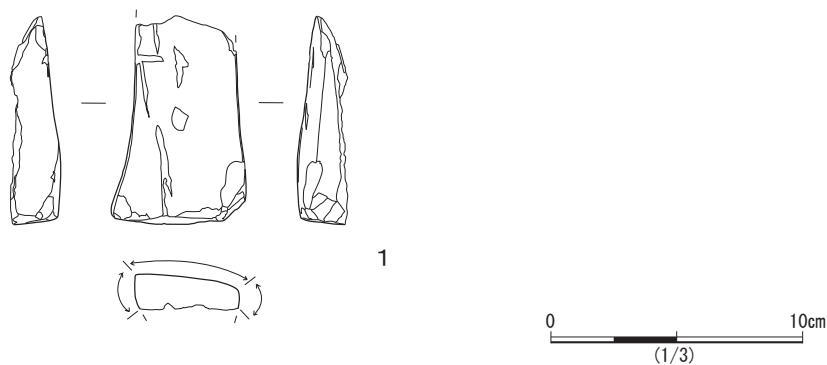
遺構の時期は、第7号溝と同時期と推測される。



第8号土坑

- 第1層：褐灰色土(10YR4/1) しまりやや弱い。橙色粒子を少量、灰白色パミスを極少量含む。
 第2層：褐灰色土(10YR4/1) しまりやや弱く粘性やや有り。橙色粒子・灰白色パミスを極少量含む。
 第3層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強い。灰白色土を少量、橙色粒子・黄褐色土ブロックを極少量含む。堆積やや緻密。

第54図 第8号土坑(1/40)



第55図 第8号土坑出土遺物(1/3)

表27 第8号土坑出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	石製品 砥石	長さ：(8.25) 幅：4.2 厚さ：(1.4) 重量：96.9g 残存：基部欠損	石材：凝灰岩	SK8 覆土一括

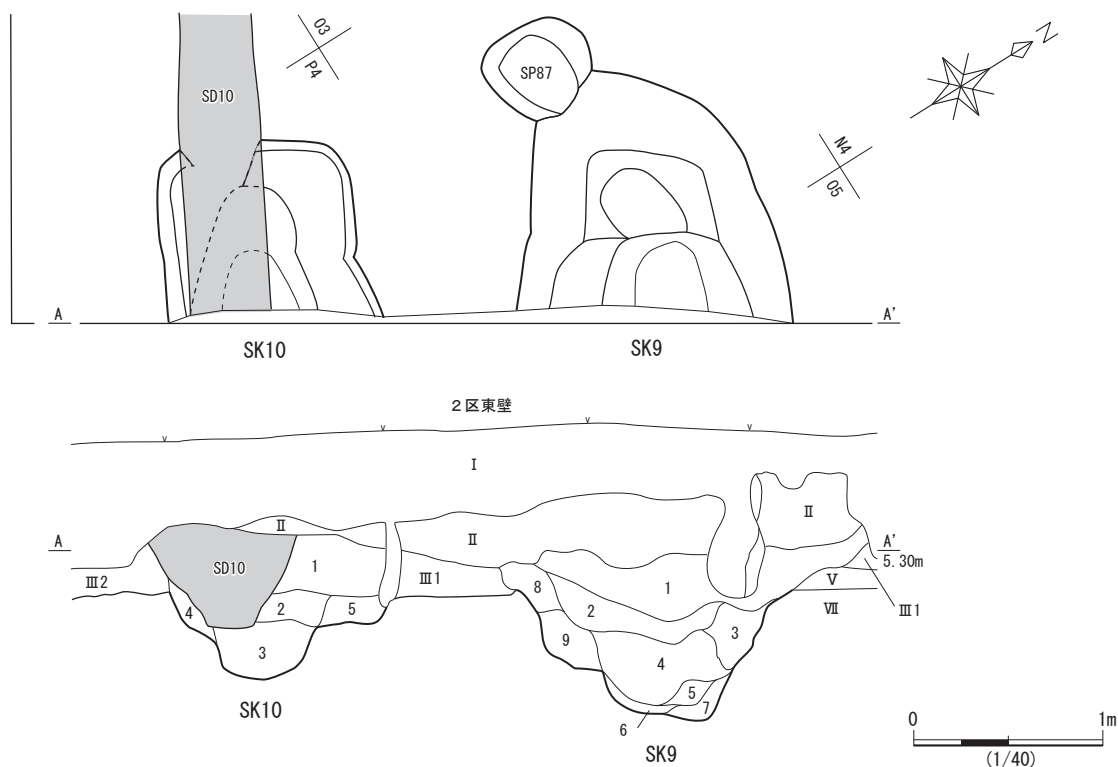
No. は第55図の遺物番号に対応する

第9号土坑(第11・39・56図 表28 図版2-1・3)

2区南東端部のO・P4・5グリッドで検出した。南東側は調査区外となる。形状や規模の類似性から、第10号土坑と対になると考えられる。重複する第87号ピットは本遺構に付帯する遺構であると考えられ、ピットの残存規模は表28のとおりである。平面形状は不整楕円形を呈すると推測される。座標軸と長軸方向との偏差は、概ねN-55.5°-W西偏を指す。遺構確認面における残存規模は、長軸1.29m、短軸1.47m、深さ64.3~68.2cmを測る。底面の標高は約4.41mを測り、約4.0cmの凹凸を有する。断面形状は、逆台形を呈する。

遺物は、相模型土師器坏1片1.6gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、第10号土坑と同時期と考えられる。



第9号土坑

第1層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強く粘性やや弱い。橙色粒子を中量含む。粉質。
第2層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり粘性やや強い。焼土を含む。橙色粒子を少量含む。堆積やや緻密。
第3層：褐灰色土(10YR4/1)	第1層に似るが、色調やや暗い。褐色土を少量含む。
第4層：灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性やや強い。やや粉質。堆積やや粗い。
第5層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)	しまりやや弱い。
第6層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)	やや砂質。
第7層：褐灰色土(10YR4/1)	粘性やや強い。やや砂質。やや酸化。
第8層：褐灰色土(10YR4/1)	粘性有り。第2層に比べ色調明るい。橙色粒子を中量含む。
第9層：褐灰色土(10YR4/1)	第8層を基調として褐色土ブロックをやや多量に含む。

第10号土坑

第1層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強く粘性やや弱い。橙色粒子を少量含む。
第2層：褐灰色土(10YR4/1)	第1層に比べ色調明るい。焼土をやや多く含む。
第3層：褐灰色土(10YR4/1)	第2層を基調として褐色土を中量含む。橙色粒子減る。
第4層：褐灰色土(10YR4/1)	褐色土を斑にやや多量に含む。堆積粗い。
第5層：褐灰色土(10YR4/1)	第2層に似るが、しまり減る。

第56図 第9号・10号土坑(1/40)

表28 第9号土坑内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP87	不整楕円形	逆台形	54.0	(50.0)	18.0	—

番号は第56図中の遺構番号に対応する

第10号土坑(第11・39・56図 図版2-1・4)

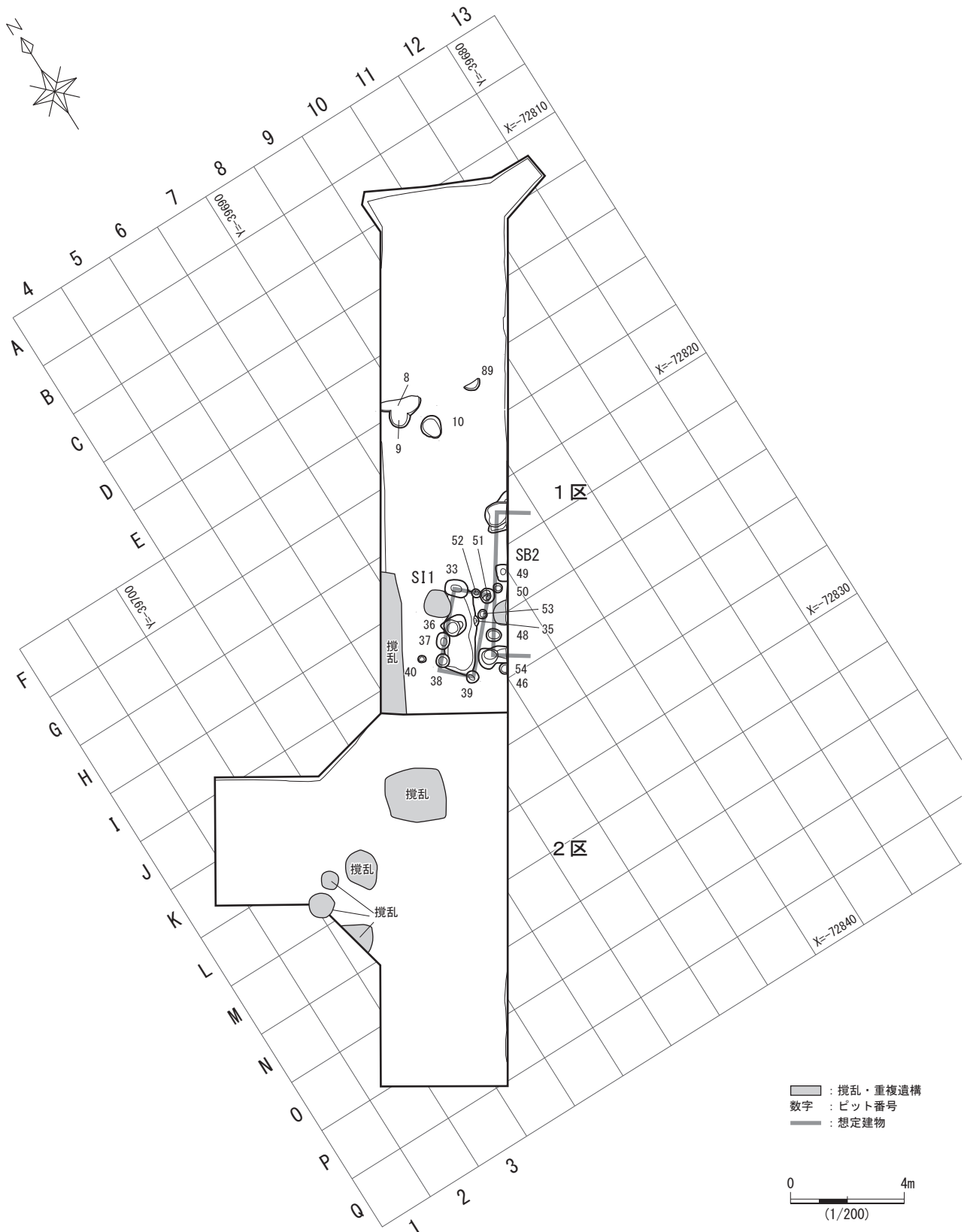
2区南東端部のP4グリッドで検出した。南東側は調査区外となる。第10号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。平面形状は不整方形で断面形状が箱形を呈する掘り込みが想定される。座標軸と長軸方向との偏差は、概ねN-62.5°-W西偏を指す。遺構確認面における残存規模は、長軸0.99m、短軸1.04～1.15m、深さ12.2～15.8cmを測る。底面の標高は約4.88mを測る。さらに遺構の中央には平面形状は長楕円形で断面形状がU字形を呈する掘り込みが想定され、残存規模は、長軸0.65m、短軸0.45～0.66m、深さ35.3～39.0cmを測る。底面の標高は約4.65mを測る。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土の特徴が第10号溝と類似し、第10号溝と同時期と推測される。

第5節 古代～中世

1区南部に第1号竪穴址・第2号掘立柱建物、1区中央部に第8号～10号・89号ピットが発見された。



第57図 古代～中世遺構配置図(1/200)

第 1 項 豎穴址

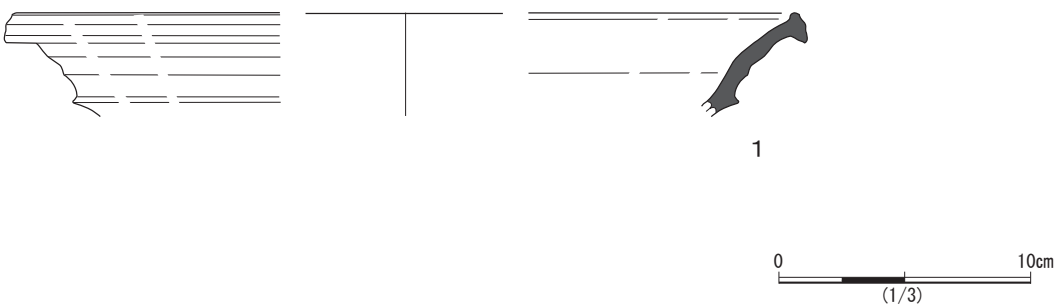
第 1 号豎穴址(第11・57～59図 表29・30 図版 1－6・7、図版 4－3－1)

1 区南部のH～J 6～8 グリッドで検出した。第11号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が古い。平面形状は、不整四辺形を呈する。座標軸と南辺との偏差は、概ねN-36.5°-E東偏を指す。掘り込みを取り囲むピット10穴は本遺構に付帯する遺構であると考えられ、各ピットの残存規模は表30のとおりである。遺構確認面における想定規模は、長軸3.02m、短軸0.95～1.27m、深さ2.8～20.1cmを測る。底面の標高は西側約4.98m、東側約4.85mを測り、西側から東側へ向かい約13.0cm下降傾斜する。断面形状は、船底状を呈する。

遺物は、相模型土師器甕 1 片1.6g、須恵器甕 1 片72.7g、灰釉陶器瓶類 1 片3.8gが出土し、このうち須恵器 1 点を図示した。

1 は須恵器甕の口縁部である。外面には、断面三角形形状を呈する隆帯が一条巡る。産地は、色調や隆帯の特徴から東海系であると推測される。遺物の時期は 7 世紀後半～8 世紀前半頃と推測される。

遺構の時期は、覆土の特徴から中世と推測される。

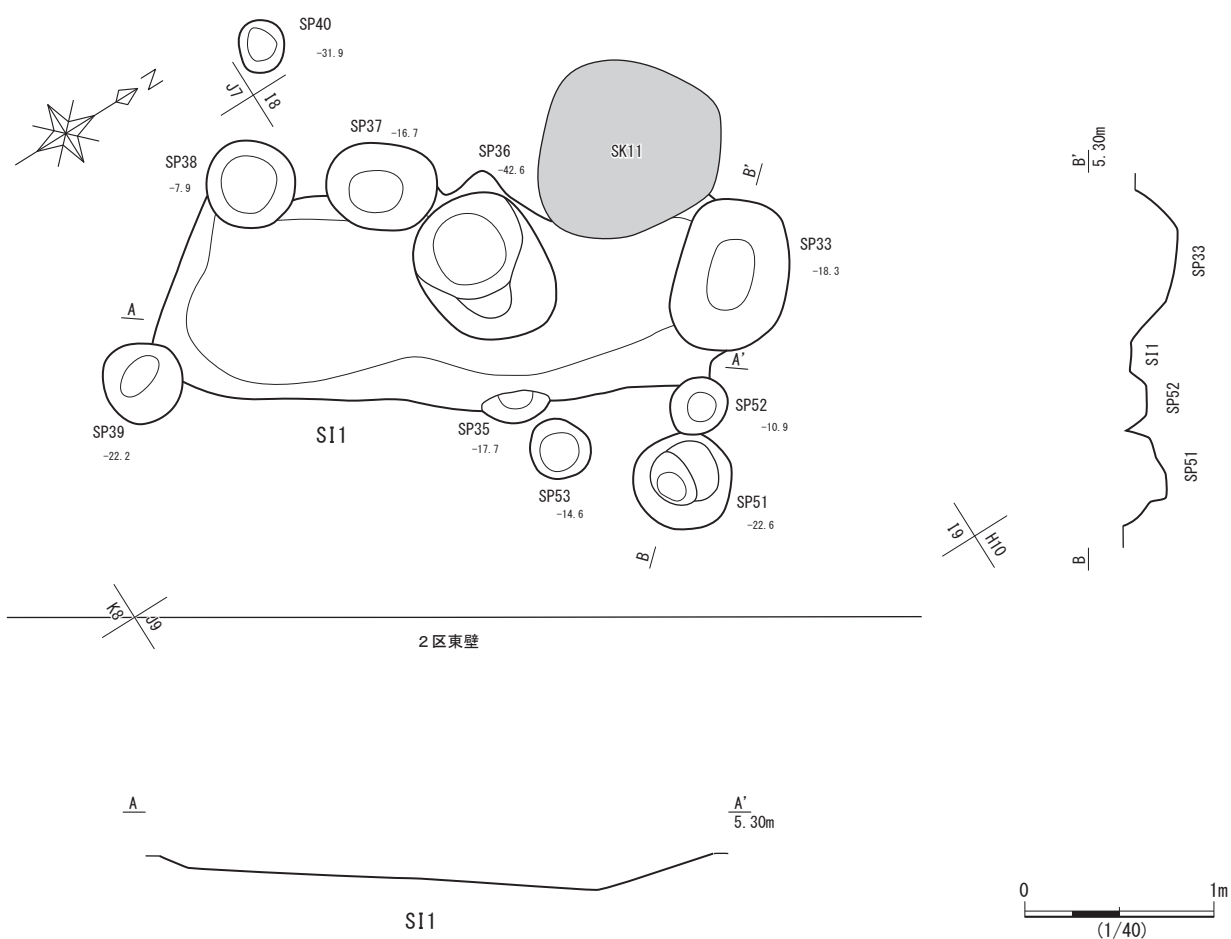


第58図 第 1 号豎穴址出土遺物(1/3)

表29 第 1 号豎穴址出土遺物観察表

No.	種別	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
	器種			
1	須恵器 甕	口径：(30.9) 底径：－ 残高：4.1 重量：72.7g 残存：口縁部1/8	胎土：やや緻密 白色粒 黒色粒 石英 焼成：良好 色調：7.5YR6/1褐灰 せいけい：ロクロ成形 産地：東海系 年代：7 世紀後半～8 世紀前半頃 備考：外面には断面三角形形状の隆帯一条が巡る	SI1 覆土一括

No. は第58図の遺物番号に対応する



第59図 第1号竪穴址(1/40)

表30 第1号竪穴址内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP33	楕円形	逆台形	83.0	59.0	18.3	—
SP35	楕円形	U字形	(36.0)	(16.0)	17.7	—
SP36	不整楕円形	逆台形	82.0	67.0	42.6	—
SP37	楕円形	逆台形	59.0	46.0	16.7	—
SP38	不整円形	逆台形	48.0	48.0	7.9	—
SP39	不整楕円形	逆台形	44.0	43.0	22.2	—
SP40	楕円形	U字形	28.0	24.0	31.9	—
SP51	不整楕円形	U字形	53.0	51.0	22.6	—
SP52	楕円形	U字形	33.0	29.0	10.9	—
SP53	不整楕円形	逆台形	32.0	32.0	14.6	—

番号は第59図中の遺構番号に対応する

第2項 掘立柱建物

第2号掘立柱建物(第11・57・60図 表31 図版1-4~7)

1区南部のH~J 7~9グリッドで検出した。ピット6穴から成る配列を確認し、掘立柱建物の西辺と判断した。但し建物東側の大部分は調査区外となり、棟方向は不詳である。第47号・90号ピットおよび第1号掘立柱建物と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。座標軸と西辺との偏差は、概ねN-31.5°-E東偏を指す。遺構確認面における残存規模は、長軸6.45m、短軸0.81~1.04mを測る。西辺は2間の規模を有して、南側から第46・54・48号-50・49号-26号ピットからなる配列が想定される。また第54号-50号-26号ピットの芯芯間の距離は、2.34m-2.70mを測る。第46号・48号や49号ピットは、補強用の支柱または建て替えに伴う柱穴であった可能性がある。第54号ピットは、南辺に沿って溝状の掘り方(溝持ち部分)を掘り、この西端部に柱穴を設置したものと推測される。各ピットの残存規模は、表31のとおりである。

遺物は、第54号ピットから近世瀬戸系灰釉陶器碗1片6.4gが出土したが、図示には至らなかった。この遺物は、後世の混入遺物であると考えられる。

遺構の時期は、東壁土層断面の観察から第1号掘立柱建物(第60図第27号ピット)より一段階古いことは確実であり、古代~中世と推測される。

第26号ピット

第1層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強い。黄褐色土を中量含む。
第2層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強い。黄褐色土をやや多量、酸化粒子を極少量含む。
第3層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり強い。ブロック。第2層の褐灰色土を極少量含む。
第4層：褐灰色土(10YR4/1)	黄褐色土を少量含む。やや酸化。堆積やや粗い。
第5層：褐灰色土(10YR4/1)	しまり強い。灰黄褐色土を中量、黄褐色土を少量含む。
第6層：灰黄褐色土(10YR4/2)	第5層の褐灰色土を中量含む。酸化のため色調黒色味やや帯びる。堆積緻密。
第7層：灰黄褐色土(10YR5/2)	しまり強い。褐灰色土を極少量含む。土粒細かい。色調明るい。
第8層：褐灰色土(10YR4/1)	第1層に似るが、しまりやや増す。
第9層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや弱い。黄褐色土を少量含む。
第10層：褐灰色土(10YR4/1)	しまりやや強い。黄褐色土を中量含む。根の腐植一部あり。
第11層：灰黄褐色土(10YR5/2)	しまり強い。褐灰色土を極少量含む。土粒細かい。色調明るい。
第12層：灰黄褐色土(10YR4/2)	第2層の褐灰色土を少量含む。土粒やや細かい。色調やや明るい。堆積緻密。

第46号ピット

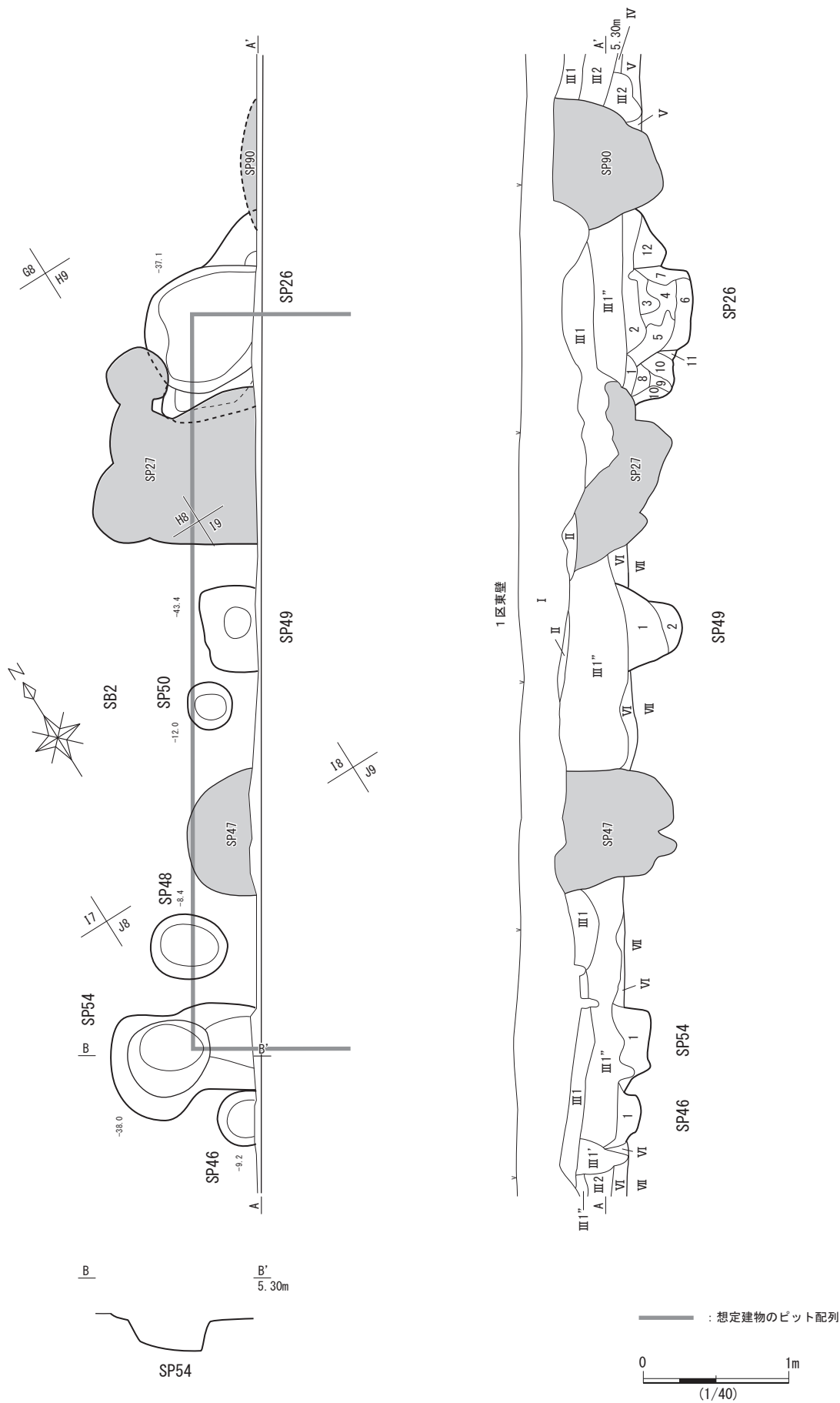
第1層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり強い。黄褐色土を斑にやや多量、酸化粒子を極少量含む。
--------------------	-------------------------------

第49号ピット

第1層：褐灰色土(10YR4/1)	部分的にしまりやや強い。灰黄褐色土をやや多量、黄褐色土を少量含む。
第2層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりやや弱く粘性やや有り。黒褐色土を極少量含む。

第54号ピット

第1層：灰黄褐色土(10YR4/2)	しまり強い。黄褐色土ブロックを中量、橙色粒子・炭化物を極少量含む。
--------------------	-----------------------------------



第60図 第2号掘立柱建物(1/40)

表31 第2号掘立柱建物内ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP26	不整楕円形	箱形	(78.0)	87.0	37.1	—
SP46	楕円形	逆台形	(26.0)	38.0	9.2	—
SP48	楕円形	逆台形	53.0	45.0	8.4	—
SP49	不整形	U字形	60.0	(41.0)	43.4	—
SP50	楕円形	U字形	33.0	31.0	12.0	—
SP54	不整楕円形	逆台形	(101.0)	49.0 ～72.0	38.0	陶器碗 1 片 6.4g

番号は第60図中の遺構番号に対応する

第3項 ピット

1区第4号溝の南側に隣接して4穴を検出した。各ピットの時期は、覆土の特徴から古代～中世頃と判断した。

第8号ピット(第11・57・61図 表32 図版1－3)

1区E・F 8・9グリッドで検出した。北側は第4号溝の掘り込みにより消失していた。第9号ピットと重複し、新旧関係は本遺構が新しい。残存状態は悪く、概ね底面を残すのみであった。残存規模は、表32のとおりである。

遺物は出土していない。

第9号ピット(第11・57・61図 表32 図版1－3)

1区E・F 8グリッドで検出した。北側は第8号ピットの掘り込みにより消失していた。残存状態は悪く、概ね底面を残すのみであった。残存規模は、表32のとおりである。

遺物は出土していない。

第10号ピット(第11・57・61図 表32 図版1－3)

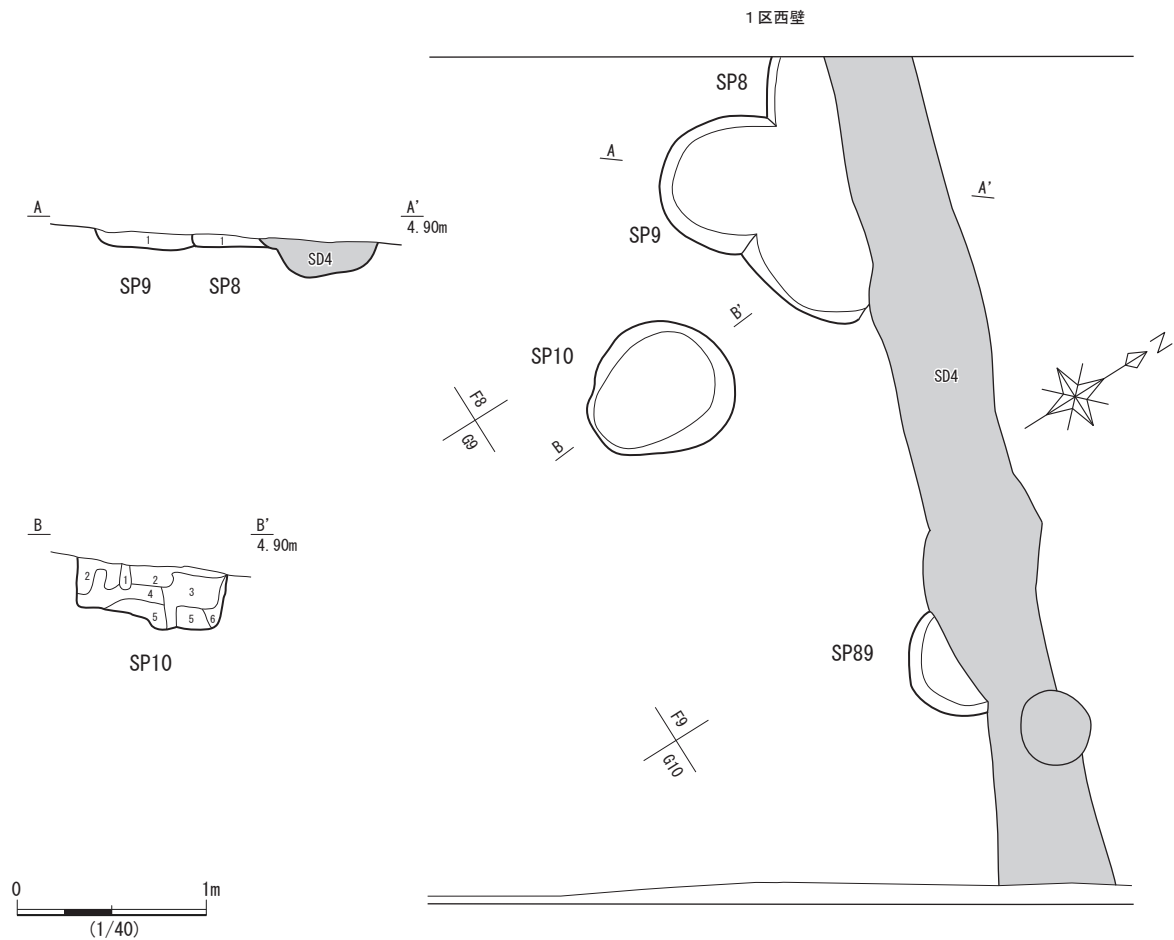
1区F 9グリッドで検出した。平面形状は不整楕円形を呈し、断面形状は箱形を呈する。表32のとおりである。

遺物は出土していない。

第89号ピット(第11・57・61図 表32 図版1－3)

1区F 10グリッドで検出した。北側は第4号溝の掘り込みにより消失していた。残存状態は悪く、概ね底面を残すのみであった。残存規模は、表32のとおりである。

遺物は出土していない。



- 第8号ピット
第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性有り。黄褐色土を中量、酸化粒子を極少量含む。堆積緻密。
- 第9号ピット
第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性やや有り。黄褐色土をやや多量、酸化粒子を極少量含む。
- 第10号ピット
第1層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。橙色粒子・酸化粒子を極少量含む。
第2層：褐灰色土(10YR4/1) しまりやや弱い。褐色土を少量含む。色調やや明るい。
第3層：褐灰色土(10YR4/1) しまり強い。橙色粒子を極少量含む。堆積緻密。
第4層：褐灰色土(10YR4/1) 第3層に似るが、しまりやや増し粘性やや有り。
第5層：灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性有り。黄褐色土を少量含む。色調やや明るい。堆積緻密。
第6層：灰黄褐色土(10YR5/2) 黄褐色土を中量含む。色調明るい。

第61図 1区北部古代～中世ピット(1/40)

表32 1区北部古代～中世ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP8	長楕円形	箱形	(140.0)	(69.0)	13.2	—
SP9	楕円形	箱形	(58.0)	73.0	12.8	—
SP10	不整楕円形	箱形	80.0	73.0	26.8	—
SP89	楕円形	箱形	(62.0)	(28.0)	9.4	—

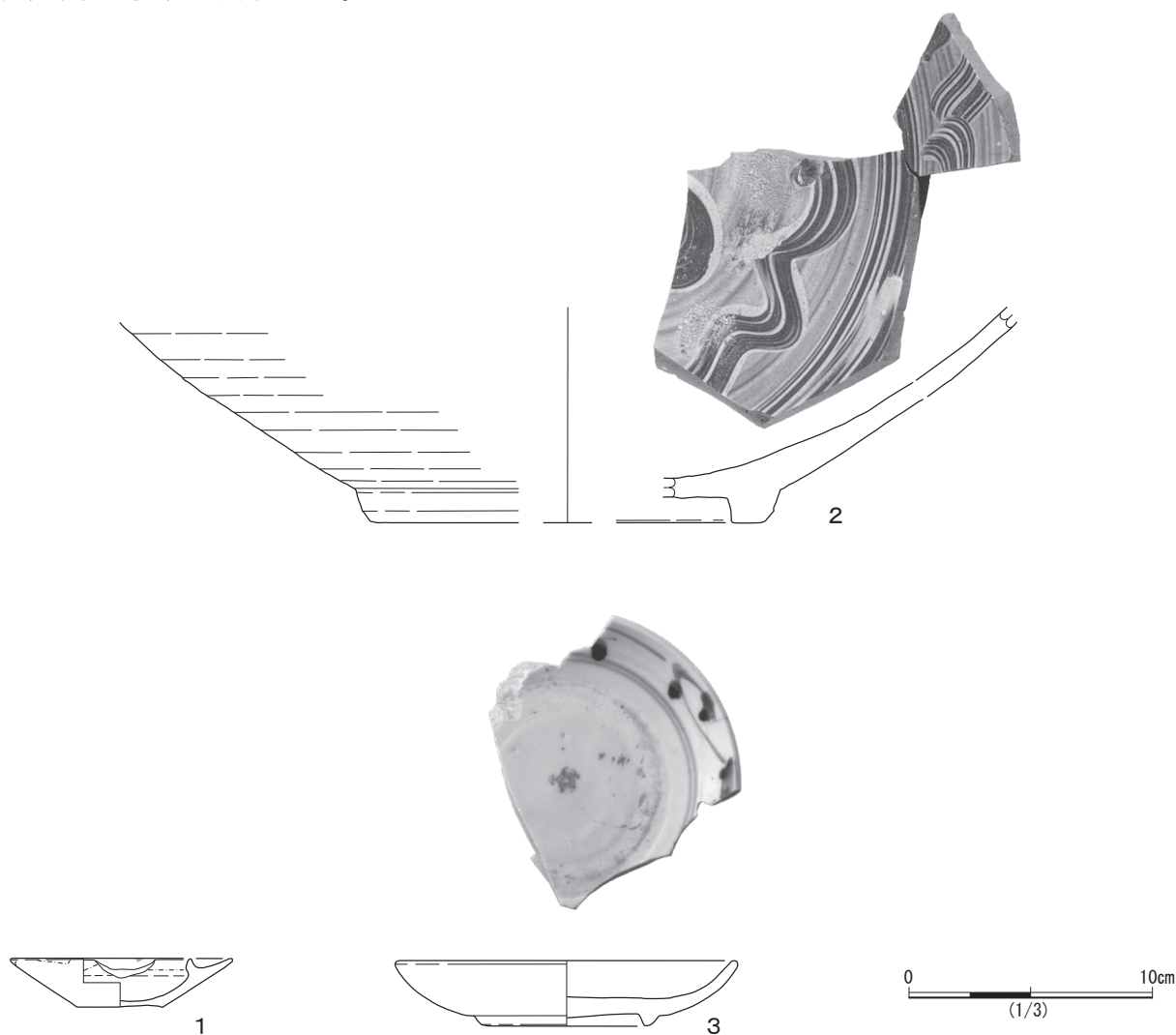
番号は第61図中の遺構番号に対応する

第6節 遺構外

第1項 表土出土遺物(第62図 表33 図版5-1-1)

相模型土師器坏1片8.8g、甕1片4.7g、瓦質土器羽釜1片4.4g、瓦器1片6.2g、瓦1片193.5g、陶器7片557.6g、磁器4片249.6gが出土した。羽釜口縁部の形状は「羽釜B」(伊藤1992)に比定され、遺物の時期は15世紀後半～16世紀前半頃と推測される。瓦器は火鉢の口縁部であり、遺物の時期は15世紀代と推測される。瓦は近世の平瓦の端部である。陶器には18世紀末～19世紀の瀬戸・美濃系灰釉大鉢が含まれる。磁器には18世紀中頃～後半の肥前系青磁染付筒型碗、18世紀後半～19世紀前半の肥前系白磁猪口や、大正～昭和時代初期の瀬戸・美濃系碗が含まれる。このうち陶磁器3点を図示した。

1は瀬戸・美濃系陶器の燈火具受付皿である。口縁部と受け部の高さは、同じ高さである。受け部内面を除く口縁部から内面に透明釉を施す。遺物の時期は18世紀後半と推測される(金子2000)。**2**は唐津系陶器の刷毛目大鉢であり、図上復元された半径は18.0cmを超える。内面の文様は、地に白泥を塗布し刷毛目により波状文を描く。遺物の時期は17世紀～18世紀初頭と推測される。**3**は肥前波佐見系磁器の皿である。口縁部内面に花唐草文、見込みに五弁花文が染付される。また見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。遺物の時期は18世紀中頃～後半と推測される。



第62図 表土出土遺物(1/3)

表33 表土出土遺物観察表

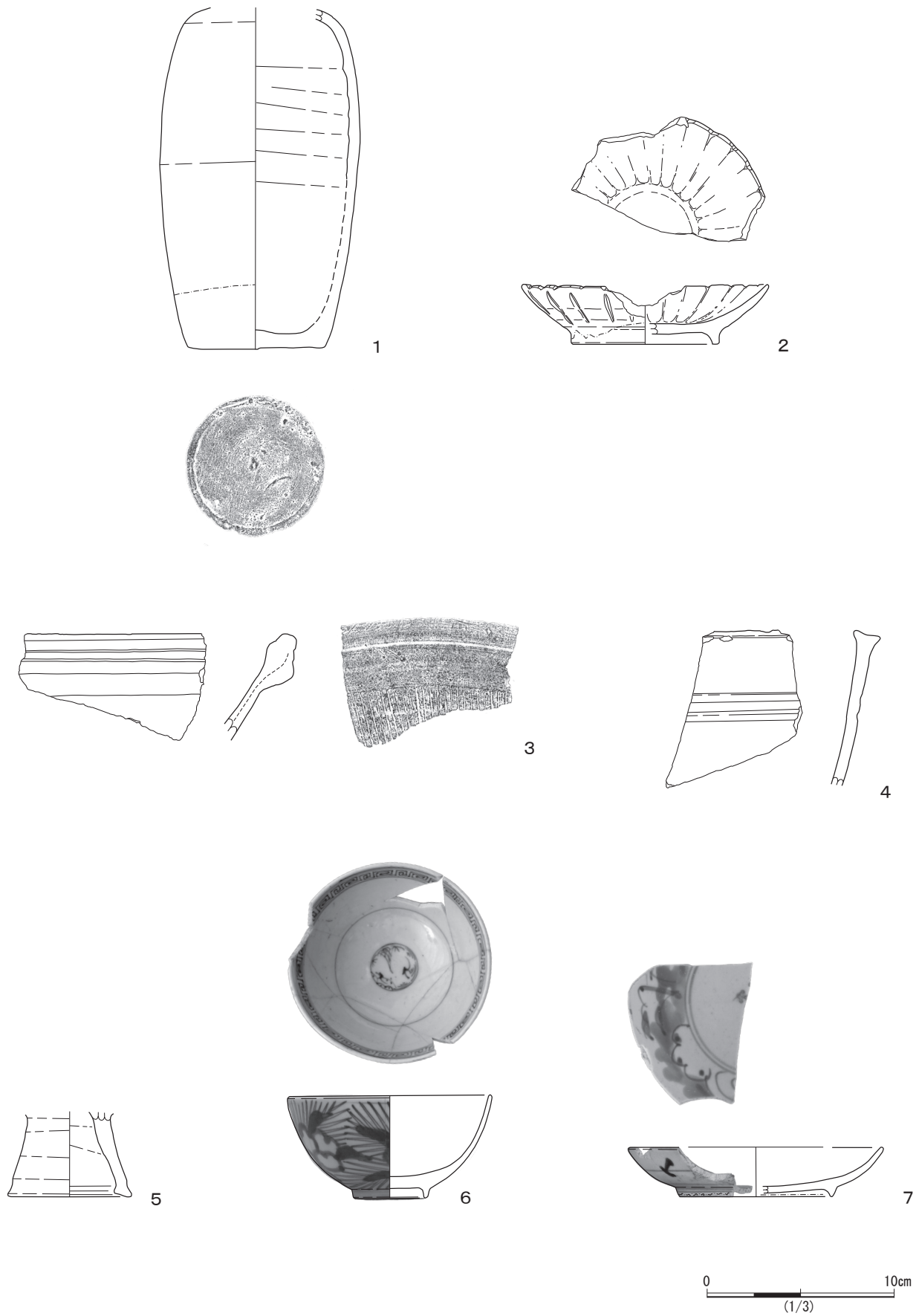
No.	種別	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
	器種			
1	陶器 燈火具 受付皿	口径：9.1 底径：3.5 器高：2.0 重量：59.6g 残存：略完形	胎土：やや緻密 砂粒 焼成：良好 色調：2.5Y7/3 浅黄 せいけい：轆轤成形 底部外面 回転ナデ 施釉：透明釉 産地：瀬戸・美濃 年代：18世紀後半 備考：口縁部外面 煤付着 外面・受け部内面 無釉	表土一括
2	陶器 刷毛目大鉢	口径：－ 高台径：(16.2) 残高：8.85 重量：390.1g 残存：体部～高台部1/6	胎土：やや粗 白色粒 黒色粒 雲母 焼成：良好 色調：2.5YR5/4にぶい赤褐 せいけい：轆轤成形 施釉：透明釉 絵付：内面 白泥塗布→ハケ目 文様：波状文 産地：唐津 年代：17世紀～18世紀 初頭 備考：見込みに砂目2つ 同一個体3片出土 し2片が接合	表土一括
3	磁器 皿	口径：(14.1) 高台径：6.4 器高：2.7 重量：120.4g 残存：口縁部1/6 体部～ 高台部2/3	胎土：緻密 砂粒 焼成：良好 色調：2.5YR7/2灰 黄 文様：口縁部内面 花唐草文 見込み 五弁花文 せいけい：轆轤成形 産地：肥前波佐見系 年代：18世紀中頃～後半 備考：見込み 蛇ノ目釉 はぎ 暈付 無釉	表土一括

No. は第62図の遺物番号に対応する

第2項 攪乱出土遺物(第63図 表34 図版5-1-2)

陶器(碗・皿・大鉢・捏ね鉢・搦鉢・徳利・花瓶)11片1,272.5g、磁器(碗・皿・徳利)16片546.2gが出土した。陶器には、17世紀後半～18世紀前半の唐津系緑釉碗、18世紀後半の瀬戸・美濃系灰釉捏鉢、18世紀後半～19世紀前半の瀬戸・美濃系灰釉大鉢などが含まれる。磁器には、18世紀中～後半の肥前波佐見系小皿、19世紀前半の肥前波佐見系大徳利、19世紀前半～中頃の肥前系碗などが含まれる。このうち7点を図示した。

1は瀬戸系陶器の貧乏徳利であり、頸部から底部が完形である。遺物の時期は近世中頃と推測される。
2は美濃系陶器の灰釉菊花文皿であり、型押し成形され見込みに布目痕が残る。遺物の時期は17世紀後半と推測される。
3は常滑系陶器で搦鉢の口縁から体部片である。体部内面に施すスリ目単位は不明である。遺物の時期は近世後半と推測される。
4は瀬戸・美濃系陶器で搦鉢の口縁から体部片である。体部内面にスリ目は確認されず、全面に鉄釉を施す。遺物の時期は18世紀後半～19世紀前半と推測される。
5は瀬戸系陶器の大型花瓶であり、脚部が完形である。全面に褐釉を施釉するが、暈付は無釉である。遺物の時期は近世と推測される。
6は肥前系磁器の碗で口縁から体部の一部分が欠損する。外面に牡丹文、口唇部内面に雷文、見込みに環状松竹梅が染付される。遺物の時期は19世紀前半と推測される。
7は肥前波佐見系磁器の皿(なます皿)である。内面に草花文、見込みに五弁花文が染付される。遺物の時期は18世紀中～後半と推測される。



第63図 攪乱出土遺物(1/3)

表34 攪乱出土遺物観察表

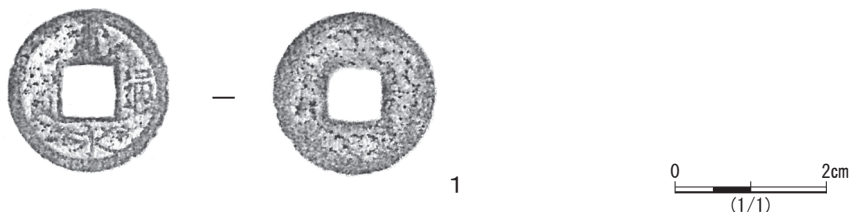
No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	陶器 德利	口径：－ 底径：7.3 残高：18.25 重量：669.0g 残存：頸部～底部略完形	胎土：やや緻密 砂粒 白色粒 焼成：良好 色調：2.5Y6/1黄灰 せいけい：轆轤成形 施釉：灰釉 産地：瀬戸 年代：近世中頃	攪乱一括
2	陶器 皿	口径：(13.0) 高台径：7.7 器高：3.2 重量：65.3g 残存：口縁部～高台部1/3	胎土：やや緻密 砂粒 白色粒 焼成：良好 色調：2.5Y7/3浅黄 2.5Y5/1黄灰 せいけい：型押し成形 内面 布目痕 施釉：体部外面から内面 灰釉 文様：菊花文 産地：美濃 年代：17世紀後半	攪乱一括
3	陶器 播鉢	口径：(－) 底径：－ 残高：5.7 重量：101.4g 残存：口縁部～体部小片	胎土：やや粗 砂礫 白色粒 雲母 焼成：良好 色調：10R5/6赤 5YR3/1黒褐 せいけい：粘土紐巻き上げ→轆轤成形 産地：常滑 年代：近世後半 備考：スリ目単位不明	攪乱一括
4	陶器 播鉢	口径：(－) 底径：－ 残高：8.4 重量：52.1g 残存：口縁部～体部小片	胎土：やや粗 砂粒 焼成：良好 色調：10YR7/3に ぶい黄橙 せいけい：粘土紐巻き上げ→轆轤成形 施釉：内外面 鉄釉 産地：瀬戸・美濃 年代：18 世紀後半～19世紀前半 備考：内面スリ目なし	攪乱一括
5	陶器 花瓶	口径：－ 脚部径：6.4 残高：4.55 重量：108.2g 残存：脚部完形	胎土：やや緻密 砂粒 焼成：良好 色調：2.5Y7/2 灰黄 せいけい：轆轤成形 施釉：内外面 褐釉 産地：瀬戸 年代：近世 備考：畳付無釉	攪乱一括
6	磁器 碗	口径：10.7 高台径：3.7 器高：5.5 重量：130.8g 残存：口縁部・体部一部欠 損	胎土：緻密 砂粒 焼成：良好 色調：N8/灰白 せいけい：轆轤成形 文様：染付 外面 牡丹文 内 面 雷文 見込み 環状松竹梅 産地：肥前 年代：19世紀前半 備考：畳付無釉	攪乱一括
7	磁器 なます皿	口径：(13.4) 高台径：(8.1) 器高：2.65 重量：40.4g 残存：口縁部～高台部1/5	胎土：緻密 砂粒 焼成：良好 色調：N8/1灰白 せいけい：轆轤成形 文様：染付 外面 不明 内面 草花文 見込み 五弁花文 産地：肥前波佐見 年代：18世紀中～後半 備考：畳付無釉	攪乱一括

No. は第63図の遺物番号に対応する

第3項 遺物包含層出土遺物(第64図 表35 図版6－1－1)

遺物は、相模型土師器坏9片12.0g、甕12片38.6g、須恵器甕1片4.4g、瓶類1片15.7g、灰釉陶器碗1片1.6g、在地系土器2片25.3g、陶器鉢類1片19.0g、磁器紅皿1片1.2g、銅製品1点1.1g、礫2点1.0gが出土した。在地系土器は、近世の焼塩壺蓋と近世後期の器種不明土器である。陶器は、近世中～後期の瀬戸系灰釉鉢類である。磁器は、近世後期の肥前系紅皿である。このうち銅製品1点を図示した。

1は銅製の銭貨であり、銭名は「寛永通寶」である。新寛永文銭に分類され、遺物の時期は17世紀後葉以降と推測される。



第64図 遺物包含層出土遺物(1/1)

表35 遺物包含層出土遺物観察表

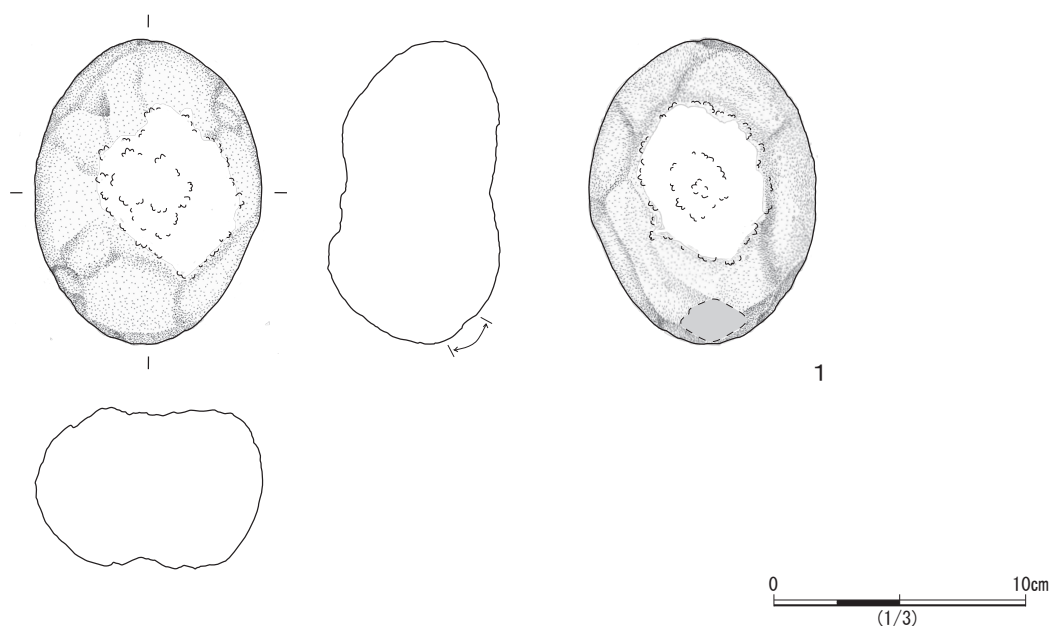
No.	種別	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
	銭名			
1	銅製品 寛永通寶	外径：2.1 内径：1.8 穿孔：0.7×0.7 厚さ：0.08 重量：1.1g 残存：完形	分類：新寛永文銭 文字書体：行書 読み方：対読 遺存状態：良好 年代：近世寛文以降	遺物包含層

No. は第64図の遺物番号に対応する

第4項 遺構確認面出土遺物(第65図 表36 図版6-1-2)

相模型土師器坏5片16.2g、甕26片91.0g、須恵器甕2片8.6g、灰釉陶器碗1片3.4g、陶器2片17.0g、石製品1点659.0gが出土した。灰釉陶器は、高台部の特徴から猿投黒笹90号窯式期に並行するものと推測される。陶器は、中世後半～近世前半の瀬戸系灰釉皿と近世後半の瀬戸・美濃系灰釉瓶類である。このうち石製品1点を図示した。

1は凹み石であり、上下面に凹みを有し、また側面に磨り痕を有する。石材は玄武岩である。



第65図 遺構確認面出土遺物(1/3)

表36 遺構確認面出土遺物観察表

No.	種別	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
	器種			
1	石製品 凹み石	長さ：12.1 幅：9.0 厚さ：6.8 重量：659.0g 残存：完形	石材：玄武岩	遺構確認面

No. は第65図の遺物番号に対応する

第Ⅲ章 まとめ

円蔵村では先祖を同じくする家のつながりを「地類^{じるい}」と呼び、第12次調査地点の当主は、円蔵村近世元和年間(1615)頃の高橋家(屋号オオシモ)に遡る。また元禄13(1700)年の円蔵村を本貫地とする旗本大田氏六代好敬の加増230石について名主高橋伝内・長百姓高橋数右衛門の名がみえ、第15次調査地点の当主は、本家(高橋伝内)に遡る(小室2019)。第12次・15次調査地点付近は近世高橋家の農地経営に伴う隆盛が窺われ、その地割りは宅地開発に至る今日まで受け継がれて原風景が保たれていたものと考えられる。

本調査では主に近世以前の遺構や遺物が発見され、以下に注目すべき点を振り返りまとめとする。

基本土層

本調査地点では、近現代層(第Ⅰ層)の直下に古代～中世の遺物包含層(第Ⅲ層)が堆積し、中世の最上面となる第Ⅱ層や古代の遺物包含層(第Ⅳ層)は、局所的に確認するにとどまった。近現代と中世の土地利用に伴う削平行為の結果、中世の最上面～近世層や古代層が消失したものと考えられる。第Ⅰ層から近世の遺物がやや多く出土し、近現代の生産域から宅地化に至る地業行為が大規模であったことを物語る。

近世

第66図には平成29年度公共下水道布設関連調査第6区・7区の遺構配置図を掲載した(伊藤・田中2019)。市道5157号線の地下には、市道と同じ方向に延び概ね同じ幅の1溝が確認された。1溝の覆土には宝永パミス・スコリアの水平堆積が観察された。また1溝の下位には2溝が存在し、16世紀代の渥美窯系陶器や17世紀後半の瀬戸・美濃窯系黒釉天目碗などが出土している(伊藤・田中2018)。

本調査地点北端部の第1号溝は、上記1溝の南壁部分にあたると考えられる。1溝を含めた全幅は、約5.00mを測ることが確認された。なお上記2溝は、本調査地点では確認されなかった。

出土遺物は17～18世紀代の陶磁器が纏まり、肥前産磁器18点のうち波佐見窯系は6点を数え、瀬戸産貧乏徳利などの出土は、当時の消費者の好みや日常生活の一端を窺い知ることができて興味深い。

第5次調査地点は第15次調査地点の東側隣接地にあたり、17世紀後半～18世紀前半頃の波佐見窯系初期くらわんか碗を含む肥前産磁器を多く含む点が注目され、当時の下ヶ町遺跡における経済水準を考えるうえで留意すべきと指摘され(高橋・田中2001)、直接的には両地点に展開する高橋家の隆盛に帰結する。

中近世

調査区北端部において第2号・4号溝を検出した。第2号溝は第4号溝の北側に位置をずらして掘り込まれたと考えられる。両遺構と市道側の1溝の埋没時期は近世宝永期後であり、一条の区画溝として同時期に機能していたと考えられる。第4号溝から1溝の全幅は約11.50mを測り、第2号溝から1溝の全幅は約9.50mを測ると推測され(第66図)、本来は第1号～2号溝間の鞍部に里道が通っていたと想定される。

本調査地点は円蔵神明神社の横参道へ至る里道の辻にあたり、また、第3号土坑から馬の下顎が出土した。現時点では、第3号土坑が辻を意識して掘られた遺構であるかは不詳であるが、今後辻沿いで馬骨が出土する事例が増加するならば、何らかの儀礼に基づく行為であることが予想される。

第5号土坑は長軸1.81mを測る長方形の遺構であるが、金山遺跡第14次調査地点では同じ平面形状を呈し錢貨を含む第1号土壇墓が確認されている(伊藤・中根2011)。筆者が把握している限りでは長軸1.00m超の長方形土坑の検出事例は4例に止まり、錢貨の出土から土壇墓と捉えているものの人骨の出土は未確認であるため、長方形土坑の性格については今後の類例の発見を待って再検討する必要がある。

中世

第6号・7号溝は市道(大区画溝)に対して概ね直交し、延長距離は約23.50mに達する。その性格は、地割りと側溝機能を併せ持つ区画溝と考えられる。第5号・8号・9号・10号溝は小規模な市道と並走する溝であり、地割りに設けられた側溝であったと考えられる(第66図)。

市道と接する調査区北端部から1区南端部第5号溝辺りまでの距離は約10間(18.20m)を測り、この範囲が当該地では一区画であった可能性が想定される。なお1区側では第1号掘立柱建物が所在し、2区側では横断する溝が増加する様相が認められ、土地利用にも相違が窺われる。

本調査における成果の一つは、中世の第1号掘立柱建物の発見である。確認された西辺の規模は、3間5.18mを測る。北側隣接地の第17次調査地点では建物2棟(渡辺2019)、付近地の明王ヶ谷遺跡第5次調査では建物1棟(押木・齋木2015)が発見され、付近地に中世掘立柱建物が存在することが明らかとなった。

古代～中世

第1号竪穴址は、内土間の構造を呈する「オク」であったと考えられる。第1号竪穴址と隣接する第2号掘立柱建物の西辺の規模は2間6.45mを測り、中世の第1号掘立柱建物より約1.20m長いことが確認された。第2号掘立柱建物の全容は不詳であり推測の域を出ないが、第2号掘立柱建物は居宅であり、また付帯施設の第1号竪穴址を有する建物であった可能性がある。

古代

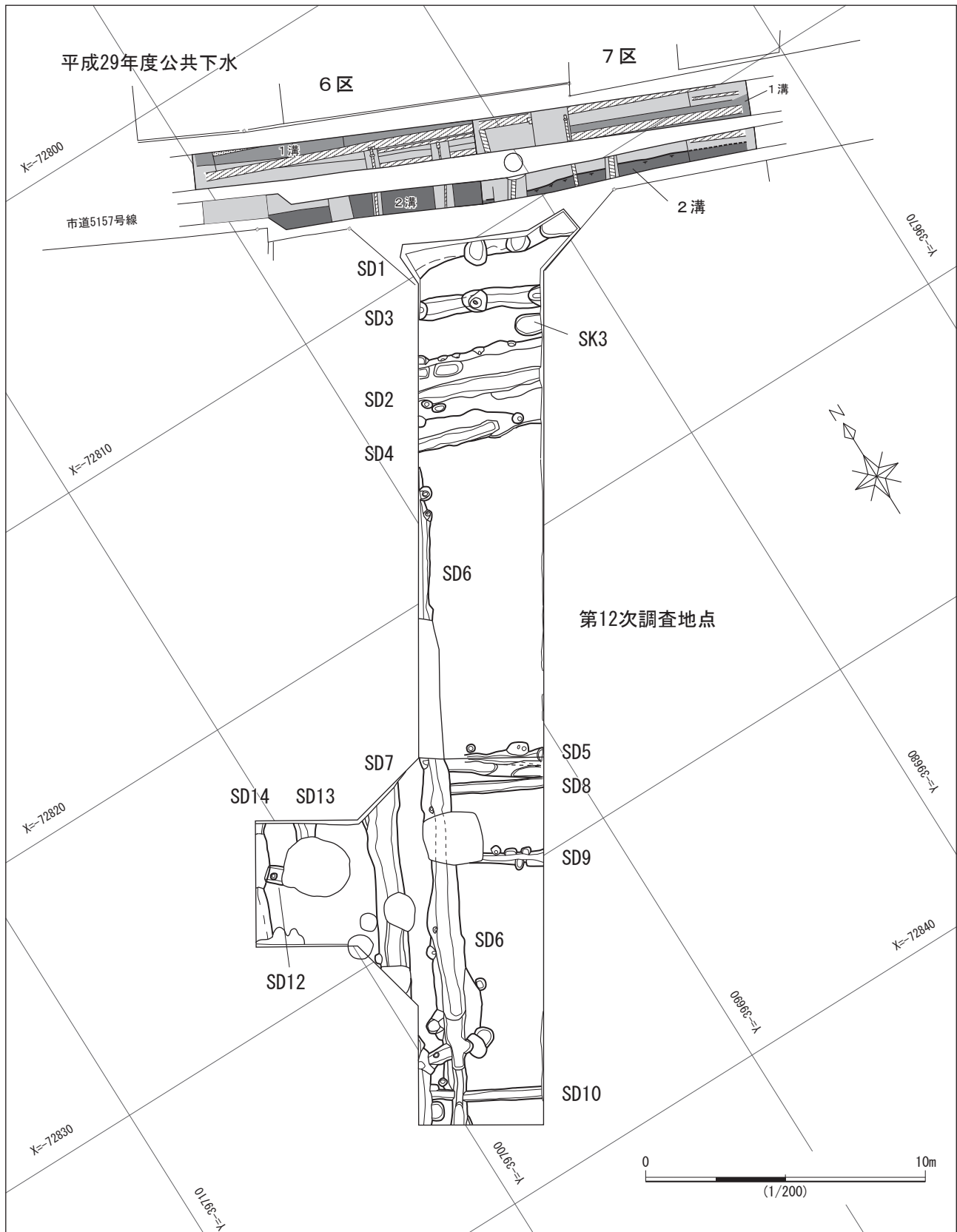
本調査地点付近では、第5次調査地点が9～10世紀代の居住域と建物、第11次調査地点が古墳時代後期～奈良時代の居住域や平安時代初頭以降の生産域(林原2006)、第17次調査地点が土坑や溝が遺構の大半を占める10世紀代の生産域(渡辺2019)にあたることが確認されている。

一方本調査地点では古代の遺構は検出されず、また遺物は相模型土師器177片572.1g、須恵器23片295.9g、灰釉陶器碗7片38.7gに止まった。出土遺物から本調査地点における人的活動は9世紀代を中心とする時期と想定されるが、遺跡密度は非常に低調であり空白域の様相を呈することが確認された。

弥生時代末～古墳時代前期

ミガキを施した壺類や甕の胴部片が出土し、当該期の遺物散布地にあたることが確認された。当該期の集落域は本社B遺跡第1次調査地点から金山遺跡第8次調査地点付近に展開することが既に明らかであるが、さらに北側の本調査地点付近まで広がる可能性がある。

以上、本調査地点は中近世を主体とする円蔵村の変遷に即した内容が確認された。中世の長方形の大型土坑、竪穴址や掘立柱建物の発見は、土地利用の多様性を示唆する結果となった。中近世の大区画溝の幅は約10.00mを測り、また複数の溝からなる地割りの一端を捉えることができた。17世紀後半～18世紀前半頃の肥前産磁器など多くの遺物が出土し、近世円蔵村の村役人の生活水準が高かったことを垣間見ることができた。今後は付近地の調査結果を加味し、円蔵村復元の一助となれば幸いである。



第66図 第12次調査地点付近溝分布図(1/200 下水調査は伊藤・田中2019から転載一部改変し工事図面上で合成した)

引用・参考文献

1. 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県 愛知県史編さん委員会
2. 伊藤俊一・田中万智 2018『公共下水道布設関連調査』平成28年度発掘調査
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告62 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
3. 伊藤俊一・田中万智 2019『公共下水道布設関連調査』平成29年度発掘調査
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告66 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
4. 伊藤俊一・中根由起子 2011『矢畑 金山遺跡Ⅴ』茅ヶ崎市文化振興財団調査報告24
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
5. 伊藤裕偉 1992「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター
6. 押木弘己・齋木秀雄 2015『矢畑明王ヶ谷遺跡 第5次発掘調査報告書』
株式会社斉藤建設 有限会社鎌倉遺跡調査会
7. 梶原勝・鳥越多工摩・金子佳史 2000「第6章 第5節 遺物各論」『小石川牛天神下』第二分冊(遺物編)
都内遺跡調査会 都立文京盲学校遺跡調査班
8. 小室正明 2019『円蔵誌』小室正明
9. 高橋和・田中万智 2001『円蔵 下ヶ町遺跡第5次調査』財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
10. 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XⅤー陶磁器分類編ー』太宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会
11. 中野晴久 1986「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅱ』常滑市教育委員会
12. 林原利明 2006「第2編 円蔵下ヶ町遺跡(第11次調査)」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅰ』茅ヶ崎市教育委員会
13. 渡辺務 2019『円蔵 下ヶ町遺跡第17次発掘調査報告書』株式会社アーク・フィールドワークシステム

第Ⅲ編 円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経緯

茅ヶ崎市円蔵2463番5における土木工事等について、令和4(2022)年2月16日に代理人から埋蔵文化財包蔵地の照会を受けた茅ヶ崎市教育委員会教育推進部社会教育課(以下「社会教育課」という。)は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地の下ヶ町遺跡(神奈川県・茅ヶ崎市埋蔵文化財包蔵地台帳No.184遺跡)の包蔵地内であることから文化財保護法(以下「法」という。)第93条第1項に基づく届出を求めた。

これを受けて事業主(個人)から令和4年2月18日付けで「法第93条第1項に基づく届出」が提出された。周辺の状況から現在の土木工事計画が遺跡に影響を与えると判断し、事業主(個人)に対し遺跡の現状保存のための設計変更等の検討を依頼した。その後、検討結果を踏まえ事業主(個人)と協議を行い、個人住宅の一部については記録保存のための事前発掘調査を実施することで調整を行った。調査面積は、事業面積100.13㎡に対し20.00㎡であり、残りの部分については原則現状保存とした。調査は、茅ヶ崎市教育委員会が実施することで協議をまとめ令和4年3月17日から実施することとした。

表37 発掘調査に係わる文書一覧表

	文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
1	埋蔵文化財所在有無の照会					
	所在有無の照会	-	令和4年2月16日	代理人	市教委	
2	文化財保護法 第93条第1項に基づく土木工事の届出					
	土木工事の届出	-	令和4年2月18日	事業主	県教育長	市教委経由
	発掘指示の通知	文遺第 61095号	令和4年3月9日	県教育長	事業主	市教委経由
3	出土品の手続き					
	埋蔵物の発見届	-	令和4年4月1日	市教委	市警察署長	
	埋蔵文化財保管証の提出	-	令和4年4月1日	市教委	県教育長	
	文化財認定と帰属の通知	文遺第 51002号	令和4年4月19日	県教育長	市教委	

* 名称の略記

・ 県教育長：神奈川県教育委員会教育長
・ 市警察署長：茅ヶ崎警察署長

・ 市教育長：茅ヶ崎市教育委員会教育長

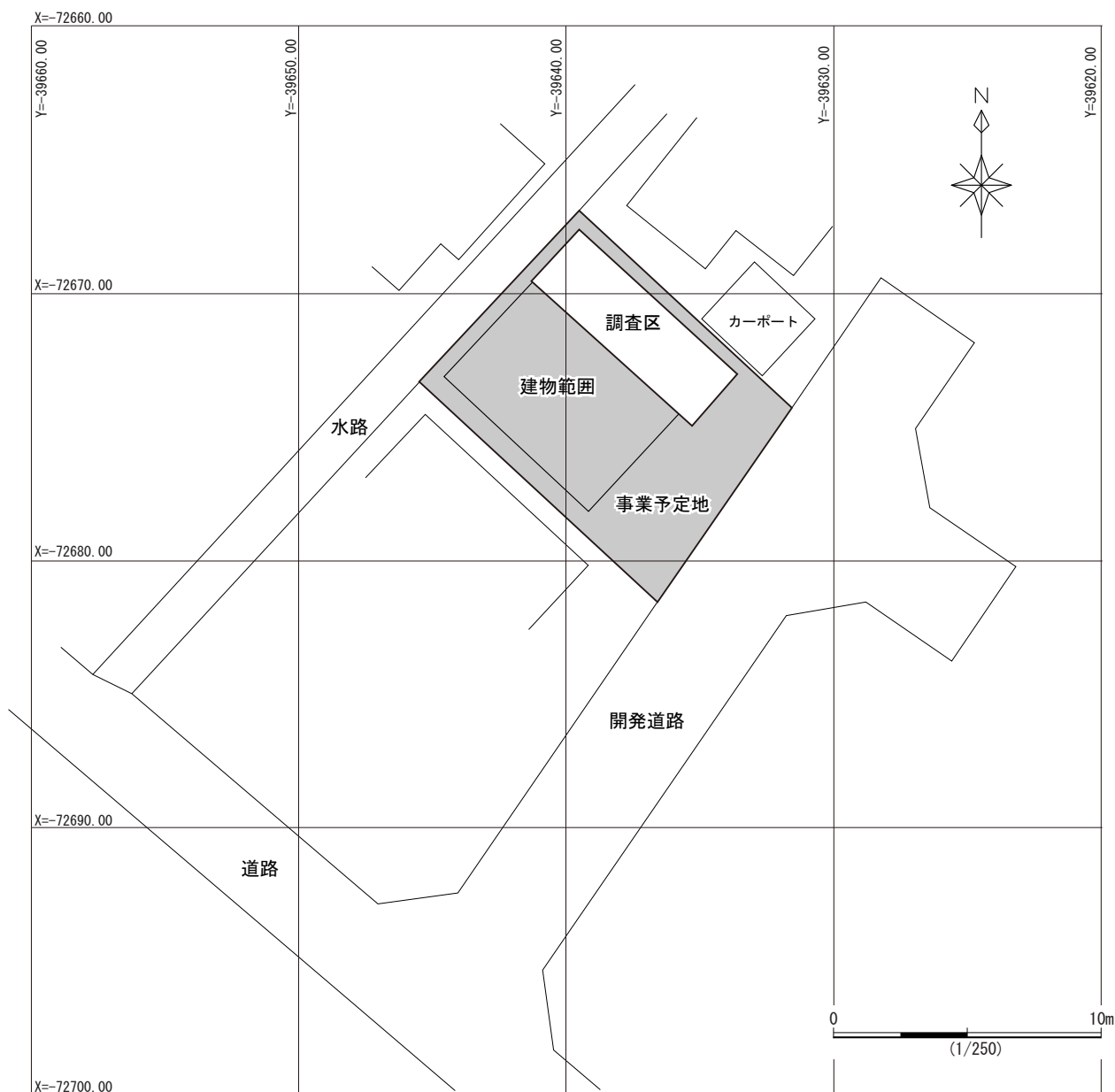
・ 市教委：茅ヶ崎市教育委員会

第2節 調査区の設定と調査の方法

第1項 調査区の設定

調査は事業地南東部の建物予定範囲を対象に実施した。調査区は隣地宅地との安全を考慮し、北側土地境界から0.50m、東側土地境界から0.60m分を後退し、事業予定地内の北東部に2.50m×8.00mの調査区を設定して実施した。最終的な調査面積は20.00㎡となった。調査にあたっては、調査範囲全体に対して2.00mグリッドを設定し、グリッドの方眼は国家座標に一致させた。グリッドは北西隅を基準として南方方向に向かってA、B、C…、北辺が東方向に向かって1、2、3…となるよう設定し呼称した。

測量点は、調査区の南側に所在する茅ヶ崎市4級基準点No.A94(X=-72698.353m、Y=-39646.022m、H=5.816m)を移設し、事業地内に1箇所(X=-72675.257m、Y=-39632.435m、H=5.846m)を設定した。



第67図 調査区位置図(1/250)

第2項 調査の方法

土層の掘り下げは、客土と宝永火山灰を含む第Ⅰ層を重機、近世～古代の包含層と考えられる第Ⅱ・Ⅲ層、地山層との漸位層である第Ⅳ層を重機と人力を併用して掘削し、それ以下については人力で掘削した。遺構確認は第Ⅱ～Ⅴ層上面で行い、残土は事業地内に仮置きした。遺構調査終了時には、高所作業車を使用して全景写真を撮影した。

出土遺物は客土～第Ⅰ層掘削時においては一括、それ以下については基本的に遺構毎に一括で取り上げた。また、概ね5.0cm以上の遺物や特殊な遺物等は必要に応じて点上げ、まとまって出土した遺物については微細図を作成した。

遺構の平面図はトータルステーションを用いて縮尺1/20、微細図は遣り方測量で1/10で作成し、断面図は縮尺1/20ですべての遺構および調査区壁断面について作成した。その他の記録については必要に応じて適宜作成した。

第3節 調査の体制と経過

第1項 調査の体制

現地調査および整理作業、報告書刊行作業は以下の体制、期間で行った。(五十音順、敬称略)。

調査体制

①調査地点 神奈川県茅ヶ崎市円蔵字下ヶ町2463番5

②調査目的 個人住宅新築工事に伴う記録保存のための発掘調査

③調査期間 現地調査：令和4(2022)年3月17日から同年3月29日

整理・報告書作成：令和4年4月1日から令和7(2025)年3月31日

④調査体制

現地調査：担当 三戸智也 調査員 大久保日向子 高橋桃子 田中万智

調査補助員 大竹恵子 内田恵子 高橋浩子

調査支援 亀井進 白井広明 武井博 宮下秀之(株式会社カナコー)

⑤資料整理：担当 三戸

整理作業員 及川利加子 大屋信子 澤村奈穂子 清水三恵 高橋桃子 山下恒子

遺構図面修正・トレース：高橋

⑥報告書作成：担当 三戸

作業員 伊藤俊一 大屋 澤村 高橋美智子 田中

挿図作成：伊藤 田中 三戸

遺物実測図・拓影図作成・トレース：大屋 高橋 観察表作成：伊藤

遺構写真：三戸 遺物写真：澤村 田中

写真図版作成：伊藤 三戸

⑦助言・協力者 大村浩司 加藤大二郎 株式会社カナコー

第2項 調査の経過

近隣への事前説明を行った後、令和4年3月17日から現地調査を開始した。

3月17日は、準備工として調査地点の安全管理対策および機材の搬入を行い、同時に仮原点への座標値移動を行った。その後事業設計図をもとに調査区を設定し、光学測量により調査区周辺図を作成した。

重機による表土掘削を行った後、人力により掘り下げて遺構確認を行った結果、近世の第1号溝や第2号・4号溝他を検出し、各溝の掘削を開始した。

3月22日は第2号溝を完掘し、各図面の作成および写真撮影を完了した。また第4号溝の掘り下げ過程で第1号集石を検出した。

3月23日は第1a号溝を完掘して平面図や写真撮影をした後、第1b号溝の掘削を開始した。また第1号竪穴址の掘削を開始した。なお第1b号溝掘削時は安全を考慮し、調査区北西壁の流土防止工事を行った。

3月24日は第1号集石の掘削・精査、微細図を作成した。その後第1b号溝・第1号集石や第4号土坑を完掘し、各図面の作成および写真撮影を完了した。第4号溝の掘り下げ過程で第1号土壙墓を検出した。

3月25日は第1号土壙墓の精査、微細図作成および骨の取り上げを行い、随時写真撮影をした。

3月28日は第1号土壙墓を完掘して平面図や写真撮影をした後、第2号・3号土坑、第4号溝や第1号竪穴址を完掘し、各図面の作成および写真撮影を完了した。

各遺構の完掘後、調査地点の航空写真撮影などの全体写真撮影を行った。

3月29日は埋め戻した後、調査地点の現況回復作業や機材の撤収作業を行い、現地調査を終了した。

発掘調査中は、社会教育課の大村浩司氏、加藤大二郎氏の多大なる協力を得た。

第3項 整理作業

出土品整理は令和4年4月1日から令和7年3月31日まで茅ヶ崎市文化財調査事務所で三戸智也が中心となり適宜実施し、報告書を刊行した。なお、現地で付した遺構名・番号については遺物注記および本書作成にあたり表38の通り変更した。

表38 遺構名称変更一覧表

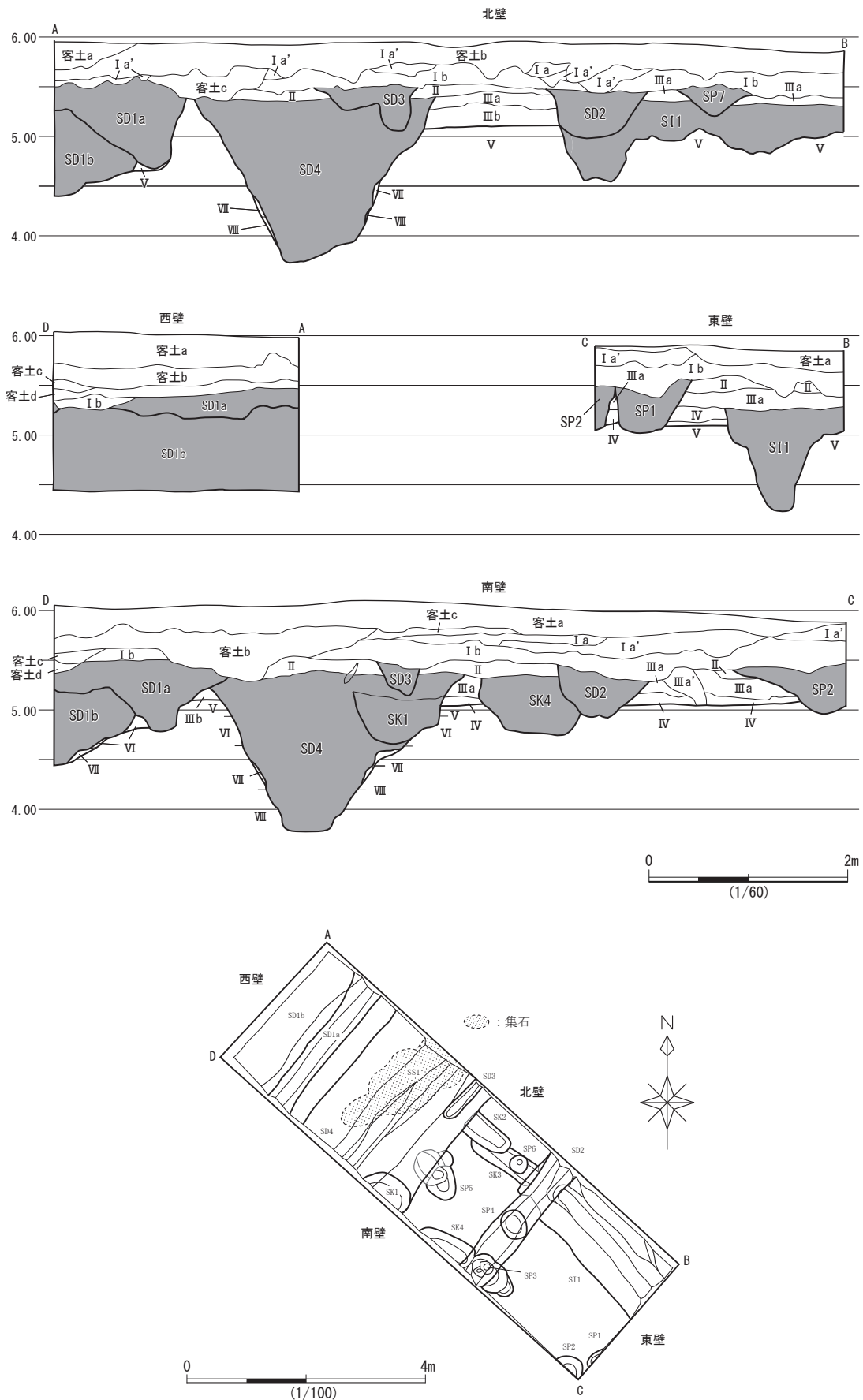
本書掲載遺構名称		原図記載遺構名称
第4号溝	←	3号溝
第4号土坑	←	4号溝
第3号土坑	←	5号溝
第3号溝	←	6号溝
第2号土坑	←	7号溝
第1号土壙墓	←	1号土坑
第1号竪穴址	←	1号竪穴状遺構
遺構名称は原則として現地調査時の番号を使用し、変更が必要になったものは本表にまとめた。		

第4節 基本土層

基本土層は、調査区壁の土層を図示した。

土層は地表から順に、既存建物の解体土と考えられる客土a、宅地造成時の盛土・整地層と考えられる客土b・cがあり、第Ⅰ層が宝永パミスを含む近世後半以降の堆積土、第Ⅱ層が近世から中世の堆積土、第Ⅲ層が古代から古墳時代の堆積土、第Ⅳ層が古墳時代以前の堆積土、第Ⅴ層以下が無遺物の地山層と考えられる。以下、各層の特徴について記述する。

客土a：暗褐色土（10YR3/3）	しまり極めて強い。粘性ややあり。
客土b：暗褐色土（10YR3/3）	しまり強い。粘性あり。ロームブロックを含む。礫を含む。
客土c：黄褐色土（10YR4/6）	しまりあり。粘性あり。
客土d：黒褐色土（10YR2/1）	しまりあり。粘性あり。
第Ⅰa層：暗緑灰色土（5G4/1）	しまり強い。粘性少ない。宝永パミス径5.0mmを含む。
第Ⅰa'層：緑灰色土（5G6/1）	しまり強い。粘性少ない。宝永パミス径5.0mmを含む。
第Ⅰb層：灰黄褐色土（10YR4/2）	しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径5.0mmを含む。
第Ⅱ層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）	しまりやや強い。粘性ややあり。橙色スコリア、 白色パミス径2.0mmを少量含む。
第Ⅲa層：暗褐色土（10YR3/3）	しまりやや強い。粘性あり。橙色スコリア径2.0mmを含む。
第Ⅲa'層：暗褐色土（10YR3/3）	第Ⅲa層に似るが黒味強い。根の影響か。
第Ⅲb層：暗褐色土（10YR3/4）	しまりやや強い。粘性あり。橙色スコリア径2.0mmを多く含む。
第Ⅳ層：褐色土（10YR4/4）	しまりやや強い。粘性あり。第Ⅲ層と第Ⅴ層の漸移層。
第Ⅴ層：黄褐色土（10YR5/6）	しまり強い。粘性ややあり。白色粒子を含む。
第Ⅵ層：褐色土（10YR4/4）	しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径2.0mmを含む。
第Ⅶ層：明黄褐色土（10YR6/6）	しまりあり。粘性強い。橙色スコリア径2.0mmを含む。
第Ⅷ層：明黄褐色土（10YR7/6）	しまりあり。粘性強い。鉄分を多く含む。第Ⅶ層より粘土質。

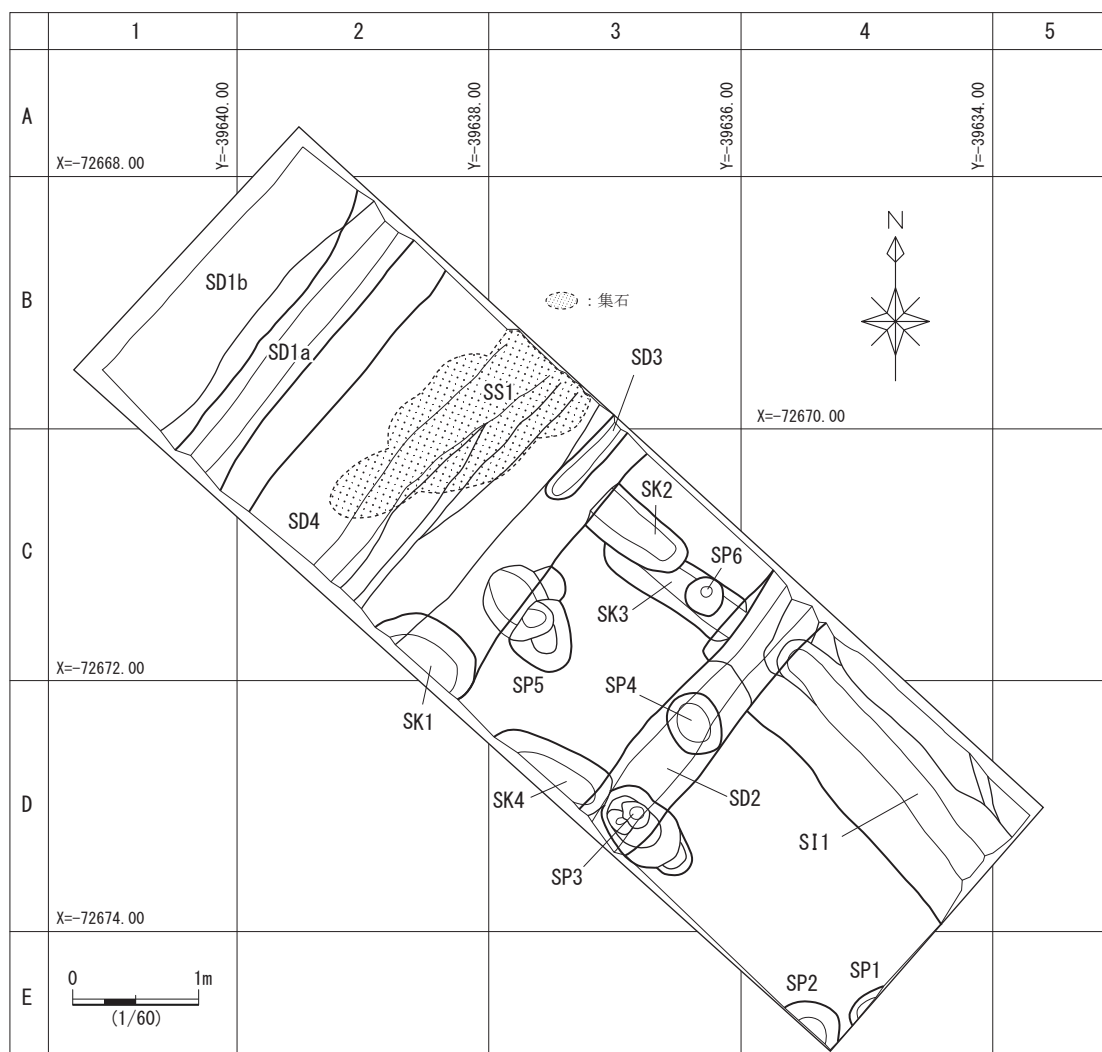


第68図 基本土層図(1/60・1/100)

第Ⅱ章 発見された遺構と遺物

本調査では、古代から近世の遺構や遺物が発見された。遺構は古代～中世のピット3穴、中世の竪穴址1基、中世～近世の溝1条、土坑3基、ピット1穴、近世の溝3条、集石1基、土墳墓1基、ピット3穴を検出した。このほか調査区北壁断面に近世のピット1穴(第68図SP7)を確認した。中近世の遺構密度に比して、古代～中世の遺構は散見される程度であることが窺われる。

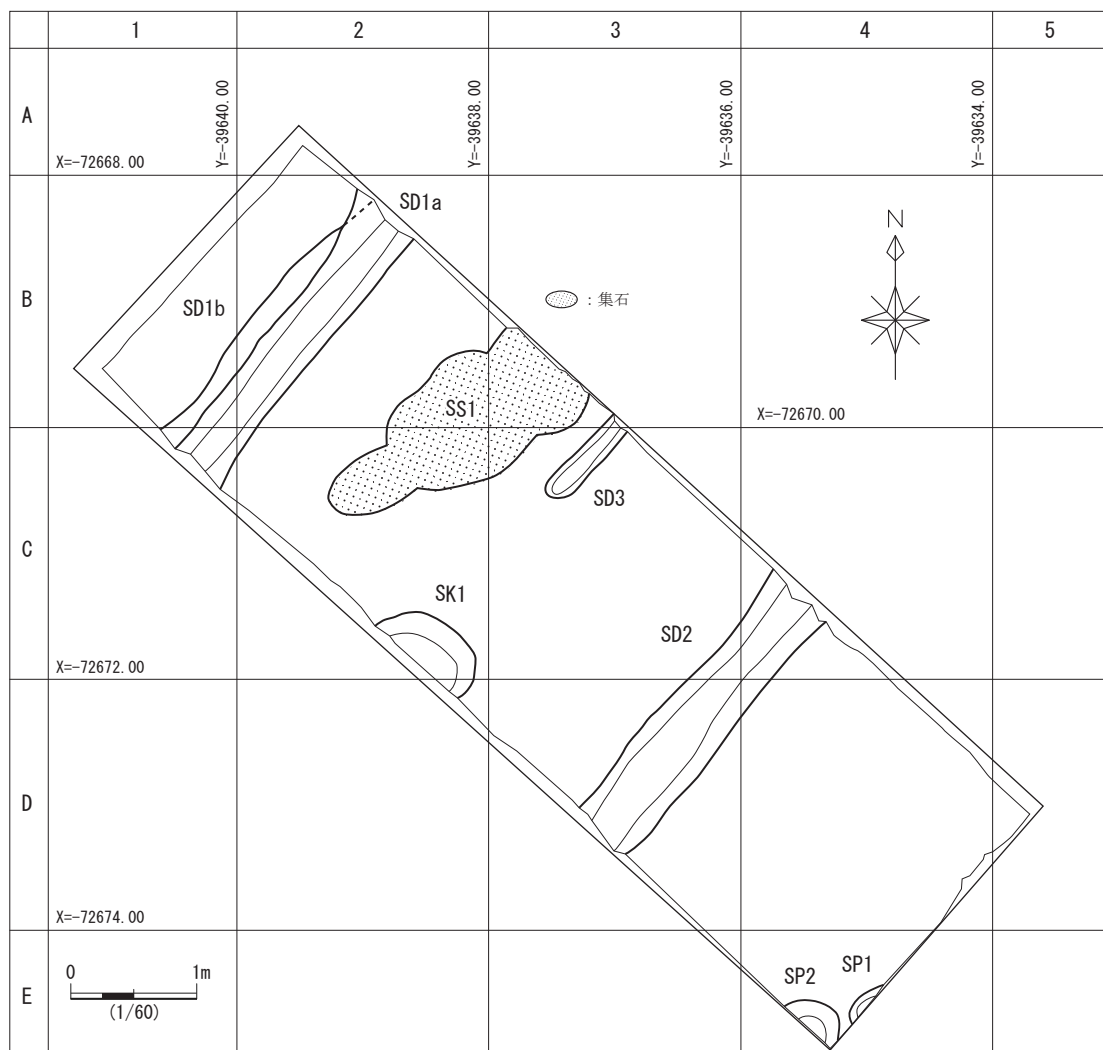
出土遺物は整理箱2箱分が出土した。総量は土師器162片397.4g、須恵器24片733.7g、灰釉陶器1片2.7g、かわらけ5片58.5g、陶器16片881.5g、青磁1片1.3g、磁器5片41.2g、鉄製品2点114.3g、石製品2点110.6g、礫123点18,735.8g、人骨5点139.9g、獣骨21点16.1gなどである。量としては、集石から出土した礫以外では土師器片が最も多いが、いずれも細片であった。また青磁片や12～13世紀代の陶器が少量出土し、中世における人的活動の痕跡を窺い知る資料となった。



第69図 遺構配置図(1/60)

第1節 近世

第Ⅱ～Ⅲ層上面において溝3条、土壇墓1基、集石1基、ピット3穴検出した。各溝やピットの覆土には宝永火山灰を含むことから、近世後半以降に埋没したと考えられる。なお集石と土壇墓は中近世と推測される第4号溝の埋没段階で掘られた遺構であり、近世の遺構とした。



第70図 近世遺構配置図(1/60)

第1項 溝

第1a号溝(第69～71図 図版9-2～4)

第1a号溝はB・C1・2グリッドに位置する。遺構は南西―北東方向に調査区を横断し、北東側と南西側は調査区外になる。第1b号溝および第4号溝と重複し、新旧関係は本遺構が最も新しい。また第1b号溝の埋没後に掘られたと考えられる。座標軸と延長方向との偏差は、概ねN-39.5°-E東偏を指す。残存規模は、長さ2.50m、幅0.39～0.60m、深さ29.9～47.2cmを測る。底面は2.0cm程度の凹凸はあるが概ね平坦である。また北東端部から南西端部へ約9.8cm下降傾斜する。断面形状は、不整なV字状を呈する。覆土中に宝永パミス・スコリアを多く含む。溝の埋没後に第Ib層が堆積し、また上面の一部には、第Ia層の掘り込みが観察された。

遺物は肥前産染付碗の体部2片(第71図第1a号溝P1・P2)が出土した。P1は18世紀中頃～後半、P2はこんにやく印判で17世紀末～18世紀前半頃と推測される。いずれも細片のため図示には至らなかった。

遺構の時期は、覆土中に宝永火山灰を多く含み、18世紀前半以降と推測される。

第1b号溝(第69～72図 表39 図版9-3・4、図版13-1-1)

第1b号溝はA～C1・2グリッドに位置する。遺構は調査区西壁に沿って南西―北東方向に調査区を横断し、北東側、南西側と遺構の底面から西壁部分は調査区外になる。第1a号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。遺構の東壁上半部は、第1a号溝の掘り込みにより消失していた。座標軸と遺構東壁との偏差は、概ねN-43.0°-E東偏を指す。残存規模は、長さ2.48m、幅0.57～0.73m、深さ30.2～35.2cmを測る。底面は約5.0cmの起伏を有するが、概ね平坦である。断面形状は、底面から西壁の立ち上がりが未確認であるため不詳である。覆土の最上位に宝永パミスを少量含む。

遺物は、相模型土師器坏1片4.4g、須恵器坏1片1.2g、甕1片140.7g、陶器3片208.0g、磁器1片8.9g、礫5点1,090.8gが出土し、このうち4点を図示した。

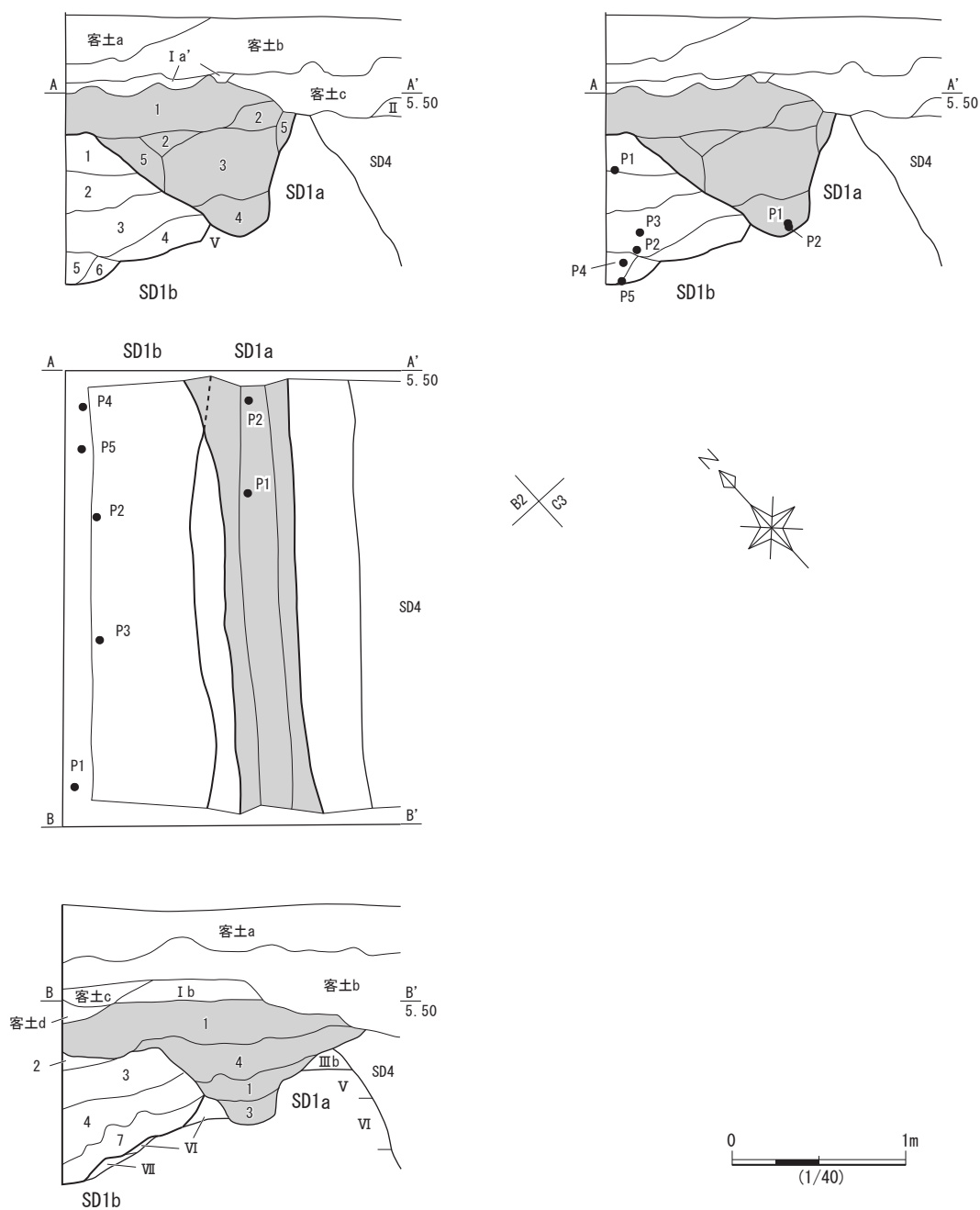
1は瀬戸産播鉢の口縁～体部小片である。体部内面に櫛描き6条1単位のすり目を施す。縁带上端部は磨滅しているが、これは転用による磨り痕の可能性もある。遺物の時期は、近世初頭～中頃と推測される。

2は瀬戸産卸皿の底部小片である。見込みには卸目を施し、外周部分に灰釉が残存する。遺物の時期は、中世と推測される。3は常滑産こね鉢の体部片を再利用した転用陶片であり、外面と側面の3面に使用痕が観察された。遺物の時期は、中世と推測される。4は肥前産染付碗の体部～高台部片であり、見込みに五弁花文を施す。遺物の時期は、18世紀前半頃と推測される。

遺構の時期は、覆土最深部から18世紀前半頃の肥前産染付碗(P4)が出土し、18世紀前半頃と推測される。

第2号溝(第69・70・73・74図 表40 図版10-1、図版13-1-2)

第2号溝はC・D3・4グリッドに位置する。遺構は南西―北東方向に調査区を横断し、北東側と南西側は調査区外になる。座標軸と遺構東壁との偏差は、N-39°-E東偏を指す。残存規模は、長さ2.50m、幅0.47～0.60m、深さ12.6～16.8cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。底面は約5.0cmの起伏を有するが、概ね平坦である。



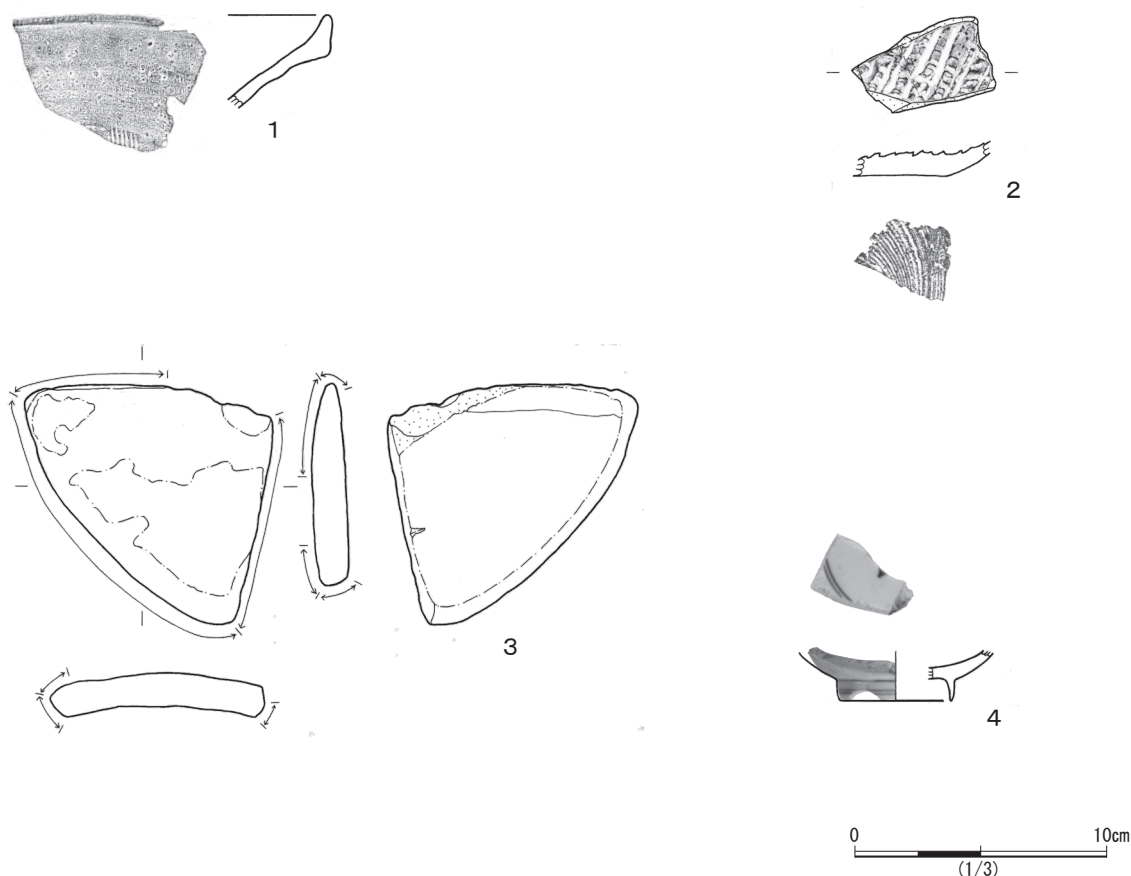
第1a号溝

- | | |
|--------------------|--|
| 第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまり弱い。粘性少ない。第I b層に似るがしまり弱く宝永パミス、スコリアを多く含む。 |
| 第2層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまり弱い。粘性少ない。宝永パミス、スコリアを多く含む。 |
| 第3層：黒褐色土(10YR2/1) | 宝永火山灰主体層。 |
| 第4層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径3.0mmを少量含む。 |
| 第5層：灰黄褐色土(10YR4/2) | 第4層に似るがしまり増す。 |

第1b号溝

- | | |
|----------------------|----------------------------------|
| 第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまりあり。粘性少ない。上部に宝永パミス径5.0mmを少量含む。 |
| 第2層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまりあり。粘性ややあり。炭化物を少量含む。 |
| 第3層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまりやや強い。粘性ややあり。 |
| 第4層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまりあり。粘性ややあり。第V層土ブロックを少量含む。 |
| 第5層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) | しまりあり。粘性ややあり。白色パミス径3.0mmを少量含む。 |
| 第6層：褐色土(10YR4/4) | しまりあり。粘性あり。第V層土ブロックを多く含む。 |
| 第7層：灰黄褐色土(10YR4/2) | 第4層に比べ粘性強く第V層土ブロック増す。 |

第71図 第1a号・1b号溝遺物分布(1/40)



第72図 第1b号溝出土遺物(1/3)

表39 第1b号溝出土遺物観察表

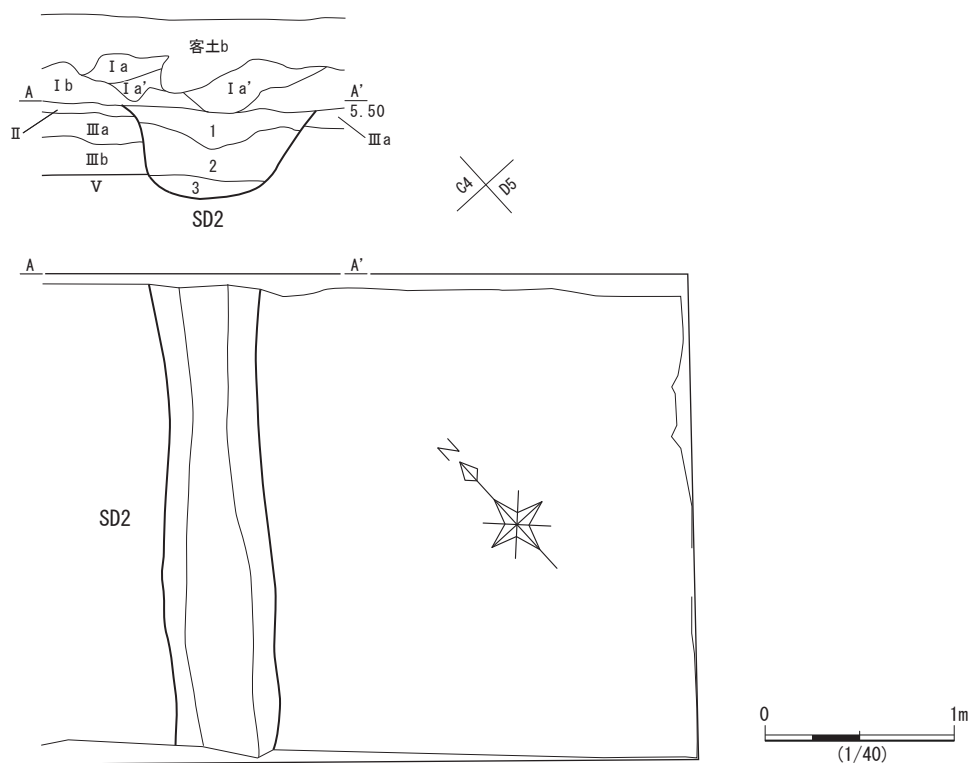
No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	陶器 挿鉢	口径：(-) 底径：- 残高：3.7 重量：38.1g 残存：口縁～体部小片	胎土：緻密 砂粒 白色粒 焼成：良好 色調：内外面 7.5YR6/2灰褐 胎土 10YR7/4こぶい黄橙 せいけい：粘土紐巻き上げ→轆轤成形 体部内面 櫛描き6条1単位のスリ目 施釉：内外面 鉄釉 産地：瀬戸年代：近世初頭～中頃 備考：縁带上端部磨滅し転用による磨り痕の可能性あり	SD1b P1
2	陶器 卸皿	口径：- 底径：(-) 残高：1.4 重量：21.8g 残存：底部小片	胎土：緻密 砂粒 焼成：良好 色調：胎土 2.5Y7/2灰黄 せいけい：轆轤成形 底部外面 回転糸切り 見込み：卸目 釉：見込み外周 灰釉 産地：瀬戸年代：中世	SD1b P5
3	陶器 こね鉢 転用陶片	長さ：9.55 幅：9.85 厚さ：1.4 重量：148.1g 残存：口縁～体部小片	産地：常滑 年代：中世 備考：外面1面と側面3面使用	SD1b P3
4	磁器 碗	口径：- 高台径：(4.4) 残高：1.9 重量：8.9g 残存：体部～高台部1/4	胎土：精良 砂粒 焼成：堅緻 色調：胎土 白 せいけい：轆轤成形 絵付：染付 文様：見込み 二重圏線・五弁花文 高台部外面 二重圏線 産地：肥前 年代：18世紀前半	SD1b P4

No. は第72図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第71図中の遺物番号に対応する

遺物は相模型土師器坏2片5.9g、甕5片6.4g、陶器碗1片4.1g、鉄製品1点11.7gが出土し、このうち鉄製品1点を図示した。

1は角釘と推測される。胴部片であり全長は不詳であるが、幅と厚さは0.50cm以上、原寸で2寸弱を測り、3寸以上の大型の個体が想定される。

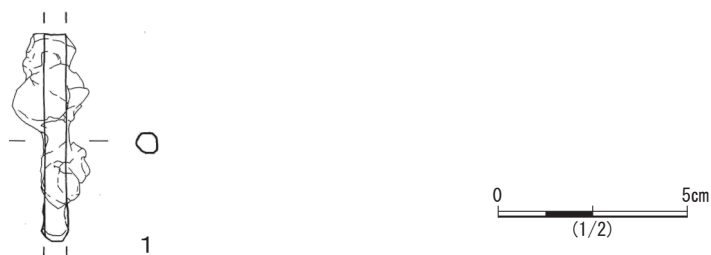
遺構の時期は、覆土の特徴から18世紀代以降と推測される。



第2号溝

- 第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径3.0mmを含む。
- 第2層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまりややあり。粘性少ない。宝永パミス径3.0mm、褐色土ブロックを少量含む。
- 第3層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまり弱い。粘性少ない。宝永パミス径2.0mmを少量含む。

第73図 第2号溝(1/40)



第74図 第2号溝出土遺物(1/2)

表40 第2号溝出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	鉄製品 角釘	長さ：(5.50) 幅：0.60 厚さ：0.55 重量：11.7g 残存：不詳	備考：両端部欠損	SD2 覆土一括

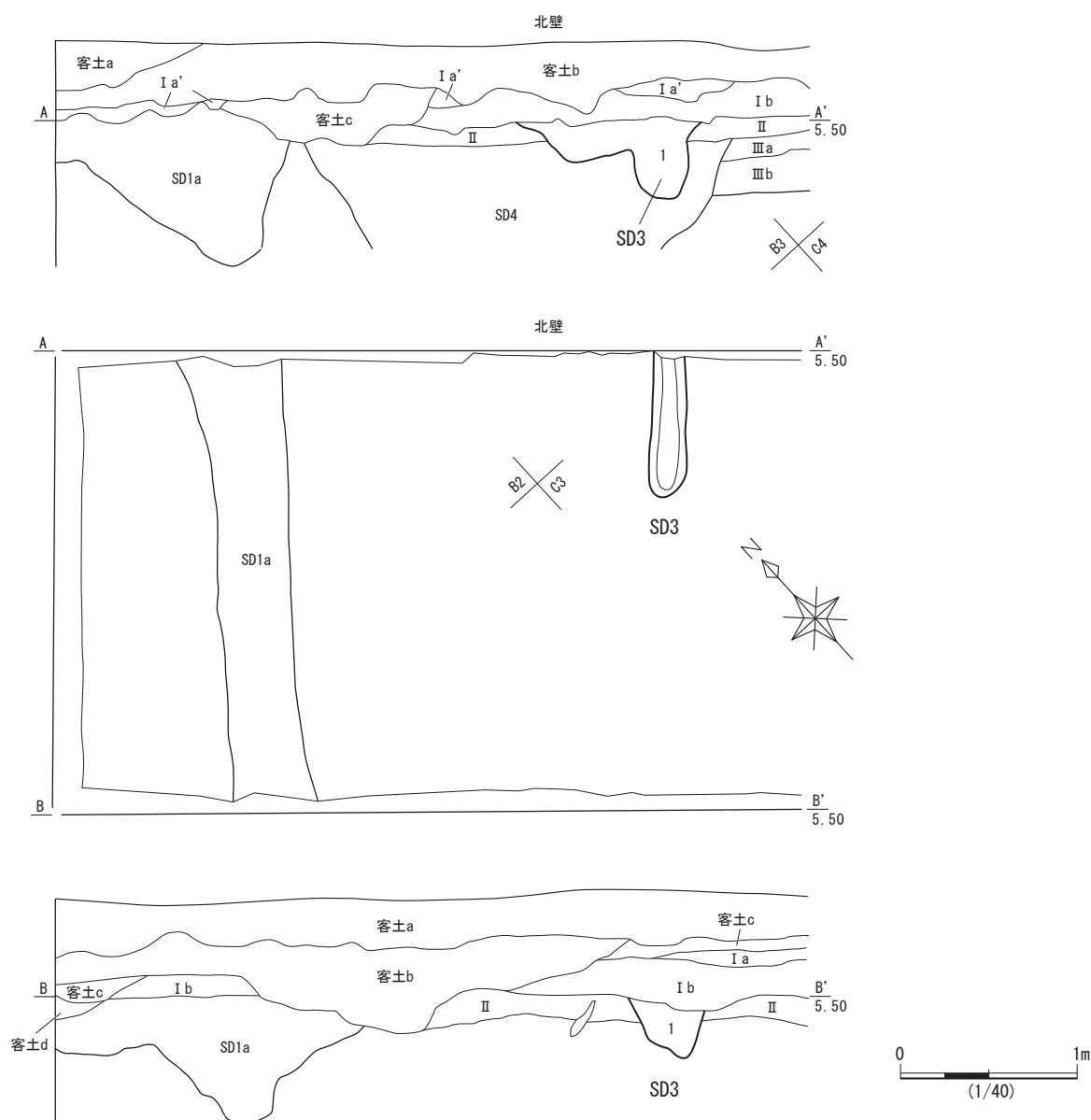
No. は第74図の遺物番号に対応する

第3号溝(第69・70・75図 図版11-1)

第3号溝は、B・C3グリッドに位置する。調査区中央部に遺構の南端部を有し、北東方向へ伸びた後調査区外となる。第Ⅱ層を掘り込むことを確認した。溝南側延長上の南壁断面には、概ね同じ高さと同様の掘り込みが観察され、断続的に南側へ延びるものと考えられる。座標軸と遺構主軸方向との偏差は、N-42.5°-E東偏を指す。残存規模は、長さ0.82m、幅0.18~0.21m、深さ3.3~4.8cmを測り、概ね溝の底面にあたり、約5.0cmの起伏を有するが概ね平坦である。断面形状は不整な逆台形またはU字形を呈する。遺構の性格は、両壁断面の形状や断続的に南壁断面へ接続することが想定され、畝である可能性がある。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、覆土中に宝永パミスを含み、18世紀代以降と推測される。



第3号溝

第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまりややあり。粘性なし。宝永パミス径5.0mmを多く含む。

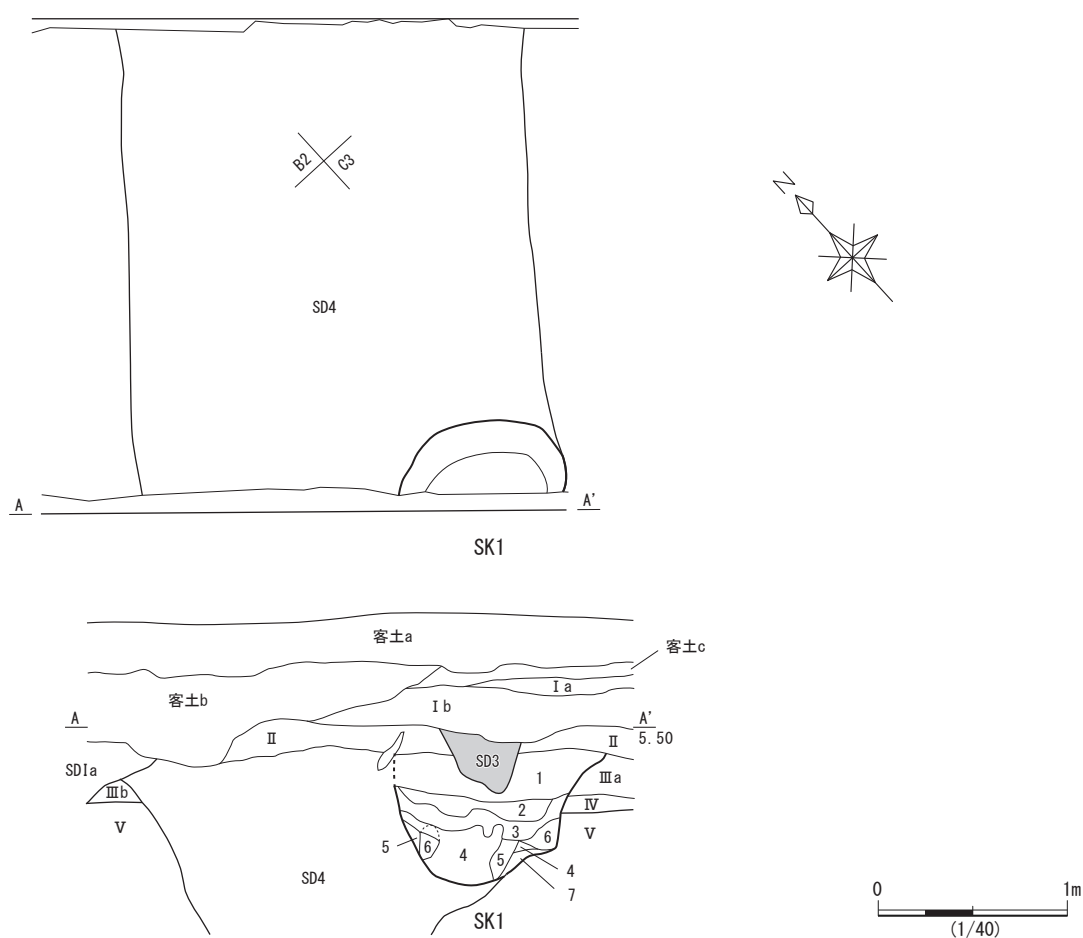
第75図 第3号溝(1/40)

第2項 土墳墓

第1号土墳墓(第69・70・76・77図 図版10-2~4)

第1号土墳墓は、C・D2グリッドに位置する。調査区中央部南壁沿いで検出した。遺構の南半部は調査区外にあたる。第4号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。南壁土層断面の観察によれば、第4号溝が完全に埋没する前のいわば凹地であった段階で第1号土墳墓が掘られ、また遺構の上位には第Ⅱ層が堆積することを確認した。平面形状は楕円形を呈すると推測される。残存規模は、長軸0.87m、短軸0.39mを測る。断面形状は不整な逆台形または挿鉢状を呈し、深さ4.1~19.3cmの中端を有して最深部は36.4cmを測る。

遺構の時期は、第4号溝の埋没時期にあたり近世前半頃と推測される。



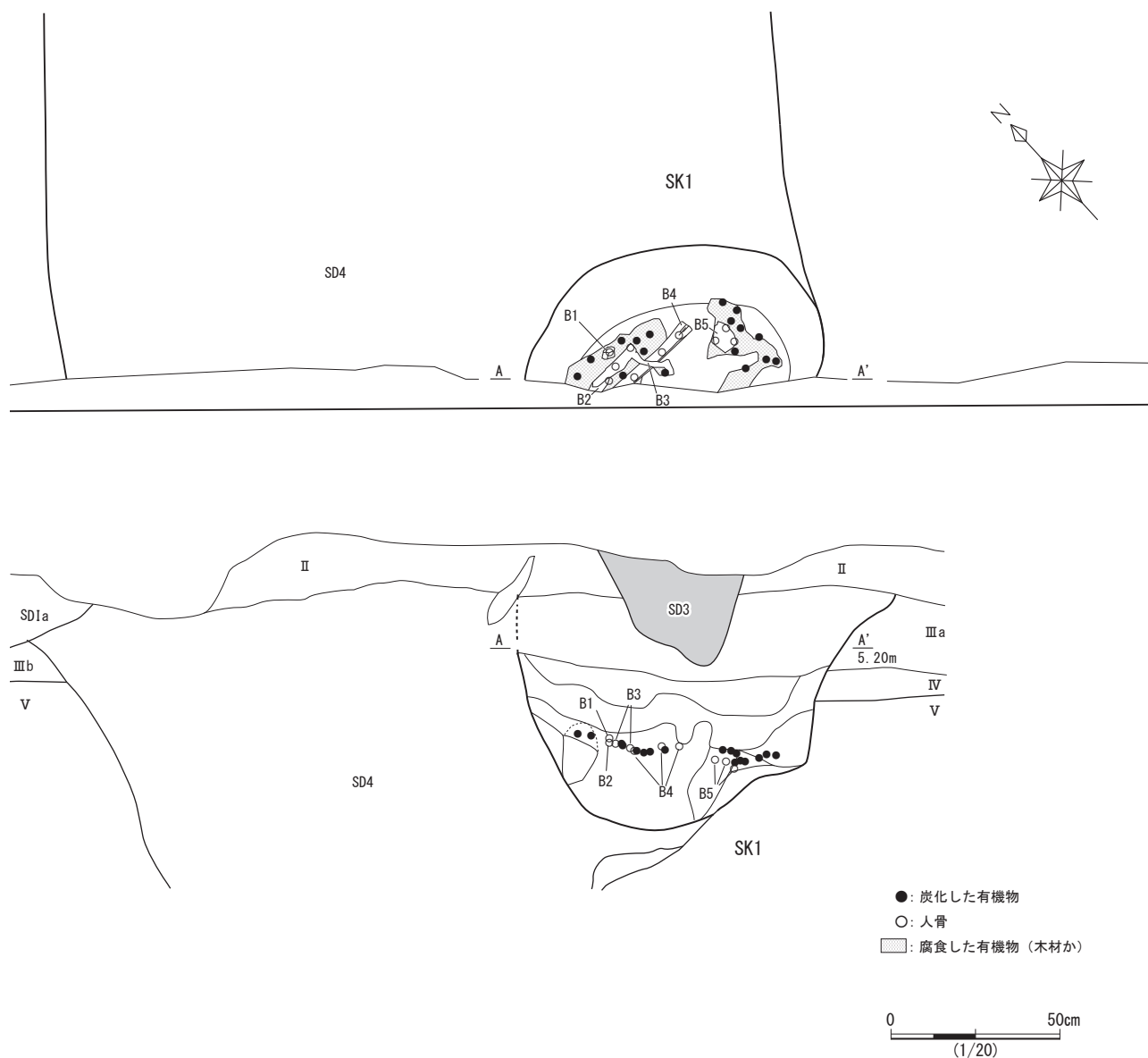
第1号土墳墓

- | | |
|----------------------|---|
| 第1層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) | しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア径1.0mmを少量含む。白色パミス径2.0mmを少量含む。 |
| 第2層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) | しまりあり。粘性ややあり。橙色スコリア径1.0mmを少量含む。白色パミス径2.0mmを少量含む。炭化物を含む。 |
| 第3層：灰黄褐色土(10YR4/2) | しまり弱い。粘性ややあり。骨・腐食した有機物を含む。 |
| 第4層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) | しまりあり。粘性ややあり。橙色スコリア、白色パミス径1.0mmをわずかに含む。 |
| 第5層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) | しまり極めて強い。粘性ややあり。白色パミス径3.0mmを少量含む。 |
| 第6層：褐色土(10YR4/4) | しまり強い。粘性あり。第Ⅴ層に似る。 |
| 第7層：にぶい黄褐色土(10YR5/4) | しまりあり。粘性あり。第Ⅵ層土ブロックを多く含む。 |

第76図 第1号土墳墓(1/40)

遺物は相模型土師器坏1片0.6g、甕1片0.3g、須恵器坏1片2.6g、甕1片9.9g、礫2点16.6g、人骨5点139.9gが出土したが、図示には至らなかった。遺構の時期を示す遺物はなかった。

土坑の底面から約20.0cm上の高さから骨とともに炭化した有機物が纏まって検出された。骨を検出した標高は約4.8mであり、東側がやや低くなる。一部の骨(第77図B4)の残存状況は良好であったが、それ以外の骨や有機物はもろく形を遺すのが困難であった。なおB4は、脚部片の可能性はある。



第77図 第1号土坑墓遺物分布(1/20)

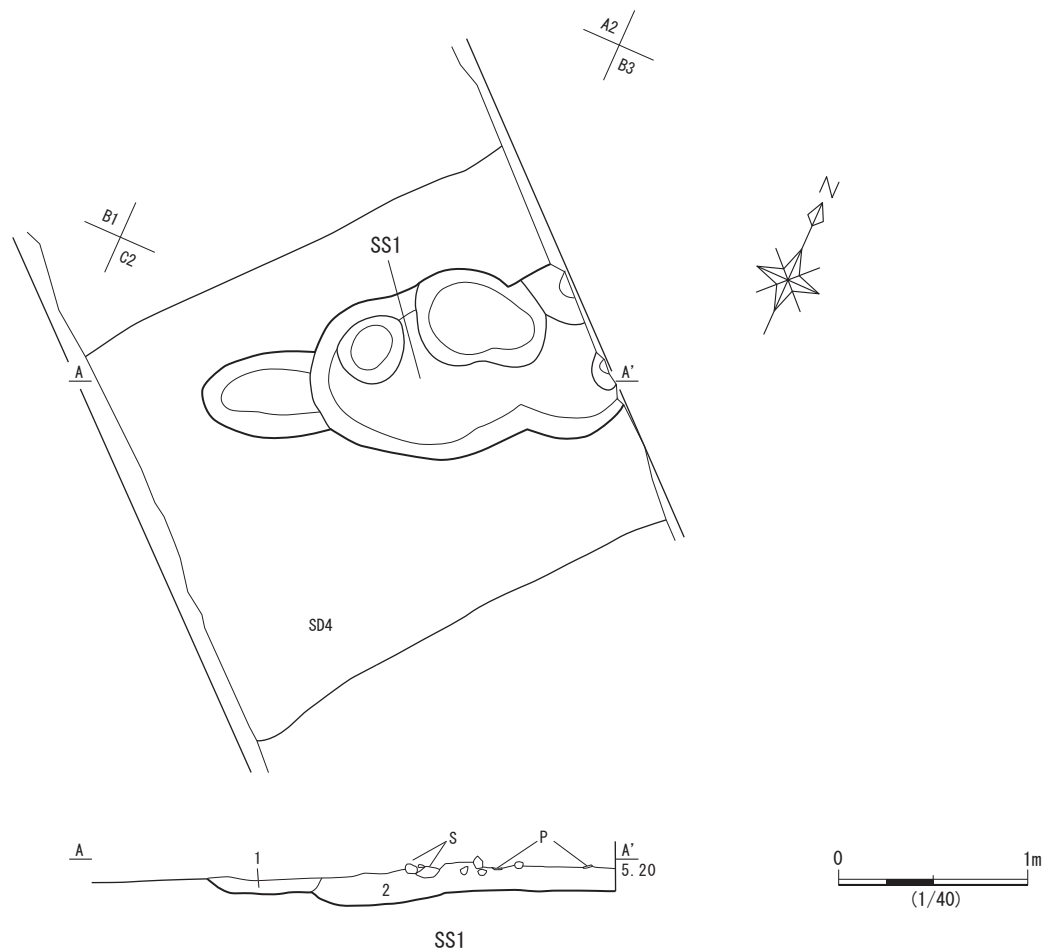
第3項 集石

第1号集石(第69・70・78～80図 表41 図版10-5～7、図版13-1-3)

第1号集石は、B・C 2・3グリッドに位置する。第4号溝と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。遺構の北東部は調査区外にあたるが、第4号溝内の北東側約2/3を占める。北壁土層断面の観察によれば、第4号溝が完全に埋没する前のいわば凹地であった段階で第1号集石が形成され、また遺構の上位には第Ⅱ層が堆積することを確認した。平面形状は不定形を呈する。浅い土坑状またはピット状の窪みが重複しつつ連続する様相が窺われ、簡易な掘り込みを伴うと推測される。残存規模は、全長2.21m、幅は先端部で0.46m、平坦面で0.90～1.00m、深さは先端部で5.7cm、平坦面で9.7～14.9cm、窪み部分で12.3～16.3cmを測る。

検出された礫は、標高5.20m前後の第4号溝第1層と第2層の境付近を中心に分布しており、短期間のうちに形成されたと考えられる。

遺構の時期は、第4号溝の埋没時期にあたり近世前半頃と推測される。



第1号集石

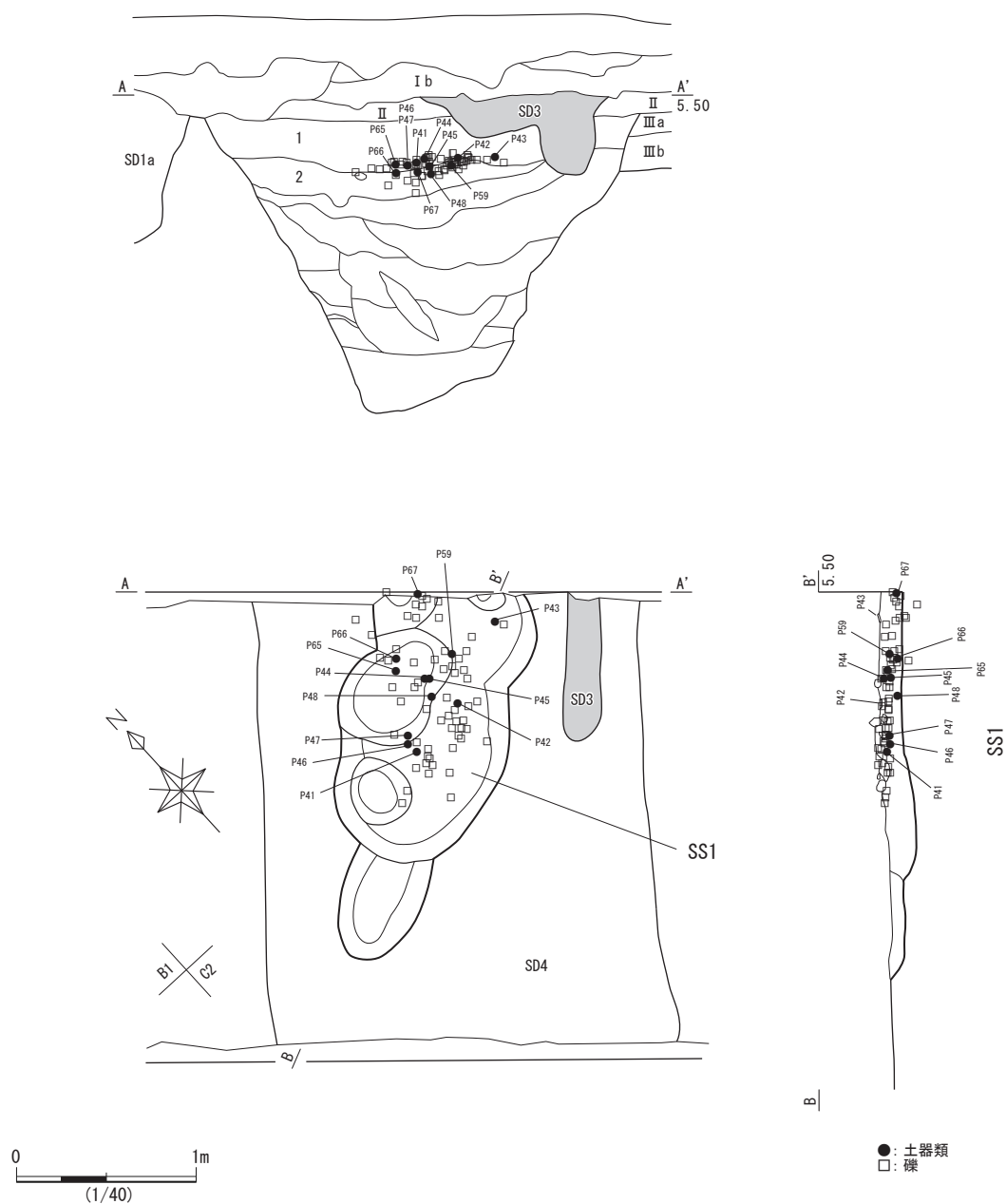
第1層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりあり。粘性ややあり。暗褐色土ブロック混じる。橙色スコリア径1.0mmを少量含む。

第2層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりややあり。粘性ややあり。暗褐色土ブロックが少量混じる。橙色スコリア径1.0mmを少量含む。

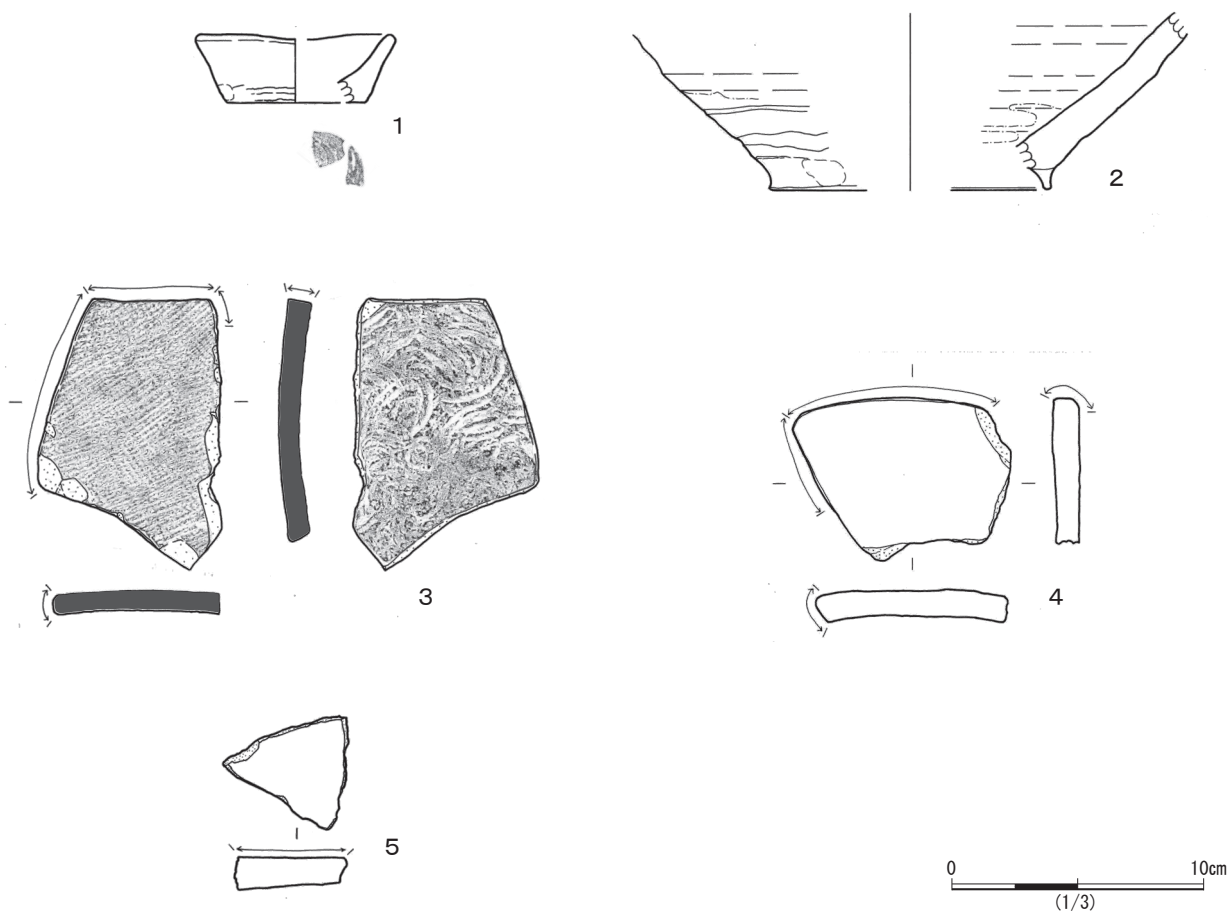
第78図 第1号集石(1/40)

遺物は、相模型土師器坏4片8.9g、甕15片21.1g、須恵器甕7片357.4g、かわらけ2片21.7g、陶器4片394.8g、青磁1片1.3g、石製品1点34.8g、礫67点11,562.5gが出土した。青磁は同安窯系の遺物であるが、時期不明であった。このうち5点を図示した。

1はかわらけであり、P46とP47が接合した。器形は逆台形を呈し腰が張り、器肉が厚い。遺物の時期は、器形の特徴から15世紀末～16世紀初頭と推測される。2は常滑産片口鉢Ⅰ類1片である(P41)。遺物の時期は、13世紀中頃と推測される。3は須恵器甕胴部の転用砥石であり(P48)、側面2面に使用痕を有する。また別側面の一部も磨滅している。4は常滑産陶器こね鉢の転用陶片であり(P45)、側面2面に使用痕を有する。5は陶器の細片であり、器種は甕または鉢の底部外縁である可能性がある(P43)。胎土には滑石を多く含み、東海系の所産と推測される。上面1面は強く磨滅し、転用陶片として再利用された可能性がある。



第79図 第1号集石遺物分布(1/40)



第80図 第1号集石出土遺物(1/3)

表41 第1号集石出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	かわらけ 皿	口径：(7.6) 底径：(5.6) 残高：2.5～2.7 重量：21.7g 残存：口縁～体部1/5 底部1/4	胎土：緻密 砂粒 橙色粒 角閃石 白色骨針状物質 焼成：良好 色調：内外面 7.5YR6/6橙 せいけい：ロクロ成形 底部外面 回転糸切り 板状圧痕 底外部 指頭痕 年代：15世紀末～16世紀初頭 接合：P46+P47 備考：口縁部の歪み大きい	SS1 P46+P47
2	陶器 こね鉢	口径：- 底径：(11.1) 残高：6.9 重量：116.6g 残存：体部～高台部1/6	胎土：緻密 砂粒 白色粒 焼成：良好 色調：内外面 7.5YR6/6橙 せいけい：粘土紐巻き上げ→轆轤成形 体部外面下位 ヘラケズリ 貼付け高台 産地：常滑 片口鉢Ⅰ類 年代：13世紀中頃	SS1 P41
3	須恵器 甕 転用砥石	長さ：10.65 幅：7.3 厚さ：0.85 重量：101.4g 残存：胴部小片	備考：側面2面全体と3面の一部使用	SS1 P48
4	陶器 こね鉢 転用陶片	長さ：6.5 幅：8.6 厚さ：0.9～1.1 重量：81.8g 残存：口縁～体部小片	産地：常滑 年代：中世 備考：側面2面使用	SS1 P45
5	陶器 甕・鉢 転用陶片	長さ：5.0 幅：4.5 厚さ：1.0～1.3 重量：34.8g 残存：細片	産地：東海系	SS1 P43

No. は第80図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第79図中の遺物番号に対応する

第4項 ピット

第1号ピット(第69・70・81図 表43 図版11-2)

第1号ピットは、E 4 グリッドに位置し隣接する。南壁・東壁土層断面の観察から、第1・2号ピットの規模は幅70.0cm以上、深さ50.0cm以上を測り、共通性を有する。残存規模は、表43のとおりである。

遺物は、土師器甕1片0.7gが出土した。細片のため図示には至らなかった。

遺構の時期は、覆土中に宝永パミスを含み、近世後半以降と推測される。

第2号ピット(第69・70・81・82図 表42・43 図版11-2、図版14-1-1)

第2号ピットは、E 4 グリッドに位置し隣接する。残存規模は、表43のとおりである。

遺物は、鉄製品1点1片102.6gが出土し、これを図示した。

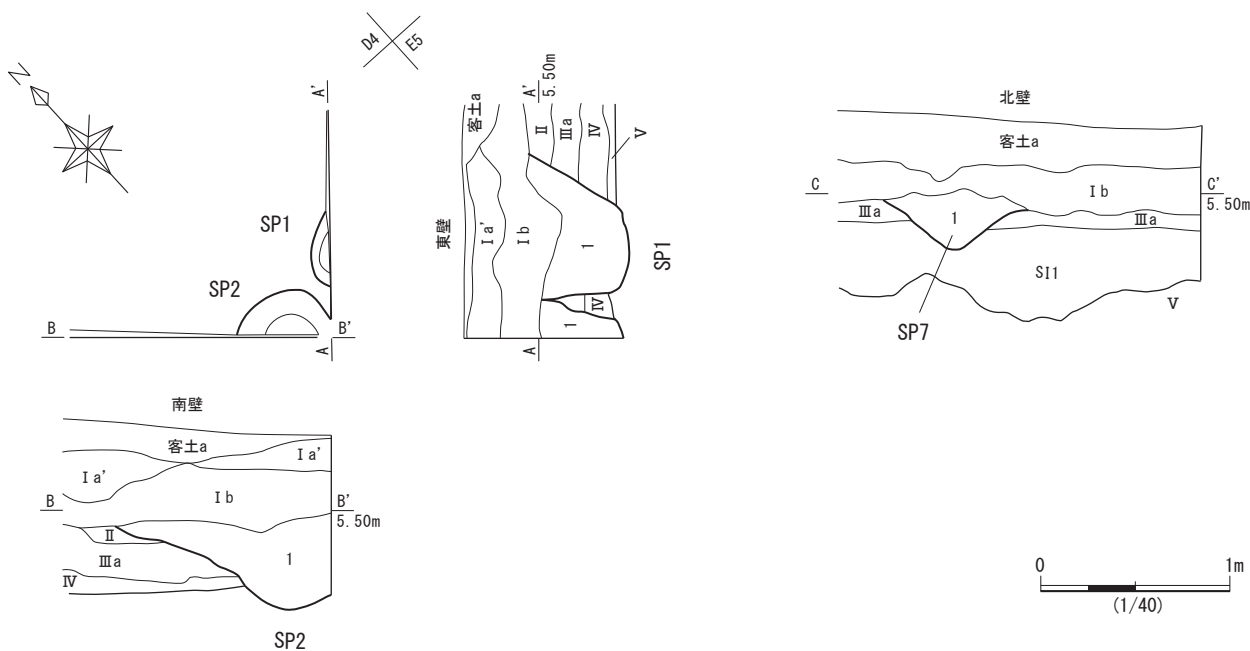
1の器種は不詳である。

遺構の時期は、覆土中に宝永パミスを含み、近世後半以降と推測される。

第7号ピット(第81図 表43)

第7号ピットは、北壁土層断面で確認した。残存規模は、表43のとおりである。

遺構の時期は、覆土中に宝永パミスを含み、近世後半以降と推測される。



第1号ピット

第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径5.0mmを含む。

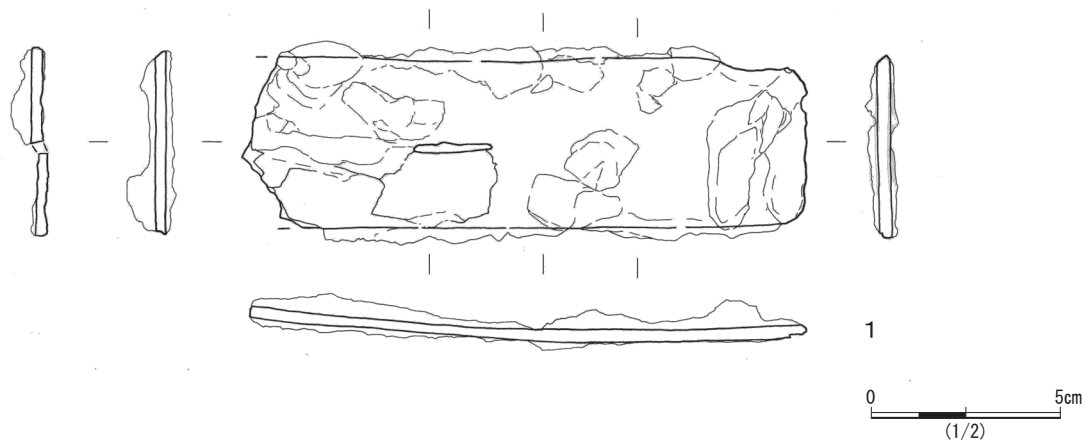
第2号ピット

第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径5.0mmを含む。褐色土ブロックを少量含む。

第7号ピット

第1層：灰黄褐色土(10YR4/2) しまりあり。粘性少ない。宝永パミス径3.0mmを含む。

第81図 第1号・2号・7号ピット(1/40)



第82図 第2号ピット出土遺物(1/2)

表42 第2号ピット出土遺物観察表

No.	種別 器種	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
1	鉄製品 板状製品	長さ：(14.9) 幅：4.9 厚さ：0.60 重量：102.6g 残存：不詳	備考：中央部に長さ2.0cmの貫通箇所がある	SP2 覆土一括

No. は第82図の遺物番号に対応する

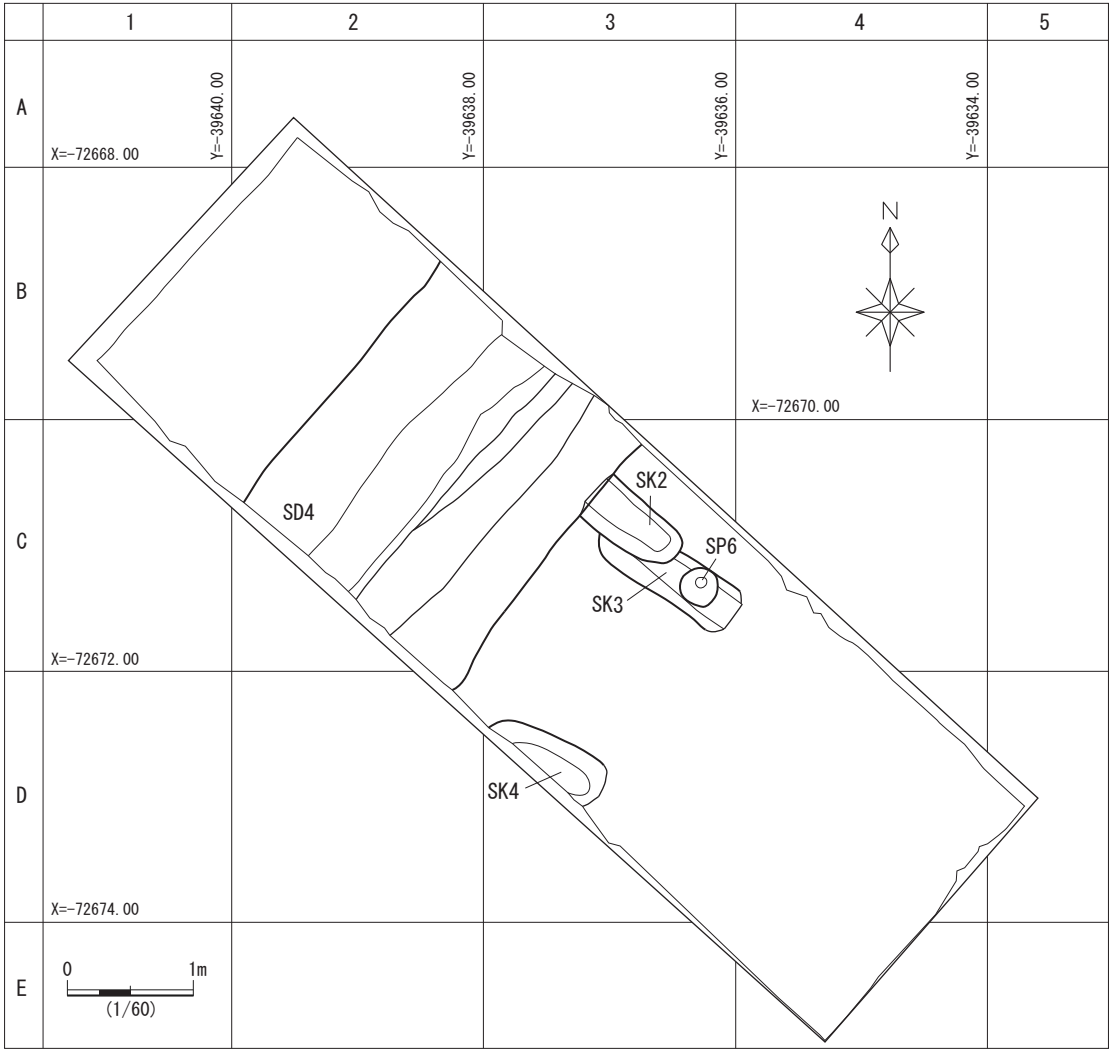
表43 近世ピット計測表

番号	平面 形状	断面 形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP1	—	逆台形	(39.0)	(10.0)	5.9	土師器甕 1 片 0.7g
SP2	楕円形	逆台形	(54.0)	(24.0)	14.0	—
SP7	—	V字形	76.0	—	32.0	—

番号は第69・70・81図中のピット番号に対応する

第2節 中世～近世

検出した遺構は溝1条、土坑3基、ピット1穴である。覆土はにぶい黄褐色土、暗褐色土を呈し、周辺の中世文化層に類似することから当該期と判断した。遺構はいずれも第Ⅳ・Ⅴ層上面で確認した。各遺構の重複関係と覆土の様相から、各土坑は溝より古いと考えられる。



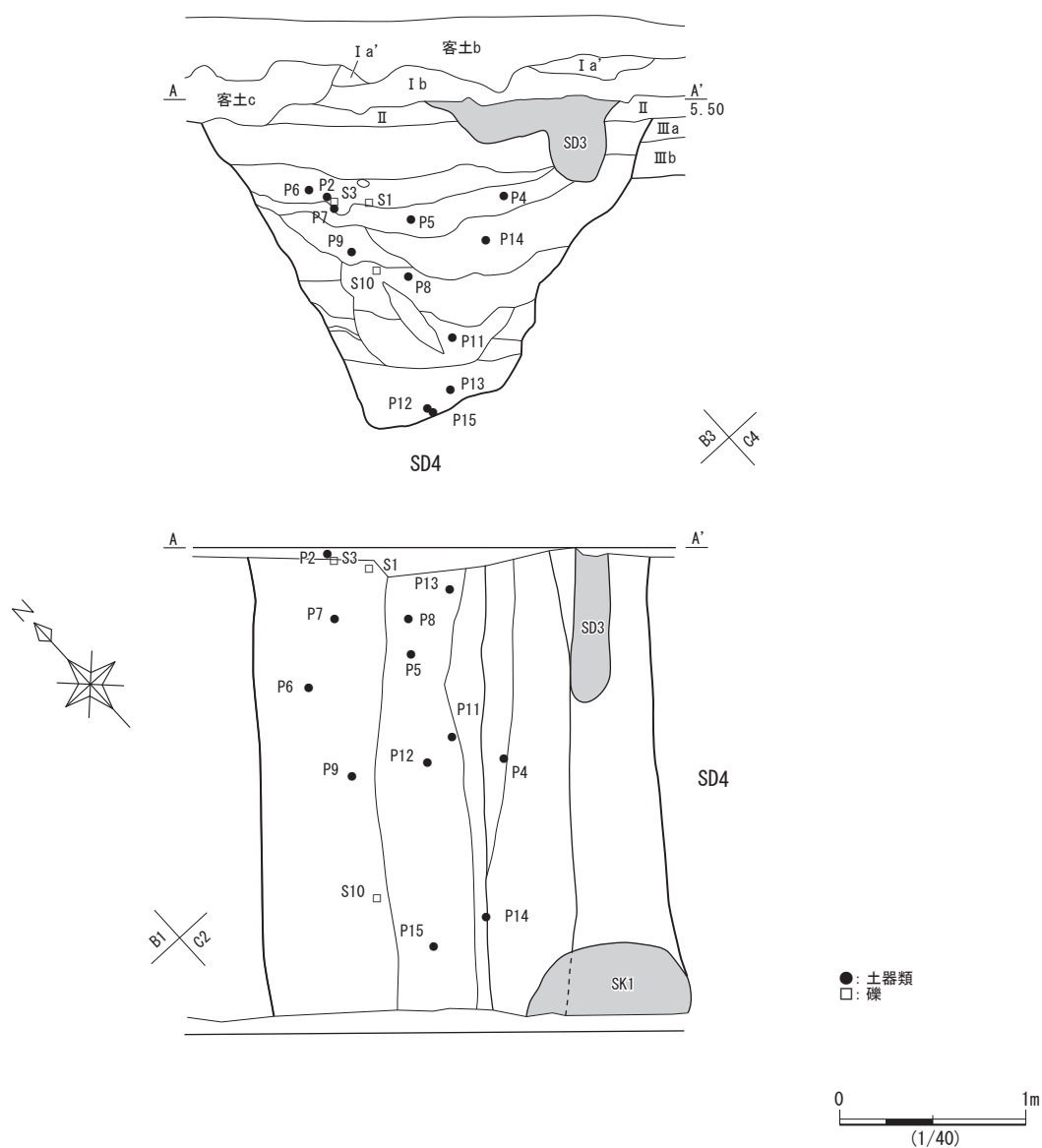
第83図 中世～近世遺構配置図(1/60)

第1項 溝

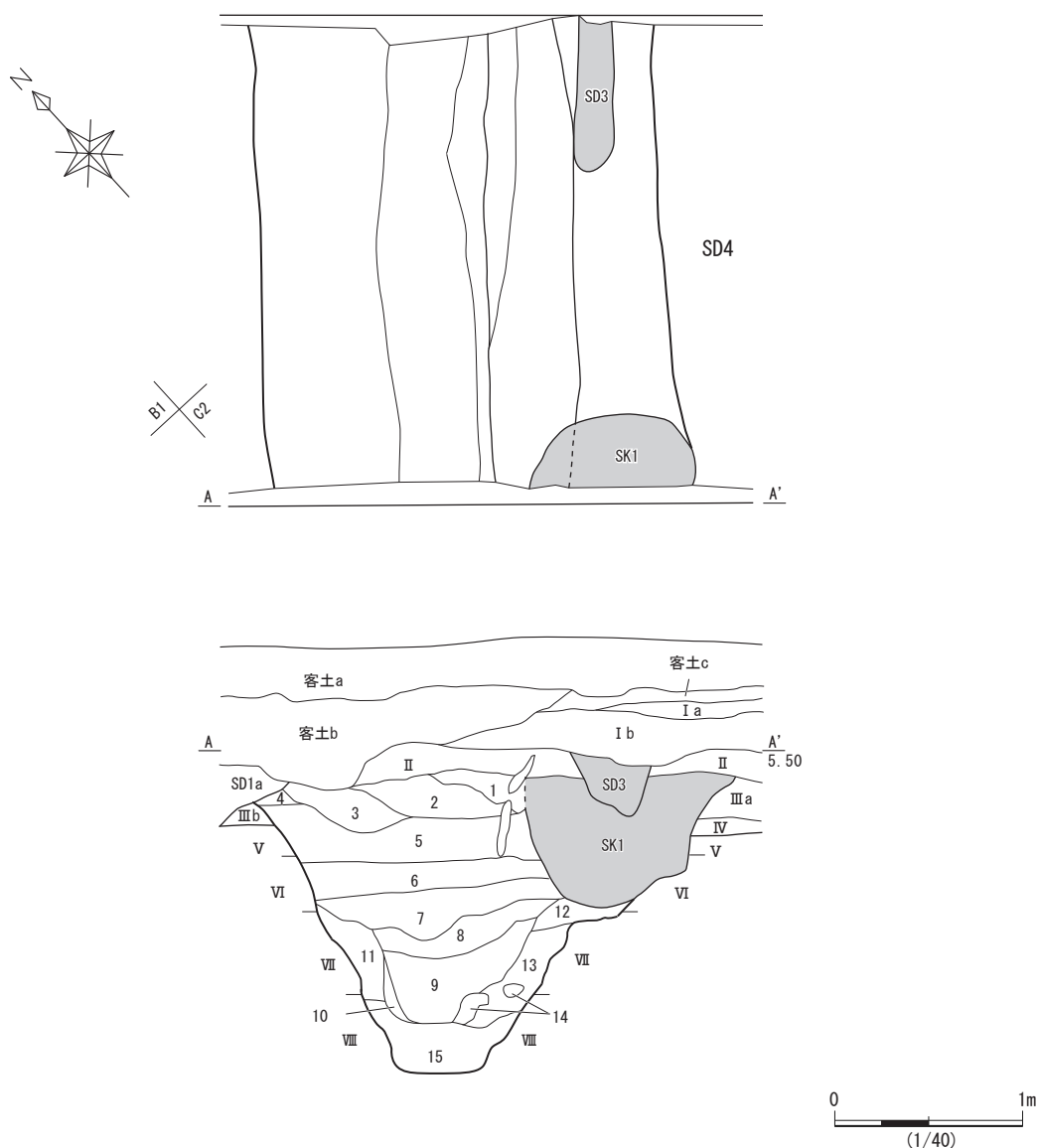
第4号溝(第69・83～86図 表44 図版11－3・4、図版14－2－1)

第4号溝は、B～D 2・3グリッドに位置する。遺構は南西－北東方向に調査区を横断し、北東側と南西側は調査区外になる。第1a号溝、第3号溝、第1号集石や第1号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。座標軸と遺構主軸方向の偏差は、概ねN-39.5°-E東偏を指す。遺構の上位には第Ⅱ層が堆積することを確認した。また覆土の様相から少なくとも一度の掘り直しが行われた可能性がある。残存規模は、長さ2.51m、幅2.12～2.23m、深さ1.35～1.38mを測る。底面は約5.0cmの起伏を有するが、概ね平坦である。断面形状は、逆台形を呈する。

遺構の時期は、覆土中には宝永火山灰を含まないため、中世後半～近世前半頃と推測される。



第84図 第4号溝遺物分布(1/40)



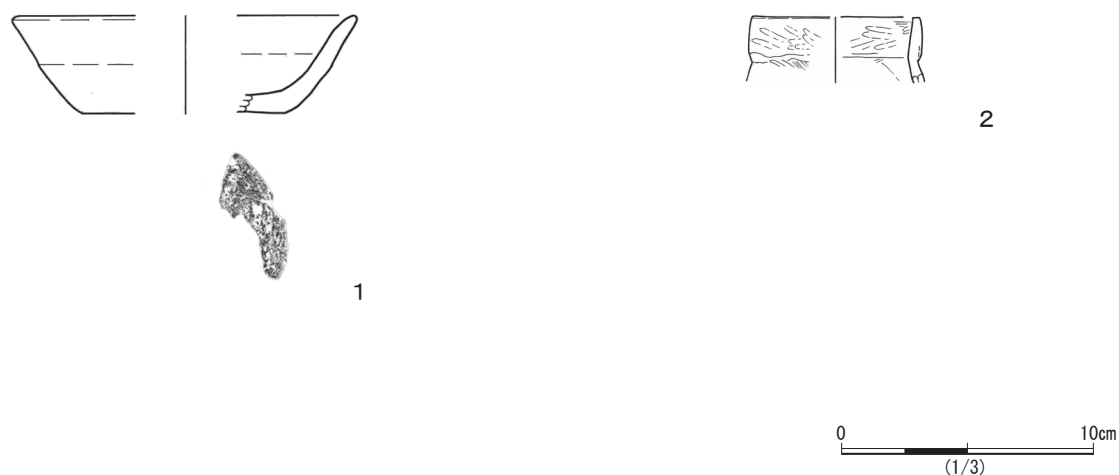
第4号溝

- 第1層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア径5.0mmを少量含む。
- 第2層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり粘性あり。橙色スコリア、白色パミス径2.0mmを含む。暗褐色土ブロックを少量含む。
- 第3層：暗褐色土(10YR3/3) しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア径3.0mmを含む。暗褐色土ブロックを多く含む。
- 第4層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり強い。粘性ややあり。橙色スコリア径1.0mmをわずかに含む。
- 第5層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり極めて強い。粘性ややあり。橙色スコリア、白色パミス径2.0mmを含む。
- 第6層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりややあり。粘性ややあり。橙色スコリア、白色パミス径1.0mmを含む。
- 第7層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり強く粘性ややあり。青灰色粘土をまばらに含む。橙色スコリア、白色パミス径1.0mmを含む。
- 第8層：にぶい黄褐色土(10YR5/3) しまり強い。粘性あり。青灰色粘土を多く含む。鉄分を多く含む。
- 第9層：にぶい黄褐色土(10YR5/3) しまりやや強い。粘性あり。青灰色粘土、鉄分を含む。黒色スコリア径5.0mmを少量含む。
- 第10層：にぶい黄褐色土(10YR5/3) 第11層に似るがしまり強い。炭化物含む。
- 第11層：にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまりあり。粘性あり。第VI層ブロックを含む。
- 第12層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりあり。粘性ややあり。第V層ブロックを少量含む。
- 第13層：にぶい黄褐色土(10YR5/3) しまり強い。粘性あり。橙色スコリア、白色パミス径1.0mmを少量含む。灰色粘土を含む。
- 第14層：暗褐色土(10YR3/3) しまり強い。粘性あり。第13層をまばらに含む。
- 第15層：にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまり弱い。粘性やや強い。鉄分を含む。

第85図 第4号溝(1/40)

遺物は、土師器壺 1 片7.6g、相模型土師器坏12片31.7g、甕36片131.1g、須恵器甕 6 片137.4g、灰釉陶器 1 片2.7g、かわらけ 2 片33.7g、陶器 4 片105.2g、磁器 1 片1.1g、石製品 1 点75.8g、礫28点4,245.5g、骨片 4 点5.4gが出土した。このうち 2 点を図示した。

1 はかわらけであり、器形は大型で器高が高い。遺物の時期は、器形の特徴から13世紀代と推測される。
2 は小型壺の口縁～頸部片である。遺物の時期は、古墳時代前期と推測される。



第86図 第 4 号溝出土遺物(1/3)

表44 第 4 号溝出土遺物観察表

No.	種別	法量・残存率 (cm)	特 徴	出土位置
	器種			
1	かわらけ	口径：(13.6) 底径：(8.0) 器高：3.85 重量：30.3g 残存：1/6	胎土：緻密 砂粒 赤褐色粒 泥岩 白色骨針状物質 焼成：良好 色調：外面 5YR6/6橙 内面 5YR6/8橙 せいけい：ロクロ成形→ナデ 年代：13世紀代 備考：胎土は鎌倉出土のかわらけに類似する	SD4 P5
2	土師器 小型壺	口径：(6.6) 底径：- 残高：3.0 重量：7.6g 残存：口縁～頸部1/6	胎土：緻密 砂粒 橙色粒 白色骨針状物質 角閃石 焼成：良好 色調：外面 2.5YR5/4にぶい赤褐 内面 2.5YR5/6明赤褐(赤彩) せいけい：内外面 ヘラナデ 頸部外面 斜め下ヘラナデ→口縁部ヨコナデ→口縁部 内面 ミガキ状の横ヘラナデ 年代：古墳時代前期	SD4 覆土一括

No. は第86図の遺物番号に対応し、出土位置の遺物番号は第84図中の遺物番号に対応する

第2項 土坑

第2号土坑(第69・83・87図 図版11-5)

第2号土坑は、C3グリッドに位置する。調査区中央部に遺構の東端部を有し、北西方向へ延びた後第4号溝の掘り込みにより消失する。新旧関係は第4号溝より古い。平面形状は長楕円形を呈する。座標軸と主軸方向との偏差は、N-48.5°-W西偏を指す。残存規模は、長軸0.83m、短軸0.42m、深さ11.0～12.7cmを測る。概ね遺構の底面にあたると推測され、約6.0cmの起伏を有するが概ね平坦である。断面形状は、U字形を呈する。

遺物は出土していない。

遺構の時期は、重複する第3号土坑と同時期と推測される。

第3号土坑(第69・83・87図 図版11-5)

第3号土坑は、C3・4グリッドに位置する。調査区中央部に遺構の西端部を有し、南東方向へ延びた後第2号溝の掘り込みにより消失する。第2号溝、第2号土坑および第6号ピットと重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。平面形状は長楕円形を呈する。座標軸と主軸方向との偏差は、N-56.0°-W西偏を指す。残存規模は、長軸1.24m、短軸0.40m、深さ10.2～19.0cmを測る。底面は約3.0cmの凹凸を有するが、概ね平坦である。断面形状は、U字形を呈する。

遺物は、相模型土師器坏3片1.8gが出土したが、図示には至らなかった。

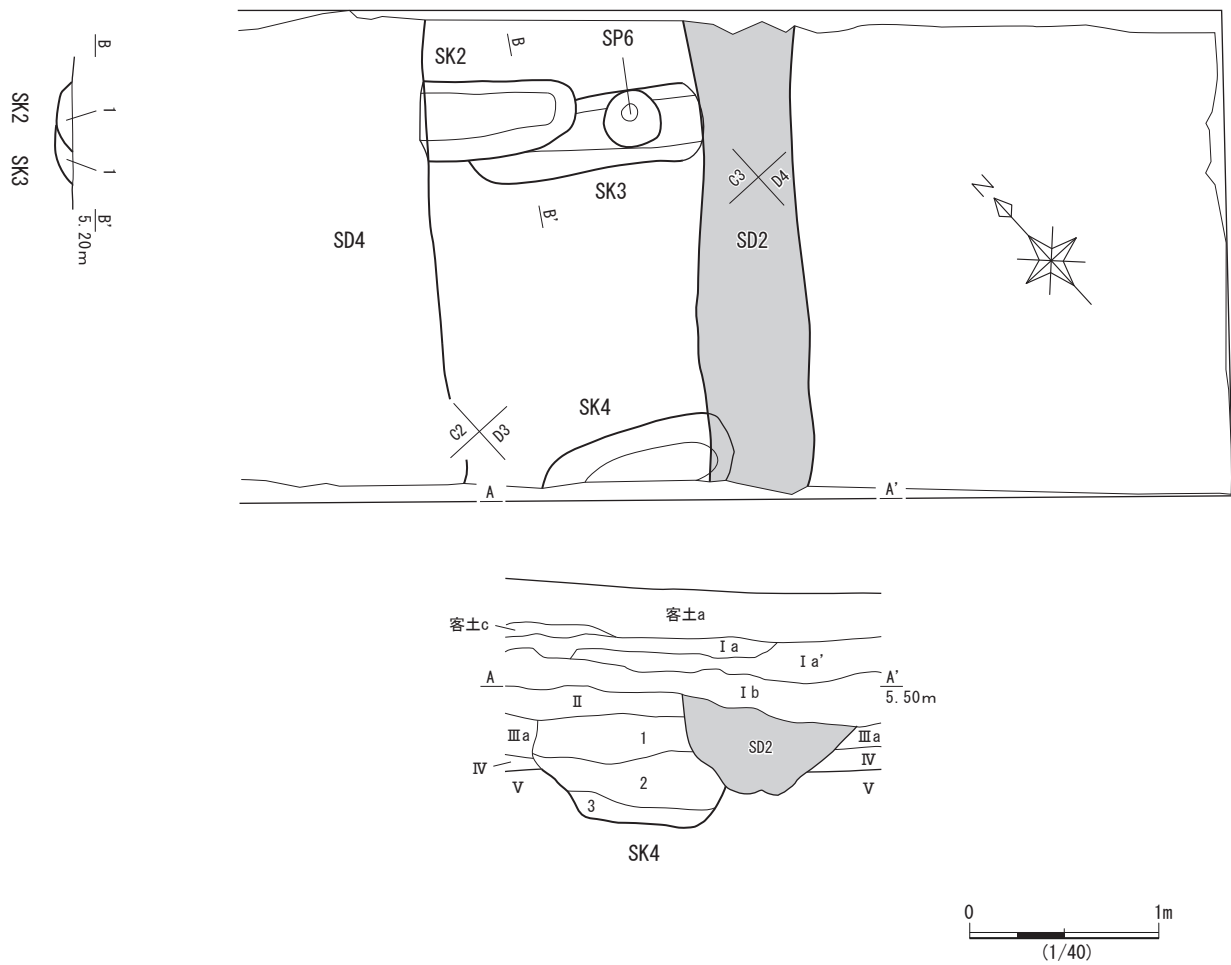
遺構の時期は、後述する第1号竪穴址より新しく第4号溝の頃と推測されるが判断材料に乏しく、幅をもたせて中世～近世と推測される。

第4号土坑(第69・83・87図 図版11-7)

第4号土坑は、D3グリッドに位置する。また第Ⅲa層上面から掘り込まれることを確認した。遺構の南西側は、調査区外となる。第2号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。平面形状は長楕円形を呈すると推測される。座標軸と主軸方向との偏差は、N-63.5°-W西偏を指す。残存規模は、長軸1.03m、短軸0.35m、深さ27.5～31.8cmを測る。底面は約5.0cmの凹凸を有するが、概ね平坦である。断面形状は、逆台形を呈する。

遺物は、相模型土師器坏2片2.2g、甕1片0.1gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、判断材料に乏しく、平面形状が似る第2・3号土坑と並ぶことから、両遺構と同時期の可能性がある。



第2号土坑

第1層：暗褐色土(10YR3/3)

しまり強い。粘性あり。橙色スコリア含む。黄褐色土ブロックを多く含む。

第3号土坑

第1層：暗褐色土(10YR3/3)

しまり極めて強い。粘性あり。橙色スコリア含む。黄褐色土ブロックを少量含む。

第4号土坑

第1層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)

しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0mmをわずかに含む。

第2層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)

しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0mmをわずかに含む。褐色土ブロックを少量含む。

第3層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)

しまりあり。粘性あり。橙色スコリア径1.0mmをわずかに含む。

第87図 第2号・3号・4号土坑(1/40)

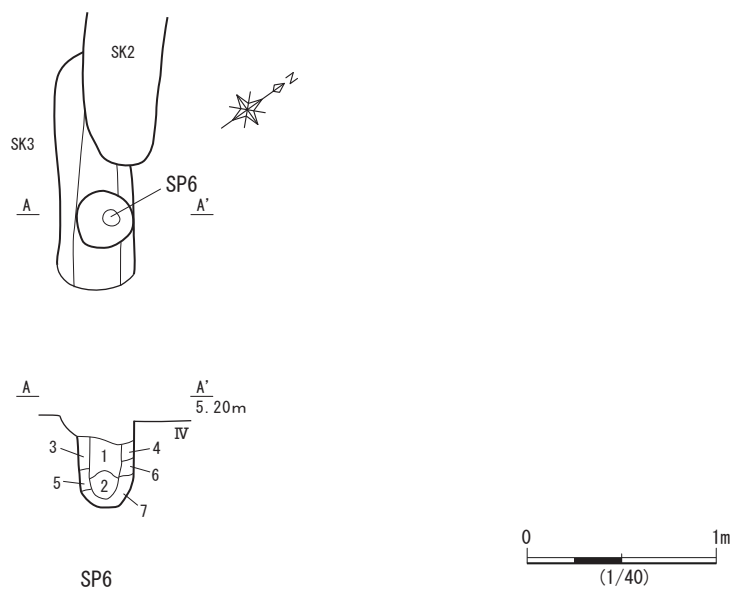
第3項 ピット

第6号ピット(第69・83・87・88図 表45 図版11－6)

第6号ピットは、C3グリッドに位置する。第3号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。残存規模は、表45のとおりである。遺構の性格は、覆土の堆積状況から柱穴の可能性はある。

遺物は、相模型土師器甕1片1.5g、礫1点0.5gが出土したが、図示には至らなかった。

遺構の時期は、重複する第3号土坑の年代観や覆土の特徴から中世～近世と推測される。



第6号ピット

- 第1層：暗褐色土(10YR3/3) しまり強い。粘性あり。橙色スコリアを含む。褐色土ブロックを斑に含む。炭化物をごくわずかに含む。
- 第2層：暗褐色土(10YR3/3) しまり強い。粘性あり。黄褐色土ブロックを含む。橙色スコリアをわずかに含む。
- 第3層：暗褐色土(10YR3/3) しまりあり。粘性あり。黄褐色土ブロックをわずかに含む。
- 第4層：暗褐色土(10YR3/3) しまりあり。粘性あり。全体に黄褐色土ブロックを含む。
- 第5層：暗褐色土(10YR3/3) しまりあり。粘性あり。第3層よりも黄褐色土ブロックを多く含み色調明るい。
- 第6層：暗褐色土(10YR3/3) 第4層に似るが第4層に比べ色調暗い。
- 第7層：暗褐色土(10YR3/3) しまり強い。粘性あり。土質は第V層に近くなるが色調は第V層よりも暗い。

第88図 第6号ピット(1/40)

表45 第6号ピット計測表

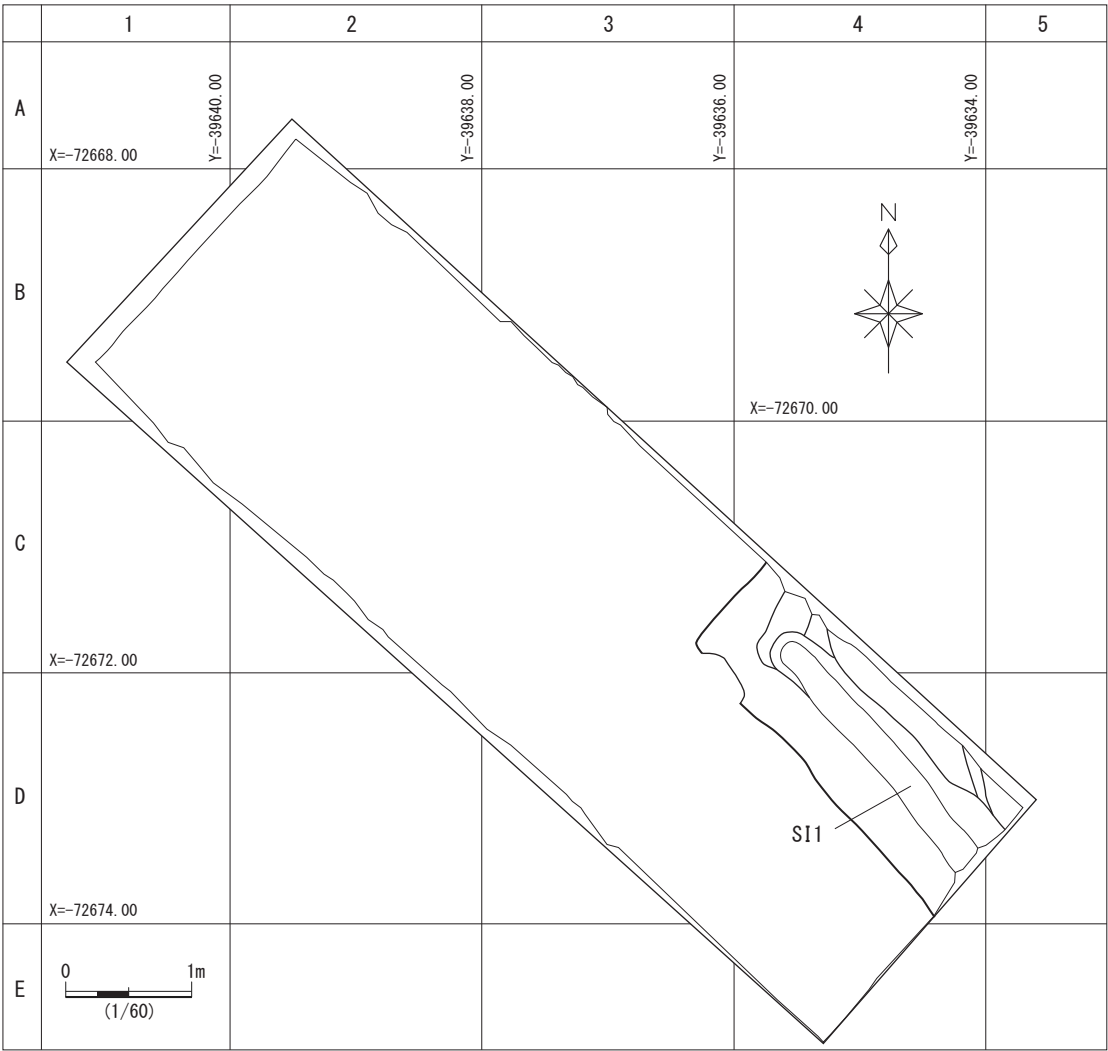
番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP6	不整円形	U字形	31.0	30.0	47.5	土師器甕1片 1.5g、礫1点 0.5g

番号は第69・83・87・88図中のピット番号に対応する

第 3 節 中世

第 1 項 竪穴址

検出した遺構は竪穴址 1 基であり、調査区南東角に位置する。覆土は暗褐色土を呈し、周辺の古代文化層に類似するものの、中世遺物が出土したことから当該期と判断した。遺構は第Ⅴ層上面で確認した。

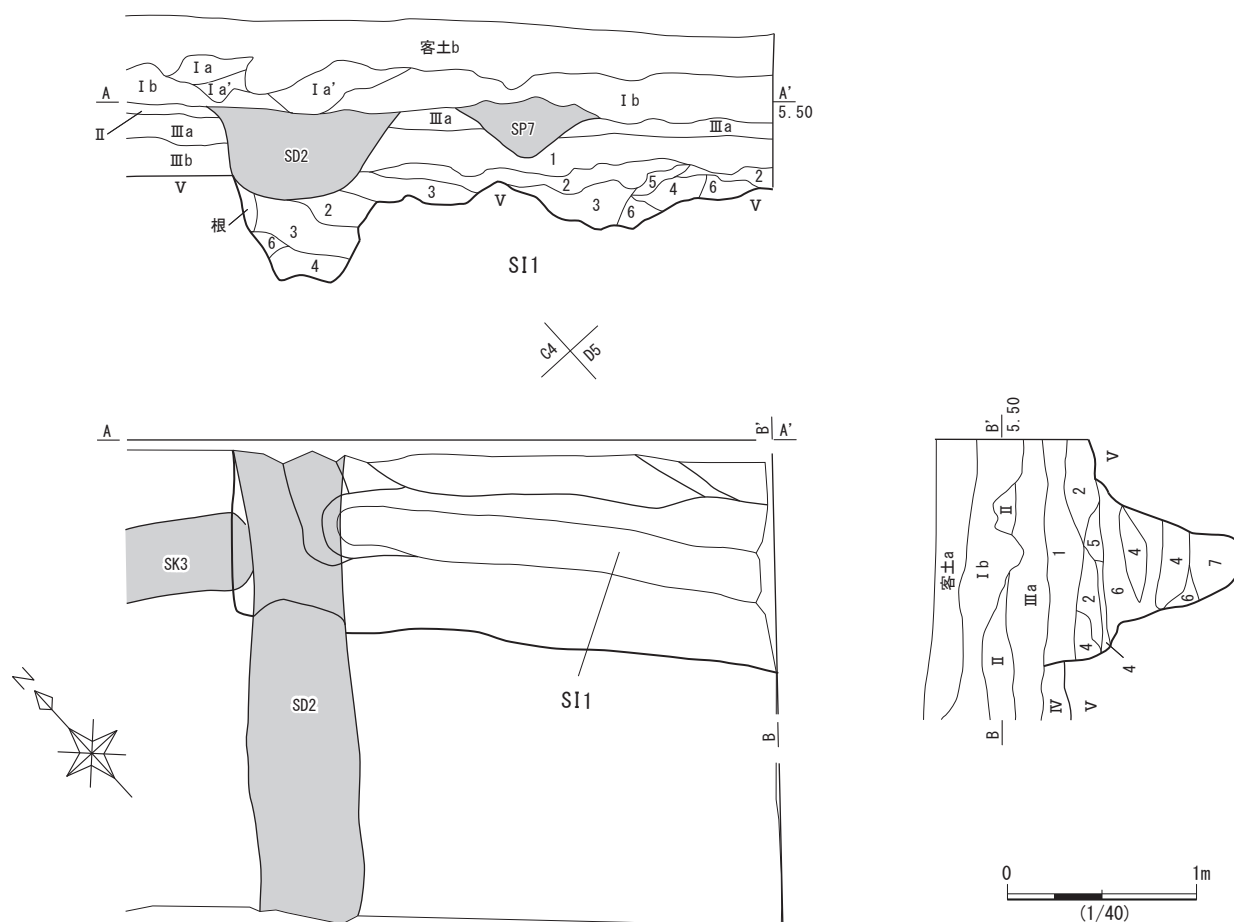


第89図 中世遺構配置図(1/60)

第1号竪穴址(第69・89～91図 図版12-1～3)

第1号竪穴址は、C・D3～5グリッドに位置する。北東側と南東側が調査区外にあたる。全容は明らかでないが、平面形状は方形を呈するものと推測される。第2号溝および第3号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。北西辺は第2号溝の掘り込みにより上半部が消失し、下半部のみが残存していた。座標軸と南西辺の偏差は、概ねN-41.5°-W西偏を指す。残存規模は、南西辺2.88m、北西辺0.85～1.07m、中央部の深さ16.0～38.6cmを測る。中央部の底面は南西側へ7.8～8.8cm下降傾斜する。

遺構の外縁部は中央部に比べて一段深い溝状を呈し、平面形状はL字状に屈折することが確認された。外縁部は調査区東壁から調査区に沿って南東―北西方向に延びた後、北東側へ概ね90°屈折する。その残存規模は、南辺が長さ2.88m、幅0.70～0.86m、深さ74.2～79.0cmを測り、西辺が長さ0.85m、幅0.70m、深さ61.3cmを測る。南辺は西辺に比べ約15.3cm深い。底面は概ね平坦であり、断面形状は逆台形を呈する。



第1号竪穴址

第1層：暗褐色土(10YR3/3)

しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0mmを少量含む。

第2層：暗褐色土(10YR3/3)

しまりやや強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0mm、褐色土ブロックを少量含む。

第3層：暗褐色土(10YR3/3)

しまりやや強い。粘性あり。橙色スコリア径1.0mm、褐色土ブロックを含む。

第4層：暗褐色土(10YR3/3)

しまり強い。粘性あり。第1～4層中で最も褐色土多い。

第5層：褐色土(10YR4/4)

しまり強い。粘性あり。暗褐色土ブロックを含む。

第6層：褐色土(10YR4/4)

しまりやや強い。粘性あり。暗褐色土ブロックを少量含む。

第7層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)

しまりあり。粘性あり。灰色粘土、鉄分を多く含む。

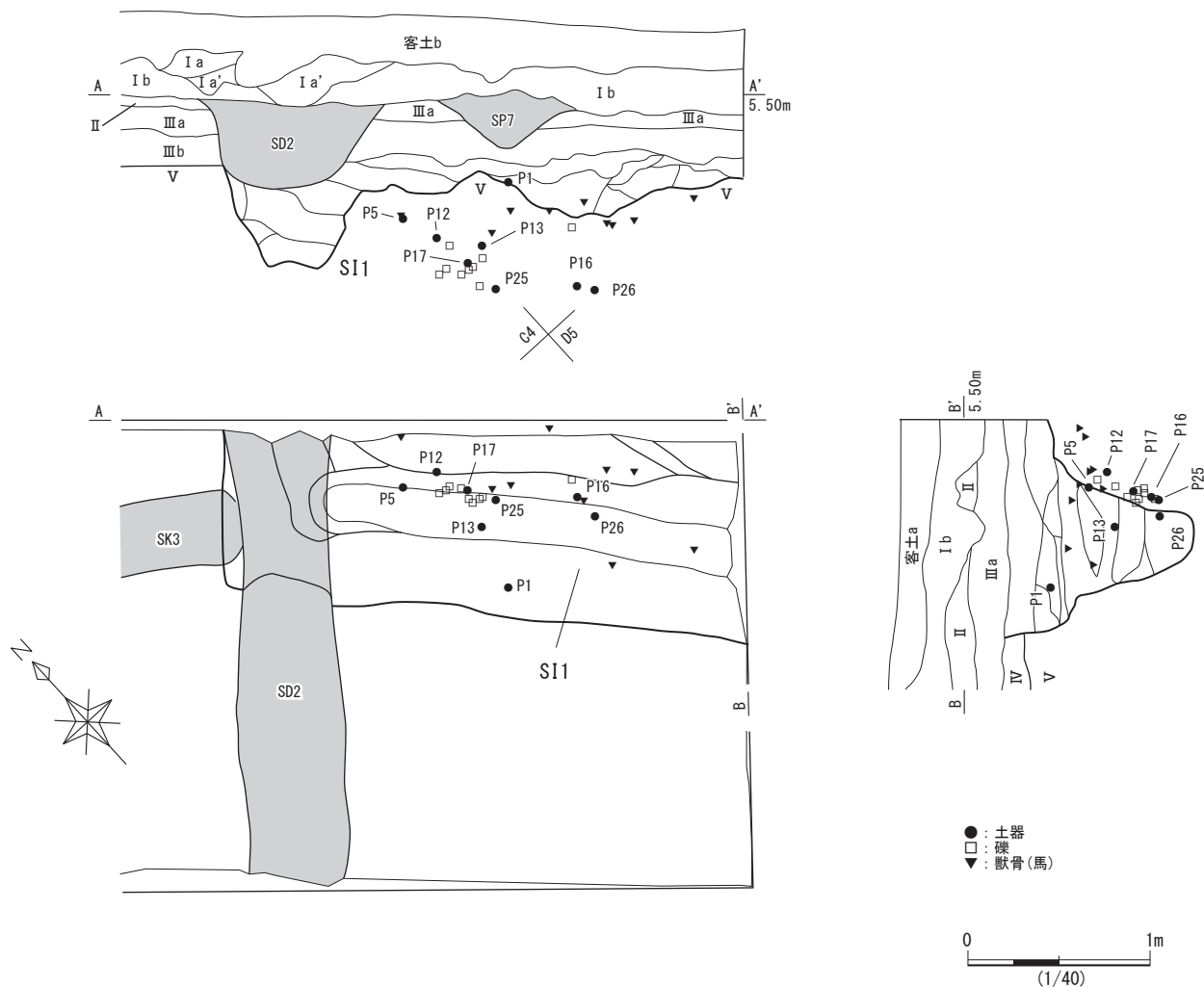
第90図 第1号竪穴址(1/40)

また西辺を掘削した後に、南辺を掘削したことが窺われる。外縁部を溝状に掘り込む遺構としては、溝持ちの掘立柱建物の溝部分である可能性がある。但し、溝部分には柱穴や柱痕の存在を示唆する掘り込みを確認するには至らなかった。

覆土は褐色土と暗褐色土の互層となっており、人為的に埋め戻された様相を呈する。

遺物は、相模型土師器坏20片38.2g、甕39片92.0g、須恵器坏1片4.6g、甕2片5.7g、陶器こね鉢2片147.1g、礫17点1,317.2g、骨片17点10.7gが出土した。骨片(馬)や礫が目立って出土した。P1・P5・P13・P16・P25は土師器甕である。P26は須恵器坏であり、底部外面に回転糸切りを施す。陶器のこね鉢は常滑または渥美窯系の遺物であり(P12・P17)、このうちP17は、12～13世紀代の遺物である可能性がある。いずれも細片のため図示には至らなかった。

遺構の時期は、出土遺物から中世と推測される。



第91図 第1号竪穴址遺物分布(1/40)

第4節 古代～中世

第1項 ピット

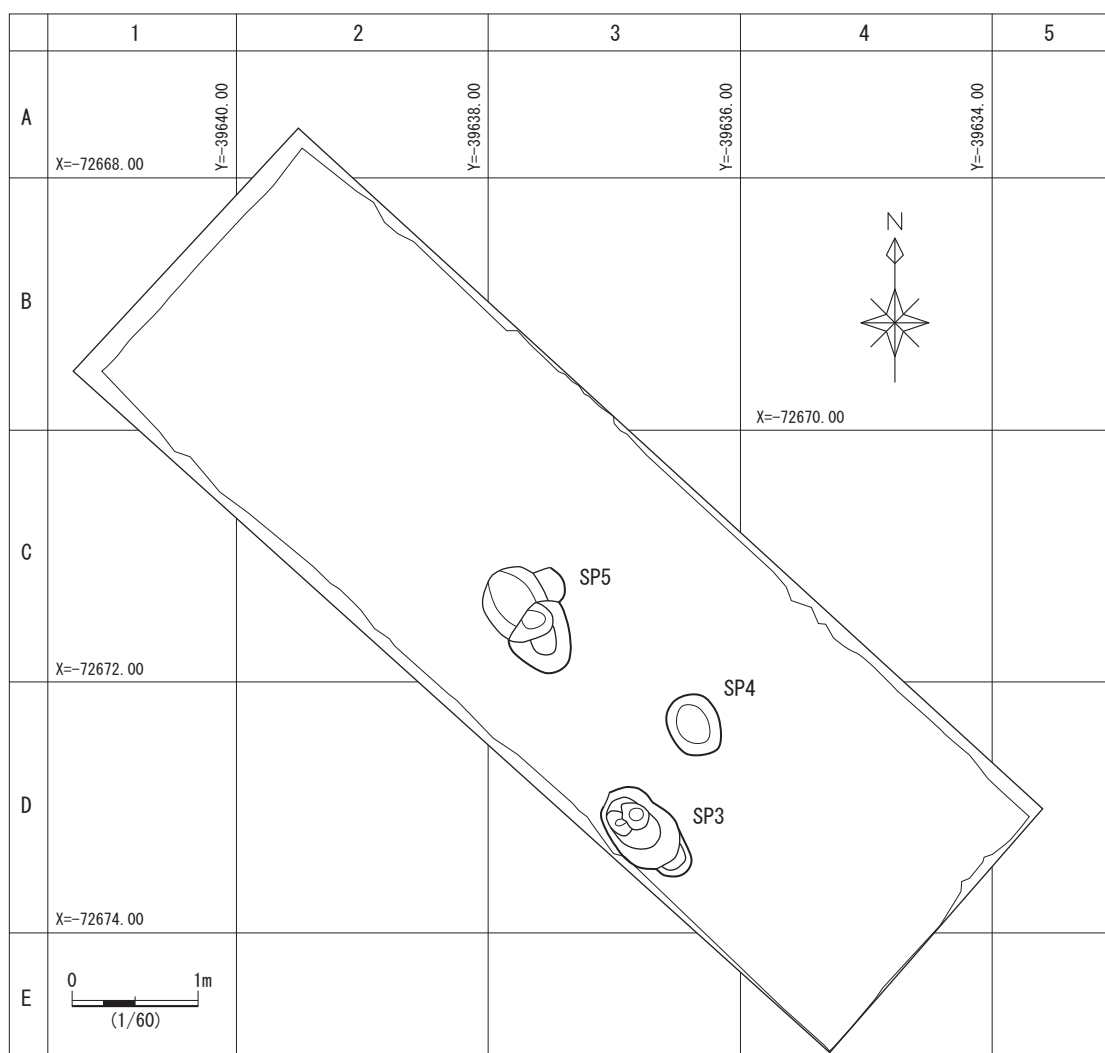
検出した遺構はピット3穴であり、調査区中央から東部に分布する。各ピットの時期の判断は覆土の特徴を抛り所とせざるを得ず、覆土が周辺の古代文化層に類似することを考慮し、幅を持たせて古代～中世とした。遺構はいずれも第Ⅴ層上面で確認した。

第3号ピット(第69・92・93図 表46 図版11－7、図版12－4)

第3号ピットは、D 3 グリッドに位置する。第2号溝および第4号土坑と重複し、新旧関係は本遺構が最も古い。残存規模は、表46のとおりである。

第4号ピット(第69・92・93図 表46 図版12－4)

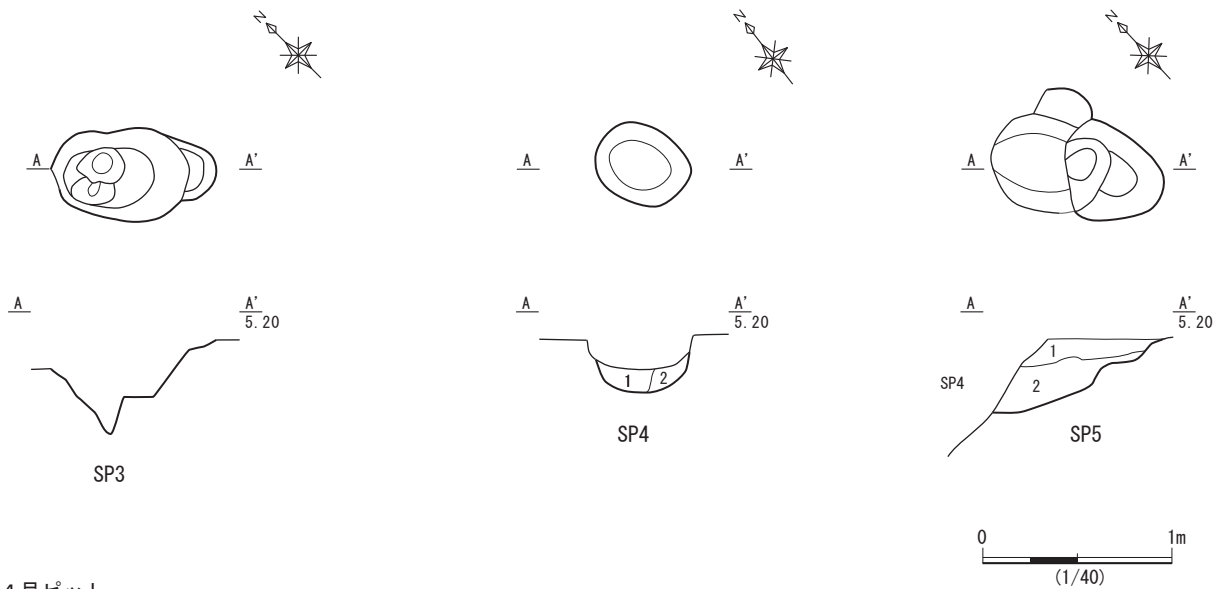
第4号ピットは、D 3 グリッドに位置する。第2号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。残存規模は、表46のとおりである。



第92図 古代～中世遺構配置図(1/60)

第5号ピット(第69・92・93図 表46 図版12-5)

第5号ピットは、C2・3グリッドに位置する。第4号溝と重複し、新旧関係は本遺構が古い。残存規模は、表46のとおりである。



第4号ピット

第1層：褐色土(10YR4/4) しまりあり。粘性あり。
第2層：褐色土(10YR4/4) しまり強い。粘性あり。

第5号ピット

第1層：暗褐色土(10YR3/3) しまり強い。粘性あり。橙色スコリア径2.0mmを含む。
第2層：暗褐色土(10YR3/3) しまり強い。粘性あり。褐色土ブロックが混じる。

第93図 第3号～5号ピット(1/40)

表46 古代～中世ピット計測表

番号	平面形状	断面形状	計測値 (cm)			出土遺物
			長軸	短軸	深さ	
SP3	不整楕円形	U字形	87.0	50.0	40.0	—
SP4	楕円形	U字形	50.0	40.0	18.1	—
SP5	不整楕円形	U字形	93.0	65.0	42.3	—

番号は第69・92・93図中のピット番号に対応する

第5節 遺構外

第1項 表土出土遺物

遺物は、相模型土師器坏3片7.8g、甕14片35.1g、須恵器坏2片34.5g、甕2片39.7g、かわらけ1片3.1g、陶器2片22.3g、磁器1片10.3g、礫3点502.7gが出土した。いずれも細片のため図示には至らなかった。

第Ⅲ章 まとめ

本調査では、古墳時代前期から近世後半頃の遺構や遺物を確認することができた。ここでは時代ごとに発見された遺構や遺物について所見を述べることでまとめとしたい。

近世以降

近世以降については溝を主たる遺構として検出している。第1a号溝は第1b号溝と重複しており、宝永火山灰が純堆積していた。第1b号溝の埋没後継続して溝が掘られ、宝永山の噴火によって埋没したと考えられる。中世以降において南西―北東方向の溝が継続的に配され、第1a号溝と第1b号溝の重複は、区画の踏襲が窺える。

第2・3号溝は宝永火山灰が混じっているのみであり、1707年以降に埋没したと考えられる。いずれの溝も延長方向は、中世～近世の溝および第94図に記載された付近地の地割りとほぼ同じである。

第4号溝の覆土上層から第1号集石、重複して第1号土壙墓がつくられており、第1号土壙墓からは人骨が発見された。土層堆積状況と礫の出土状況を観察する限り、第1号土壙墓は第4号溝が完全に埋没する前の、いわば凹地となっている状態で掘り込まれたと考えられ、検出面が標高約5.20mとなる第1号集石とほぼ同じ高さとなる。第1号土壙墓および第1号集石の上部に堆積した第4号溝の覆土は同質であり、第1号土壙墓の時期を示す遺物の出土はないものの、第1号土壙墓と第1号集石が同時期の遺構と考えて差支えないだろう。なお第1号集石の性格については不詳であり、今後基礎資料の蓄積を待って再検討を行う必要がある。

本調査地点の北側約70.00mにあたる第13次調査地点では、「おそらく西方に顔を向け、膝を曲げて横たわる側臥屈葬」と思われる埋葬人骨が発見され、16世紀代のかかわりが出土している(長澤2007)。報告によれば土壙墓の平面形や深さは確認できなかったとのことだが、幅約2.00m以上の溝に近接して発見されており、本調査第1号土壙墓の類例と考えられる。

中世～近世

中世～近世は最も遺構数が多い。第1b号溝および第4号溝は同方向に延び、中程度以上の規模を有している。第1b号溝については、さらに事業地北西側に広がっていることや事業地の北西境が水路敷であることを考慮すれば、第1b号溝は水路敷を中心として推定幅5.00m以上になる可能性がある。また第1b号溝と水路敷は、下ヶ町遺跡第3次調査地点および第8次調査地点で発見された大規模溝の南西延長に位置し、周辺の主たる土地区画や排水路として機能していた可能性が高い(第94図)。

第4号溝は第1b溝に並行する溝で少なくとも一度の掘り直しが行われたと考えられるが、覆土に宝永火山灰を含まない点で、近世前半までには埋没し、第1b溝との共存はなかったと判断される。

中世

中世の遺構は第1号竪穴址である。遺物量は多くないが、かわらけが出土していることから中世に位置づけられる。大部分が調査区外となるため定かではないが、底面の深さが異なることから溝持ちの掘立柱建物などの他の遺構となる可能性もある。

13世紀代のかわけや常滑産片口鉢、同安窯系青磁などが出土した。これらの遺物は、後世の中近世遺構に混入したものと考えられる。13世紀中頃は鎌倉幕府の御家人二階堂氏による懷島郷の所領時期にあたるが、これらの遺物は同時期の人的活動の痕跡をとどめるものである。また隣接地に遺構の存在を予想させる。

古代

古代の遺構は確認されず、また古代～中世とした遺構はピット3穴と遺構数が少ないが、古代の遺物が一定量出土していることから古代に位置付けられる集落域の一部であったと考えられる。遺構や遺物が少ない要因として、古代の活動があったものの中世以降に削平された可能性がある。

周辺調査においては、第17次調査地点に古墳時代中期の居住域が形成されて以降(渡辺2019)、古墳時代後期には第1・4・8・10・11次調査地点において竪穴住居址が検出され、集落が本遺跡西部に展開することが明らかになりつつある。本調査地点の南東側約35.00mにあたる第15次調査地点では古代の竪穴建物跡が、また西南西側約130.00mにあたる第4次調査地点では古墳時代後期から奈良・平安時代までの集落跡が発見されている(宮下1997)。第8次調査で検出された竪穴住居址の時期は、概ね7世紀中葉～後半3軒を含む、8世紀後半～9世紀前葉7軒、9世紀中葉～後半2軒の年代観が与えられている(宮下2003)。

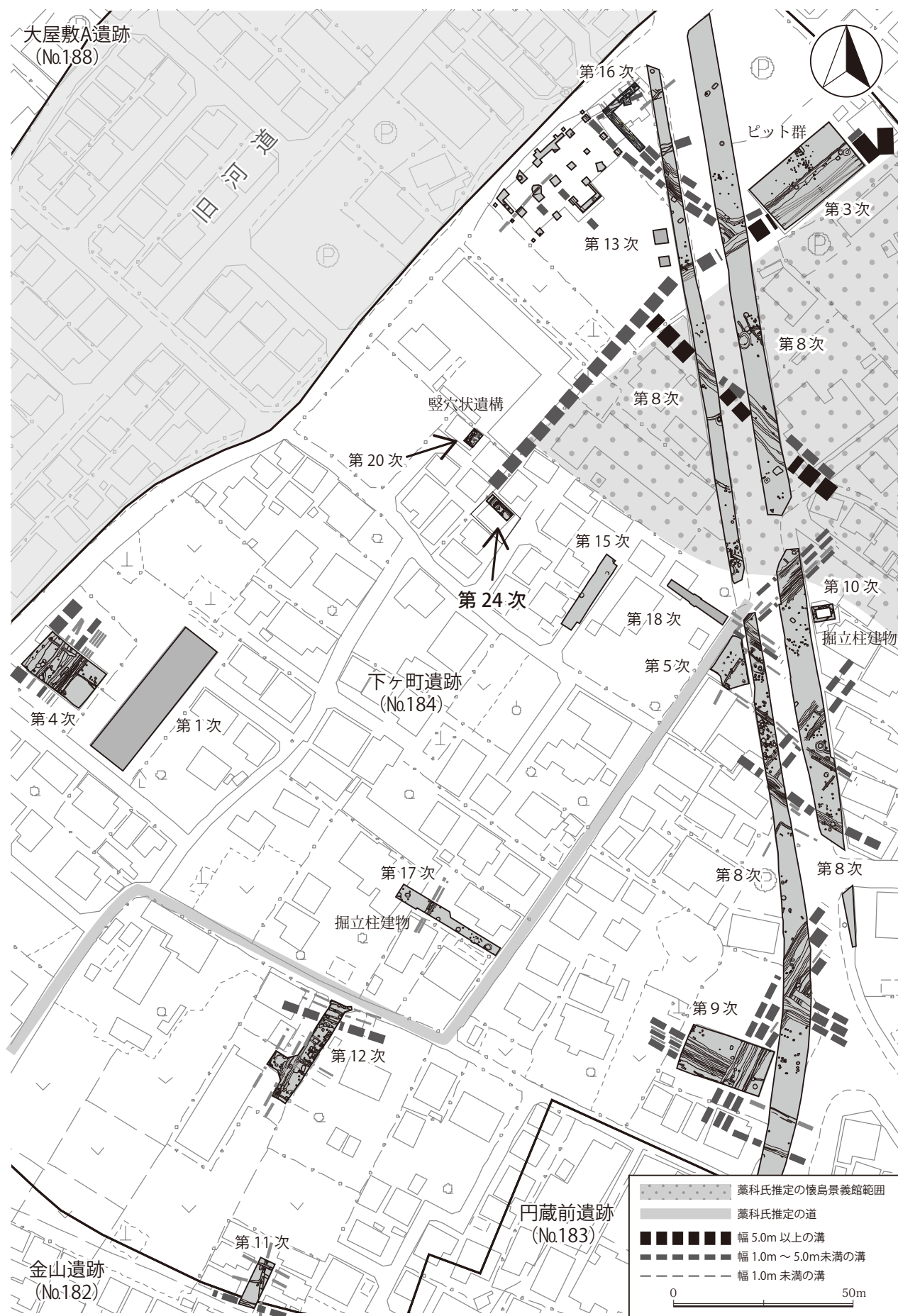
第4号溝から須恵器坏の底部が出土した。坏の底部外面には回転糸切り痕が無調整で残り、坏の時期は、9世紀代以降と推測される。本調査地点は第8次調査地点の西側約60.00mに位置するが、9世紀代以降の遺物が出土したことにより、第8次調査地点に展開する集落域は、本調査地点が立地する南部砂質微高地の西端部にまで広がる可能性がある。

古墳時代前期

古墳時代前期については、第4号溝から小型壺の口縁～頸部片が出土した。また本調査地点の隣接地では、第13次調査地点(長澤2007)や15次調査地点から遺物が出土しており、本調査地点を含む付近地は当該期の遺物散布地であることが窺われる。

第1・4次調査地点から旧河道を挟んだ北西側の大屋敷A遺跡第5次調査地点では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡が発見されている(高杉・柳川2010)。大屋敷A遺跡や大屋敷B遺跡の過去の調査から、北部砂質微高地側が当該期集落の一つの中心にあたることが既に明らかであるが、旧河道左岸沿いに分布する宮ノ腰遺跡、本社B遺跡、金山遺跡においても遺跡が確認されている。旧河道の地形を利用した人的活動は、水田耕作や漁労、また水運や移動手段が想定され、その結果これらの遺跡が形成されたと考えられる。さらに本遺跡にも遺跡の展開が予想される。

以上、本調査地点が古墳時代前期から近世後半の複合遺跡であることを再確認することができた。狭小な発掘調査であっても、本遺跡の基礎資料を蓄積できたことは一つの成果といえる。今後はこれらの基礎資料を通じて周辺遺跡との関係を比較検討し、市域砂質微高地の遺跡形成を復元していきたい。



第94図 第12・24次調査地点付近溝分布図(1/1,500 三戸(2022)から転載一部改変)

引用・参考文献

1. 三戸智也 2022「第Ⅲ編 円蔵 下ヶ町遺跡第20次調査 第Ⅵ章 まとめ」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅸ』
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告62 茅ヶ崎市教育委員会
2. 高杉博章・柳川清彦 2010『茅ヶ崎市西久保大屋敷A遺跡第5次発掘調査報告書』
株式会社アーク・フィールドワークシステム
3. 長澤保崇 2007『下ヶ町遺跡（No.184）発掘調査報告書』株式会社斉藤建設
4. 宮下秀之 1997「4. 円蔵・下ヶ町B遺跡第4次調査」『第8回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会』発表要旨
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
5. 宮下秀之 2003『円蔵・下ヶ町遺跡 一県道45号線道路改良工事に伴う第8次発掘調査報告書一』
茅ヶ崎市文化振興財団調査報告7 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
6. 渡辺務 2019「第2～6章」『円蔵 下ヶ町遺跡第17次発掘調査報告書』株式会社アーク・フィールドワークシステム



1. 1区北半部(南南西から)



2. 第1号・3号溝(西北西から)



3. 第2号・4号溝(西北西から)



4. 1区中央部(南南西から)



5. 第1号掘立柱建物・第15号土坑(西北西から)



6. 1区南半部(南南西から)



7. 第1号竖穴址・第5号溝(西北西から)



8. 第3号土坑馬骨出土状況(北北西から)

図版 2

第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査



1. 2区全景(南南西から)



2. 2区北端部(南から)



3. 第6号・7号溝北側(南西から)



4. 2区南端部(西から)



5. 2区車返し部(南南西から)



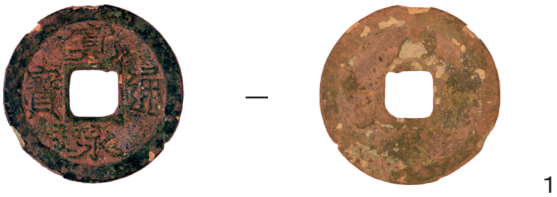
6. 第14号溝・第1号不明遺構(南南東から)



7. 1区東壁基本土層(西北西から)



8. 2区東壁基本土層(西北西から)

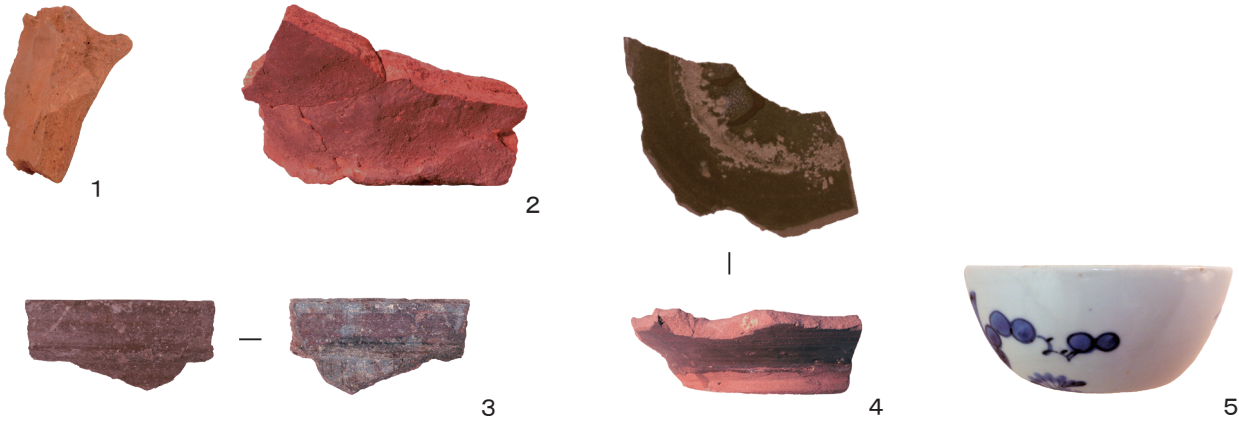


1. 第 1 号井戸出土遺物



2. 第 15 号土坑出土遺物

2. 近世



1. 第 1 号溝出土遺物

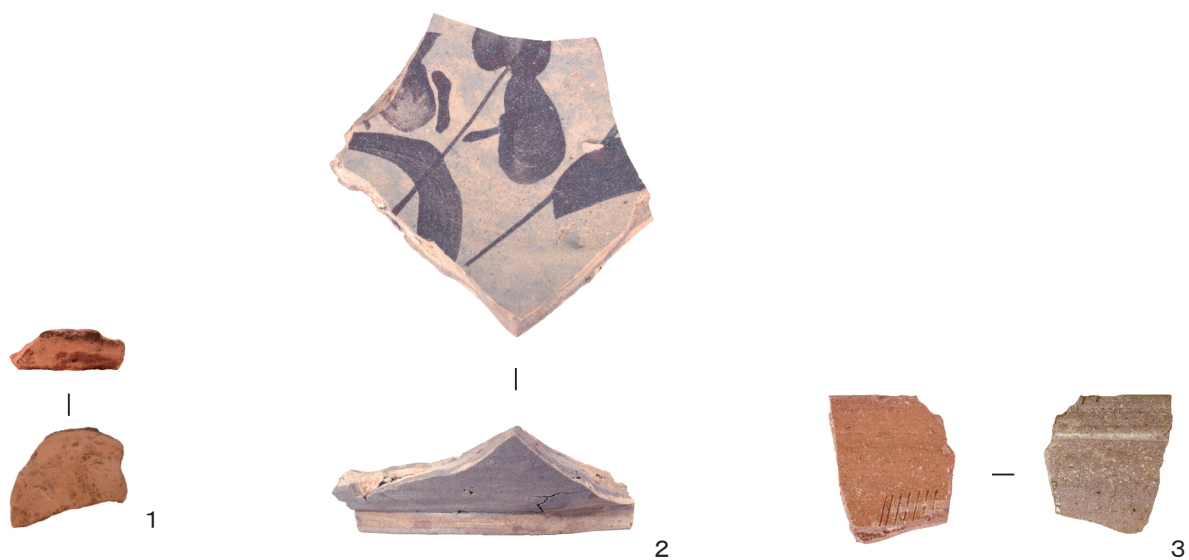


2. 第 1 号土坑出土遺物

図版 4

第Ⅱ編 円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査

1. 中近世



1. 第2号溝出土遺物



2. 第4号溝出土遺物

2. 中世



1. 第6号溝出土遺物

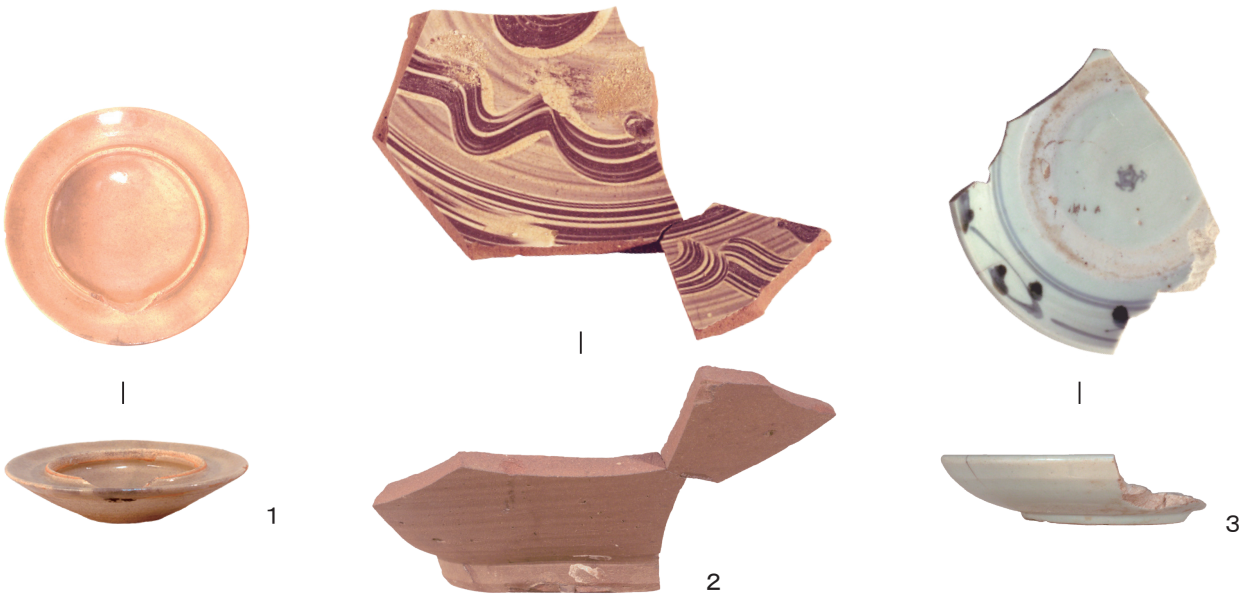
2. 第8号土坑出土遺物

3. 古代～中世

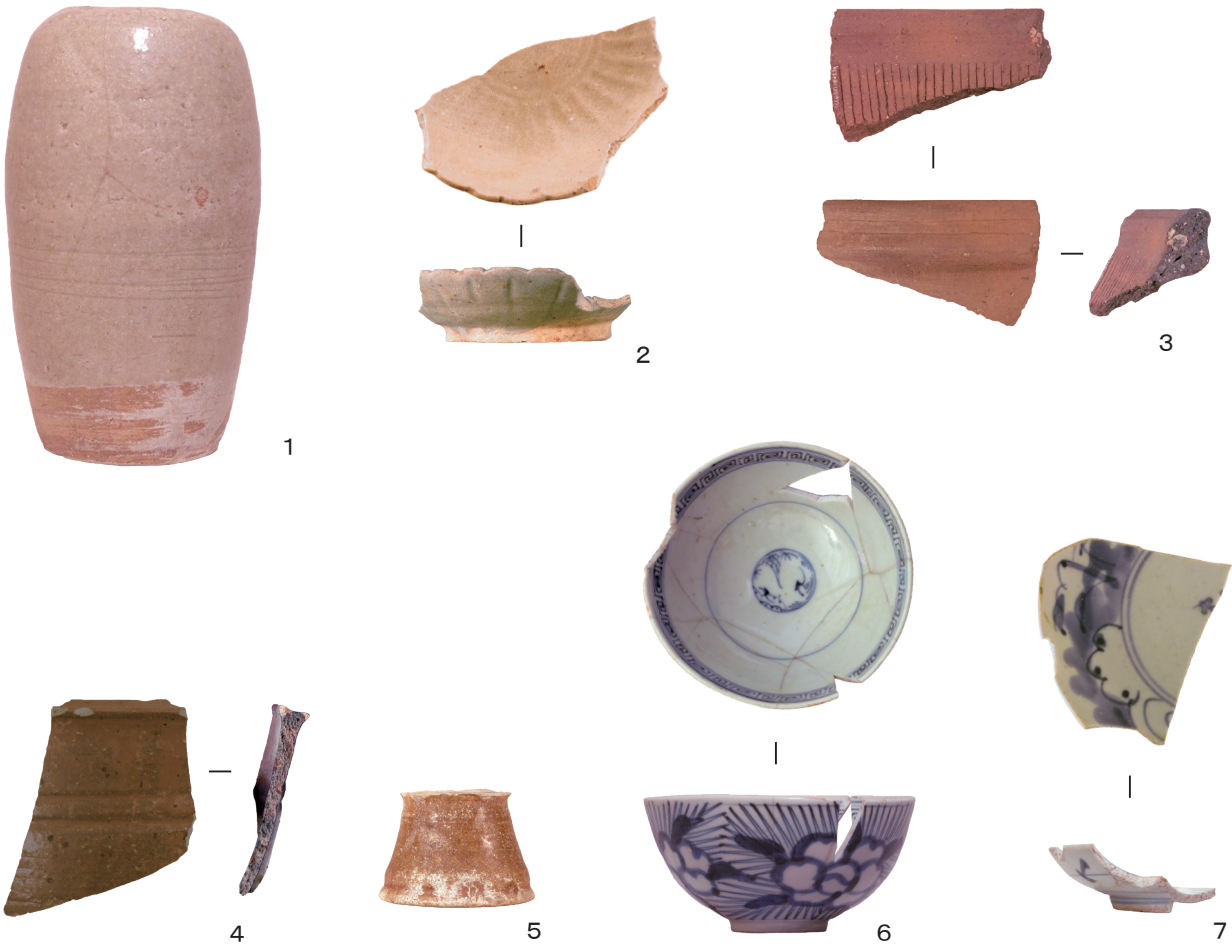


1. 第1号竪穴址出土遺物

1. 遺構外



1. 表土出土遺物



2. 攪乱出土遺物

1. 遺構外



1. 遺物包含層出土遺物



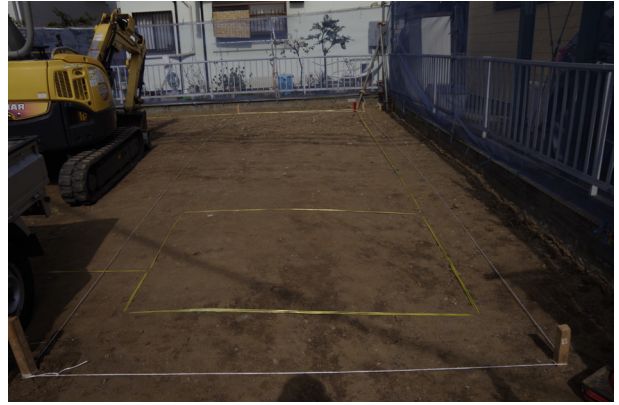
2. 遺構確認面出土遺物



1. 第24次調査地点(下)と第8次調査地点(県道)・第3次調査地点(イエローハット)(南西から)



1. 調査地点近景(南西から)



2. 調査区設定状況(南東から)



3. 事業地北西側に残る水路敷(南西から)



4. 作業風景(北西から)



5. 全景(上が北東)



1. 遺構確認状況(南東から)



2. 第1a号溝宝永火山灰確認状況(南西から)



3. 第1a号・1b号溝完掘状況(南西から)



4. 第1a号・1b号溝北壁土層堆積状況(南西から)



1. 第2号溝完掘状況(南西から)



2. 第1号土壙墓人骨検出状況(北東から)



3. 第1号土壙墓南壁土層堆積状況(北東から)



4. 第1号土壙墓完掘状況(北東から)



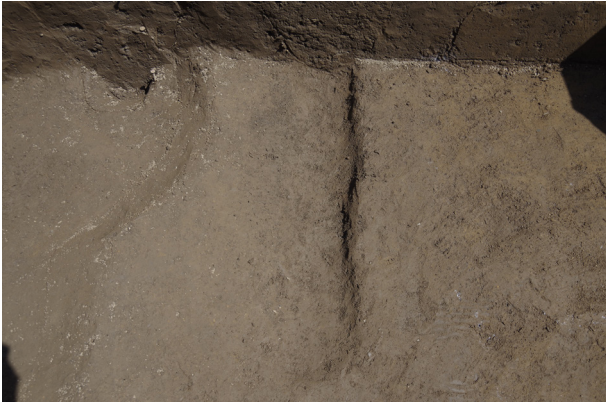
5. 第1号集石確認状況(南西から)



6. 第1号集石検出状況(南東から)



7. 第1号集石完掘状況(南東から)



1. 第3号溝完掘状況(南西から)



2. 第1号・2号ピット完掘状況(北から)



3. 第4号溝北壁土層堆積状況(南西から)



4. 第1a号・1b号・4号溝完掘状況(上が北東)



5. 第2号・3号土坑完掘状況(南から)



6. 第6号ピット完掘状況(南西から)



7. 第4号土坑・第3号ピット完掘状況(北東から)



1. 第1号竪穴址完掘状況(南東から)



2. 第1号竪穴址完掘状況(上が北東)



3. 第1号竪穴址東壁土層堆積状況(北西から)

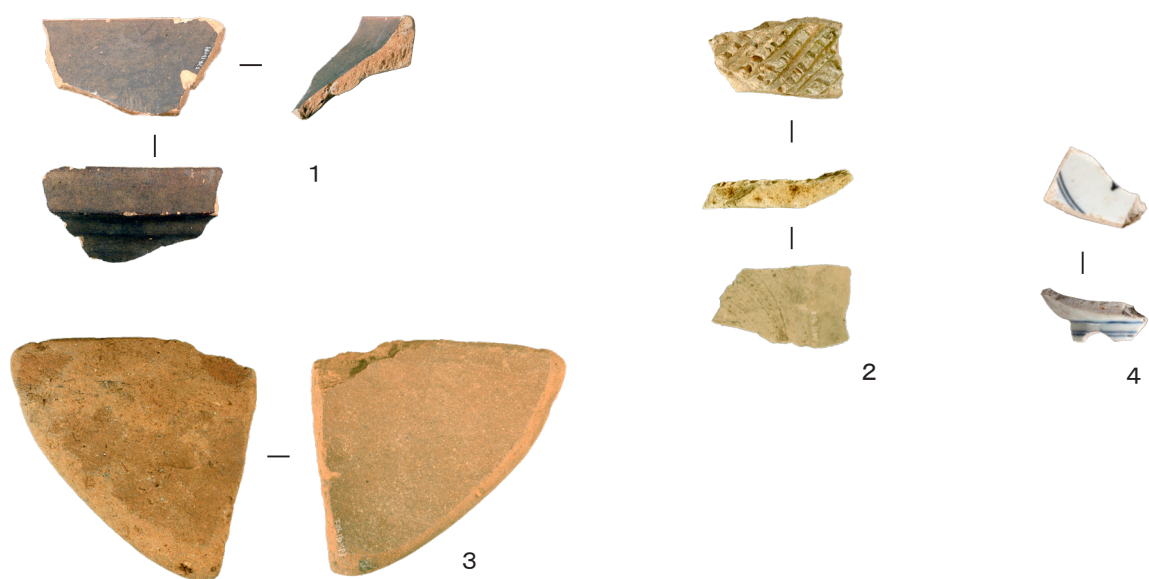


4. 第3号・4号ピット完掘状況(北西から)



5. 第5号ピット完掘状況(北東から)

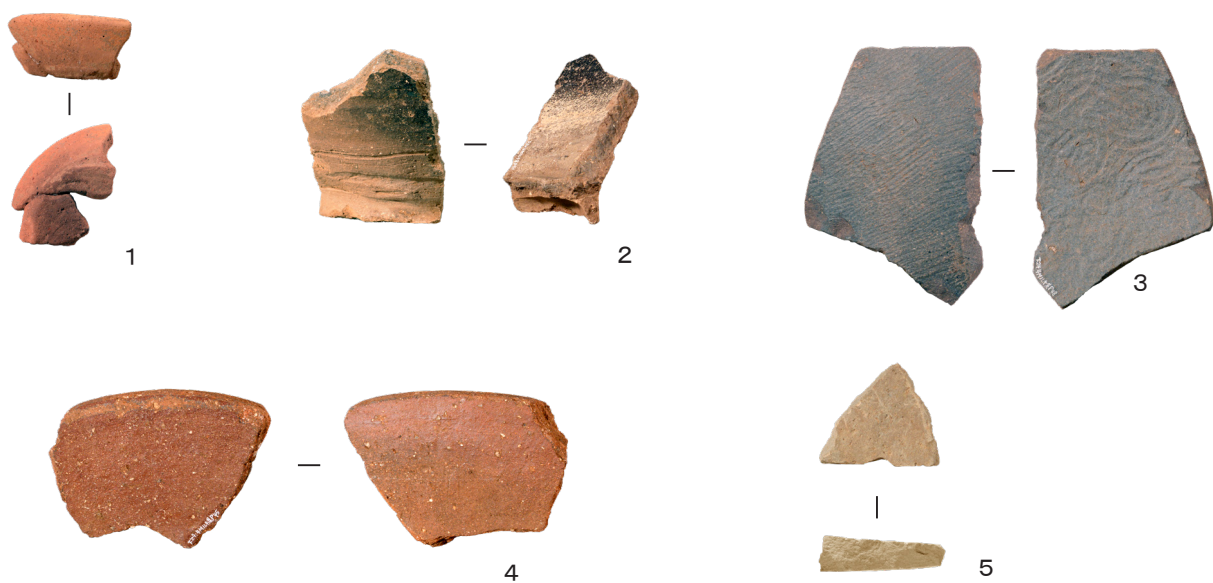
1. 近世



1. 第1b号溝出土遺物



2. 第2号溝出土遺物



3. 第1号集石出土遺物

1. 近世



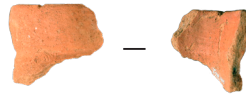
1

1. 第2号ピット出土遺物

2. 中世～近世



|



2



1

1. 第4号溝出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちがさきしまいぞうぶんかざいちょうさしゅうほう12							
書名	茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅻ							
副書名	円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査 円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査							
巻次								
シリーズ名	茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	72							
編著者名	三戸智也 伊藤俊一							
編集機関	茅ヶ崎市教育委員会(社会教育課)							
所在地	〒253-8686 神奈川県茅ヶ崎市茅ヶ崎一丁目1番1号 TEL0467-82-1111							
発行機関	茅ヶ崎市教育委員会							
所在地	〒253-8686 神奈川県茅ヶ崎市茅ヶ崎一丁目1番1号 TEL0467-82-1111							
発行年月日	2025(令和7)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えんぞう 円蔵 しもがまち 下ヶ町遺跡 第12次調査	ちがさきし 茅ヶ崎市 えんぞうあざしもがまち 円蔵字下ヶ町 2602番の一部外	14207	茅ヶ崎市 No. 184	35° 20′ 34″	139° 23′ 48″	20050801 ～ 20050915	175.0㎡	宅地造成工事に伴う発掘調査
えんぞう 円蔵 しもがまち 下ヶ町遺跡 第24次調査	ちがさきし 茅ヶ崎市 えんぞうあざしもがまち 円蔵字下ヶ町 2463番5	14207	茅ヶ崎市 No. 184	35° 20′ 39″	139° 23′ 50″	20220317 ～ 20220329	20.0㎡	個人住宅新築工事に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
円蔵 下ヶ町遺跡 第12次調査	集落跡	古墳前期		土師器		中近世の溝を主体とする遺構群が発見された。溝の分布状況から、大区画溝や中小の地割りが確認された。中世の堅穴址や掘立柱建物は、過去の発見事例が少なく、貴重な基礎資料を蓄積することができた。		
		古代		土師器 須恵器 灰釉陶器				
		古代～中世	堅穴址1基 掘立柱建物1棟 ピット4穴					
		中世	堅穴址1基 掘立柱建物1棟 不明遺構1基 溝11条 土坑5基	陶器 鉄製品 砥石				
		中近世	溝3条 土坑5基 ピット16穴	かわらけ 陶器 馬骨				
		近世	溝1条 土坑3基 ピット5穴	陶器 磁器 石製品				
		近代	井戸1基 土坑1基	土製品 ガラス 鉄製品 銭貨				
円蔵 下ヶ町遺跡 第24次調査	集落跡	古墳前期		土師器		中近世の溝群が発見された。溝群は、東側の第8次・3次調査地点へと延びる大区画溝の一部分であると考えられる。		
		古代		土師器 須恵器 灰釉陶器				
		古代～中世	ピット3穴					
		中世	堅穴址1基	かわらけ 陶器				
		中世～近世	溝1条 土坑3基 ピット1穴	青磁 鉄製品 石製品 礫 馬骨				
		近世	溝3条 集石1基 土壇墓1基 ピット3穴	陶器 磁器 鉄製品 人骨 礫 炭化物 植物遺存体				

所 収 遺 跡 名	要 約
円蔵 下ヶ町遺跡 第12次調査	<p>本調査地点は東南東－西北西方向へ延びる市道5157号線に対してT字状に接続する位置関係にある。平成29年度公共下水布設関連調査の結果、この市道の全幅員が中近世の区画溝であることが確認されている。</p> <p>本調査区北端部においてこの区画溝と並走するの同時期の第1号～4号溝を検出し、その最終的な全幅が10.0m前後を測ることが確認された。また直交する第6号・7号溝や並走する第5号・10号溝他が検出された。中世の第2号堅穴址・第1号掘立柱建物や古代～中世の第1号堅穴址・第2号掘立柱建物が検出された。北側隣接地にあたる第17次調査地点においても2棟の掘立柱建物が発見されているが、中世建物の発見数が少ない中での今回の発見は本調査地点の特徴といえる。</p> <p>古代の遺構は検出されず、また遺物は極少量かつ細片であるが、古代の遺物散布地であることが確認された。なお古墳時代前期の遺物も極少量含まれる。</p>
円蔵 下ヶ町遺跡 第24次調査	<p>本調査地点では調査区を縦断する第1a号・1b号・4号溝などが検出され、16～18世紀代の長い時期にわたり機能していたことが確認された。事業地境界には水路敷が延びるが、水路敷は第1a号・1b号溝を掘り直しと考えられる。この溝群の北東側延長は、第8次・第3次調査地点で発見されている大溝に接続すると考えられ、付近地の地割りを形成する大区画として機能したと考えられる。なお18世紀以降に第4号溝が埋没して凹地になると、凹地に第1号土壇墓や第1号集石が設けられた。</p> <p>13世紀代のかわらけ・片口鉢、また青磁片が出土し、この頃の人的活動の痕跡を確認することができた。</p> <p>古代～中世とした遺構はピット3穴にとどまったが、出土遺物の主体は土師器であり、古代の遺物散布地であることが確認された。なお古墳時代前期の遺物も極少量含まれる。</p>

※文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用できません。なお、利用に当たっては出典を明記してください。

※この報告書に関わる記録図面類（写真を含む）は茅ヶ崎市教育委員会で保管していますので、利用する場合は茅ヶ崎市教育委員会に連絡をして、必要な手続きを取ってください。

※本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用しています。

〔紙質〕	表紙	レザック80ツムギ	170kg（四六版）	〔印刷〕	電算写植によるオフセット印刷刷色は黒色
	見返し	色上質紙	厚口		写真図版はモノトーン印刷
	本文	淡クリーム金鞆	46.5kg（A版）		
	写真図版	マットコート紙	57.5kg（A版）		

茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告72

茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅻ

円蔵 下ヶ町遺跡第12次調査

円蔵 下ヶ町遺跡第24次調査

発行日 2025(令和7)年3月31日

編 集 茅ヶ崎市教育委員会

発 行 〒253-8686 神奈川県茅ヶ崎市茅ヶ崎一丁目1番1号

TEL 0467-82-1111

印 刷 株式会社宮崎印刷所

〒253-0084 神奈川県茅ヶ崎市円蔵370

TEL 0467-85-5522